時報 No.15

大阪大学山岳会

比 良 山 …… 39
冬 山 合 宿
南アルプス白根三山縦走 …… 41
南アルプス塩見ー北岳縦走 …… 42
中央アルプス …… 45
新人スキー合宿 …… 45
春 山 合 宿
葛ー烏帽子ー東沢乗越 …… 49
1967年度 報 告
リーダー所感 …… 55
5 月 山 行
槍ケ岳 北鎌尾根 …… 56
東北朝日連峰山行 …… 57
烏帽子ー東沢ー赤牛ー霞平(黒部)ー高天ケ原ー三俣 …… 60
(付記)観天望気記録 …… 64
新人山行 槍ケ岳千丈沢にて …… 66
夏 山 合 宿
合宿ノートより …… 68
赤岳、D稜、天上沢、C稜ツルムーC稜、小槍、
A稜側稜、小槍尾根、北鎌上半、北鎌下半、
C稜ツルム側壁、硫黄岳
夏 山 山 行
北アルプス縦走パーティ I …… 75
北アルプス縦走パーティ II …… 76
剣岳チンツ登攀 …… 77
黒部上の廊下遡行 I …… 78
黒部上の廊下遡行 II …… 80
黒部上の廊下ゴムボート下降 …… 81
祖母谷ー室堂、小山行 …… 85
黒部上の廊下核心部 …… 86

10月　山　行

南アルプス北半 …… 93

魚沼パーティ …… 94

六兵衛谷偵察 …… 96

穂　高　山　行 …… 97

11月　山　行

水晶荷上げ（春山用デポ） …… 98

双六から後立縦走 …… 98

御岳アイゼン合宿 …… 100

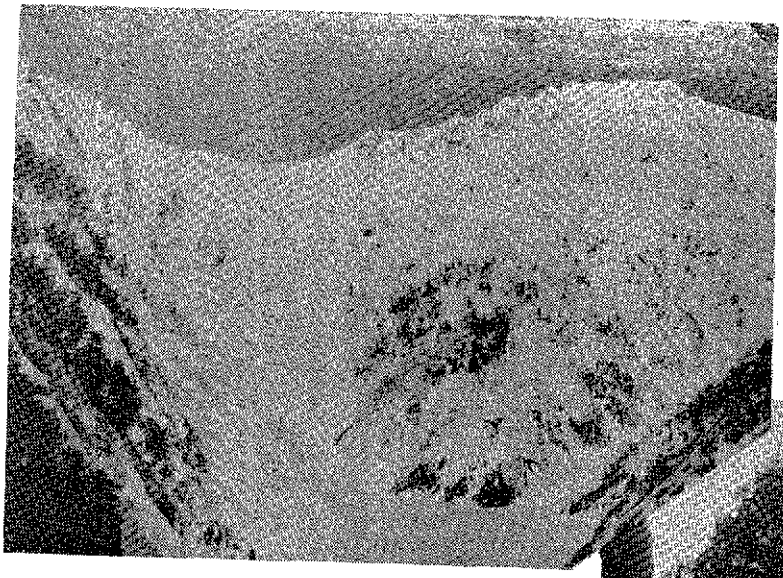
冬　山　合　宿 …… 白馬突破山尾根 …… 101

新人冬山合宿 …… 102

春　山　合　宿 …… 黒部上の部下 完全トレース …… 105

↑ 口元のタル沢出合より上流のトロを見る。（3月29日）

↓ 黒部の急流を初下降するゴムボート隊（8月1日）



← 金作出合より同谷を見上げる。
（3月28日）

→ 上の黒ビンガ直下より上流方向を望む。
（3月28日）

↓ 金作出合よりスゴ沢のテント地への帰路をたどるアタック隊。（3月28日）

グリンデルワルト再遊

篠　田　軍　治

１９６７年６月末８年振りにグリンデルワルトに遊んだ。ベルンで元、理学部にいて現在防衛大学の教授をしている広川氏に会ったところ同氏の甥でスキーの選手をしていた柴田君がイタリーから来ており、グリンデルワルトへ行ってみたいとの事で日帰りで行くことにした。どうせ日帰りだからというわけで装備は何もない。今日は天気がよいから、山がよく見えるだろう。そうするとフィルストのリフトを登って２０００ｍ以上のお花畑からアイガーの北壁を真正面から眺めてみようということになった。

実のところ、今度はグリンデルワルトで泊る気はしない。というのは近年日本人登山家なるものがアルプスへワンサと押しかける。これが郷に入っても郷に従わない。郷に従わないのは、あながち悪いとも言えないが、技術的な面、例えば火成岩の山のテクニックを無批判に水成岩の山に持って来るようなことも批判の対象になっている。度重なる遭難事故の度毎にスイスに滞在している邦人が片身の狭い思いをしている。確かにこんなことも原因して滞在しようという気はおこらない。

インターラーケンで支線へ乗換えると、いよいよ山へ来たという感じがする。グリンデルワルトの駅の附近は特に取り立てて言うほどの変り方はしていない。まだ昼食には早過ぎるが折角来たのだからと嘗ての槇さんのガイドであるエミール・シュトイリの経営するホテルの、道に面したテーブルで軽い食事をする。エミールは居るかというと、居るとのことで出て来た。もうすっかり老いこんでしまっている。体格は昔の儘でがっしりしているが年は争われない。

フィルストのリフトはグリンデルワルトの村をはさんでアイガーの北壁と相対した側にあり、終点の標高は２２００ｍを越え、落差は１２００ｍ。二人並んで腰掛けるようになっており、三回ほど乗換えるのである。花の咲出した牧場地帯を登って行くに従って眺めは次第によくなって行く。左の方のウエッターホルンとその北壁もよく見えて来る。またグリンデルワルト氷河の上へシュレックホルンやフェンステルアールホルンも顔を出して来る。

終点へ着いてみると意外に雪が多い。コンディションさえよければ２６００ｍのフアウルホルンの頂上まで行きたいと思っていたが、この雪ではどうにもならない。ここまでは普通の観光客が来るところで、終点のビルにはレストランのある所だけに裸になって雪のある所を歩いている人もある。折角来たのだからとできるだけ上の方まで頑張って心ゆくまで眺望を楽しむ。アイガーの右のユングフラウの続きが少し雲がかかっている以外、実によく晴れている。しかし６月末の２０００ｍクラスとは言え、この雪では花にはまだ早い。所々、雪の早く消えたところに丈の低い高山植物が咲いているだけだ。

８年前のアイガーの北壁を眺めたときにはルートはどれだろうと、双眼鏡で観察し帰ってからヘックマイヤーの本と比較してみたりしたが、今は絵葉書にもルートが出ているくらいで、すぐわかる。

帰りがけにリフトの終点でコーヒを飲んでいると日本人に会った。もと日本鋼管の山岳部員で、今は下のホテル、テルミヌスでアルバイトをしている和泉氏だ。同氏の言うところによると、日本隊は一、二を除いて何とも言えない程全く無茶苦茶で、パンションを無人小屋のつもりで荒らして、掃除もせずに週刊紙を散らかして行く、万引きもする、何もする、一々覚えていないが、どうも誠に困ったことばかり。欧米各地を旅行すると日本からスポーツに名を借りた団体が来て迷惑をしたという話をよく聞くが、これはそれらに輪をかけているようだ。戦前もよく満州に出掛け、これが戦後は欧米と変って来たわけだろうが、戦前にはこんなひどいのも無かったし、また満州では日本を延長しても現地人からそれほど批判されることも少なかったろうが、スイスは満州とは違う。この点は充分わきまえて欲しいものである。

〔阪大山岳会（ＯＢ会）会長〕

30年目の白馬

恩地　裕

42年12月26日から、山岳部、スキー部の合宿を訪ねる目的で白馬に入った。白びそ荘で猪股氏、宮川氏にお会いし、二時間ほど夜行列車の疲れをいやしてから、お二人について、リフトを用いて栂池に登った。山寮には誰もいなかったので、昼食後、三時間ほど栂の森でスキーを遊んだ。夕方、合宿中の新人パーティが荷上げから帰って来て、山寮の中は一時ににぎやかになった。部員の諸君と共に二階でスリーピングバックで眠って、翌朝7時に出発した。腰までの新雪のラッセルを新人の人々が元気に3～5分おきに交代して、尾根づたいに6時間かかって天狗原に達した。白銀に輝く白馬の姿をみて、突然、丁度、30年前の2月に、私共も新人ばかりで天狗原に冬の幕営に来たことを思い出した。あのときは、森上で汽車を降りて大きなリュックをかついで登っていった。新雪をラッセルしながら、御殿場あたりで日は暮れてしまい、ランタンをつけながら登ったのをおぼえている。早稲田の小屋についたのは日もとっぷりと暮れ、大部おそかったように思う。ダラダラした広い所にはあまりなれていないので、ルートを誤っていないか心配であった。しかし天候には恵まれて、次の日には天狗原にテントをはって、ママゴトのような生活であった。今度、天狗原について、あの雪の大斜面をみたとたん、私は30年昔に急につれもどされた。そして、私の18才の青春の事どもが走馬燈のように脳裏をかけめぐった。天狗原で部員の方々と別れ、一人、追憶にふけりながら山寮まで帰り、また、宮川さんと二人で彼のついでくれる酒をのみながら、ほんとうに久し振りに静かな冬山の夜を過した。

（阪大山岳部部長）

昭和24年6月阪大山岳部が正式に再建されて以来篠田先生は、常に私達の先輩であり、良き指導者でありましたが。昨年3月をもつて阪大工学部教授を退官され、現役山岳部部長に恩地先生を迎える事になりました。ここに先生の略歴を紹介致します。

大正9年6月4日　大阪に生れる。小中学校時代は淡路島で過し、この時、大峰、御岳、四国祖谷などに山の喜びを知る。

昭和12年4月　松本高等学校入学。第二期松高黄金時代の山岳部で、穂高を中心に活躍する。

昭和13年6月　穂高小屋ーキレット通過ー南岳の壁ー肩の小屋。　7日　奥又の池ー松高のコルー明神主峯

昭和14年1月　瓢箪池ー明神東稜。　5月　コブ（尾根）ー奥穂ー涸沢（ビバークを含む）。7月　前穂4峰明大ルート、同5峰正面中央フェイス試登。11月　前穂北壁途中にてビバークし、Bリッジー第2テラスーV字雪渓ーA沢を下る。3名全員凍傷。雪崩頻発して、10日間釘づけとなつた後下山。12月　前穂3峰又白側リッジを登攀して前穂に至る。

昭和15年4月　阪大学。蒙古を夢みる。

昭和18年9月　同医学部卒業。同衛生学教室に入る。

同　年　兵役検査甲種合格、反軍思想で軍医（中尉）にはならず二等兵として入隊。後独力で北京陸軍病院付軍医となる。

昭和21年　5月　帰国。7月結婚。　昭和24年4月　医学博士となる。

昭和26年　7月　3年間のアメリカ出張　スキー　上達

昭和29年10月　奈良医大整形外科教授。　昭和40年10月　阪大麻酔科教授となり現在に至る。

現在は1男2女の父　現住所　西宮市今津二葉町1－10　電話(2)－8740

リーダー所感　41年度を振り返つて

渡　部　　洋

とにかく山岳部という所は、外から見ていると面白い。社会学、心理学の博士論文の材料ぐらい、いくらでもあるのではないか。部員のもがきは悲しくもあり、こっけいでもある。今年一年部を外からながめていると、リーダーであったころとは考えも少し変ってきたようだ。責任がなくなったのが第一の原因であろうが、それ故に本当の事がいえるかも知れない。思いつくまま書いてみることにしよう。

富士山の遭難以来、部は余りにも安全ということを強調しすぎたきらいがある。安全な登山を行ない得る実力をつけるには、安全登山ばかりしていては到底不可能である。逆に言うなら絶対安全という一定のわくの中で登っているとかえって危険になる。我部において、全ての山行計画はリーダー会でチェックされる。リーダー会を通過した計画には〃安全〃という太鼓判が押されているわけだ。計画はつぶやく、あとは計画どうりやるだけやと。実際計画どうり駒を進めていくならば、まず何事もなく無事下りてこれるだろう。その山行が成功するのは入山前すでに決まっていたのである。こういうやり方の山登りは確かに面白くない。いや山登りとすら言えないかも知れない。しかしながら我々は、これで遭難が防げるなら仕方あるまい。これがうちのやり方なんや、他に方法もないしと信じてきた。

所がこの2.3年に起った事故はこういうやり方の弊害が表面化したのだ。山行のリーダー、メンバーは部会で押された安全という太鼓判の御守りの力を過信する。計画通り動けばまちがいないと信じているものだから、自分の眼で見自分の頭で考えるということを忘れてしまった。ひとつでも計画になかったものがでて来ると、とたんにボロが出る。計画を変えるなんてとんでもない。計画が主で人が従となってしまった。その結果、山に行きたがらない山岳部員がでてくる仕末。それでもだましだまし行くが、4年になるころには、もう山岳部がいやになる。それでも尚山に行くのは、義務感とやっぱり山が好きだからである。

部が登山学校であるならば修業期間は3年にすると良い。3年間はカリキュラムに従う。それが出来ない者は即退学。4年になったら免状を与え、それからは自分の山行をやらせたら良い。部に縛られることもなくのびのびと。
それこそ行きたい時に行きたい者と、行きたい山に行ける。ヒマラヤへ飛ぶのも良かろう。3年間に得たものをフルに発揮できる機会を与えるべきだ。
もう一つ部の沈滞に関係する因子は留年である。この留年が以外と曲者である。大量留年は我々の1年上の学年に始まり、その後絶えることなく今日に及んでいる。この現象は山岳部内だけではなく、全学的傾向である。留年してヒマになり更に山に行くのかというとそうでもない。かえって親に力を与える結果になり、手かせ、足かせはめられて山へ行けないというのが多い。〃なぜ留年するのか〃〃まあ頭が悪いからや〃この答はごく少数の者には適用されうるだろうが3割という大量留年の答ではない。この問題はその人間の性格にまで及び根の深いものである。戦後の教育の弊害がそろそろ出て来たと言って良いだろう。今の若い者は自由であるがゆえに潜在的に不安を宿している。ヒマを持て余ますといらぬ事を考える。迷いがでてくる。これを打ち消すには強烈な刺激が必要である。だが、しんそこ酔えるものなんてざらにはない。それであっちへうろうろ、こっちへうろうろ。もちろん大学の教養部なんて強烈な刺激を与えてくれる所ではない。
一昔前の単純な（純粋な）人間にとって登山はしんそこ酔える対象であったろう。しかし今の学生はそれに陶酔できない様である。それだけ人間が複雑になってきたらしい。
もう一つ、留年する者にいえる共通のものは性格的にずぼらであるということだ。戦後の自由に重点を置いた教育はずぼら者を育ててきた観

がする。特に山岳部にはずぼらが多い。本当に目に余るものがある。今や、ずぼらのずぼらによるずぼらの為の山岳部となってしまった。部の運営がうまく行かないのはこれによる。ずぼら退治は去年一年やってみて、今年一年見ておってやっと分った。底の抜けた桶に水を注ぐようなもの。ずぼらを退治するには根本的に、「幼少年教育からせんとあかん。」

次に移ろう。阪大山岳部には思想の伝承ということがなかったのではあるまいか。知っての通り阪大は後立山を起点としてそこから順次線をのばしていったような登山をしてきた。時報特別号に書いてあるように当時の合宿はすべて地域的因縁を持ち次から次へと前後の説明がつく。つまり一つの山から次の山へと目で対象を追った登山であった。それが富士山の遭難でプツリと切れてしまった。それに国内の山の開拓期の終りが運悪く重なった。遭難の後2.3年は部の再建という仕事があり、目的もあった。ところがそのことがいつのまにか部の目的にすり変ってしまったのだ。我々が部でたたきこまれたのは安全第一の登山であってアルピニスムでもなく、パイオニアスピリットでもなかった。安全登山は登山の大前提でしかない。決して目的にはなり得ない。部の再建が一応終りを告げると同時にすることがなくなった。一体どこへ行けば良いのか。

もし仮にパイオニアワークというのが部の至上主義であるとするなら、国内での活動が行きづまったら、必然的に国外へ出ざるを得ないだろう。P29というやりかけの仕事がありながら現役から登ってしまおうという気概が一向に出てこないのは一重にこのことにあると思う。

最後になってしまったが41年度の山行を総括する。みんなボーラーにはあきあきしたらしいので春山(部報No.14三俣一薬師一槍縦走参照)はノンデポノンサポート、小人数による長い縦走をした。又部が分散合宿という方向に動きつつあったのでそれに対処すべく、新人を縦走の一部に組み入れた。我部ではいままで春山で新人を動かすにはまだ早過ぎるという考えが強かった。だが果してそうなのか？　試してみる必要があると思い実験的に易しいルートを選んでみた。1人30kg未満の荷であったがかなり動かせると思った。今後徐々に試して見るが良かろう。

次は夏、ここ2.3年雨にたたられほとんど岩登りができなかった。毎週日曜日、近郊のゲレンデで登っているものの果して我々にどの位の力があるのか見当もつかなかった。昨年度に引きつづいて剣で合宿をしたのはグレードが判っていたからである。

富士山で雪上訓練を行うことは残念ながらできなかった。それは10月11月と山行がたてつづけにあり、今年は3年生がいないため4年生が無理をし、それで時間的にも経済的にも4年生が破産してしまった為であった。

冬山は行きたい所へ行きたい者が行けるようにした。こういうやり方ならば四方八方丸くおさまりそうだが、結果的には面白い計画がでなかった様である。しかし二人で中央アルプスに行ったのはいろいろと良かったと思う。

新人合宿は監督の意見を取り入れ、スキー以外に力を注ぎ新人を徹底的にしぼり例年とはかなり内容が違ったと思う。吹雪の中でも萎縮しないというのがスローガンであった。そのため悪天こそ利用すべきであった。

次は春山であるが我々が出したいくつかの計画から2年生に選ばせた。ぼくが上の廊下の遡行に固執したのは、我々に欠けているのは目的でありそれ故にみんなやる気がないのだと思ったからである。上の廊下の遡行を狙うならまあここ2.3年は助かると考えた。又2年生全員で上の廊下をとったのでこれで来年はうまく行くと思った。

以上私見どころか偏見というようなものもかなり書いてしまった。極端に近い所もあるが、これももう一度みんなに考えてもらいたいからである。41年度　まあ曲りなりにもどうにかこうにかつとめられたのは篠田先生を始め監督それにたくさんの先輩のお陰です。どうもありがとうございました。それではここらで終ります。さようなら。

(理学部　生物学科)

5　月　山　行

東谷ガンドウ尾根

期日　4月29日～5月7日
メンバー　L渡部（4年）　辻（4年）　的場（2年）　甲田（2年）

4月28日
出発前のごたごたで急行「ちくま」に乗れず23時50分発の普通列車で行く事にする。

4月29日　大町着12時55分
列車がガタンと止まった途端に現実に戻った。我等の座していた席の真向いの女子高校生の美しきかんばせよ。また再びあなたを見るのは、ただ永却の後だろうか。あ・・・あなたの帰る所、そしてこの俺達の行く先を誰が知ろう。マイクロバスで大谷ケ原まで入る。ここからは、二本の足のみが頼りなのだ。30キロの荷物でやをら腰をあげ、3ピッチで西俣出合につく。ここより迎ぐ鹿島槍東面の尾根や谷は魚のうろこの様に、にぶい光を放ち、綿帽子をかぶった冬山とは好対照をなしている。急ぐ必要もないので、今日はここで幕営。（4時）

4月30日　晴後強風アラレ
6時半出発。北股本谷を約100米入った右岸より赤岩尾根に取り付く。ブッシュ混りの登攀はこの上もなく楽し。3時間もすると高千穂平へ着く。広くもないが、テントは張れそうである。ここより尾根は急角度で左へ折れ、一気に後立の稜線に突きあげている。稜線直下から約百米の登りは、雪崩を考慮して直登する。稜線は部分的に夏道が出ており、一気に冷小屋へかけこむ。（12時）この頃より剣岳に雲がかかり出し、天候悪化を告げてきたので、布引岳手前で幕営する。テントを張り終えた頃からアラレも少し降ってきた。我々の判断に間違いがなかった事を喜ぶ。

5月1日　晴
ゾクゾクとする寒さで眠られない。テントから首を出すと、案の定、満天の星だ。6時、テントをたたみ全身にフアイトを秘めて新雪の上に立つ。歩く事3ピッチにして鹿島槍南峰に至る。東谷源頭の寂ばくとした荒々しさよ。のぞきこむだけで金玉のちぢむ思いがする。ここでアイゼンをつけ、牛首尾根へ踏みこむ。当初、鹿島槍と牛首山のコルから東谷支流へおりるはずであったが、コルからおりている沢は上部百米が60度位の傾斜があり、又、下部が見通せず、岩壁が待ちうけている様な気がして、この沢の下降はあきらめる。ひとつ手前のコルから延びている沢も約40度の勾配で、キスリングをかついでの下降には不安も感じたが、アイゼンが効く事でもあるので、思い切ってルートに選ぶ事にする。初め約200米は沢筋を下る。ここより右手の亀の背のような尾根を200米下降する。正午を過ぎると雪もくさりはじめ、始終ザイルで確保しつつ下る。次に右手の沢を15米トラバースして尾根に出て、左の沢を2ピッチも下ると、5万分の1の地図に青線で記入されている東谷の支流におりる事が出来た。（2時）ここより尻制動でガンガン飛ばし3時20分東谷出合に至る。上部の滝（F3）まで行かんとせしも、全員に疲れが見えるのと、明日に備えて、今日はここで幕営とする。東谷の静寂さは表わす言葉もなし。猿の鳴き声に見守られ、剣岳に沈む太陽を惜しみつつ夢路をたどる。

5月2日　晴おそくなって雨
6時、不安と期待の入り混じった気持で東谷核心部へ突入する。上部の滝は完全に埋まっていて楽に通過する。このあたりより雪渓も切れており、慎重に下りる必要がある。下部の最初の滝（F2）は左岸を行く事により突破する（ナイロンザイル使用）。東谷はここで右へそして左へと大きく屈曲して黒部へ注ぎこんでいる。何としても最後の滝（F1）は通可したい。

ここで引き返す事は敗北なのだ。だが、左岸もここで垂直の壁にさえぎられ、ルートは絶たれた。右岸への方法としては (1)、沢筋の２０米程上につり橋がかけられてあるが破損して斜めに傾いておりとても使えない。(2)、沢筋に倒木が渡されてあるが、バランスを崩す恐れがあるために使いたくない。(3)、徒渉は流れが強く考えられない。この３つがあげられる。協議の結果(2)の倒木を空身で右岸に渡り、Ｆ１の通過の可能性を判断した上で次の行動をとる事にする。仮に渡れても、ハイそれまででは困るのである。渡部が偵察の結果、これより下流Ｆ1の前後は両岸が切り立っており、沢筋は勿論まく事も出来ない事が分かり、牛首尾根へ逃る事になった。屈曲点に直角に入りこんでいる小沢をつめる事百米、次に左手のブッシュ状尾根を３０米登る。ここより日電歩道の跡がある。疲れた体にムチをうって何とかして牛首主尾根まで行こうと思うが、雨も降ってきたので途中で幕営する。かすかに残る雪渓をならしてテントを張り終えたのは７時２０分であった。

５月３日　雨　沈澱

５月４日　雨　沈澱

５月５日　晴

６時久し振りの太陽を仰ぎつつ出発。約３ピッチで牛首尾根へ出る。このあたりには鉄柱が立っており、５０ｍも主尾根を下りると社がある。２００ｍ眼下には偉大なる黒部の水がとうとうと流れている。正面にみるガンドウ尾根の末端は急なうえ、ブッシュや木登りでかなりのアルバイトが要求されるであろうが５００ｍも登れば雪稜となってくるので、そう心配する事もなさそうだ。さて当面の問題はここから東谷出合までおりる事である。踏み跡らしきものはありそうだが、黒部に垂直に延びている事を考えると、弱気にならざるを得ない。主目標のガンドウ尾根に早く取付きたいという気もあって邪道ではあるが関電のインクラインで降ろさして頂く。１０時半末端に立つ。最初の急な所は水平道の登りになっており楽であった。４時間ほどで雪稜に出る。このあたりより右手はスパッと切れており、尾根はやせはじめ、すこし緊張させられる場面もあったが、登りであるので慎重に歩きさえすれば別に困難な尾根でもない。十字峡から延びている尾根（この尾根は別山南尾根に似ており、２つのピークで急角度に高度を落している）とのジャンクションピークのすぐ下で幕営（４時）尚この支尾根にはテント地はここより他にない。

５月６日　うす曇りのち晴

６時出発。最後の難関突破の日が始まる。まず左の小沢を３０米トラバースして、側稜を直登する。３０分でジャンクションピークに至る。ここより大滝尾根の頭までは、小突起の連続でやせており一歩一歩仙人側をまき気味に行く。おそらく雪庇は劔沢側に出るものと思われる。大滝尾根の頭は、格好のテント地であろう。ここよりまたナイフリッヂの連続で、一ケ所４０ｍザイルを使用する箇所もあった。対岸の別山あたりから石ナダレの音が聞こえ、何とも言えないぐらい不気味である。９時４０分、南仙人山につく、すこし下のコルより尻制動で一気に劔沢までかけおりる。（１０時半）

二股にテントを張って劔大滝を見物にいく。

５月７日　晴のち曇り

別山乗越を経て彌陀ケ原へと急ぐ。

（後記）－この山行は青春期のもつ肉体と精神を投入しても惜しくなかった。願わくば、この様な山行を今後もやりたいものだ。（辻記）

朝日－白馬－突坂尾根（仮称）

日時　４月２８日～５月６日

メンバー　Ｌ佐々木（４年）、細川（４年）、山田（２年）、岡田（２年）

行動概要　（参照地図、小滝白馬岳、黒部）

４月２８日　大阪発

４月２９日

車中にてケロシンを駅に忘れたことを発見し糸魚川にて購入。このため大糸線の列車を２つ遅らせ北小谷についたのが１１時。風吹大池にむかう林道（風吹林道）にはいる。途中、第一番の橋が流されており水量も多いので徒渉はや

めにして、すぐ右手の小尾根にとりつきヤブこぎ開始。強烈なヤブでピッチ３００ｍ。２ピッチ目に草すべりの斜面にかかった。この小尾根から次の支尾根に行きこの尾根の北側に雪がついていたので雪のある所をえらびながら尾根づたいに登り、途中から小さな沢に入った。所々で雪どけ水の音を聞きながら登りコルの少し手前にテントをはる。水は沢の雪のない木の根本からとることができた。

４月３０日　晴後吹雪

４時起床。７：３０出発。風吹大池から蓮華温泉までいくことにしてまずコルに出て次の尾根にとりつく。雪があるのでヤブこぎをする必要なし。そのうちスキーに好適と思われる広い雪原に出た。目の前に見える尾根を目ざして登り始める。尾根を登りつめたとき、眼前に風吹岳、横前倉山などがあらわれる。あとはずっとこの尾根（われわれは阪大尾根と呼んだ）通しに行けることがわかりホッとする。とにかく２日目でまだ白馬。朝日を見ることができない。尾根通しに行くと途中から人の足跡がありやや残念。籠岳の下で一服。この登りは乗鞍の登りと同じ位かやや急といった２００ｍ差の登り。ジグザグに登って１ピッチ半で鞍岳の頂上についた。１１時。あとは風吹大池までたいした登りもなく、南側に残っている雪庇に気をつけてブラブラ行く。風吹大池は一部水面がでているがまわりは真白。乗鞍の斜面が見え人が登っているのが確認できた。蓮華温泉には風吹高原をこえ千国揚から彌兵衛川に下ることにしたが吹雪いてきたので風吹高原で幕営とする。

５月１日　晴

６時３５出発。彌兵衛川をシリセードを混えて下り、８時頃蓮華温泉につく。小屋の親爺と話しをして、水を補給して出発。瀬戸川には吊越があるとのこと。兵馬平から夏道通りに歩いていくととんでもない斜面に出て引返す。吊越は夏道から１Km近く下流にあった。なれぬ吊越に時間をくい１１時半出発。池の横を通り白高地沢を右手に見ながら、尾根を登りヒョウタン池をすぎて、白高地沢に入る。入った所で、雪倉から降りてきたスキーヤー２名に出合う。あとは赤男山から出ている尾根の支尾根にとりつき再び白高地沢に入って朝日岳直下のカール底に出る。途中で岡田が気分が悪いといいだしたので、休憩を余分にとりながら朝日と赤男のコルに向った。コルの直下にテント設営。

５月２日　晴後吹雪

出発６：３５。１０分程でコルに出ることができ、柳又谷を直下に見下し、また猫又山を見ることができた。西の空には前線と思われる雲が見える。赤男山のトラバースは、二年生がトップを行ったためにルートファインデングの悪さからルートを間違えて１ピッチ損。３ピッチで赤男と雪倉のコル。これから雪倉からほぼ北へ出ている尾根めがけてトラバース。割合に急な斜面であったが、雪がしまってアイゼンがきくので恐怖感はほとんどなかった。トラバースの後、尾根を登ると夏道があったのでアイゼンをはずして夏道通しに行く。日は暖いというより暑いので、夏山の縦走ムード。雪倉の頂上で記念撮影。西の方は相当に曇ってきた。雪倉と鉢のコルの避難小屋でしょうゆをみつけ、今日はこれで味つけということになった。小屋から１ピッチ歩き、いよいよ鉢を越えようという時は全員バテ気味。天気の悪さを考えて、ここで幕営とする。近くに水があったので助かった。今日は拾った醤油でうどんということになった。テントをはって、じきに吹雪。また、設営最中に単独行のオッサンがやってくる。今度の山行で初めてあった登山者である。

５月３日　吹雪　停滞。

昨夜遅くから風が強くテントを破られそうになったので皆背中を壁につけてテントを守る。朝おきた時は全員長々と寝ていた。首が痛くてしようがない。テントの張り方が風に直角であったが、凹みであったので風は主にテントの上部を吹き、最悪の事態にならずにすんだ。また後室をかんのふたでひっかき破られた。

５月４日　地吹雪　後　晴　停滞。

ムードは昨日よりもますます悪くなった。エッセンを計算間違いしたので、翌日はもう下山するような話まででてきたが、結局あと三日分と昼食一食あることがわかり、計画続行。ムー

ド一変。早く突坂山へ行きたくなった。

5月5日　快晴

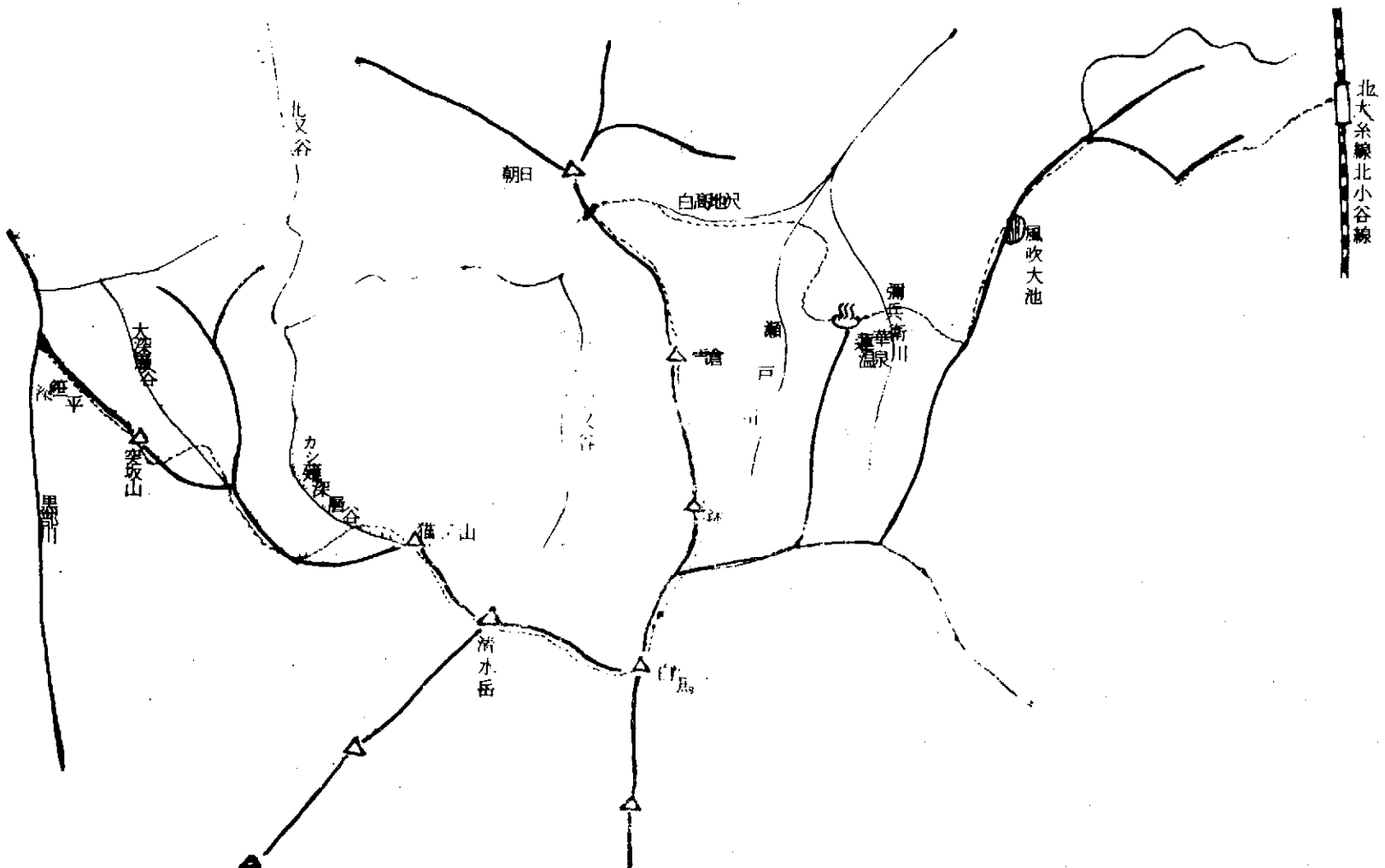
テントの張線、ピッケル，アイゼンetc にエビのシッポがつき撤収に時間がかかり、出発7：30。今日はどうしても猫又山の次のコルまで行くことにして出発。雪はよくしまっており快適である。単独行のおっさんは我々より先に出たらしく一人のアイゼンの跡があった。鉢岳を越え三国境に向っていると、白馬から降りてきた3人パーティが三国境へとシリセードを始めた。うち1人が途中からすごいスピードになりストップ体勢をとったまま見えなくなった。すわ、白馬沢へ滑落かと思ったが、三国境についてみると、三人とも休憩中。下はスリバチ状であった。細川氏が煙草をねだりに行き、見事ハイライト一箱をせしめてきた。いよいよ、白馬への登りにかかる。春、白馬に行った竹林によれば、途中に四つんばいになって登るようなところがあるとのこと。別にいやらしいところもなく、三国境から40分で頂上着（10時10分）。　記念撮影をして（佐々木氏のフイルムはここでおしまい）主稜、杓子岳の岩場をながめて、出発。小屋があいていたら中で昼食にすることにしていたが、小屋は二つとも閉鎖。旭岳の方にはトレースはなく以後完全に人間を見ることはなかった。旭岳は南側をまき、尾根通しに清水岳に向う。朝日岳がまた近くなる。清水平へついた頃から全員バテ気味となる。地図でみると猫又山まではすぐである。が、現実は厳しかった。清水岳から猫又山へかけては東側に大きな雪庇がでており、はい松帯の上を歩くことになった。アイゼンをつけたまま大丈夫と思えるあたりに足をおろす。予想があたればいいようなものの、はずれた場合は情けない格好になる。おまけに急な斜面なので一回転するものもでる有様。どうにか、猫又山の近くまでくることができた時はムードが非常に悪くなった。佐々木氏にハッパをかけられて、猫又山をこえ尾根通しに行くつもりであったが、沢通しの方が楽だということになり、カシ薙深層谷の最上部をシリセードを混えてコルの下まで行く。疲れた体にむち打って、コルのちょうど向うがわから出ている小さい尾根の上に登り、テント設営。

5月6日　晴

5：30出発。尾根通しに進んだが、雪が少なく雪庇の上を歩くこともしばしば。突坂山の方は雪がなく、すごいブッシュこぎと思われた。突坂山へ伸びている尾根とカシ薙、大深層の間にのびている尾根との分岐点に着いたとき藪こぎをきらって400m、シリセードで、一気に下って、突坂山手前のコルに出ることにして、大深層谷を下る。高度差400mばかり下った所から再び、尾根にとりつき雪のある所をえらびながら進む。この辺からひどいブッシュになり特にコルの手前では草つきのすべるトラバースで1ピッチで少しも進まない。結局3ピッチで、50～100m程度しか進まない。どうにかこうにか、猫又谷の支谷の雪渓上におり、ここから突坂山上部へつき上る雪のつまったルンゼをキックステップで登る。やっとのことで、上部の平らなところへ出た時は全員ホットした感じで、15分間の休憩。（11時35分）突坂山でトサカにきたなどとぼやきながら、ピークへ向う。この辺は雪も多く非常に歩き易い。ピークの直下にあきかんと張綱の切断されたものを発見。カンにはHUAC65冬山とあった。ピーク（といってもずんべりしたものだが）の上で、又休憩。あとは下るだけと思うと、身も心も軽くなる。突坂山北側はかなり下まで雪がついている。雪の上をブラブラ下っている内に雪がなくなり、又ブッシュこぎ。今度は下りでもあり、前ほどすごくないので、小さな沢（ルンゼ）を下る。所々雪がありすべったりして泥だらけになりながら、下ると関西電力の保線道と思われる小径が現われた。緑を味わいながら暑さと疲れに半バテになった体をひきづって、笹平へついたのは14：20分であった。

（山田　記）

白馬 突坂尾根付近



飯豊山主稜線縦走

期間　41. 4. 29～41. 5. 5

メンバー　L　糸井　文彦（E4）

食糧　田中　喜樹（T2）

装備　竹林　真一（Σ2）

4月28日　夜急行「日本海」にて出発

4月29日　山都　バス　一ノ木　トラック　一　川入一御沢

新津から盤越西線にて山都まで、山都よりバスで一ノ木まで、更に一ノ木よりトラックで川入部落へ入る。川入より、ようやく本山行の第一歩を踏み出す。途中ツクシをつんだりしながら1ピッチ余で、夏には小屋のある御沢に到着し、テントを張った。清冽な水が流れ静かな、良きテント地であった。

4月30日　くもり時々晴

御沢一地蔵山一飯豊本山

さすがにもう5月だけあって4時半ともなれば外は明るくなってくる。くもり空であるのが残念だったが出発。長坂はガイド・ブックに書いてあるほどきつい尾根でもなく淡々と高度を上げる。約1000mよりやや下と思われるあたりより雪が見え出し、所々にブロック状に残った所をこわごわ通る所もあったが横峰よりやや下あたりからは一面の雪となった。横峰を地蔵山とまちがえ、二人にゴマをすったりアイゼンをつけたりして出発してからまだ稜線に上っていないことに気付いた時は少なからずがっかりした。途中より地蔵山の腹をトラバースして、三国岳とのコルに出る。地蔵山と三国岳の間は鎖鎖のある所で南に面しているため雪も他に比べて少なく岩と残雪のミックスしたものが交互に表われる所をアイゼンで歩くので仲々はかどらず、アイゼンの泣く声がかわいそうであった。三国岳の直下で田中が小スリップしたけれども幸い大したこともなく三国小屋に着く。風が強いので小休止の後出発。夏道のあらわれている所が多くなったので遂にアイゼンをはずす。種蒔山をこえ、切合小屋に着いたころから風が強くなって、切合小屋出発後雪さえ降ってきた。今日は、御西小屋まで行くつもりでいたが、こう天気が悪くなっては無理と思われたので、ともかく飯豊本山の小屋まで行かんものと、時にはバランスを失いそうになる風と雪の中を歩いて小屋に入った。神だなに神妙に手を合わせた後その前にテントを張った。小屋に残っていたしょう油で竹林が家から持ってきたタケノコをたいて食う。ウマカツタ、ウツマケタ。

5月1日　快晴

飯豊本山一（大日岳往復）一地神山

昨日の悪天は前線の通過でその前線も完全に通過して今日は全くの快晴となった。稜線は新雪におおわれ朝日に映えて美しい。1時間で御西小屋着。そこでサブ・ザックにヤツケ etc をつめて大日岳往復に向かう。大日岳直下の傾斜がきつい他は何ということもなくただ歩いて、往復完了。御西小屋附近では単独行者も含めると、4パーティに出会った。再びパッキングをして北へ向けて出発。御西小屋からしばらくは、だらだらした広い稜線で烏帽子岳の所で登りとなった。烏帽子岳からしばらく行くと又下りとなって十文字鞍部。ここには小屋があった。小屋から北股岳へ登り切ると、目ざす地神山がかなり近くなってきた。北股岳の下りで地元のものらしい一団に会う。門内岳まで又もだらだらと行く。門内岳をこえた所に避難小屋有り。ここらで二年生の調子もおちてきたので気休めをいって励ましつつ前進。扇ノ地神まで行けば地神山は目の前。地神山を下ってしまうとテント地もなくなるので地神山山頂直下の平らな雪の上にテント設営。今日のコースは初めてでもありもしガスられたりしたら現在地の確認が難かしかろうと思われる。幸いに今日はその心配もなく佐渡、日本海、信濃川と雄大な景色を眺めながら稜線漫歩とでもいうべき行程であった。

（実際は、登り下りは小さいが距離があるので10時間も歩けばかなり体力を消耗する）

5月2日　晴後曇

地神山より札差岳往復

移動性高気圧は去りつつあるが、まだ尾を引いているので天気はもちそうだ。サブ・ザックの軽装で札差岳を往復せんものと出発する。地神山からは高度をさげるためか雪が少なく殆ん

ど夏道をとって行く事ができる。南北の稜線の東側には豊富に雪があるが西側には少い。途中大石山東側をトラバースしようとして雪の間にあらわれたブッシュをこかされ思わぬ時間をくった。丸い広い尾根で鉾立峯の他はキツイ登りもなく札差岳に到着。札差岳から北はゆっくりと高度を下げて飯豊山塊も終りをつげる。札差岳山頂手前の広い所には小池があり、その横にカマボコ型の新しい立派な避難小屋があった。備えつけのノートを見ると春に京大が来たらしい。我々も一言感想をかかせてもらう。帰りはポカポカと照る太陽とのんびりした稜線に誘われて休けい毎に昼寝をしながらゆっくりと戻った。午後はテントの前の斜面でグリセード遊び西の空には雲が押し寄せてきて低気圧の接近をつげていた。

5月3日　風雨後風雪　停滞

ニュースや気象解説で何回も警告していた気圧の谷の接近により夜半雨のち雪。目をさましてみれば、低い後室の方が一面の池となっていて、コッフェルで十数杯もかき出さねばならなかった。一日中風強く雪。

5月4日　風雪　停滞

相変らず、風雪、通過した低気圧の吹き出しらしい。

5月5日　くもり（ガス）後快晴

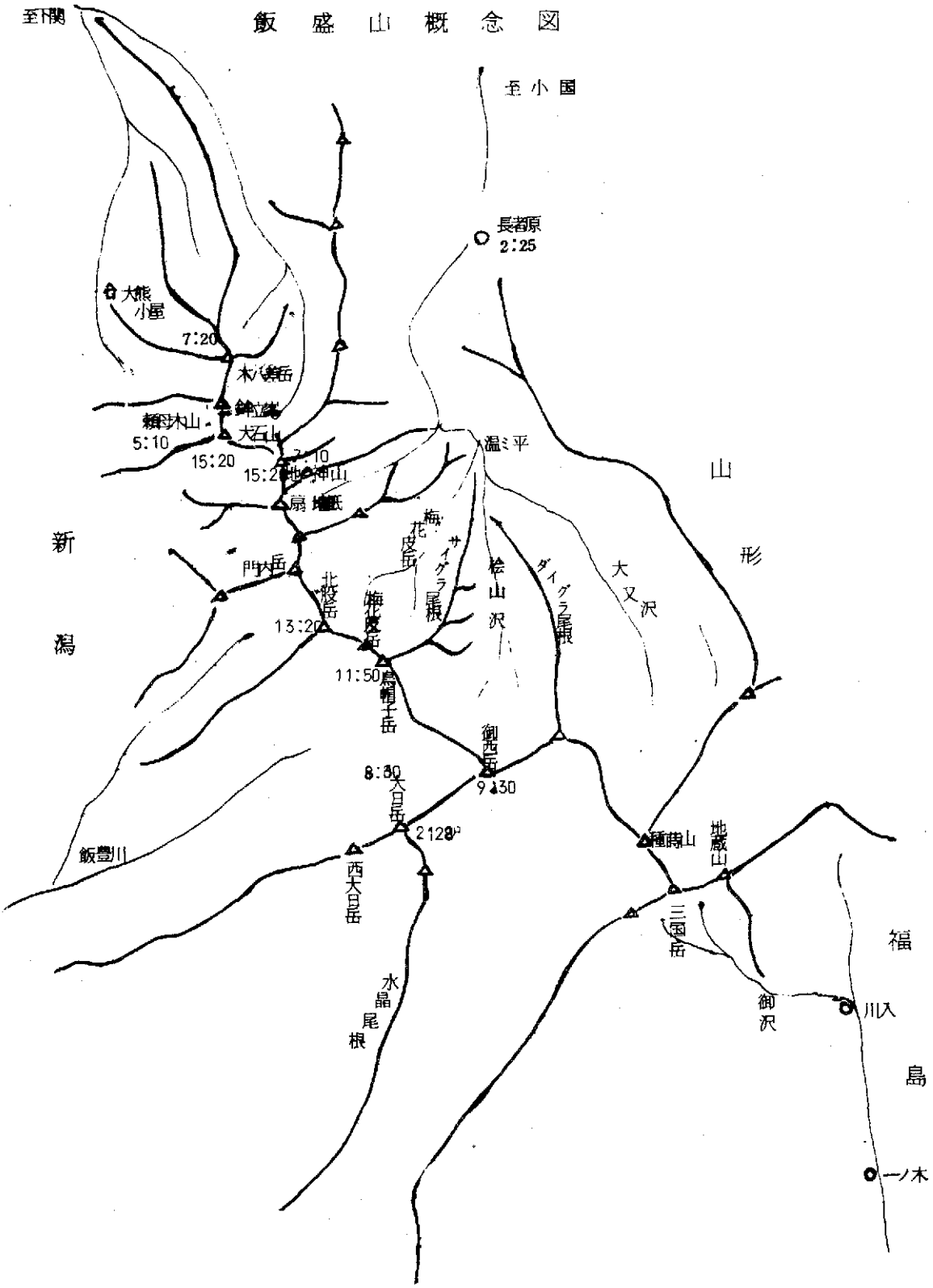
地神山－（丸森峯尾根）－長者原－小国

今日こそはと思って起きたのに、今日5日も又ガス。風がやまない。気象解説をきけば、高気圧の一つはすでに通過している。雨でエッセンの一部も食えなくなったし、低気圧もかなり去っており天気は良くこそなれ、これ以上悪くはなるまいと判断して、悪天の中を撤収することにする。雪がついてテントは考えられないほど大きくなってしまってかつぐのに苦労する。出発して北地神の頂上あたりでしばらく青空はのぞいたが、風は相かわらず強い。しかしながら、丸森峯尾根に入ると嘘のように風はやみ又1ヒッチもガスの中を慎重に下るとみるみるうちに天気が好転してきた。温身平辺りが下に見えるし、長者原方面ののどかな風景が見えてきてすっかり緊張から解放されて下った。2日間にわたる降雪によってかなり下までタップリ雪があり春山の帰りかと錯覚をおこさせる程であった。ドンドン下れば雪はなくなり、シャクナゲ、コブシの花の美しさに目をうばわれる。道のわるさをブツブツ云いながらも程なく下り切って、飯豊山荘の前に出た。ブナの原生林を通して雪をかぶった山が眺められ美しい。長者原のバスの時間に大分間があるので、テントをかわかしたり、記念撮影をしたりして辺りの何ともいえぬ美しい風景を満喫する。この辺りはまだ一面雪があった。長者原までは美しい沢ぞいのブナの林の中を行く道で形容の言葉もない程のうるわしさだ。北アルプスにも南アルプスにもない独自の美しさだ。川入部落の辺りまでくれば道ばたの小川の流れウグイスの声、ふりかえれば文字通り白銀に輝く飯豊の山々、立ち去り難い思いであった。約2時間余りで長者原につく。長者原も又美しい静かな部落である。長者原からのバスの後からいつまでもいつまでも飯豊の山々が見送っている。願わくば、もう一度長者原から飯豊を訪れたい。北アルプスのようなけわしさも、南アルプスのような雄大さも持たないが、奥深い飯豊のふところに抱かれた今度の山行は、忘れられぬ思い出として残るであろう。飯豊のよさは、山とそれをとりまく林や山々とかつ渾然一体となった素朴な奥深い美しさにあるのではなかろうか。

（糸　井　記）

Schizocodon soldanellojdes
form alpina

飯盛山概念図


至下関
至小国
長者原
2:25
大熊小屋
7:20
木ノ葉岳
鉢盛
頼母木山
大石山
5:10
15:20
7:10
15:2
地神山
扇地蔵
温ミ平
山
形
新
潟
門ノ岳
北股岳
13:20
梅花皮岳
サイグラ尾根
梅花皮岳
桧山沢
ダイグラ尾根
大又沢
11:50
烏帽子岳
御西岳
9:30
8:30
大日岳
2120
西大日岳
飯豊川
種蒔山
地蔵山
三国岳
水晶尾根
御沢
川入
福
島
一ノ木

大峰縦走

新人山行大峰山系　前鬼口ー大日岳ー彌山ー山上ヶ岳ー吉野

期間　4月29日～5月4日

メンバー　五出雲路（4年）、中岡、松林、田村（信）、田村（孝）（1年）

4月29日　晴れ

入大阪出発ー前鬼口ー前鬼川

予定より遅れ、ヘッドランプにたよってカレー風タキ込みとやらをすする。

4月30日　晴

5時30分起床。目がさめる前に、自動車がCSの横を通り過ぎる音をきいた。テントの外に出るとひんやりした空気が快よい。人造湖になった谷の向うの山にうっすらと朝もやがかかり、山の朝を感じる。7：30分、大日岳をめざして出発、やっと前鬼川の貯水量が減りはじめた頃、9時、西の谷との出合いに着く。やがて谷がずっと深くなり、清流ははるかに下方となる。前方には、不動の滝が新緑の中に白い水しぶきをあげている。日本的美といったらよいであろうか。これほどすばらしい滝ははじめてであった。この頃から、5分の休憩がおどろくほど短かくなる。滝以上に我々の目を輝かせた同志社女子大のパーティは、かえって悲観を大にしたものだ。思い思いの服装の我々5人が、整然と足ならみをそろえて行進する彼女らに圧迫されたというよりは相手にされなかったといった方が、良いかも知れない。それにしても無愛想なネェチャン達だ。前鬼部落、数えるほどしかない家々が、わずかの水田を前にしてひかえている。さあ、これからがいよいよ登りである。汗が背中をじめらすのを感じる。歩くごとに神経をつかいながらも、歩くことのみを考えてはならない。苦しさをまぎらわし、25分を忘れるために、いろんな事を考える。とはいえ、とぎれとぎれの回想ばかりでまとまった考えをめぐらすことはできない。12時30分近くなった時、自分のモモの筋肉がひきつるのを感じる。不均衡に力をかけたなら、完全につってしまうだろう。だんだんいたみがひどくなる。丁度、二ツ石の所であった。自分のために休憩してもらうことにする。再び出発、前方に大日岳のピークがそびえたつ。もう尾根は遠くない。水の補給をし、ワンピッチで大石の辻に出る。13時50分であった。大日はもう目の前だ。ワンピッチで登り、荷物をおろすと、おどろくほど体が軽い。はるかずっと名も知れぬ尾根がならび、かすんでいる。谷はずっと深い緑におおわれ、底を見いだすことは不可能だ。おもわず、ヤッホーと呼ぶ。快よいこだまが幾重にも帰ってきた。

5月1日　ガス

7時出発、釈迦岳までワンピッチ、1799.6mの頂上からは何も見えず、ヒョウまじりの小雨がふきつける。銅製の仏像が立ち、それを運んだ行者達のことが思われる。釈迦の急斜面をくだると、あとは孔雀岳、仏生岳というダラダラの上り下り、登山者が多いのに驚く。昨日の登りで一応足に自信がもてたのか、予想以上の速さだ。10時40分、七面山への分岐点、揚子ヶ宿址。七面山への道の方向に〃危険の立て札がある。地図にも大きな岩場が数ヶ所しるされている。行けども行けども『前鬼←→彌山』という天理大のワンゲルが設けた道しるべばかり、少々いや気がさしてくる。明星ヶ岳をすぎた頃、関西最高峰といわれる八経ヶ岳とのさかい目に、ポツンポツンと残雪。景色らしき景色の臨めない山歩きにとって、唯一のなぐさめとなった。八経での眺望も、風の音のみ。14時20分彌山の小屋に着く。休憩なしの素通り。下りはまた急な傾斜の石ころ道である。実際、彌山には留まる気がしなかった。小屋のすぐ向うは、ゴミの山だったし、小屋のたたずまいもひどく俗っぽかったように思う。彌山から、ワンピッチと少し下ったところに地図上にもあるように聖宝の宿跡があった。テントを張る場所があるくらいのもので水場なし、ガスが水滴化して木の枝からしずくを落している。15時15分であった。出雲路、中岡の二人でサブに水筒をつめ、飯盒をさげて水をさがしに行く。メシを食べる時だけは幸福感を味わう。

5月2日　雨　ガス

１０時２０分　水場のある露宮地にたどりつくために出発。靴の中は皆同じにグショグショ文句を言ってもはじまらない。ただ歩くのみ。行者還の小屋が見えた時は救われる思いだった。出雲路さんの予想以上に小屋は満員、土間のストーブの横にたって、水っぽいジュースと、味のないクラツカーをかじる。板の間では、ラジュースが音をたて、湯煙があがる。後髪をひかれる思いで小屋を後にする。小屋を出て約３ピッチの場所、１４時３０分、荷を降ろす。炊事はすべて水筒の水だが雨の水の利用を考える。これは我々新人がやりはじめたことであるが、まず木の幹を水が伝って落ちているところを見つけ、木の皮を上にそらしてはぐ、即ち自然のジャ口ができるわけである。その方法で翌朝のミソ汁はもちろん５人分の水筒も０．Ｘ。何時頃であったろうか、雨がやみ、テントのすき間から、火床にかすかにスミ火が残っているのが見えるではないか。キャンプファイヤーを楽しもうというわけで全員いっせいにテントをとびだした。喜んでさっそく石をとり除き、たきぎを集める。まもなくボッと炎が上がる。一同がうかれるのも無理はない。じめじめしたいやな気分から解放されるのだから。そこで皆思い思いに靴下をかわかしたり体をあたためたり、中岡があんな声どこからでるのだろうと思われるような声で山の歌を歌う。ボンヤリと天空に月が浮び、天気が変るのではないかと希望をもつ。そうして１時間ほど楽しんだであろうか。月はいつの間にかかくれ再び風と雨が出現する。一同満足してテントの中へ、あいかわらずシュラフは湿っぽい。

５月３日　雨　ガス

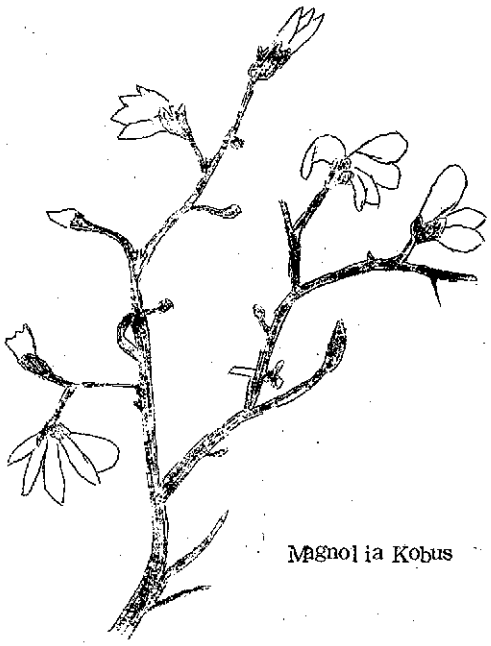
またも雨。この朝が我々炊事係（といっても新人４人だが）にとって最悪のコンデイションだった。マッチを三箱ぐらい使ったのち、松林が湿った新聞紙にやっと点火。とにかくホッとした。１０時出発。大普賢岳の周辺は岩場が多いらしい。道はあっても岩が露出して、けわしい登りが続く。大峰は日本でも最多雨地帯であろう。吉野スギが育つのもこういう気候のせいであろう。といっても我々にとっては、ぐちっぽくなる雨だ。松林がヒザをいためている。雨でひやしその上疲れがかさなったのであろう。ここまで来た以上、山上ケ岳へ登らなくてどうしよう。中岡快調、ピッチが上がる。山上まであと１８丁、１６丁…１０丁というように、こけむした石碑が道ばたにある。松林かなり足をひきずっている。めざす大峰神社に着いた時には何ともいえない快感が疲労の中に、わき上ってくる思いだ。堂々とした蔵王堂の中に、人間くさい臭いが満ちている。金のないものは、おまいりができないようだ。センコウ一本たてるにしても数十円はとられる。きようは開山日だそうである。山上を下る時、数十人の参拝者の一団に会う。信仰の力は強いものだ。必然的に肉体的苦痛を経なければならないだろうし、同時に山へお参りしたという精神的強さというものは強靱になるだろう。ここには哲学がある。机上で哲学書を開いても得られないものがあるのではないか。途中で出会った年寄りが口の中で「アリガタヤ、アリガタヤ」といっていた心境である。わき目もふらず歩き続けた。歩くことのみが我々の仕事で、あとはリーダー次第だという気になる。どんどん下って行くのだがキャンプ地がなかなか見あたらない。１７時まえ、やっと３坪ほどのテントをはった跡を見つける。信ちやんが夕食クラツカー論をしきりに出雲路さんに訴たえる。水場なし、新聞紙は少なく湿っていて火をおこす気力もない。結局信ちやんの主張を我々も支持して出雲路さんもクビを前にふった。（先日の木から水をとる方向は雨量減少のため実現せず）固形燃料で飯合に湯をわかし紅茶で心ばかりの暖をとる。腸にしみる。

５月４日　晴　快調

５時半起床　風雨の音なし。それっというわけで外にとびだす。青空だ。６時出発、朝食は水場のあるところまでおあずけ、体温が上り、スポンがほんのりと乾きはじめる。山々も見える。吉野まで、あと１６０丁、でも下りは松林にとって苦痛を伴うようだ。６時４０分５番関キャンプ地であるにもかかわらず水場が見あたらない。昨夜の露宮場所でひろったメモには、この先水場が多しとある。前進、皆、空腹をう

ったえる。吉野杉やひの木の植林地帯である。里が近いことを感じさせる。7時15分大天井岳の山腹にあたると思われる場所にところどころ、谷の方への落ち水がある。その適当な所で朝食。その前に、ちょっとしやれた気分になって松林と二人で歯をみがく。松林の目じりは下りっぱなしだ。オレだって、笑わずにいられない。だって、きょうは山を下りるのだから。山の本で著者が山を降りたくない気分になるものだと書いてあったのに比べ、何んと正反対ではないか。9時50分、出発、一路吉野へ、今回の山行にこの日がなかったら、それこそ本当に二度と山へ来まいと思ったかも知れない。百丁茶屋を見下す、山道から五月の山をながめる。まぶしいほどの緑である。誰ともなしに歌を口ずさむ。口笛が出る。苦しい山行だったと思う。しかし、今はもうそんなこと問題ではない。自分でも、こんなに歩けたのかというある種の満足感が頭の中を占めてしまう。非常食のための菓子類がおやつになる。遠足気分だ。13時5分分、吉野奥千本、鬼の首でも取ったかのような喜び。疲れも忘れて、出雲路さんに40分ほど時間をもらい桜見物。体が宙に浮くような気分で走る。葉桜も桜の花も、今の我々にとって同じこと。途中でバス道をそれ、御陵の方へのいなか道にはいる。宮滝の方へ行く分岐を通り、犬養孝教授著の「万葉の旅(上)」の171ページにある道を下って、吉野駅へ、15時45分であった。

(田 村 孝 記)



1966年度 夏山合宿 於 剱岳・二股

合宿において

我部が今夏合宿に求める目的は岩と雪との基本技術の修得 および今年の部員構成の特質による二年部員への訓練を第一とした。そのため山自身に対するフロンテイア・スプリットよりもクラシックな岩と雪の山に決定し、その対象を剱岳を求めB、Cを二股とした。昨年の雨にたたられた合宿の経験を生かし梅雨あけを慎重に選んだ。また十分に部員を動かし、その対象をマスターするために後述のように日程、対象を決定した。

期間　7月20～8月2日

メンバー　CL　渡部　洋　(S2)
　SL　出雲路敬孝　(T4)
　細川　明彦　(T2)
　糸井　文彦　(E4)
　医療　黒田　治朗　(M4)
　辻　信男　(T4)
　装備　田中　喜樹　(T2)
　食料　的場　幹史　(Σ2)
　岡田　謙治　(J2)
　甲田　吉彦　(Σ2)
　竹林　真一　(Σ2)
　山田　靖則　(T2)
　田村　孝　(L1)
　田村　信介　(Σ1)
　出口　信之　(Σ1)
　松林　一男　(T1)
　松川　隆行　(T2)
　石原　敏雄　(S1)
　中岡　和哉　(M2)
　三沢日出男　(OB)

行動概要

7月19日　先発(細川、田村孝、松林)出発
　20日　本隊出発
　21日　晴→曇　称名→大日平CS
　22日　雨→曇　CS→大日の登り3.P C
　23日　曇→雨　CS→大日小屋→奥大日→室堂乗越CS
　24日　晴　CS→別山乗越→二股予定地
　25日　晴　長次郎　熊ノ岩下で雪上訓練
　26日　晴　TK中岡　田村L
　　○6峰A face: 魚高ルート
　　○同　C face: RCCルート　渡部、山田
　　○八峰下半
　　糸井、的場、石原、田村(Σ)
　　○源治郎尾根II峰平蔵側
　　細川、甲田
　　○八峰上半　辻、田中、松林、松川、出口、三沢OB
　　○チンネ：中央チムニ 9,aバンドbクラック　出雲路、竹林
　　○四ノ沢－I峰－56コル
　　黒田、岡田
　27日　晴○大窓－池平－仙人
　　三沢OB、石原
　　○東大谷中尾：G1　糸井、田中
　　浮石のため糸井負傷当日下山
　　○八峰上半　細川、竹林
　　田村(L)、中岡
　　○本峰北壁：L2　山田、岡田
　　○　同　：L1　渡部、出口
　　○剱尾根上半　辻、甲田
　　○6峰A face　魚高ルート
　　同　C face　RCCルート　出雲路、的場
　　○本峰南壁：A1　黒田、松林
　　TK　田村(Σ)、松川
　28日　晴　長次郎にて雪上訓練

7月29日　晴時々曇　停滞

30日　晴○小窓→三ノ窓→本峰　出雲路、山田、松川、中岡、石原、田村(L)

○剱尾根上半　黒田、竹林

○7峰長次郎face:aルート　渡部、田中

○本峰北壁：L2　細川、田村(Σ)

○6峰Cface:RCC剱稜会ルート　辻、岡田

○本峰北壁:L5　甲田、的場

TK　出口、松林

31日　雨　停滞

8月1日　○源治郎尾根　出雲路、岡田、石原、松林、出口

○本峰北壁:L4　渡部、松川

○同　南壁:A2　辻、田村(L)

○6峰三ノ窓face　黒田、田中

○別山南尾根　細川、山田、的場

ハシゴ沢→内蔵助→5.6コル→4.5BS

○本峰北壁:L3　竹林、甲田

TK　田村(Σ)、中岡

8月2日　晴　○チンネ：左方ルンゼg.c.d　辻、甲田

○本峰北壁:L6　出雲路、田中　中岡

○チンネ：左稜線g.c.d　⊗　黒田、岡田

別山南尾根(II)　細川、山田、的場

内蔵助平　渡部、竹林、出口

田村(LΣ)、松林、石原、松川

合宿ノートより

剱尾根上半　辻、甲田

7月27日

出発5：00－三の窓コル7：30－R3取付8：20－R3終了　ドーム峰頂上直下9：20－コルB10：05－コルA12：05－長次郎の頭12：20－BC15：10

三の窓コルから見えるR3は傾斜が急に見えるが、取り付いてみると淡々とした登攀が稜線まで続く。このR3はアンザイレンしてコンティニアスで登る。取付はすぐ判る。高度感があって、三点支持の練習にも良く、1年生のトレーニングに良いと思う。コルBまでは別に何もなし。コルBから見るR2は走って登れそう。コルBより再びアンザイレンして、ロツククライミングらしき登攀が4ピッチ続くが別にどうということは無かった。3ピッチ目にR1の上部をトラバースする。R1は岩のルンゼで傾斜はゆるいがホールドが少ないと見た。コルBから長次郎の頭まで脆い逆層の岩を、稜線を、或いは池の谷左俣を巻きながら約2時間で着く。ドームから見る小窓王南壁、池の谷フランケ等の偉容はさすが剱西面と感心せざるを得ない。又、チンネも傾斜急に見え、さすがである。池の谷右俣への高度感は特に印象的であった。

（辻　記）

東大谷G1　糸井、田中

7月27日

出発4：00－前剱8：05－G1取付10：00－事故10：15－平蔵のコル12：15－平蔵の出合1：00－BC帰着3：10

取付で30分程準備した後糸井トップで登り始める。セカンドの田中は取付きのハイマツで確保する。15m程直上し、糸井少しの間上へいくか左へいくか迷う。そうしてしばらく上へいったがルートがわからずもとの地点（迷った地点）迄もどりセカンドの田中に〃トラバースするぞ〃と告げトラバース開始する。7～8m程トラバースした後浅いテラスらしき所の左上にあるハーケンにカラビナをかけザイルをセットする。そこより糸井は直上して2～3m位登った所でホールドに岩（30×30）がぬけて墜落した。墜落時岩のカドで右足に5cm深さ1cm～1.5cm位の怪我をする。一方の足にザイルがからみついたがやっとはずしてしばらくザイルにぶら下ったまま休憩し、カラビナをかけた地点迄もどる。そこでセカンドの田中にの

ぼってきてもらい、きずの手当をする。なおその時抗生物質の錠剤をトンカチで押しつぶして傷口にふりかけた。その時二人でのぼるか下るかを相談し、往路を帰るのはchock stoneの所で40mザイルを二本使ってけんすい（途中空中けんすい）したのでのぼれるのかどうかわからないので糸井は〃田中が後すべてトップをのぼってくれればついていける〃というので田中がトップでのぼり始める。核心部は3ピッチで終了する。なおルートは2ピッチ目からリッジを取った。平蔵のコルにて岡田、山田パーティーにあい長次郎出合でまっている他のパーティーに連絡のために早くおりてもらった。なお糸井は平蔵谷をグリセードで下降した。長次郎出合にて、リーダー渡部と相談して室堂の診療所にいき糸井はそのまま下山した。

（文責　田中）

6峰3の窓側Face　　黒田、田中

8月1日

出発5：30－取付7：30－六峰ジャンダルムの頭1：00－六峰E－Face の頭3：40 BC5：30

1 pitch　取付に苦労する。約15m岩、20mのガレ場、ハーケン

2 pitch　gullyの右手のいやらしい所を攀るもハーケンはきかない。

3 pitch　草付まじりの岩

4 pitch　gullyの左手のいやらしい所。急な岩を15～20m登った上は草付

5 pitch　草付まじりの岩。5～6mの岩でビレイする。

6 pitch　Hung 気味の所を左へ3mトラバース。草付に沿って左上に10m。後はブッシュの中を2～3m登ってビレイする。

ここまでに3時間を要して10：30になる。六峰ジャンダルムでは六峰側は大きなGullyになっていて、Gullyの終りはclimbing downしてGullyの右手のブッシュにとりつく。少しガレた沢を登ると、その上はBush と草付と露岩の交互に出てくる所を約3時間位も登り、六峰E－Face の頭に着く。七、八のコルを下り二股のB．C．に着いた時は皆さん心配して、捜索に出ようとしていた。すみません。12時間行動をやって少ししんどい。

（田中記）

別山南尾根 8/1～8/2 L細川　的場、山田

8月1日

BC（5:00）－ハシゴ段乗越（7:00）－取付（9:50）－稜線（11:00）－4峰手前岩峯下（12:00）－4峯途中BP（16:45）

二股のBCを出発して他のパーティーと共に真砂まで行きあと右岸ぞいにハシゴ沢出合へ行く。荷は3日分の食料と登攀具でだいたいサブ一杯。ハシゴ段乗越から見る内蔵助平は美しい。内蔵助谷にそって下り丸山側壁が頭上に現われる所まで来て谷に下る。渡渉点で府大の赤旗を見つける。一回目の昼食。ここからはまず稜線に出ようと小さなルンゼにそって登り1時間のヤブこぎで稜線に出た。出た所は5.6峰の間と思われる。右側は大タテガビン南東壁が圧倒的である。又赤沢岳西尾根が特異な稜線を見せる。稜線通しにヤブこぎを進め4峯手前の岩峯に出た。ここでトラバースしようとして失敗、結局リッジ通しに登る。アンサウンドな岩で気持が悪い。岩峯上より黒部川が見通しである。第二尾根の南壁も大きい。掃除すれば良い岩場になるであろう。岩峯をこえると再びヤブこぎ。大切戸はまだかまだかと思うが木に登って見ると目の前は大きな岩峯（黒部側は樹林）であり大切戸の位置は分らない。時間もたっているので樹林の間の広い所を見つけてビヴアークとする。初めてのビヴアークでもあり寒かった。

8月2日

St（6:50）－大切戸（9:15）－南峰（13:05）－ハシゴ段乗越（15:30）－BC（17:20）

内蔵助谷で入れた8ℓの水もEssenで1ℓにへってしまった。Essenは水の必要なものが多く完全に失敗。とにかくまたヤブこき開始。1時間少々で4峰の岩場に下る。これが偵察隊の名づけた〃洗たく岩〃と判断。4峰頂上に立つと見ごとに切れている。あれだけ近くに見えた

南峰がずっと遠くに行ったみたいである。内蔵助側からまき気味に１０ｍブッシュを頼りに下る。捨縄のかかったピンを見つけまず２０ｍの懸垂。そこから補助ザイルと共に４０ｍの懸垂。はじめの５ｍ位はやぶの中で後半２０ｍが完全な空中懸垂である。大切戸はいかにも切戸という感じである。巾は１０ｍくらいで急なルンゼが両方から上っている。ここで真砂岳の遠足隊と交信。再びヤブこぎ開始。３峰までは急なヤブこぎの後もう少しで達する。３峰と２峰の間も小さいながらキレット状を呈する。２峰までは途中ナイフリッジ等がありなかなか楽しい。２峰と１峰の間も数段の岩棚であり１峰からの岩稜は顕著である。１峰から南峰までのブッシュが１番強烈であり南峯三角点を見つけた時はほっとした、がブッシュはまだまだ続く。尾根との分岐点の途中で雪渓を見つけはじめて昼食をとる。尾根の分岐からハシゴ段乗越までは尾根どおしに切開きがあり容易にハシゴ段乗越へ。あとＢＣまではブラブラとゆっくり帰る。予定よりも遅かったが誰も心配しない。

（山田記）

チンネ左稜線－Ｇチムニー－ｃｄクラック

黒田、岡田

８月２日

出発５：００－取付８：００－Ｔ５着１０：１０－Ｇチムニー－１１：５０－頂稜１２：２０ ⇒ ＢＣ２：３０

左稜線

１ピッチ　少々かぶり気味のガリー。２０～２５ｍで広いテラス。

２ピッチ　草付とハイマツ混りの岩。３０ｍ

３ピッチ　ハイマツと草付の段。３０ｍ。

４ピッチ　右手へ登ってハイマツ帯に出る。３５ｍ。ハイマツの中を２０ｍコンテイニアで行く。

５～６ピッチ　ハイマツと草付をさけて、右手のリッジ横のフエイスを登る。３５～４０ｍ

７ピッチ　三つのツアッケの八峰側を巻いてＴ５へ

Ｔ５から適当なピンがなくて懸垂できず同じ所をクライミングダウン。左方ルンゼに合流してコンテイニアスで中央バンドへ。この間Ｔ５で昼食を取ったりして１時ブラブラする。

Ｇチムニー　ｃｄクラック

１ピッチ　チムニーをぬけ、上部がかぶっていて右手に出る所が少しいやらしいが、きいてないハーケンにカラビナをかけてｃクラックに入る。少し登って小さなテラスでハーケンでビレイする。３５ｍ。

２ピッチ　ｃクラックを登る。クラックが急になりはじめホールドの少なくなる所でｄクラックにうつる。ハーケンを打ったが非常に良くきいた。カラビナ支点に左足を大きく出して、左手の大きながっしりしたホールドを頼ってｄクラックに入る。ｄクラックはホールドは豊富だが浮石が多　ｄクラックをちょっと登ればチンネ頂稜である。ハーケン消費２本。　（岡田記）

個人行動表

	７／２６	７／２７	７／３０	８／１	８／２
渡　部	六峯Ａ、ｃフエイス	本峯北壁	七峯長次郎側	本峯北壁	内蔵助平
出雲路	チンネ	六峯Ａ、ｃフエイス	小窓→本峯	源治郎尾根	本峰北壁
糸　井	八ッ峯下半	東大谷			
黒　田	四ノ沢	本峯南壁	剣尾根上半	六峯三窓側	チンネ
辻	八ッ峯上半	剣尾根上半	六峯Ｃフエイス	本峯南壁	〃
細　川	源治郎二峯平蔵側	八ッ峯上半	本峯北壁	別山南尾根	別山南尾根
田　中	八ッ峯上半	東　大　谷	七峯長次郎側	六峯三ノ窓側	本峰北壁

甲　田	源治郎峯平蔵側	剣尾根上半	本峯北壁	本峯北壁	チンネ
岡　田	四　ノ　沢	本峯北壁	六峯Cフェイス	源治郎尾根	〃
竹　林	チ　ン　ネ	八ツ峯上半	剣尾根上半	本峯北壁	内蔵助平
的　場	八ツ峯下半	六峰A，Cフェイス	本峯北壁	別山南尾根	別山南尾根
山　田	六峯A，Cフェイス	本峯北壁	小窓→本峯	〃	〃
田村(I)	T．K	八ツ峯上半	〃	本峯南壁	内蔵助平
田村(2)	八ツ峯下半	T．K	本峯北壁	T．K	〃
出　口	八ツ峯上半	本峯北壁	T．K	源治郎尾根	〃
松　林	〃	本峯南壁	T．K	〃	〃
松　川	〃	T．K	小窓→本峯	本峯北壁	T．K
石　原	八ツ峯下半	池　ノ　平	〃	源治郎尾根	T．K
中　岡	T．K	八ツ峯上半	〃	T．K	本峰北壁

○ 食糧報告

昨年のエッセンの悪名を今年は打消そうといろいろと工夫してみた。特にタンパク質とVCに気をつけた。

○うまかったもの

ボッカ中のフランスパン、チキンライス、ジュース（VC強化）、パーテイのゼリー

○合宿腹について

これは栄養失調の症状で、いくら食べても満腹と感じない。今年は大分ふせげた。タンパク質とVCがあったからだとしたらエッセン係として光栄。

○タンパク質

何でもいいから腐らないようなものを考えられるだけ持っていった。

- 鯨肉のつくだ煮
  油であげた角切りを砂糖、しよう油、ショウガ、塩で味つけ。
- 生干しいわしの油あげ
  生干しは安いがすぐ腐るのでこの手を使った。しよう油をかけていった。
- みそづけ豚肉
  油であげてみそとまぜる。豚汁用。みそは白と黄を半々か甘みそ使用。
- かつおぶしのつくだ煮
  しよう油で十分に煮て水分へらす。ダシにもなるし、しよう油の代用になるしこのままでも使える。
- ハム・ハンバーグ
  1Kg400円という安いもの、もちろん魚肉
- 魚かんづめ
  安い。しかし汁に入れたら消えてしまう。タンパク質としてはハムより上。
- 高野ドウフ、かつをぶし、みそ
  日本古来のたんぱく質

○干しマメ（グリーンピース）

もどすのに火と水が大分いるが山でグリンピースがくえるし、畑のタンパク質

○ビタミンC入りジュース

山で必要なのはA、Bにあらず Cである。Cの効用としては寒冷に対する抵抗力。疲労回復。日やけ（かんけいない）詳しくはテレビを見よ。

アスコルビン酸（VC）500mg／1人（必要量の5倍）
砂糖30g／人
クエン酸、エッセンス　少々

（的場）

○ 装備報告

- ハーケン　100コもっていったが消費40コ。横ハーケンの売行き良好
- カラビナ　消費なし。
- ザイル　1つ（40mザイル）転落をとめるためダメになった。

・ケロシン　ほとんどまきを使用したため定着では多く余ったが最後のファイアーですべて消費。

・テ ン ト　上級生の１人がろうそくでテントを１つこがした。残念である。

感　想

各１人づつが注意してくれたのであまり損傷もなくまあ無事にすんだ。

（田　中）

○ 気 象 報 告

定着、縦走を通じて好天に恵まれ、十分に行動することができた。山上天気図では気圧が低く太平洋高気圧は弱そうに見えたが、上層に強い高気圧があった（後で知ったことだが）ため今度のような好天に恵まれたものである。上層気象の重要さを示されることであるが困難なことであると思われる。

一年生は全体的に一応天気図はかけるようになっているがもう少し見やすく、ということを今後やってほしい。また二年生によく書けないのがいるが早く書けるようになってほしい。

（山　田）

Phyllodoce alleutica

夏　山　山　行

高天ケ原パーテイ

メンバー　L田中（2年）、竹林（2年）、松川（1年）、田村信（1年）

8月3日　雨

房治（13：30）→雷鳥沢CS（14：00）

8月4日　晴

C. S. St（7：00）→一ノ越（9：00～11：00）→獅子（13：00）→五色CS（15：50）

8月5日　晴

C. S. St（6：15）→越中沢岳（9：50）→スゴ小屋（13：00）→スゴCS（14：10）

8月6日　晴

C. S. St（7：15）→薬師岳（10：15～10：45）→太郎（12：00～12：10）→カベツケ原CS（15：15）

8月7日　晴

C. S. St（7：30）→高天ケ原CS（13：00）

8月8日　晴　停滞

8月9日　晴　停滞

8月10日　晴

C. S. St（6：30）→三俣（11：50）→双六（14：30）→ワサビ平（18：50）→新穂高（19：30）

8月5日

鳶岳からスゴ小屋が目の前に現われたので午前中にスゴのテント地につくと思ったがいろいろの小さなPeak にまどい着いたのが14：10スゴのテント地はスゴ小屋から約1時間の所皆バテ気味。

8月7日

道をまちがえカベツケ原に8：30着。ブツシュこぎ1P．5P．で高天ケ原峠につく。美しいが少し季節が遅いのか花がかれている。残念。高天ケ原で松川が腹を悪くして停滞が長くなった。食べすぎが原因と思われるが注意せねばならぬ。ワサビ平へ下った時は全員半バテであった。

（田　中）

裏銀座パーテイ　　8月3日～9日

メンバー　L渡部（4年）、的場（2年）、田村孝、中岡、石原、松林、出口（以上1年）

雷鳥沢－五色ケ原－平－東沢出合－赤牛岳－高天ケ原－赤岳岳－烏帽子岳－濁

「朝日に輝くぬかるみ踏んでー」

楽しげなハイカーの村雷鳥沢で我々は縦走の最初の朝を迎えた。立山は、素晴らしく晴れ渡った空に逆光をあびて立つ。細くたなびいた一本の雲は淡いオレンジ色だ。真近な山崎カールもまだ陽の光はささない。人間が縦横に踏みにじってしまった立山も今この一瞬の姿こそ、人の目に触れる以前からの永遠に変らぬ真の姿なのだ。

昨日の雨に洗われた山は、あちこちに水溜りを残し、小さな小川となっている。空の色はその全ての水面に明るくすがすがしく映っている。今日の一の越への登りは何と心はずむものだろう。室堂の建物には、すでに陽が射しはじめた。

「口は禍のもとー」

道は一気に平へ下る。道々聞く有難き説教、曰く「山の装備はな、何一つ欠けてもアカンもんや、ラジコ（ラジウスのこと）の穴そうじ一本で縦走失敗する事も有るんや。どんな装備でも絶対失うたらアカヘンで。」この説教師刈安峠で大いにくさる。即ち「あーオレの水筒あらへんぞ、しもた落ちてもた。」一日中人から一滴の水も貰わずに、自分からの失敗に償いを行

ったが彼が東沢で水を飲んだその一瞬、黒部本流は逆流し、東沢は水が涸れてしまった。リーダー受難の１日でした。

「エデンの園」

東沢出合より黒部を５００ｍ上ると沢中の洲に素適な泊り場がある。東沢テント地と異り、人も来ず、数匹の岩魚も釣れた。久し振りにゆっくりと体をのばし、合宿のアカを今日一日の晴天停滞で十分に落すことにしよう。なごやかに沢音は間近く聞え、キラキラと水面は輝く。烏帽子の岩峰がわずかに見える所まで東沢の斜面は緑でうまっている。我々の楽園はここなり。

突然、あたりの静寂が乱入者によって破られる。見よ、東沢出合より来たる四つの黒い影を。その上彼等は女連れではないか。だがここまでには黒部の急流を二度渡渉しなければならないのだ。悪魔よ去れ、楽園の守りは堅いぞ／あっ渡り始めたぞ、１列に連なってよたよたと。ひっくり返れ、そして二度と楽園に来るな。バカ、帰れ、ごけろ、流されてしまえ。しかしこの悲痛な叫びは天に達せず、終には楽園は騒がしいキャンパーの泊り場と化した。我等一同、大ぼやき。

「思い出深き赤牛」

登れども登れども赤牛の馬鹿尾根はまだ長い。昨年ここで上級生にしごかれていた、どこかの部員の姿が思い出される。昼過ぎ、やっと来た頂上で、渡部氏は早速記念碑を捜す。３年前、彼が初めて口元のタル沢の遡行に成功してここに立った時、ペンキで岩に記した初恋の人の名。この岩ゆえに彼は、春夏秋冬このピークに足を運んで来たのである。さて３時頃ガスの巻いて来た中で我々は道が無くなっているのに気付いた。尾根をまちがえて下ったのだ。万事窮す。右にすべきか、左にすべきか、一面ガラ場の急斜面と這松で自分達の足跡さえ判らない。夕暗迫る７時頃、飢えと渇きに目を血走らせた７つの黒い影は漸く高天ヶ原にたどりつきました。

「大シゴキー」

「走れ／」オニの声が飛ぶ。「何もそもそしとる。もっと早う走らんか／」こりや大変だ、平時と大分風向きが異う。えらいことになった。出口は泣き声を出し中岡はベタ遅れ、松林のオトウちやんも死にものぐるい。道行く人の驚いた顔、ふりかえる顔、立ち止る顔。それでも走る。天まで走る。バットマン的場も走る。馬脚の石原も、田村だって遅れは取らじ。後ろからオニが追いかける。

やっと着いた水晶小屋。終に中岡氏は前後不覚のノックダウン。出口は腹をおさえてウンウン。後日、ドクター中岡、自ら診断を下す、「あれはショックによる一時的な全身の痙れんであります。」今年の中岡氏の医療講義は、ことのほか、ショックについての説明と治療法が、懇切丁寧でありました。オワリ。

（的場記）

黒部上ノ廊下遡行

メンバー　Ｌ加藤（４年）、岡田、山田（2年）
期日　Ｓ４１年８月３日～８月１３日
８月３日　雨

房治荘－（１３:３０）→一の越（１６:００～１６:２０）→浄土山富山大学立山研究所（１７:２０）

例の如く房治荘で荷分けをしたあと雷鳥沢へ行く他のパーティーと別れて室堂へ向う。軽量化をしたはずにもかかわらずさほど軽くない。室堂から一の越へかけては穴堀りのために道が判りにくい。一の越に着くと風雨とも少しひどくなったので小屋の中へ入って休憩。一の越からは横なぐりの雨の中を全員フラフラしながら登る。２ピッチ半で浄土へ着く。小屋の中は非常に寒い。

８月４日　晴

立山研究所（６：００）→五色ヶ原（９:５０　１０：００）→平（１２：００～１３：１５）→東沢出合（１５：４５）

12時の渡に間に合わせようと早めに出る。鬼の下りの春の雪崩事故現場を再確認しておく。ザラ峠への下りは1ピッチだったが峠へつくとヒザはガタガタ。五色ケ原の小屋でかんづめを一個あけてから出発。少々時間を食ったので思切ってとばす。結局五色ケ原から平まで2時間、渡し舟にもすべりこみセーフ。渡し舟からおりて少し休憩の後、水平道を進む。今年は誰とも会わない。東沢出合でテント地を捜がすが余り良い所はない。結局去年と同じ所に張った。

8月5日　晴

東沢出合BC（6：30）→南沢岳と烏帽子岳の間の沢の出合→南沢西尾根転進地→BC（13：40）

天気図は思わしくないので上廊下行を延期して南沢西尾根の偵察に向う。東沢は初め左岸に踏跡が有り別にいやらしい所も無い。行くと大木が、橋のようにかかっているところがあり右岸にわたる。目ざす沢まではすぐであった。ただちに遡行にはいる。20分も行くと沢は右に大きく曲り5m位の滝であった。左の支沢（涸沢）に入って2ピッチ藪こぎの後尾根にうつる。尾根通しのブッシュはさほどでもない。倒木のある所で上部、下部を見わたす。少々急だが下って下れぬことはない。ここから下りにかかる。小さいが顕著な尾根である。右側によるとガレがある。所々フイックスの必要性ありと感じる。帰りは橋をわたらずに渡渉やへつりのトレーニング。BCに帰り渡部氏らのパーティを捜すが見あたらない。黒部の方にキャンプを構えていた。

8月6日　晴　停滞

連日の行動でもあり休憩のため停滞とする。渡部氏たちも停滞。少々サボりすぎとちがうか。京大パーティー、阪大ワンダーフォーゲルパーティーと会う。暇な1日。

8月7日　晴

BC（6：30）→高まき開始（9：20）→口元タル沢（10：20）→廊下沢出合→スゴ沢出合（12：00～12：20）→金作谷から500m下流CS（15：40）

いよいよ上ノ廊下入り。サブいっぱいに荷物をつめて出発。渡部氏らと別れたあとすぐ渡渉。早朝の渡渉は寒い。上の廊下に入って1ピッチ目にワラジをつける。途中一ケ所左岸をへつり広い河原へ出る。ここで渡渉、ザイルを出して加藤がトップで行く。深さは腰の上。この渡渉に20分を費す。左岸上方にニセピンガが見えはじめると両岸がせばまり川が大きく右に曲っている所にきた。これから先はトロ、背はたりそうにない深さなので左手ナメ滝の支流の右岸を登って高まき開始。高まいて樹林の中に入ると踏みあとを見つけ踏みあとをつたっていくと高天ケ原新道に出た。高天ケ原新道を通って口元のタル沢に着く。タル沢上流は廊下のようである。タル沢から尚も新道を行く。途中口元のタル沢出合の見える所で休憩。出合は青々としたトロ。向いの沢からは雪渓が落ちこんでいた。この分ではとうてい沢ぞいの遡行は望めないと判断。新道ぞいに尚も進み、途中から廊下のないことを確認して河原へ下る。もう100mも下流は小さいながら廊下をなしていた。少し行くと岩に赤ペンキで矢印がつけてあり少々厭なかんじ。（高天ケ原新道がここについているとは考えてもみなかった。）廊下沢下流の屈曲点は赤牛側がゆるく河原も広く積雪期にもテントを張れそうな所である。木挽側からの雪崩もそう大きいのは出そうにない。ここからスゴ出合までは広々とした河原でスゴの稜線を見ながらののんびりした所である。スゴ側はそれほど木がないので雪崩は出るかも知れない。スゴ沢のもう一つ上流の沢の出合で昼食。上の黒ピンガの入口である。出合附近は青々としたトロ。右岸通しに岩棚の上に行き、懸垂下降で下に下る。新潟大のパーティーがブッシュの中から再び現われた。なおも右岸をへつり支沢の滝を越えた所でニッチもサッチもいかなくった。渡渉すれば腰の上にまで水がくるのは目に見えている。この先どのくらい廊下が続いているかもわからない。結局高まき。一応樹林帯に入り川ぞいにヤブをこぐが川が右に少し曲るあたり（上の黒ピンガ核心部の手前）から河ぞいに行くのをあきらめねばならなくなった。ヤブや草つき竹ヤブを抜け金作谷の出合が見える所で下ることに

しブッシュを持っての下降がはじまる。2回アブザイレン。途中でカモシカの白骨死体を見つける。左手の小沢（黒部へ注ぐ）には滝（２０ｍ位）が二つあり黒部側に下りながら出合へ下る。出合は大きな岩盤であった。金作出合まであと５００ｍ位であるがまだ廊下がつづいており今日はここで幕営。

８月８日　晴

ＣＳ（６：３０）ー金作谷出合（９：００）ー（高まきのため時間記録なし）ー第二カールの沢の出合（１４：３０）→赤牛沢出合ＣＳ（１５：３０）

天気は思ったほど悪くならない。今日も上天気。金作までの廊下は渡渉（深さはわからない）覚悟なら行けぬこともないが早朝の渡渉は気がすすまない。高まく。ヤブをこいているうちに下半身はびしよぬれ。渡渉と変りはなかった。教訓；早朝は渡渉もヤブこぎも結果的には同じことである。金作谷はカールまで雪渓でびっしり埋っている。出合のトロはこれもまた青々としている。両側の草つきは急傾斜なのでまた高まく。高まきや今日はどこまで行くのやら。途中で今度は生きているカモシカを見つける。黒部は右岸からナメ滝が落ちているのが確認できた。カモシカの啓示に導かれだんだんおかしな具合になってきた。何本も尾根をこえているうちに沢の二俣に出た。どうもこの沢があのナメ滝の沢らしい。この沢の左俣をつめたら霞平だと思いながら右俣に入り途中からまたまたヤブこぎ。小さな尾根に出た。雲平が見える。木に登ってこのあたりが平地と考え、廊下に当らぬように右よりに下降をはじめる。竹ヤブのヤブこぎにはかなわぬ。小さな涸沢を見つけて沢にそって数時間ぶりにブッシュから解放された。第二カールの沢の出合の少し上流であった。記録によればこれからは大した所がないらしい。少しへつると又河原に出た。尚行くと左手からナメ滝で沢が入っており、その先をへつって高まく。高まき後は大きな岩盤の上を行くと又トロ。高まき道もあり高まく。下りはアブザイレン。あとはずっと開けている。右岸通しに小さく高まいて行くと魚つりのオッサンに出会う。聞く所と足ごしらえから察してこの先は何もなさそう。どうこうしているうちに赤牛沢出合（滝）についた。今日はここまで。沢の音が子守歌のようであった。

８月９日　晴

ＣＳ（６：３０）ー立石（７：００）ー夢の原（９：００ー１２：００）→温泉小屋（１２：３０ー１３：３０）ー温泉沢ＣＳ（１４：００）

例によって加藤が４：３０に目をさます。飯を食っていや食いながら今日は東沢出合まで帰るのをやめて温泉にでもはいろうという意見が出る。全員一致で採沢。歩きだしてすぐ立石につく。奥のタル沢をつめて行くと右俣から滝がある。ケルンも左俣に有ることでこれを温泉沢とまちがえてどんどん行ったらケルンの代りに滝が出てきた。少し行くとまた二俣。またまた左俣に入る。硫黄の臭いがしてきたので間違いなかろうと思いきやさにあらず、妙な形の小さな滝をいくつか越えていくうちにまたしても20ｍ位の滝。高まいているうちに道を発見（高天原新道でした）道の通りに行く。しかし途中にジュースの袋が捨ててある所を見ると同類はかなりいたようだ。道をどんどん行くと夢の原。トカゲといくか。昼近くまでパンツ一つでゴロゴロしていた。一度アベックが近くを通った時のはずかしさ、限りなし。日も高いしぼつぼつ行動を起して温泉小屋に着いた。荷物を途中において温泉沢を上り、適当なＣＳを見つけて舞いもどり一風呂あびろ。風呂にはいっていると夢の原の方から竹林と田村（信）が来る。風呂から上って聞いてみれば松川が食いすぎて腹をこわして停滞とのこと、あきれた奴らだ。こちらが毎日、軽量化されたまずい飯で頑張っているというのに。今日も又、ツエルトを張ってのビバークをはじめよう

てテント地に帰って晩めしのしたく。

８月１０日　晴

ＣＳ（６：３０）ー赤牛岳（９：３０〜１０：１０）ー東沢出合ＢＣ（１２：３０〜１３：２０）ー二の沢出合（１４：３０）

例の通りに出発、温泉沢をつめるうちに道を見失なって沢をつめていた。滝があるが小さい。

途中で尾根に移り道どおしに稜線に出る。赤牛稜線はさすがに人がいない。裏銀座は小さいのがゾロゾロと行っている。赤牛岳の頂上で写真（山の写真）をとっているオッチャンと少し話したあと北東尾根を3時間で下ってＢＣ着。二の沢出合まで行くと聞いてげんなり。とにかく東沢をやぶこいで二の沢出合まで行く。同志社のテント跡があった。出合に着いたら二年組は半バテ

8月11日　晴

ＣＳ（６：５０）ー三ツ岳北西尾根２３００付近ーＣＳ（１０２０）

僕と岡田とで三ツ岳の北西尾根の偵察。二の沢に入って少し行くと5段の連瀑。予定の沢とおぼしき沢まで１５近くの滝があった。最大は２０ｍ、予定の沢は合流点でナメをなし二の沢本流も２０ｍと２５ｍ位の二つの滝をかけていた。花崗岩の風化した沢を登り最後のつめて右側によって北西尾根にとりつく。北西尾根は巾が広い。赤牛北東尾根２１５７９ｍピークを見ながら下る。ブッシュは余りなく傾斜もさほどではない。しかし右にも左にも寄ってはならぬと思われる。右側はこの沢、左側はガレてある。二、三ケ所急な所があったが別になんということもなく昼まえにＣＳ着。この尾根は下部で見るかぎり十分使えると思われる。昼からはお休み。加藤が２５cm程度。イワナを３匹つったがだれも調理しない。結局いけすの中に一晩おいておいた。

8月12日　晴後曇

三ノ沢出合（６：３０）ー烏帽子岳（１５：００）ー烏帽子小屋（１５：３０）ー濁（１７：００）ー葛（１８：３０）

昨日のルートで行く。登った沢は予定の沢ではなかったようだ。その２０ｍの滝を高まき、ヤブをこぎ、　りられそうな所を見つけて沢におりる。地図で見るともう沢はゆるくなってもよいのに滝が出てくる。１０ｍ位の滝（数は確認せず、　）を高まきながら上部を見ると、どうなるか判ったものではない。尾根に取付く。はじめニセエボシの西尾根に取付いたつもりであった。が、これはすぐ間違いであることが判った。岩場の出てくる尾根をヤブコギをしながら登るのはしんどいが稜線に出れば楽になろうという希望を持ってこいでいたが稜線が見えだすとうんざり。強烈なブッシュである。稜線に出るとますますびっくり、ハイ松である。目の前に烏帽子を見ながら何時間かかることやら。しかたなしに挑戦する。数時間悪態をついてやっとのことで烏帽子の岩の中程についた。捨縄でザックをおろし、もう一がんばりヤブをこいでやっとのことで縦走路に出るとホッとした。クタクタの体にむち打ってブナ立を下ることにした。ブナ立を2時間で下る。

（山　田　記）

黒部上ノ廊下下降

8月24日～8月28日

メンバー　L渡部（４年）、的場、竹林、甲田、田中（２年）

8月24日　晴

富山ー太郎ー薬師沢

8月25日　快晴

出発８：００ー薬師沢出合９：００ー薬師岳南稜末端１０：００ー立石１２：３０ー立石の岩小屋２：３０

薬師沢出合は水量少い、左岸を１ピッチ行くと用越がある。　薬師南稜末端はちょっとしたコブになり、春にはＴＳになるが、対岸からの雪崩に注意。廊下に入る所でワラジをつける。いくつもの右岸の小沢を過ぎ、１１：４０左岸に崩壊のある屈曲点を曲る。両岸の沢は大きさの割に水量少ない。立石奇岩をすぎた左岸の沢は落口がスラブで水量多く、少し登れば広々として、面白そうな沢だ。

8月26日　晴

出発8：20－赤牛沢9：05－90°屈曲点10：30－金作出合3：00

初めて左へ大きく曲ると、左岸より大きなカラ沢が入る。岩石の押出しが多い。この沢の出合まで、右岸は10～30mのナメ岩で、チムニー状の所を5m程下る。（9：00）カラ沢の両岸は岩壁。この出合より左岸は壁で、両側つるつるの岩。青いトロが30m続くが右岸にはっきりした踏跡があり高巻可。この所で再び右に本流は曲っており、急に視界がひらけ、ゆるい右岸と越中沢のピークとが見える。高巻きを終ると右岸より水の流れる沢が合流し、左岸より2本の押出しがある。9：30左岸より水量の少ない大きい沢（薬師第3カールよりの沢）が入るが傾斜はゆるい、しかし沢身は細く両岸は壁。ここから先、両岸の尾根はゆるく水面から15m程のハコ（9：40）次の屈曲点までの廊下記号は大したことはなく、10m位で、その上は広い大地でQ.Sになるだろう。9：45左岸より広い大きな沢（薬師第4カールからの沢）が入る。水量は少なくゆるい、さっきの沢より開けていて明るい。赤牛側はここへ尾根を使って下りれる。90°屈曲点（5万分の1地図の黒部の「部」の文字の所）付近は20m以上の壁であるが河巾はある。しばらく行くといよいよ金作出合上流部の大廊下帯に入る。トロを泳ぎ右岸左岸と渡りながら最後に右岸の急な草付をトラバースして金作出合に出る。金作谷は下の方はゆるく、雪渓が少し残っている。赤牛側は大きな河岸段丘となっている。

8月27日　晴

出発8：15－上の黒ビンガ1：00－スゴ沢出合2：00

少し行くと廊下となる。右岸に滝の沢が入る、その手前には10mほどの岩がつづきその上は台地である。流れが左へ曲った所から、左岸の急斜面を登って高巻く、再び右へ曲る所の対岸薬師側には数条に分れた沢が落ちている。眼の下は切れ落ちてトロとなっている。懸垂を2回行って80m程下りトロの終る所に下り立つ。

狭い廊下の底を歩く、1度田中が徒渉中に流されるが自力で泳ぎつく、薬師側からの沢を過ぎると目の前には左岸に巨大な壁が立っている。この壁は金作出合から見える中央に赤い崩壊部のある壁だ。その下はトロとなっていてとても進めない。ザイルを出して泳いで通過する。これから先も狭い廊下が続き、流れは激しい。左に曲った本流はすぐ右に曲るが、ここが上の黒ビンガである。左岸には見事な立壁が立ち、その下は数段に分れた岩棚でそれぞれ1m～2mの高さである。岩棚は十分に広く寝そべって休む。ここから広河原の入口であるスゴ沢出合まではそれ程遠くはない。

8月28日　晴

出発7：25－廊下沢出合8：00－口元のタル沢出合12：00－下の黒ビンガ1：10－東沢近くの砂洲2：30

廊下沢をすぎてもまだ河原は広く右岸をどんどん進む。大きな岩の上からチョックストンをヒンにして懸垂で水の中に下り泳ぐ。(10：00)左に本流が曲る所からトロ。両岸は迫り内部はうす暗いトロがつづく。150～200m位向うで再び本流が右へ曲る所に白い岩が右岸にあるのを見て、渡部口元のタル沢出合の目印だと言う。しかし目の前のトロは急流がうずを巻いている。空身にザイルをつけて泳ぎ渡ろうとするが左岸に押流されて次々に失敗する。最後に的場がやっと右岸の小さなテラスに泳ぎ着き成功する。もう1度ザイルいっぱい（40m＋40m2本合せ）泳いで左岸へ。ここで口元のタル沢のある右岸へ渡る。（12：00）

ここからは大体左岸通しに美しいトロの岸を進む。やがて左へ曲ると下の黒ビンガ。上の黒ビンガより急で途中に一連の菱形ハングを持っている。その向うのトロは泳ぐ。的場がおぼれかけて田中のザックにしがみついてやっと渡る。（1：30）あとは広くなった河原を右岸、左岸と歩きながら単々とした沢歩きをする。

8月29日　晴　黒部ダム経由下山

（あとがき）

この山行も又、我々の積雪期黒部遡行への偵察の一環である。下降の気安さも手伝って、エアマットをふくらませては、トロを泳ぎ渡った。

下降は遡行に比べ何かしら不安な気持が時には残るが、滝の無い黒部であるだけに水泳という武器を用いてトロを通可出来るのが強味だ。核心部では、全てこの強みが発揮された。

（渡部　的場　記）

大峰山三昌谷

9月9日～9月11日

メンバー　L佐々木（4年）　岡田（2年）

9月9日

6：30阿倍野発。8：15下市口。11：00和田着。雨が降り出す。1：10川瀬峠。2：20篠原部落。4：30湯又。5：30ツエルトをはる。林道が入つている。夜はポツポツ雨が降る。

9月10日

5：30起床。7：50発。同裏山本谷の林道から下る。天気はよい。雨で水量はふえている。三　谷出合9：00。両岸はせばまりくらい。巨岩をくぐつて通りぬけてすぐにF1（10m）左岸のルンゼを登る。30m位登つて左へトラバース、ガリーを下つて流の上に出る9：15。F2（12m）9：20右岸ルンゼを登りトラバースして滝の上へ出て、滝の上の木を利用してアブザイレンで落口に下る。アツブザイレンのザイルをたよりに対岸へ渡る。9：45渡り切る。第一の　の下10：00。幅100高さ150m位でほとんど垂直。F3（15m）はこの　の下にあり、右岸を登る。F4は二段15m位で一段目は左岸二段目は右岸を行く。そのままF5（40m）は右岸をまいて通過しケンスイで下る11：15。ナメのある廊下状を通過して11：20出合。休けいして11：50発。F6（15m）は簡単に右岸を登り、F7（8m）は左岸をゆく。F8（15m）は左岸をまいて落口へ下る。下をのぞくとすごい釜が見える。F9（8m）左岸を高まき一たん落口へ下る。F10二段30mは両岸が高い壁で登れない。左岸にある沢の上流側にあるルンゼを40～50m登りトラバース。11：00沢を横切つて落口に下ろうとしたが下れない。沢の上流で下る。谷はややひらけた感じになる。F11二段6mはかんたんに通過。ナメ滝がありいかにも渓流という感じ。前方に岩壁が見えはじめる。F10から1時間半位歩くと、大きな岩のゴロゴロした急な谷になる。西向で日当りが良いので休けい。3：00～3：15。しばらくするとF12（60m）。水量が多くつぱな滝だ。水煙がすごい。左岸の岩尾根をツツユずたいに登る。そのあたりから右岸にりたつた岩壁をつらねて第二の　が目の前にあらわれる。大きな岩の中央をF13（100m）が落ちている。二すじに分かれているが右手の方が水量が多い。この第二の　は滝とルンゼで三つの部分に分れ流ている。左手の壁は上部に大ハングのある約150mの岩壁。真中の壁も150m位ある。右手の壁は谷をかこむようにそびえている。ビバークサイトを、この　の下に決める4：05。

9月11日

起床4：30。出発7：45。ルンゼ以外ルートが取れそうにない。ルンゼは傾斜はゆるいが両側の壁がものすごく今にも頭の上にのしかかつて　そうだ。ぬれているので今にもすべりそう。大チヨツクストーンの下8：00。ザツクをおいてチヨツクストーンの中のチムニーをぬけ、すてなわでザツクをひき上げる8：15チムニーをぬけ出る。8：25　ルンゼを登り切り谷に出る。谷は細くなつている。休けいして8：40発。しばらくして広い出合に着く。奥に大きな滝のみえる左手の谷へ行く。3mほどの小滝の向うに60m位のF15がみえる。岩壁にかこまれて登れそうでないので左岸の岩尾根にとりつく。すごいブツシユの中を登り、9：50第三の　がま横に見える。この　は高度200は十分にある。幅も300mはある。中央部分は全くブツシユもなにもなく、ハングがつらなり、ものすごい。右手には200m位の大連瀑がかかつている。谷すじには下ることが出来ず連瀑の上に小さくなつた沢に出る。10：50そこからは倒木とブツシユをふみこえて尾根筋に出る。西によりすぎて、又、ブツシユと倒木

をふみこえふみこえ、やっと１２：０５奥駆け道に出る。ホッとした。１２：１５へ経岳。１２：３０彌山１：０５狼平。水をのみ休けい。１：３５発。川合４：００

（岡田記）

１０　月　山　行

海谷－妙高

１０月１０～１０月１４日

〔メンバー〕　L渡部（４年）　的場（２年）
出口、中岡（１年）

１０月１０日　晴後曇

糸魚川９：００バス－栗倉９：３０－海川第１発電所１１：５０－水力取入口１：２５－CS１：５５

１０月１１日　晴

出発７：０５－二股８：１５－F１９：１５－F２９：３０－幕宮２：００

二股までは河原歩きであるが徒渉を何度も強いられる。南股入口は１ｍ位の滝であるが、東股は広い川原である。振り返ると海老倉の岩壁が素晴らしい。南股に入る。F１は右岸を高巻く。F２は高巻きならず直登を強いられ、４人の通過に２時間以上かかる。１０ｍ程度のヌルヌルの２段に別れた滝であった。再び二股に出たのでケルンを積んで西の方に入る。次の二股も西側に入る。

１０月１２日　晴後曇

出発７：２０－稜線９：１５－雨飾東ピーク１１：２０－幕宮１２：５０

最後の急な土の斜面をぬけると雨飾に近いシゲクラ尾根上に出る。きたない沢だと渡部氏不満顔。新人二人はほっとする。いよいよ雨飾往復だが肩のような所まで行ってまだ上があるのにウンザリして引き返す。双　峰の東ピークまで行ったか否かでもめる。

１０月１３日　晴後曇

出発６：５０－金山９：３８－焼山頂上１２：０－焼と火打のコル１：００

昨夜の雨もすっかり上り、金山までのシゲクラ尾根を行く。途中で見た雨飾の南壁も素晴らしい。焼出頂上でこの山行初めての人間に会う。だんだん人臭くなる。

１０月１４日　曇

出発７：１５－火打８：４５－黒沢池１０：３０－妙高１２：５５－燕温泉３：１５

黒部上の廊下周辺偵察

昭和４１年１０月１４日～２０日

メンバー　L黒田（４年）　甲田、山田（２年）

目的　①下の黒ビンガ赤牛側斜面
②９０°屈曲点赤牛側斜面

１０月１４日　晴

大町から大金をふんだくられるように黒部第四ダムへ。黒四周辺はいまが紅葉のまっさかり。湖ぞいの水平道を行く。平では小屋のオッサンが船を出してくれた。渡場から３ピッチで東沢出合到着。Essen（スイジ）は甲田が大奮闘して湿った木に火をつけてまず順調な第１日目。

１０月１５日　晴後曇後雨

朝、せっかくつけた火にEssen（スイジ）の水をこぼしてしかたなくラジウス使用、サバイリンテントに３人は少々苦しい。赤牛岳北東尾根を三ッ岳の北西尾根を見ながらのんびりと登る。　２３５５ｍピークの上部の草原にテントを張るころより空もようがあやしくなった。２１５８ｍ尾根とのジャンクションから三ッ岳北西尾根がよく見える。二ノ沢出合も、二ノ沢

の連瀑も。夜中に雨。浸水せぬが雨もりがひどい。

１０月１６日　晴

雨も夜中には上って快晴である。尾根Ⅰ（概念図参考）Ⅱの偵察に向う。Ⅰ，Ⅱに達する前に右側にそれてしまい変な所に出た。沢ぞいに下り滝の真上に出たところが高天原新道であった。尾根は上部は疎林であるが下部は竹ヤブも交り猛ブッシュ。新道からそれた方の尾根の下部をのぞいてから尾根Ⅰの偵察にかかる。上部（新道寄り）の方はゆるいがだんだん急になり下の黒ヒンガを真正面に見るあたりから岩が露出し下部は完全な岩場で切れている。黒田氏が右手の小沢から下の河原に下りたが積雪期の使用はまずむりと思われる。尾根Ⅰの偵察を打ち切って尾根Ⅱの偵察に向うときにⅠ，Ⅱにはさまれた三角地帯で下降ができそうな所があり下降して河原に降りる。尾根Ⅰの末端から２００くらい上流の所。河原で写真をとって上流にむかう。トロの手前で傷ついたカモシカ発見。ここで左岸に渡渉。ジーンとくる冷たさ。左岸通しに口元タル沢出合まで遡行。渡渉点から上流は下降不可能と思われる。口元タル沢出合で再び右岸にうつり口元タル沢ぞいに高天原新道に出る。また霞平から口元タル沢出合に出ている尾根（霞平北東尾根（仮称））は下部がそれほど切れておらず使える。（広島大学も目をつけていた），尾根Ⅱは下部が岩を交えた尾根である。尾根ⅠⅡのジャンクションに赤旗を５～６枚つける。尾根Ⅰもだいたい尾根Ⅱの途中と同じような状態と思われる。テントについたのは6時をはるかに回っていた

１０月１７日　晴後雨　稜線風強し

テントを赤牛岳頂上にあげる。昨日偵察した尾根は２３５５ｍピークより上部から、晴れていれば容易に識別出来ると思われる。ガスった時には尾根をまちがう可能性は十分にある。赤牛岳頂上まで３ピッチ（２時間）。頂上東側の平地にテントをはりすぐ偵察に向う。赤牛岳北西尾根は踏み跡があり所々ケルンもつんである。Ｐ２の北側から出ている尾根を下る。（図Ⅱ参照）Ｐ２までは巨石累々たる道（？）で大きな石が動くので少々歩きにくい。

Ｐ２の北尾根は上部は岩だらけで下に行くにつれてはい松が出てくる。はい松も下に行くにつれて大きくなりはい松の上を歩くより中をくぐった方が早い。尾根はかなり急で氷化した場合相当な緊張を要するかも知れない。くぐっているうちに高天原新道に出る。あとは尾根通しに下る。途中に沢を見つけて黒部に下る。沢の出合は滝になっている。しかしもう少し北寄りに下れば容易に下れることができる。また河原より一段上の台地はＣ.Ｓ.に絶好と思われる。また黒部川の９０°屈曲点より下流３００ｍくらいまで下降は可能である。あと立石まで遡行。立石までは下れそうだ。立石の岩小屋に泊る。雨が降り出し少し上では雪になった。

１０月１８日　稜線風強し

岩小屋を９時頃出発１時間で夢の原につく。稜線は白い。高天ケ原の温泉は湯がぬいてありヘビのぬけがらがあるだけ。稜線に出るころから雪がふり出す。稜線は深い所でヒザまでのラッセル。しかし大部分夏道が出ている。赤牛頂上は１５cm、テント地は４０cmの積雪。吹雪ので水晶までゆくのはやめる。夜テントがとり寝苦しい。

１０月１９日　曇後地吹雪

テントから顔を出してみると曇。晴れるだろうと（甘い？）見通しを立てて出発。赤牛の稜線は昨日の雪で深いところは、ももまでのラッセル黒岳付近は雪がついていて楽しい。水晶小屋まで案外早くついた。東沢乗越はいやらしい、雪が氷化すると非常にいやらしくなるだろう。野口五郎小屋に入る。住みごこちは良好。

１０月２０日　地吹雪　後　晴

朝もうれつな風であった。風にあおられるようにして３ピッチで烏帽子小屋につく。１時間ボケッとしたあと、ブナ立てを下る。やはり下界は美しい。

（山　田　記）

図 I

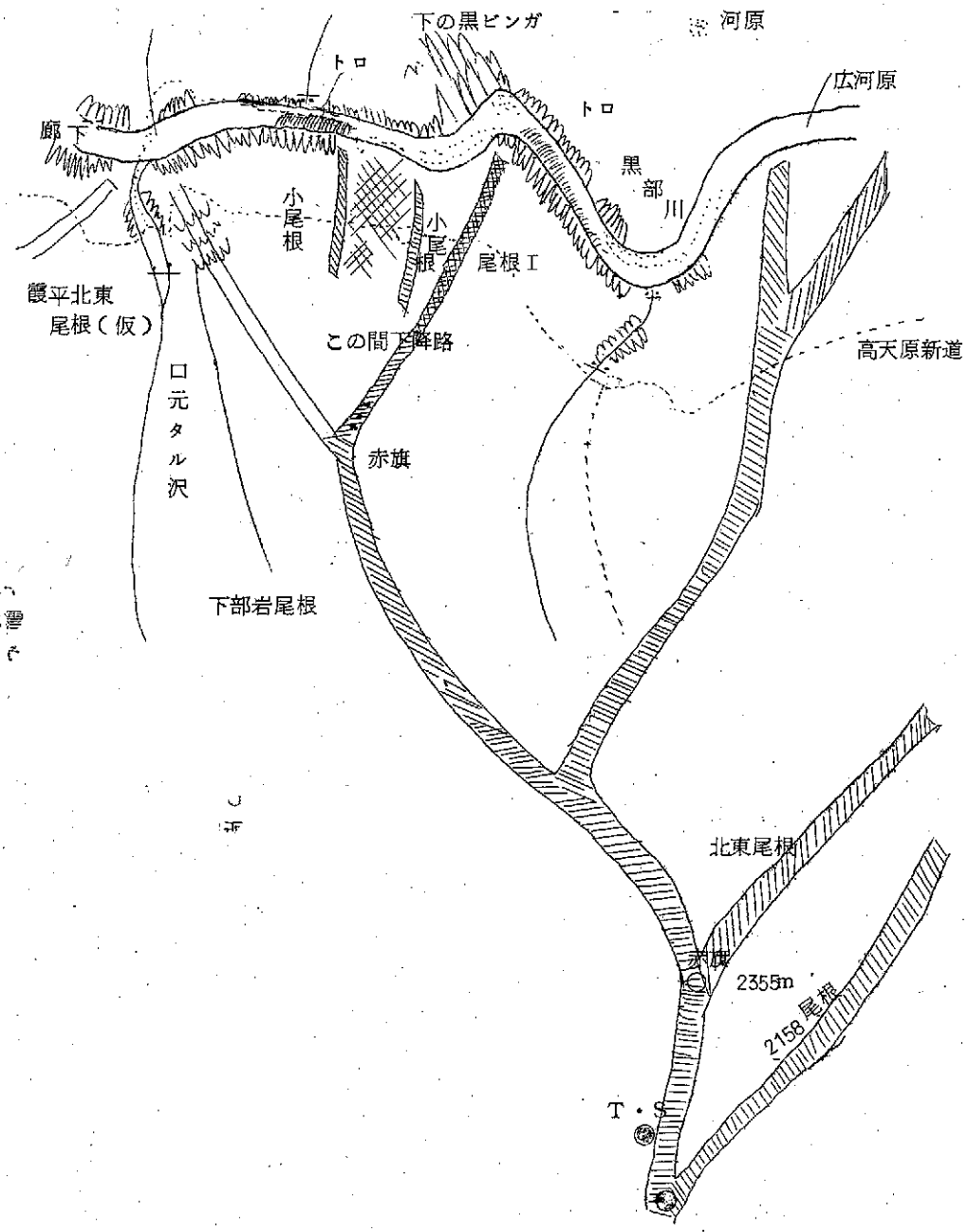
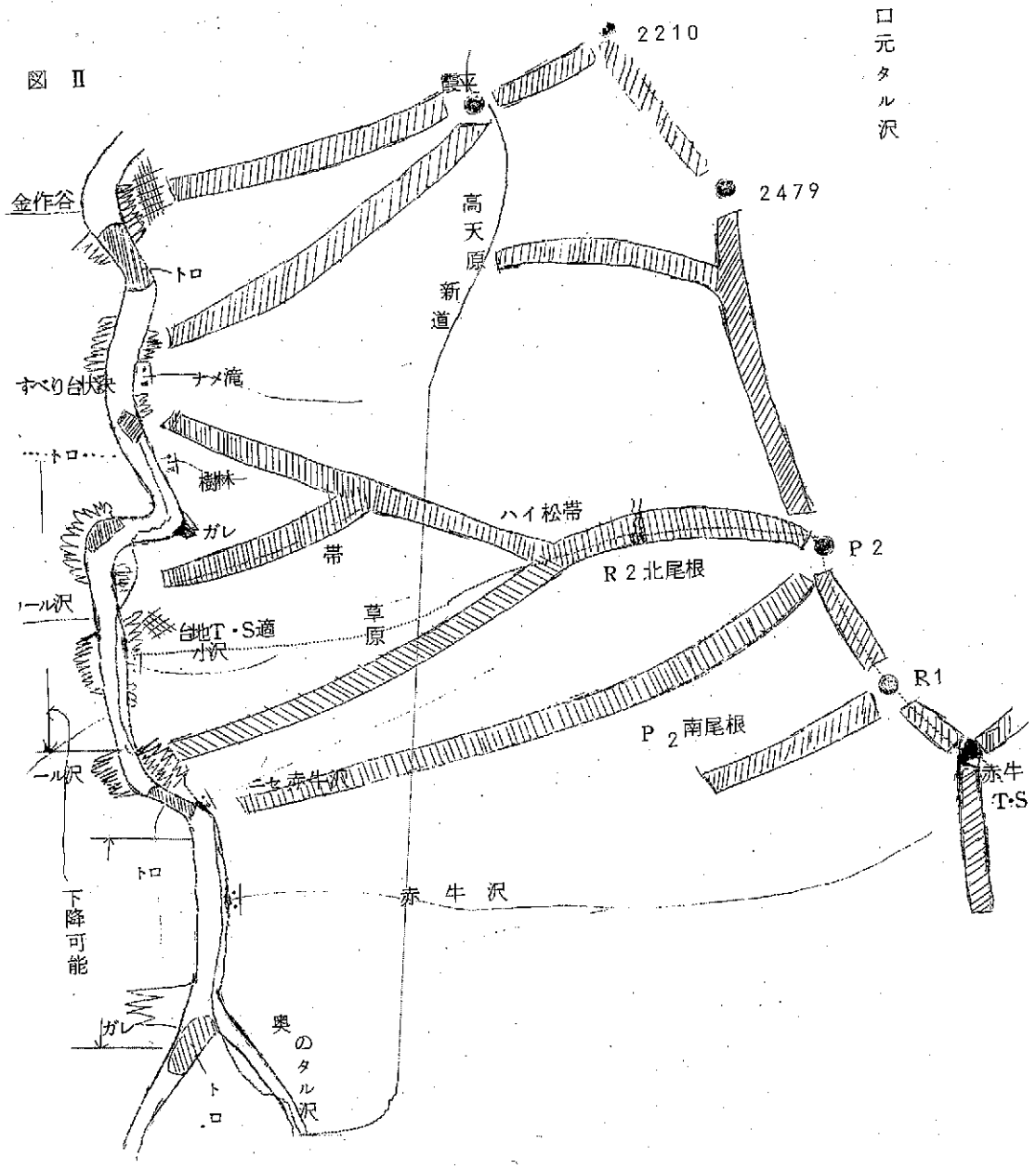

下の黒ピンガ
河原
トロ
広河原
廊下
トロ
黒部川
小尾根
小尾根
尾根I
饅平北東尾根（仮）
この間下降路
高天原新道
口元タル沢
赤旗
下部岩尾根
北東尾根
赤旗
2355m
2158尾根
T・S

図 II


2210
口元タル沢
2479
金作谷
高天原新道
トロ
すべり台状沢
ナメ滝
トロ
樹林
ガレ
ハイ松帯
帯
P 2
R 2 北尾根
草原
台地T・S適
小沢
R1
P 2 南尾根
赤牛沢
赤牛 T·S
トロ
赤 牛 沢
下降可能
ガレ
奥のタル沢
トロ

南アルプス南半縦走

メンバー　L糸井（4年）　竹林（2年）　松林（1年）　松川（1年）　田村（1年）　石原（1年）

１９６６年１０月１２日　晴→曇→雨

９：４５大河原発　１０：４５釜沢発。４：１０広河原小屋

汽車、バス、おまけにトラックと何度となく乗り換えの後、やっと釜沢より歩き始める。最初巻き道を忠実に辿るが、労の割りには距離がはかどらないので途中から河原に下りて、小渋川を遡行する。この頃より天気がくずれ出し、高山滝に着く頃はどしや降りになる。雨と、車の乗り換えで新人はややバテ気味で広河原小屋にやっとたどり着く。小屋でかしわのすき焼をして、入山一日目を祝う。このボロ小屋にもローソクの明りに六人の顔だけが浮び、まさに夜雨をしのぐ黄金の御殿。

１０月１３日　晴一曇一gas

５：２０広河原小屋発　１０：０５大聖寺平　１２：０５～１２：３０赤石避難小屋　１４：２０百間洞

昨日の雨がうそのように晴れ上った薄明の中をヘッドランプを灯して出発。大聖寺への1350mの上りは急坂の上に昨日のすき焼に腹痛を訴えるもの３人程出て来て苦しい。併し松たけの特別収穫もあり何んとか大聖寺へ達す。このあたりからガスと強風が身体の熱をうばい始める。ガスの中に時々浮び出す小赤石岳に向って進む。後は赤石岳を踏破し、急なガラ場の下りを十分程下ったら、百間洞までダラダラと広い百間平を一気に通過してしまう。百間洞のコルの南面直下にテントを張り、マツタケめしを食った。

１０月１４日　晴→曇

５：４５百間洞発　７：１０中盛丸山一兎岳コル　８：５５兎岳　９：００～９：２０兎岳小屋　１１：１５～１２：１０前聖岳（この間奥聖岳アタック）　１３：２０アザミ畑　１３：３５聖平小屋

百間洞をしばらく下ると兎岳のコルへの急坂にかかる。兎岳頂上直下　小屋で一時の憩をむさぼり又聖岳へ出発。前聖岳でしばらく休んだ後、リーダー以下２名で奥聖岳へアタックに出発する。聖から見下した聖平の小屋はすぐ近くに思えた。なかなかの急傾斜を駆け下るが途中倒木が出て来て予想外の時間がかかる。あざみ畑の休憩中東京弁が聞えて来て他大学パーティが追いついて来る。こちらは歌を口　さみ乍ら御先に小屋に入り、一番よい場所を頂く。

１０月１５日　晴→曇→雨→曇

５：２５聖平小屋発　７：３０～７：５０上河内岳９：００茶臼岳９：３０仁田岳１１：15易老岳１４：００

他大学パーティに出発は数分ばかり先んじられるが、すぐに追い抜いて上河内岳の巻き道につく。ピークまでアタックに出る。御花畑で昼寝をしたかったが何分にも秋風の吹きすさぶ枯野原。それでも誰かの出した羊かんを頬張る。空模様も大分くずれてくる。茶臼岳を過ぎた頃から次々と現われる倒木に悩まされ、おまけに小雨がぱらつき出す。光小屋に着く頃には大分シンドかった。小屋には新しい小屋を建て直す為の人夫の人達が住んで居た。そのオッサンが提供してくれた木板をテントのグランドシートの下に敷いて、雨にも拘らず乾いたテントに身を沈めて寝る。

１０月１６日　曇→晴

７：０５光岳発　７：５５百又沢頭１０：０５柴沢１１：１５かま沢１２：４０栃沢１３：１０大目沢１５：４０～５０千頭えん堤

下山にあと２日使用する事に決めてゆっくりと出発。昨日の雨に嘘をつかれた様に雲一つなく晴れ上った下山日和。寸又川河原はつり橋を渡ったり水平道を遠々と歩き続ける。終に千頭えん堤に着く。ここらあたりでテントを張る予定だったが、運よくも軌道車に便乗させてもらい、翌朝は大阪。

（石　原　記）

11　月　山　行

表銀パーテイー

〔メンバー〕　細川(I)、甲田寿、甲田吉、中岡、田村信、田村孝、石浜ＯＢ

１１月１日　葛温泉ー濁小屋ーブナダテ取付

１１月２日　取付ー烏帽子小屋往復　やっと春山用のデポを終え、心は早や、槍へと飛ぶ。その日のうちに、濁小屋を過ぎて半ピッチの河原でドン。

１１月３日　７：４０出発　１３：２５東沢乗越　濁小屋のオバチャンも乗越までは３時間で歩けますよと言う。のんびりと歩いていたらだんだん踏跡も薄くなり、地図とは大分違う道を結局６時間ほどかかって乗越に到着、他パーティーとは全然会わずで静か。

１１月４日　７：１０　東沢乗越出発。１０：１５　燕山荘　１３：３０　大天井ヒユッテ

谷川岳では何でも猛吹雪だそうで遭難が相次いで発生しているらしいが、ここは全くの好天気。僅かに大天井岳のトラバース道の残雪を融かして、エッセン用の水をこしらえた。今更ながら、天候の局地性に驚く。

１１月５日　６：４５発　１２：００大槍ヒユッテ　１３：２０槍ケ岳頂上　１４：４５大槍ヒユッテ　１５：５０槍沢

西岳の下りもほとんど雪がついておらず楽勝。東鎌尾根の所々にある雪もバケツを利用し、アイゼンを使うようなところはなかった。大槍ヒユッテからサブザックで槍ケ岳往復、頂上で全景を観賞、風もほとんど無く暖かだった。

１１月６日　槍沢ー上高地

今日は薄曇りでこの山行中最悪の天候だった。

（記　甲田寿）

黒部偵察（裏銀横断）

１１月１日～１１月７日

メンバー　Ｌ渡部　ＳＬ出雲路（以上４年）　田中　的場（以上２年）　石原　出口　松林（以上１年）

（本隊）

濁ー烏帽子小屋ー東沢ー赤牛ー水晶ー雲の平ー太郎山

目　的

黒部霞平に入山する為の最短コースとして、三ツ岳より直接東沢に下り、そのまま赤牛に登る。直線コースを探ることとする。

１１月１日

葛温泉ー濁小屋ーブナ立尾根取付

烏帽子小屋に春山用の食料を荷上げのために今日は水平道ばかりなのでシングルでいくことにする。でも荷物は５０kg位ありこんな重い荷物はめったにかつぐことはないので１ピッチがつらくてしようがない。１５分位迄は何とかいくがあとの１０分がつらくてしようがない。でもこの位のしんどさならまだヒマラヤの７０００m級位の山にもおよばないだろうと思いつつ頑張る。枕木の数をかぞえて１ピッチの目やすにしている人もいた。濁小屋の前で休憩していると〃お茶はどうですか〃とおばはんがいったが何だかお金をとられそうだったので飲みたかったが〃いやけっこうです〃と答えておいた。濁小屋より２ピッチでブナ立尾根取付に着きいつもどおりの入山祝。酒はなかったがスキヤキにて今日の重さのうさをはらす。シュラフに入って腰をしばらくさすってから寝た。

１１月２日

ブナ立尾根取付ー烏帽子小屋

今日１日頑張ればボッカも終了するのであるが今日が大変だ。何しろこの坂は悪名が高い。背のキスリングの中には個人装備の他に１斗カンが３本もはいっているのであり、まだその上に後の縦走用の食料がはいっているのであるから急坂にかかると体は前かがみになり地面に顔がつきそうだ。でも春山の時の入山が楽なことを考えると少しは苦痛がやわらくが、腰および

肩のいたさはどうしようもない。一年生もおることだし二年生がバテては上級部員の顔がつぶれるし、リーダー殿も老骨にむちうって同じ荷物をもって汗をふきふき頑張っているんだと思うとバテるわけにもいかん。ビッチ毎にそない思っていると烏帽子小屋迄３０分という道標をみつけた。内心ホッとした。烏帽子小屋前にてボッカ終了の記念写真をとる。この小屋はなかなかいい小屋である。みてくれは悪いが中の備品(?)がいい。少しばかりのフトンと多量の薪（マキ）、カチンカチンに凍ったジャガイモ等、又この小屋ではあまりたばこもいらん。なぜならこの小屋のストーブはイロリであるから。夕方一人の Madchen が入ってきた。これから槍迄いくのだという。なかなかええ度胸をしとる。でもいいぐさが気にくわん。〃学生さんはいいですね、休みがたくさんあって〃寝る時は部一番のマジメ人間出口君を彼女との境に寝かせた。

１１月３日　晴

このええ小屋とも今日でおさらばだ。デポよ小屋よ春にくる時までおとなしくまっていてくれよ。三ツ岳の登りにかかる頃より風が少し強くなって新人一人が手がこおりそうだという。リーダー氏いわく〃こんなええ天気や、ミトンつけているのに凍傷なんかになるかえ〃三ツ岳より東沢におりている尾根を下降する。２８００ｍの地点で尾根が二つに分かれている。ここでパーティーを二つにわける。西尾根と北西尾根とに。僕は西尾根を降りた。西尾根は急であるが途中一ケ所程ｆｉｘをすればおりれんことはないだろう。でも春山の帰りの登りを考えるとそっとする。途中一ケ所段になっている所（２４００ｍ位だと思う）にテントがたくさんはれるだろう。１２時に地図で東と書いてある地点の少し上の所でおちあうことになっていたので急いでいくがついた時には他ｐａｒｔｙはだれもおらずテントをはってさがしにいく。１１月の渡渉を合計六回も経過したがさがすに夏とちがってつめたいわい。みつからずにトボトボと引き返してくるとちゃんと別のテントが立っていた。骨折り損のようだった。どうも北西尾根の方は起伏が多く春のつかいもんにはならんらしい。

１１月４日　晴

仮の宿の東沢をはなれて地図で東沢谷と書いてある字より東の少し上の所から赤牛につきあげている尾根（赤牛岳東尾根）にとっつく。

ものすごいブッシュである。冠松次郎氏もいっておられるようにこの赤牛のささはひどい。弾力性があってしまつが悪い。足よりも手がつかれる。この日は必死になってがんばったかいもなく２３００ｍの地点にテントをはった。一日必死でがんばったのに６００ｍしかあがってないとは腹が立つ。おまけに新人が二回もなべをひっくり返す。頭にくることおびただしい。

１１月５日　晴

１時間程ブッシュをこぐとやっと赤牛の下のまきみち（？）（かっての鉱山道路）につく。やっとブッシメより解放された。今迄手を使っていたので足にあまり負荷がかからなかったのに今度は足がつかれる。大変にええ天気であるのでまき道にてブッシュ解放の記念写真をとる。赤牛頂上にて北西尾根をおりる出雲路、的場とわかれて水晶をめざしていく。赤牛、水晶間はゆるい起伏がつづいていて春に危険な個所はない。水晶岳はほとんど源流をまいた。水晶岳を少しすぎてから水晶ひろいをした。あんまりええのはおちとらん。水晶岳ー水晶小屋のところどころに一部分だけをみていたら横雪期とまちがう程の雪庇がでていた。今日のテント地は水晶小屋より２０分位の所であり池もありええ所である。新人が一人スケートをして失敗する。

１１月６日　晴後曇

今日もええ天気である。大体１１月というのは雨にふられるのがおちであるのに今年は稜線に雪が少しのこっているだけだ。祖父岳近くの道で熊の足跡をみつける。うまいルートをとっていてぼくがさがすルートなどよりもうまいぐわいにルートを取っている。このルートは祖父迄つづいていた。祖父の北面は少し雪がのこっていて又その下がゴロゴロした岩ときているから歩きにくいことおびただしい。新人一人がねんざ気味だ。さすがに十一月の雲の平というのは人が少い。いや今迄に人あったのは烏帽子小

屋だけだ。雲の平の小屋には中になにもはいっていない。薬師沢のつり越しは取りはずしてある。この11月7回目の渡渉である。つめたいが靴をぬいでくつ下だけで渡る。まん中へんでつめたくなってきた。対岸で足をふいて新しい靴下にかえて出発した。

薬師沢ぞいの例の道をいく。左俣をこえてから少し行った所に航空機の目標となる黄色い十字架の下にテントをはる。はった時は1時だった。今日太郎をこえてもダムの近くでテントをはることだけだからということでここにおちついてしまった。今日は大番振舞いのコンビーフ（1人1コ）で大いにめしをたべた。

11月7日

朝一度おきて朝めしをくって2～3時間朝寝をしてゆうゆう出発した。太郎より三角点迄はどうしても走ってしまう。なぜだろうか。折立の北電小屋でお茶をごちそうになって出発。途中道をまちがえて湖の奥の方にいっていた。バス停にいく迄のしんどかったこと。その日のうちに富山へでる。

〃この山行をふりかえつてみて〃

最初メンバー的には上級生がたらず、ピラミッド型の人員でどうなることかと思ったが、案じた程もなくうまく計画をはこぶことが出来た。まずブナ立の登りであるが全員頑張っていくことが出来、一回で終ることが出来た。新人が大変よく頑張ったと思う。三ツ岳西尾根ではかなりのことがわかったし、ルートファインディングの練習にもなった。ただ稜線や夏道を歩いていただけの時よりも勉強になることが多い。

先輩のいった言葉（名言）が思いうかんだ。

〃山は登るより降りる時の方がむつかしい〃

赤牛東尾根ではブッシュに悩まされたが、春山では十分に登れると確信出来た。（5月は大変快適で東沢より4～5時間でのぼれた）全員ブッシュのエキスパートとなる。水晶岳ではかなりやばい所もあったし反面水晶拾いなどをして楽しんだこともあった。

この山行は変化にとんだ山行であった。ボッカありブッシュあり、少しばかりの岩もあり、沢ありほんとうに変化にとんだ山行であった。又メンバー的にもよかった。

〃記　田中〃

（別動隊）
赤牛ー北西尾根ー口元のタル沢

メンバー　出雲路（T4）　的場（Σ2）

目　的

赤牛岳のピークより北西尾根を下り2479m，2210.4mのピークを経て、口元のタル沢左岸の尾根を黒部に下る。春山の上の廊下への計画の為に来春に予定されている所の下の黒ビンガ付近の偵察への予備として、又、本計画実行の時のサポートのコースへの予備として行われた。

行　動

11月5日　晴

10：00赤牛岳ピーク出発ー11：10 2479mのピーク手前のコルー12：00 2380m付近ー1：15　2300mで主稜線の右寄ー2：20　2060mの露岩記号付近ー3：00　1900mの顕著な尾根状の所ー4：00高天ヶ原新道ー4：20新道と口元のタル沢出合ー5：30テント地

渡部パーティと別れて北西尾根を下る。2700位までは岩のゴロゴロした尾根ではあるが歩きやすく春も問題はない。2700m～2500mの間は急斜面で相変らず大岩ばかりである。アイゼンがきいたとしてもかなり注意の必要な所となるであろう。黒部五郎岳の北側斜面より急かもしれない。

2479mピークは小さい丸い突起である。コルより少し上に短い樹林帯（高さ2～3mの樹林）があるがすぐに草地の斜面に変る。このピークより尾根は南北方向より北西へ向を変える2440m付近の下りに1ケ所露岩がある。再

び北に尾根が向を変える２３６０ｍピークまではひどいブッシュだが樹林は余りない。２３６０ｍピークと２２１０.４ｍピークの間は樹林帯である。はじめのうちやや傾斜が強い。樹林ごしに左手に霞平の池が望める。傾斜がなくなってしばらく行って北東方向にはっきりしない尾根上部を下るのだが太さ１㎝もあるすごい竹ヤブのブッシュが限りなく続いて見通しが全然きかない。やがて尾根がはっきりしだし、なおも竹ブッシュをこいで下る。竹が少なくなり樹林がふえてしばらくすると、高天ケ原新道と出合う。細く悪い切開き道だ。口元のタル沢まで行くが、テント地がないので、なおも新道を東沢の方へ行き１０分位の所に道をほり広げて幕営。

１１月６日　晴後曇

６：３０出発－７：００タル沢左岸尾根上の新道－７：３０黒部川出合（３０分休けい）－８：３０口元タル沢の新道出合－９：３０テント撤収後出発－１０：３０　下の黒ビンガから２つ目の黒部川の屈曲点－１２：００東沢出合－１：１５針の木谷－５：００黒４ダム。

昨日出来なかったので尾根の最後の下りを見る為に引き返す。ふみあとがかなりはっきりついていて何なく黒部川に達する。ヤセているし樹林も深いし小さな登り下りがあって、高度の低いこともあるので春は雪質で悩まされるかも知れない。使用する時は、しっかりしたリーダーの指導がいると思うが、不可能な尾根ではない。

高天ケ原まき道は悪い道で１０時頃２ピッチ目からは見失ってしまった。黒部川本流を何度も渡渉しながら東沢に到る。１度は小生（１ｍ８７㎝）も腰までつかる渡渉だった。足がしびれる。１１月からは小屋の閉鎖とともに舟も止っているとのこと。運よくダムの魚とりの舟にひろわれたのでよかったが食料もなくあぶない所であった。

感　想

注意する所は：

①　２７００→２５００ｍの急斜面

②　２２１０.４ｍピークのはっきりしない尾根上部

③　最後の１００ｍ位の下り

④　２４７９ｍピーク以後の複雑な地形

①については木１本もない急斜面であること、ヤセてはいないので雪質がよければ問題はないかも知れない。

②は、ブッシュが全て雪の下になるだろうから下の尾根に見通しをつけた上で、上の廊下の対岸のはっきりした尾根に目印を持って下ればよい。下部はタル沢側がかなり切れている。

③雪が安定せずに不安定なヤセ尾根となりヤバイかも知れない。樹林が多いのでザイルを使用すれば安全に行けるだろう。小さな雪崩に流されて沢へおちることのないような注意はいるだろう。出合はタル沢の正面の沢からの雪崩には十二分の注意がいる。

④２４７９ｍピーク以下はかなり複雑である。２２１０.４ｍピークまでは忠実に主稜線にそって進むことが必要。

○２４７９ｍピークから北へおりる大きな尾根

○２３６０ｍで北に向を変えること。

○２２１０.４ｍピークでは尾根が消え広い斜面になっていること。目ざす尾根へ正確に下ること。

（的　場　記）

初冬の後立（鹿島槍ケ岳から五竜岳へ）

メンバー　糸井(L)　黒田　田中　豊坂（ＯＢ）

行動概要

１１月２１日　大阪は快晴　山では猛吹雪

この日は今年一番の寒さで町でも木枯しが吹きあれ、冬の到来をつげていた。ｐｍ９：２５発のちくまはがらすきで驚くなかれ僕らは最先頭に並んでいた。見送り多数で渡部より新聞の差し入れをうける。天気図はばっちり冬型で冷小屋付近での愛知大生の遭難をつげている。予想以上に厳しいぞと互いに目くばせをする。米原付近では雪が列車の窓をうっていた。

１１月２２日（火）　雪後快晴

ねむい目をこすりながら、冷えこむ松本駅で

大糸線に乗る。北に進むに従い雪の白さが増してきて、大町では５～１０cm程も積っている。大谷原まではbus はなく、taxiも雪のため入れず仕方なく１０～１４.５人乗りのMicro bus をCharter する。鹿島部落付近では３０～４０cm大谷原では４０～５０cmの積雪があり、まだ天候は上では吹雪いているようだ。愛知大の遭難救助隊が先に出ているので、そのRussel をつかわせてもらう。ふわふわの新雪でRussel したら腰までくるだろう。赤岩尾根も上から３Party 下山してきたし救助隊のRussel もあつて堂々のtraceである。この胸から腰までのRussel をしていたら鹿島槍ヶ岳attack で終りだったろう。次第に晴れて、移動性高気圧の到来をつげている。白銀の鹿島槍ヶ岳は冬の様相を呈している。東面の急勾配をせり上る北俣本谷、三の沢をながめながら２年前の６月の大冷沢生活を糸井と語り合う。高千穂平にテントを張る。気温１８００：－１１℃

大町７００－大谷原９.５０－西俣１２.００～１２.２０－高千穂平１５.３０

１１月２３日（水）　晴

快晴である。７時前に出発する。稜線までRussel のtraceあり、又もや楽々と鹿島槍ヶ岳、爺岳を見物しながら進む、最後のtra－verseの所はRussel の跡もあり、積雪量も少ないので雪崩の心配はなく無事に通過する。剣岳が黒部川をへだててどんと坐っている。感激の一瞬だ。この山行の計画の一つとして剣を見たいということがあったからだ、冷の小舎までは３０分足らずで下ってしまう。ここではSehlaf につゝんだ遺体の周りを忙しく、人が動いていた。彼らは紅茶をすゝりながら平然としている様だ。僕は人事でなく我身なのだと心を引きしめRusselのtraceのなくなったこれからの樹林帯にわかんの紐をしめる。勇躍進もうとするが腰以上のもぐり様である。途中で方式をかえて１人が空身でRussel する。布引の下からは黒部側を夏道が走っており、そこまでいけばRussel もなくなる。しかし吸いこまれる様な青空の元でのRussel はまた痛快である。布引の下まで３時間以上もかかってしまう。これからは再びアイゼンにかえ、南峰の上りを急ぐ。南峰の下りは急で雪と岩がまざって、用心しながら行く。一ケ所１０mのフィックス。キレット小舎までは到底いけそうもないので吊尾根の斜面を地ならしてキャンプ地をつくる。いよいよこの山行のメインエベントに入ったのである。明日も移動性高気圧ががんばってくれそうなので五竜岳まで絶対に頑張らねばならない。空も冬の星座にかわり、とってもきれいだ。大町の灯も間近い。「おお、町だ」と豊坂さんが笑わせる。よく冷えこみそうだ。

出発６.５０－稜線８.４０－冷小舎９.００－布引の下１２.００－吊尾根tent site１５.３０

気温５.００　－７℃　　１７.３０　－１１℃

１１月２４日　ガス後快晴

ばたばたtent がはためいている「たしかにおかしい、移動性高気圧のまん中のはずだ。なんでやろうな」と首をかしげる。外は雪はふっていないが、風が強く、ガスで南峰も全然みえない。しばし天気待ちして、よくなりそうなので飛びだす。北峰は昨日の偵察通り、まき道を通る。１５mのfix を張る。斜面は急だが雪崩る雪質ではない。降雪後の通過は注意すべきであろう。巻き終るころにはガスもすっかり晴れ上るキレットまで相当やばい。カクネ側はスッパリ切れて、高度感が十分だ。キレットの下りは黒部側へまききぎみにブッシュをつかみながらゆき、はしごにより鞍部へ降り立つ。上りはたった１つの方法しかなかった。夏道はカクネ側の岩をまいているが７０～８０度近い斜面に雪がたっぷりついて、我々をはばんでいた。僕らはこの巻道のクサリを掘りおこしにかかったのである。「それっ、スコップ出せ」。まるで土方だった。４人で交代して上につくまでの３５mに１時間半以上もかかってしまった。「まだ話の種ができたなあ。」。キレット小舎への下りはくさり、針金が所々についている。小舎はりっぱなものだった。こゝで既に、１４.３０になっていたが五竜岳をこさなくてはとはりきって急ぐ。が五竜岳までは小peak が連立して１つこしてももう１つがあざ笑っていた。

１７００にとっぷり日は暮れてしまい、まだ五竜岳までは２時間以上ありそうであり、ついにtent を張ることにする。やっと一ケ所、張れそうな所をみつける。月は上弦でこうこうと照って、雪の白、岩の黒のcontrastがあざやかにうかんでいた。

出発８５０－北槍通過終り９.５０－キレット１２.００～１３.３０－キレット小舎１４.３０－tent地（キレットと五竜岳の中間）１７００

１１月２５日　風強し　曇後雨

非常に強い西風が吹いている。天気予報は日本海を発達中の低気圧が進行中と伝える。出発するより他に手はなかった。よろよろよろめき時々飛ばされそうになる。まったく、ピッケル頼りの３点支持ではう様にやせた尾根をゆっくり進む。幸いに風は冷たくなく凍傷はまぬがれる。五竜岳peakに９時半すぎにつく。既に剣岳、立山は暗雲につつまれている。peakより１度東側に下ると風は殆んどなかった。小舎までの下りはSeil は使用せずに楽に下れる。小舎についてほっと休息。後は低気圧との追いかけっこで逃げるばかりである。遠見尾根はばっちりしたtraceがきれいについでいて平担な雪面をどんどん歩く。大遠見辺りで雨が降り出した。遠見小舎についたのは空が既に暗くなり始め全員びしよびしよにぬれている。小舎には予想に反しておじさんがいた。３００円にまけてもらって泊ることにする。おじさんはなかなか親切な人で昭和１０年この小舎が出来て以来いるとのことで、先輩の徳永さんのことや大阪の岳人をいろいろ知っておられ、しばしこたつに入って歓談する。なお遠見尾根にもロープウエイが着くそうでおじさんはこういってなげいた。「私は岳人たちと静かにこうやって話しをしている方がよっぽどいいですよ」アノラック姿の着かざったスキー客でこの小舎もいっぱいになるのだろうか。

出発７００－五竜岳peak９.４０－五竜小舎１０.４０～１１.１０－大遠見－小遠見１４.３０－遠見小舎１５.１０

１１月２６日

後の行程は少しなのでゆっくり朝めしを食う。出たのが昼前である。昨夜雪にかわって４～５０cm積っており、ワカンで膝上までもくる。大体夏道通しに下る。下は晴れているが、上はまだ吹雪いていた。山を下るとすぐ側にあった。小舎のおじさんの家に寄って歓迎をうける。つけ物とカリンは非常にうまく、いなかの人の親切に心をうたれて神城を後にする。

出発１１.３０－神城駅１３.４５

（あとがき）

成功の原因

① 天候がついていた

丁度冬型もゆるんで移動高がでてきて２～３日もつ帯状になり次の低気圧までに遠見尾根を下れた。

② Russel の trace があった。

赤岩の登り、遠見の下りをRussel せずにすんだことである。

③ Member 的に良かったこと

始めは新人を入れるつもりだったが、渡部の意見でとり下げたこと。

④ 完全に冬の装備で行った。

以上の如く成功の原因があげられるが、全く好運にめぐまれたという他はない。へたをすると愛知大の２の舞又は鹿島attack するのがやっとだったかもしれない。また、実働４日予備２日は少々あますぎた計画だったことは事実である。１１月下旬といえど今年はまったく冬の状態とかわりなかった。（小舎のおじさんもそういっている）今後この時期に出かける人も注意してほしいものである。あぶない橋をわたったが、これまでの冬山のうちでこれほどおもしろい山行はなかったことをつけ加えておこう。

（黒　田　記）

比　良　山（貫井谷）

１１月１９日～２１日

メンバー　的場幹史（Σ２）　中岡（医２）
　　田村（文１）

時間記録

１１月１９日（土）　京→貫井

貫井行バスは２時半最終　５：５０発途中行バスで出発

うまく乗りついで貫井着８時頃　９時半就寝

１１月２０日（日）　晴後みぞれ

６：３０出発－７：１０えん提－７：２０第１の分岐点－７：４２左俣を行くが水が無くなり引き返す－７：５２第１の分岐点－８：２０第２の分岐点（左俣）－（この後ナメ滑や小滝が連続）－９：００　５０ｍ位の３段のナメ滝登山道と出合う－２条に分れた５０ｍ位のナメ滝－９：４０　ロウカに入る－（この後ザイルをしばしば出す）－１２：１５雨がふり出した中をカッパを着て滝身のシャワークライミング（５ｍ）－１３：１０　１度伏流となる－１３：２０小分岐左－１３：２５小分岐右－１３：２５最後の分岐尾根取付－１４：２１稜線（稜線へのヤブこぎ中みぞれ）－１４：２７武奈ケ岳－１５：１０八雲平－１５：３０避難小屋－（１６：１０～１７：１０シャカ岳往復）

１１月２１日（月）　雪後晴

６：５０出発－７：４０雪の中で堂満岳ピーク－９：３５比良岳１０：４０打見岳（２０分昼食）－１１：３０ホウライ山－１１：５０小女郎峠－１３：３０ホウライ駅

めでたしめでたし

Alpine Club と Mountineering Club

いつの頃からか、ごく自然に現役の山岳部はＯＵＡＣと名乗り、ＯＢ会である山岳会がＯＵＭＣと呼ばれるようになつた。卒業してＯＢになると、ザックの背中のＯＵＡＣのＡの字をＭと書き換えるのだ。

いつか篠田先生がこう言われた事をふと思いだす。

「我々が戦後阪大山岳部を再建した時に、つまらない事だがその略称についても考えたことがあるのだ。イギリス山岳会はＡＣであり、日本山岳会はＪＡＣなんだが、それはそれでいいのだ。だが各大学の中にそれぞれＡＣが出来るというのはどういうものだろうね。大体、ＡＣと意味は１国に１つある位いの大きな意味に使われるのが本当で、それで我々はＯＵＭＣを採ることにしたのだ。別にどちらでも良いことなんだろうが、外国では各大学や各職場にあるのはMountineering ClubであつてAlpine Club は単に山に登るだけではなく、もつと広い活動をしているもののことを言つているようだねえ。」

冬　山　合　宿

1966年度　報　告

C．L	渡部　洋	4年
S．L	出雲路　敬孝	4年
主　務	大野　義照	4年
新人係	糸井　文彦	4年
医療係	黒田　治朗	4年
学連係	辻　信男	4年
装備係	甲田　寿男	4年
食料係	的場　幹史	2年
気象係	山田　靖則	2年

冬　山　合　宿

南アＩパーティー（白根三山縦走）

メンバー　Ｌ佐々木（４年医療）　田中（２年装備）竹林（２年気象）　甲田（２年食料）　原（ＯＢ）

○行動概要

１２月２６日　大阪発　伊那北駅で泊る

１２月２７日　晴

伊奈北駅～バス～戸台（８４０）－北沢峠（１６３０）－北沢 Camp Site（１６：４０）

伊奈北駅からバスで戸台へ単調な河原を歩いて１３：１０八丁坂取付小屋いよいよ急な八丁坂にかかるがトレースがあるのではかどる。気温－２０℃　積雪深い所で６０cm位か。

２８日　晴

出発（８：０５）－荒沢出合（１１：０５）－北沢の野呂川出合（１１：５０）－Tent Site（12：25）

ずっとトレースあり。北沢は下に行くほど氷が発達していて歩き易いが油断をすると氷を踏み破ることもある。荒沢出合までは思ったよりも時間をくう。荒沢出合から野呂川迄は１ピッチ半位。対岸にテントがはられ、尾根には小太郎山へのトレースがあった。我々は予定の尾根を登るため氷の張った野呂川を更に遡った。小仙丈沢より一つ下流の無名沢の対岸にテント設営。原田中で小仙丈沢まで往復

２９日　晴

登った尾根は北沢出合からの尾根と２２７０m位で一緒になった。最初から急で２ピッチ目に岩がありザイルを３５ fix。後は所々岩が出てくる普通の尾根で岩場はいづれも容易に越せる。２２７０m ジヤンクションでテント設営（１５：５５）

３０日　快晴

出発－小太郎山（１０３０）－北岳肩の小屋（１４：００）

今日はずっとトレースがある。尾根は普通の尾根とちがわない。小太郎山までくると富士山が見えた。北岳の登りにかかる頃より寒気がます。田中が手の凍傷を訴えたので急遽肩の小屋へ行きこれから予定のテント地まで２時間位かかるので今日はここで泊る。

３１日　晴後吹雪

出発（７：３５）－間ノ岳（１１：３０）－農鳥小屋（１３：３０）－農鳥岳（１６：００）Camp Site

今日は天気が悪化しそうなので行ける所まで行くことにする。北岳まで１時間、北岳はさすがに人が多い。稜線は雪が風に吹きとばされて夏道が出ている。間ノ岳で糸井パーティの伝言を見つける。農鳥岳への登りは上部がかなり急で雪が氷化している。右に廻り込む所は新雪が積もればなだれの危険あり。西農鳥岳につくころよりガスにまかれて吹雪かれるが寒くはない。ガスのため大唐松尾根の下り口がわからず頂上直下の台地でテント設営。

１月１日　雪

きのうと変らない天気。沈殿

２日　朝薄日すぐ雪

出発（９：４５）－大唐松山より二つ手前のピーク Camp Site（１５：１５）

一時ガスが晴れ大唐松山への下り口がわかった。しかし降雪多く撤収おくれる。稜線は猛吹雪。大唐松尾根への下り口はシリセード。最低鞍部の手前で尾根が岩稜になり降りられないので左側の浅いルンゼ状の所をシリセード。北アではなだれの危険でこんなことはできないだろう。以後アイゼンワッパでラッセルするもはかどらず、大唐松山より２つ手前のピークでテント設営。

３日　雪

先発－後発スタート－大唐松山（１０：３０）－雨池山（１５：１５）－Camp Site（

１７：１５）

今日は下へ降りるべく田中、甲田の２人が先行し後の３人は撤収して後をおう。大唐松山で合流。ここからの急な下り２００ｍは岩の上に雪が積っていやな所だ。雨池山への分岐からは伐採してあった。雨池山から予定の尾根を下るも予定の道なし。止むなく沢を下る。２００ｍ位下ると先が急になっており、又うす暗くなったのでテント設営。

４日　晴

出発（８：００）

夜寒くてしかたなかった。沢は下りないので尾根のブッシュをかき分けていると切開きに出る。大門沢は昨日までがうそのように陽にてらされていた。

（佐々木　記）

気　象　報　告

１２月２７日	９：３０	○	－３°	（戸台）
	１３：１５	⊗時々①	－６°	（丹ケイ小屋）
	１６：４５	○	－１５°	（北沢峠）
	１７：３５	○	－２０°	
２８日	８：００	①	－１５°	
	１６：００	①◎	－９.５°	
２９日	７：００	○	－１２.５°	
	１２：４５	○	－７５°	
	１３：１５	○	－５°	
	２０：１５	○	－１２°	
３０日	１２：４５	○	－４.５°	風強
３１日	８：００	○	－２°	（小屋中）　同　レンス雲
	１１：００	◎		
	１６：００	⊕◎	－６°	西風強
	１８：１５	◎	－７.５°	微風
	１９：１０	◎	－８°	
	２０：４５	◎	－８°	
１月　１日	７：００	⊗◎	－６°	東風強
	１９：００	⊗◎	－４°	〃
２日	９：００	⊗晴小間	－６°	北西風強
	終日	⊗		
３日	朝	①　後　⊗		
４日	１０：３０	○	０°	（奈良田）山頂ガス

（竹　林）

南アⅡパーテイー（塩見岳－北岳縦走）

期間　１２月２６日～１２月３１日

メンバー　糸井（４年記録）、出雲路（４年医療）、　　、山田（２年装備、気象）、的場（２年食料）

計画立案までの過程

我々は未だ厳寒期の南アルプスは経験していなかったので今年の冬は南アルプスへ行こうというのは、年間計画を立てた時からすでに皆の心の中にあった。天候の悪い北アルプスで短いルートを対象とするよりもむしろ強風の吹きすさぶ稜線を心ゆくまで歩こうという動機からす

れば縦走形式をもってするのは当然の結果であろう。この前提のもとに種々のコースを検討した結果南ア特有の深い森林帯のラッセルに魅力を感じて塩見岳と北岳という二つの３０００ｍ峰を結ぶ計画が次第に具体化した。又、我部において過去の記録がないということにも魅力を感じた。

具体的に計画するに当り樹林帯のドカ雪のラッセルに最も重点をおいて三伏峠から井川越まで一応３日をみたものの実際に何日かかるか予想できなかったのと少しでも天気が悪くなれば３０００ｍの稜線はきびしいだろうと思われたので実働７日に対して倍の７日の予備をとった。１４日分の食料を持っての縦走は苦しいので食料、装備にわたって極力軽量化をはかった。

入山前次のような諸点に気をつけた。

1. 塩見岳周辺の岩の多い所をうまく通過すること。
2. 馬鹿尾根のラッセルを４人でいかにこなすか。
3. 間ノ岳、北岳間は強風とクラストした斜面が考えられたので特に２年生がスリップしないように気をつける。

このうち1.は特に冬山のための偵察をしなかったので、塩見岳付近の冬期に雪がついた時の状態がどうなるかが、我々に予想出来なかった為で、これが一抹の不安として残った。リーダー会としてもこのコースの場合冬山のための偵察は必要なしということであったが実際山へ入ってその点がどうかという点が危惧された。又ドカ雪に見舞われた場合４人では動きがとれなくなる場合が起こるのではないかという点に不安があった。

行動概要

１２月２５日

朝と昼の２回に２年２人、４年２人の夫々が別々に出発した。これは１日目にぜひ三伏峠まで行きたいという気持があったので、伊那大島から夏のバス終点までのトラックを先発の２年生にチャーターさせようという狙いであった。この夜は駅前の食堂にたのみこんで泊めてもらった。

１２月２６日　晴後雪

バス終点出発（１０：１５）ー三伏峠（１６：３０）ーTent Site（１６：３５）

結局トラックはチャーターできずタクシーで早朝出発した。落合で別のトラックをチャーターしてやっとのことで夏のバス終点まで入ることができた。的場苦心の軽量化のおかげで１４日分のエッセンをかついでもキスリングの重さは各人とも３２～３３Kgにおさまった。

トラックをおりた所はうっすらと雪があったが尾根にとりついてしばらくすると本格的に雪があらわれ出した。夏道どおしにトレースが残っており雪崩の心配のあるような所もないのでただ歩くのみでうすぐらくなるころ峠の上に立った。峠から少し行ってテントを設営。ふみならしてしまうとベグもきかないという有様で積雪１ｍ位か。

１２月２７日　晴後雪　Camp Site（18：35）出発（６：５０）→塩見岳（１５：４０）

天気図は冬型を示しておりここ三伏峠でもそのため雪がパラついてくもっているが樹林帯中の行動であるので予定通りに出発。先行者のトレースが残っており昨夜の雪もたいしたことがなかったのでラッセルの必要もない。トレースは忠実に夏道を行っており権右門山をこえて樹林帯をぬけるまで問題はなかったが樹林帯を出ると風強くガスっており予想以上に時間をくった。特に塩見峠の最後の登りの岩場の所で、ルートファインデングに手間どり塩見岳をこしてしまいたかったが時間も３時をこしたためやむなく頂上北側に苦しいながら平坦地を見つけてテントを張った。ここも風が強いためか積雪少く設営に苦労した。今日は１日中低温でテントをはるころには－２０°C まで下った。

６：００－１３°　１２：００－１４°
１６：００－２０°

１２月２８日　曇時々晴　６：００－２１°
１２：４５－９°　１３：３０－１２°

出発（７：３０）ー北荒川岳（１０：３０）ー新蛇抜山（１２：４０）ー　Site（１３：３０）

早朝はガスっており天気待ちかと思ったが個装をたたんでいる頃よりガスも切れて遠くの山

も見えかくれしだしたので出発する。案じていた塩見岳の下りもリッジ通しならば、ハイマツに足をとられないようにさえ気をつければ問題にする程のこともなかった。コーモリ岳分岐点からの急な下りを下りおわるころ反対側から来たパーティーに出合いこれから後他人のラッセルの後を行くのかと少々うんざりさせられた。人のいない所を求めてこのコースを選んだのに完全に期待はうら切られてしまった。北荒川から少し下るとずっと樹林帯で、我々はトレースにしたがって歩いたが、このコースは4人共初めてで我々がラッセルすれば、こんなにうまくトレースをつけられまいと思う所も見うけられた。新蛇抜山をこしてしばらく行って今日の行動を終る。

12月29日　快晴　8：30－10°11：00－12.5°　19：00－16°

出発（6：55）－安倍荒倉岳（8：10）－井川越（8：50～9：00）Tent Site（11：00）－三峰岳偵察（11：40～12：40）

昨日まではあまりすっきりしない天気がつづいたが今日は快晴。樹林帯なのに他人のラッセルの後をアイゼンをつけて出発ということで甚だおもしろくない。トレースは夏道通しにうまくつけてあり、あっというまに井川越だ。三伏峠から井川越まで3日を見ていたのだが予想外に早く井川越についたので今日はできるだけ三峰岳に近い所までいこうということで三峰岳が目の前に見える所まで進んでテントをはった。今日は半日行動だったがこれはまず明日の晴天はまちがいなく上、1日晴天さえ得られれば北岳を通過して、天気が悪くなっても下れるという所までは行けるだろうと思ったからであった。

12月30日　快晴　6：00－12°　12：30－10°　16：45－6°

出発（6：55）－三峰岳（7：25）－間ノ岳（8：25）－北岳稜線小屋（10：15～10：30）－吊尾根分岐点（11：10～11：15）－北岳頂上（11：45～12：00）－再び分岐点（12：15～12：30）－ボーコン沢頭（13：30）－砂払直下Site（14：15）

移動性高気圧が張り出してきて今日も快晴。ここまで停滞なしで進んできて10日分の食料があったが最大限実働3日あれば下山できるので6日分のエッセンを持って行くことにし、もったいないようではあったが荷を軽くするため4日分の食料をすてた。このため三峰岳付近の岩稜もなんなく通過し間ノ岳へも殆んど問題なくついた。間ノ岳－北岳間は、大体西側に夏道が強風のためか雪にあまりつけないままで出ていたのでどうということもなし。中白根付近では突風に吹かれてヨロヨロしながら歩いた。稜線小屋からは吊尾根へとトラバースする道を利用して、吊尾根にザックを捨いて北岳頂上を往復した。北岳頂上に立ってもあまり条件が良すぎたので別に成功の感激もなし。八本歯の最初の登りがfix してあったが傾斜がきつかったので安全第一ということでザイルを用いた外はずっとfix もあり人がぞろぞろ通っているので頭を使うような場所もない。最後の一夜を北岳の見えるところで過そうということと、ここ（砂払）からなら1日で芦安へ出られるだろうと思われたので砂払にて今日の行動を終りテントを張った。一時は鳳凰三山へ行こうというプランも出たが、今日見るとあまりに雪が少く自然に立ち消えになってしまった。

12月31日　快晴後曇　7：00－8°

出発（6：30）－砂払出発（7：00）－池山小屋（8：20～9：00）－野呂川川原（11：00～11：15）－林道（12：15～12：30）マイクロバス芦安（14：00）

バットレスに別れをつげて下る。明日は元旦である為か、めちゃくちゃに登山者が多くぞろぞろとそれこそ次から次へ上ってくる。凍りついた道に気をつけながら一目散に下って野呂川の川原までくると、辺りには雪はひとかけらもなく何だか拍子抜けだった。それでも野呂川林道から大きく白い白根三山を見上げた時、これで冬山が終ったのだという気持が実感としてわいてきた。

〔感　想〕

我々にとっては冬の南アルプスははじめてであり長い縦走でもある事から、かなり緊張して入山したのであったが余りに天気がよく条件に恵まれすぎたので特別な感慨もなかった。

入山前マークしていった諸点については①については特に天気が悪くなった場合にも確実にルートを見つけ得る能力が2年生にはまだ欠けているようでありその点が物たりなかった。それには我々4年生としても塩見岳付近で、ガスられた為もあって少々余裕のない行動となったのはまずかった。

②にかんしては先行者のトレースがあり全く問題なかった。

③に関しては全体に南アルプスは積雪量が少ないのかクラストした斜面には会わず又風も予想していた程強くなかったためこれも問題なかった。

結局厳しい目にあうこともなく新雪のラッセルもなくワッパは使わずじまいということで我々4年生としても肩すかしを食らわされたような物足りない思いで山を後にしたのであるが2年生にとってもあまり有益な冬山とはいえないようであった。余りにすべてに恵まれた我々の一週間足らずの短い日数では軽卒な判断かもしれないが、冬山としての厳しさは、南アルプスは北アルプスに比して根本的に欠ているのではないか。我々が南アルプスに冬山のコースを求めたのも厳寒の北アルプスに対する潜在的な恐れというものがあっていわば南アルプスへ逃げたというのが実態ではないかという気がする。

（糸　井　記）

◎中央アルプスパーテイー

メンバー　黒田　加藤（共に4年）

行動記録

12月26日　小雪

3時すぎ上松着、2合目小屋に入る。

12月27日　ガス時々晴　新雪10～15cm

8：00出発　9：00敬神小屋

夏道はカチカチに凍っている。荷物は32Kg

.5合目金懸小屋は無人で良い小屋である。この所よりひざ位迄のラッセル。トレース有り。

8合目小屋跡（2400m）位よりまっ白

夕方－20°　大変寒い

12月28日　晴　時々ガス　風強し

7：30　出発　アイゼンをつける　はい松と岩のMixした道をたどる。10：00前岳着　玉窪小屋は埋没使用不可　11：15　宮田小屋着　今日は小屋で泊るストーブ有り快適な冬山の小屋を楽しむ。

12月29日　快晴

8：10　出発　宝剣の下りは大変急である下りは雪が少ないため鎖が出ていたので何なく通過する。9：20　塚本遭難碑　木曾殿越まで快調にとばし17：00着　夏道雪なし。

12月30日　快適

8：30出発　10：00空木岳着　空木岳の登りはうまいトレースがありよかった。ここを下るとすれば注意が必要である。12：15南駒ケ岳　ここまでは何もなし。2411m迄はナイフリッジ　14：00　2411mピーク　ケサ沢宮林小屋はあばら屋である。

（反　省）

南駒ガ岳西尾根（仮称）は他パーテイがボーラーで下っているのでラッセル、赤旗あり。下まで容易に下れたがもしなければ苦労したであろう。やはり積雪期に未知の所をやるためには無雪期の偵察を痛感した。

（黒田　記）

（注：原稿未提出のためリーダー会での報告を記した）

◎新　人　合　宿

期間　12月26日～1月7日

メンバー　L渡部洋（4年）　田村孝（1年食料）　田村信（1年）　出口（1年装備）　松林（1年）　石原（1年）　中岡（1年気象）

OB参加　牧野、三沢、石浜、吉川

神の田園に小屋が出来、冬新人が天狗原に入るようになって今年で5年目になる。小屋を使

用するよりも、天狗原でのテント生活の方が、新人にとって、よりよいと思う？　小屋で寝起きしてのスキーは当初全く考えていなかった。天狗原に入ってから為すべきこととして、次の様にリーダー会で決定した。今迄の様に天狗原にテントを張りあとは撤収の日迄一ヶ所に定着していると、いざ2年になり縦走に参加すると個人装備のPacking に時間を食う、テントの撤収に手間取る等。そういう訓練が出来ないので今年は撤収迄に二回テントをたたみ少し移動して張り直すこと。小蓮華岳迄往復であるが条件が良ければ白馬迄足をのばしても良いのではないか、という意見も出た。これは条件さえ良ければということになった。又今年は上級生のメンバー不足から11月下旬に富士山での雪上訓練が出来ず、夏山でも雪が軟かくほとんどアイゼンでの歩行練習にならなかったので、小蓮華へ行く前に白馬大池のあたりで適当な斜面があれば、アイゼンでの登降練習をすることにした。次にSki であるが斜滑降迄は完全にしそのあと一日スキーツアーなるものをもうけ山スキーに慣れさす。スキーに関しては、もちろんパラレルクリスチャニア等出来るにこしたことはないが、それよりもまず斜滑降キックターンで（15Kgかつぎ）確実に下だれるようにしたかった。雪洞であるが昨年は一晩で天井が沈下し、住めなくなったので、雪洞生活をあきらめていたが雪洞を短時間でほり上げることを目的とした。次にヤツケ、オーバースボン、オーバシユース、オーバー手の着脱であるが、こういうのも防寒衣としての最後の切札であるということから、極力着用をさけ、自分勝手につけることを許さなかった。その結果オーバースボンはほとんどはかず、オーバー手袋もミトンで代用し、一回も使わずに済んだ。

<行　動　記　録>

12月26日　雪

千国駅より4ビッチで猪股氏宅（12時）背負子で1人15Kgほどデポに行く（2時）、帰りはスキーでということになりスキーをかついでいく。東急山荘をすぎてからバス道を2ビッチいくともう4：30。暗くなるとスキーで下れないのでそこにデポした。それからバス道をスキーで下りだしたがハツケンが悪い者が2人程いてかなりおくれ、東急山荘につくまでに日はとっぷりとくれた。月明りと雪明りでうす明るい東急山荘よりスキーをはずし歩いた。猪股氏宅19時

12月27日　雪

朝めしは7時より早くは出来ないといわれ、6：20起床、7：55出発、天気は雪、時々やむ。出発時新雪20cm位、早稲田大学パーティーより一足早く出た。デポ地迄快調であった。ここで昨日の荷を積み、新人一人45Kg程となる。赤抜少し手前より一人バテ始め荷物をへらした。早大と前後していた為それ程ラツセルもなかったが重荷と空腹でその後3人程バテかけた。三沢さんと会う。栂の森スキー場にかかるころより風も吹き出し歩調がおそくなり、しんどかった。神の田圃手前のトラバースに入る。後1ビツチという所だがなかなか神の田圃に出ない。夕やみせまり少々あせる。トラバースの最後の所で田村（孝）倒れて動かず、仕方なくキスリングをおき空身にさす。神の田圃の入口にて中岡も動かず。小屋にはついたというよりもとびこんだという感じで余力なし（18時）ワンゲルに出された紅茶、にぎりめしで腹ごしらえをし4名にてキスリング回収にいく。

12月28日　雪

8：20出発－15：00天狗原

全装備と1月2日迄の食料を持ち、成城小屋迄スキーにシールをつけていく、昨日の新雪でトレースはなかった。成城小屋よりスキーをはずしワツパで行く、一年にとっては始めてのラツセルであり、要りよう悪く、雪の中でもがくが前へとんと進まない。から回りという感じ。1ビツチ程いくと左よりトレースに出あう。天狗原にかかる頃より少々地吹雪、社の風上側乗鞍よりにテントをはる。（18：00－12℃）

12月29日　地吹雪　　6：00－17℃　12：00－10℃　18：00－16℃

7：30～12：30スキー直滑降、斜滑降
12：30～13：00ヒヨドリ峰の尾根の頭

にある大きなダケカンバ迄往復１３：４０～１４：４０　スキー

この日天気は地吹雪、時々風弱まる。安曇野よく見える。１６：００の天気図、移動高になりつつある。明日は快晴か、明日晴れれば小蓮華アタックとする。６：００に出て白馬大池のあたりで二時間程アイゼン練習をする予定。

１２月３０日　４時起床　晴

テントの外に出てからオーバーシューズをつけたので、７：１０出発となる。やはりアイゼンをつけるのに手間どる。１ピッチで乗越の斜面を登る。白馬大池から少し小蓮華の方へ上った所でアイゼン歩行の練習する。しかし、雪がやわらかくものにならず、途中槇尾、木原ＯＢに追いつかれる。木原さんはピッケルがないので引き返し、横尾さんが加わる。右側より風強くヤッケのフードをつけさす。１０：１０～１０：３０小蓮華岳ピーク。乗越の下りで尻制動するもあまりすべらずテント着１２：３０。１３：３０～１５：００迄スキー

今日はヤッケ、オーバースボン、オーバーシューズ、アイゼン、オーバー手袋は使用せず、又出発がおそくなったのはまずかった。一年生の歩くのを見ていると、自分の足許に注意するのがせいいっぱいで、余裕などない。強い風のせいである。やはり１１月富士山での強風になれアイゼンをはきこなすようにしておきたかった。午後になりレンズ雲は後立の方にかかる。明日迄天気がもつか。エッセンは２日の昼迄しかないので、明日は晴れてもスキーツアーには行かず、小屋に下り、荷上げをすることにする。

１２月３１日　曇後雪　無気味な朝焼け

６：００－１０℃　１２：００－５℃　１８：００－５℃

７：００発天狗原から成城小屋迄斜滑降、キックターンで下る。空身なのですべりやすい。しかし下の方になると木が多くなりうまくいかず、８：３０栂ノ木寮、住吉ＯＢ等に会う。１０：００発１年生１０Kgの荷、成城からスキーにシールをつけ沢をゆく、２ピッチ少々で天狗原へ、１２：１５テント着、大変暑かった。いまにもくずれそうな、天気であった。住吉、米沢、吉川ＯＢ天狗原迄こられすぐに下る。午後からは雪洞をつくることにする。４人用のを１年６名、スコップ２、ノコギリ２で１３：００開始、１５：３０、完成、雪のやわらかいのは仕方がないが、見かけが良いのが出来た。荒づくりに２時間近くかかり、仕上げに３０分程かかる。１３：００頃より小雪がふり出し、１５時頃より風出てくる。雪洞をほったついでに入りたかったが明日の朝はテント撤収の練習をするつもりであったので、入れなかった。一年生には明日のことは何もいわずにおいたが、うすうす感ずいていたようでもある。

１月１日　小雪

５：００起床　６：００－５℃　１２：－３℃　１８：００－３℃

７時には全員個人装備をたたみ、外に出てテントの撤収を始める。一年生には天狗原を一周するということにし、ちゃんと荷分けをさせたが我々上４名は雑なパッキングでまずかった。社をまわりこみ風下側まで歩いて１分、今日はここまでとして、テントをはる。１０時はりかえ完了。１２：００～１４：４５　スキー、雪はあまり降らず、風もほとんどなく重い雪がチラチラ、夜大町の灯がうすく見える。夜半出口と松林が自発的に雪かきに出ていた。うれしい。台湾坊主と、日本海に進んだ二ツ玉低気圧

１月２日　５：起床　６：００－７℃　１２：００－９℃　１８：００－１３℃

７：００～１０：００スキー、全制動ボーゲンシステムボーゲン　弱い冬型となり風雪（時々やむ）

１３：００迄昼休み、１３：００～１５：１５スキー断続的に風が強まり、視界10m程になる。今日はヤッケだけ　１２：３０　吉川ＯＢ小屋より上ってこられ石浜ＯＢと交代　石浜ＯＢ下山、明日は天気悪そうなので予定していた悪天候での歩行練習とする。

１月３日　雪　６：００－１７℃　１２：００－１６℃　１８：００－１５℃

昨晩かなり雪が降ったらしい寝ていて少々息苦しかった。ローソクをつけるとテントが雪の為小さくなりまるで船底のよう。さっそく一年

生に出てもらい雪かき。

7時すぎやっと朝食をおえ歩くつもりで8時に全員外に出たが、ほとんどテントの上迄雪にうもりわっぱをつけても胸位迄もぐりそうなので歩行練習は中止、全く雪かきとははてない仕事でである。と思われたが人数にものをいわせ12：30には大体かたがつく。天気は一時小雪で時々風有り足がつめたくいたい。これではスキーも出来ないので、今日はこれまでにする。かなりの雪であるのは夜中時々目がさめて気付いていたがまあええやろと思って夜中雪かきをしなかった。やはり出るべきであった。雪の圧力は相当なもので張線などほとんどゆるんでいたことなどを考えるとも■とドカ雪が降ればテントから出ることさえニッチもサッチもいかなくなることもあるだろう。二つの低気圧が三陸沖で合致し、ガッチリと冬型にはまる。かなりつづきそう。

1月4日　風雪　　6：00－15℃

12：00－16℃　18：00－17℃

昨晩は風強かった。風がつよく出るのをおくらし9：15の天気図をつける。10時外に出る。この歩行練習であるが風雪の中を自分でルートを求め目指す所へ行き無事引き返してくることとした。さてその目標であるが、12月29日のダケカンバしかないのでそれとする。1年生6名に旗竿25本程渡しリーダーを目の良くみえる田村（孝）にまかせ出発す。我々三人は5メートル程後からついていくが何も指示しない。完全な冬型で、右後より風雪、雪は低温の為非常に細いやつで、顔につくと瞬時にしてとける。1年生は右往左往しながらも張切って進む。ま■げが凍り自分の足もとさえはっきりしない。時々パーッと視界がひらけ目標が見える。帰りにはこの風雪をまともに受け、顔面凍傷確実と思われたので引き返させた。少ししか進んでなかったが1時間もたっていた。テントに帰り少し雪かきをして今日も終る。まだ高気圧は張出さない。いつまでつづくかわからない。残りの食料は2日半あるが天狗ケ原で停滞するよりもまだ下でスキーをした方が良いと思われたので明日撤収とする。撤収をスムースにするために夜半雪かきに出しベグ等見えるようにする。

1月5日　　6時－16℃

9：50出発．13：30栂ノ木寮

昨晩より雪かきをしておいたので撤収はわりと楽であった。ワッパをはいてゆく、1ピッチほど京府大のラッセルがあったが追いこしてしまうと腰までのラッセルで進まず空身の者を2名先行させどうやら進む下りなのと荷が軽いのとで割合早く下につく。栂ノ木寮は入口が少々吹きだまっていたがあいていたので入った。小屋の中はOBの帰ったあとでだれもいなく、ごみだらけ汚れ放題である。少々あきれた。夜、星が見える。

1月6日　曇後小雪

8：30～16：30　栂の森でスキー

石原スキーのエッチで向う脛を切る。　渡部吉川ネンザ。朝方くもり朝日がさし後立の山々も見えたが次第にガスり16時ころより小雪チラホラ。夜ストーブをかこんで反省会。

1月7日

親の原で解散。渡部、石原、吉川OBは歩いて下る。

次に1月6日の反省会で出たことなど記す。

○12月27日のこと

昼めしを早く食いすぎたため空腹によって疲労が早まった。45Kgというのは積雪期にはちと重すぎたが少ししんどくなるとマイペースで歩き出し本当にバテてもいないのに足を動かさない。雪山でバテるというのは致命的だがリーダーが歩けという間はがんばって歩く。栂ノ木寮への入り方がまずかった。たしかにしんどかったがもう少しがんばって雪を外で払いきれいにして入りたかった。この日早くも手の指がいたいとか感覚がないとかいいだしたものが2名ほどいた。こんな所で凍傷になるはずがないが手袋をぬらさぬようにもっと注意が必要

○12月30日

出発時間がおそすぎた。

○12月31日

沢のつめで時間がなかったので休んだ。雪崩の危険が全くなかったとはいえやはり上まで行

くべきであった。

○1月3日

ドカ雪のため外に出していたビツケルEssenかんワツパ等うまる。できるだけテントの中に入れる。標識をつける。

ワツパ、アイゼンは自分のビツケルにくくる。

（渡　部　記）

1967年　春　山　合　宿

昨年末、目標を積雪期上ノ廊下遡行におき、その偵察を今合宿に行う予定にて準備を重ねて来たのであるが出発間際にメンバーに支障をきたし、急拠計画を変更せざるを得なくなり、合宿遂行を主目的に置き、ついで今迄の準備　―　烏帽子小屋のデポ、上ノ廊下周辺の無雪期偵察結果　―　を基礎に目標をこの時のメンバー構成（新人4名、2年4名、4年1名、OB2名）と期間2週間を考慮に入れ

1）東沢をベースにその周辺

2）烏帽子、野口五郎より鷲羽、水晶アタックの両案を検討の結果新人、2年の稜線訓練を特に考慮して第2案を決定した。その際の問題点として

1）ブナ立尾根の登攀

2）東沢コル　―　赤岳間

3）この稜線上の強風

であったが1）2）はfixザイルを設定、及びメンバー構成、ザイルの使用にて克服することにした。また特に2年部員は次のリーダーグループの為の訓練として全員各パーティのリーダーをすることにした。その決定はそのつど私が行う事とした。結果的には計画通りに行なわれたが天候により前半、後半の部員の行動の相違が目についた。後半に問題が多い。また個人装備に基本的不備が多かった。個々の問題点は反省会での意見によると

○24日の行動（後述）において2年部員に積極さがたりなかった。

○ブナ立尾根下山の際に尻セードをし、かつ一年生が行ったことを黙認したこと。

○凍傷への予防注意の不足

○ブナ立尾根を登る際の出発が遅すぎはしないか（6時出発）

などである。

総体的に次のリーダーグループである2年部員が後半に登山の基本的な事を怠った事は特に反省すべきである。「山行は人里に帰って終るものであり、下山は山行中であるという」こと。

終りにOB大川、栗原さんに世話になった事に感謝します。（細川記）

参　加　者

CL	細川　明彦	4	出口　信之	1
装備	田中　喜樹	2	松林　一男	1
食糧	的場　幹史	2	石原　敏雄	1
記録	甲田　吉彦	2	大川　和秋	OB
気象	山田　靖則	2	栗原　完治	OB
医療	中岡　和哉	1		

行　動　概　要

3月12日　先発（甲田、山田、出口）大阪発

3月13日　曇時々雪

先発：葛（9：05）―濁（12：00～13：10）―取付（13：50～14：10）―濁（14：45）

大町で京大と共にマイクロバスをチャーターして葛入り。高瀬館にあいさつして軌道を行く。所々に小さいデブリがある。雪は多くない。濁小屋で一休みの後取付までのルートのトレース及び取付の状態を見に行く。取付までのルートは夏道でなく左岸ぞいに堰堤まで行き堰堤上方で濁沢を渡って夏道に合するルートをした。

本隊：細川以下6名大阪発。

3月14日　晴

先発：濁（６：５０）ー取付（７：２０）ー fix 終了（８：１５）ー１７００m（１０：００）ー濁（１１：００）

出口を小屋に残して甲田、山田でｆｉｘ 工作。取付のトラバースと、その上の急傾斜４５ｍをｆｉｘする。ｆｉｘは別にむつかしくなかった。後１７００ｍ付近まで登ってみる。だいたい同じような急な登りである。

本隊：暮（９：００）ー濁（１２：３０～１３：１５）ー取付ｆｉｘ ー濁（１５：００）

本隊暮入り。細川、甲田、山田、出口でfixの確認に行く。

３月１５日　曇後雪　稜線は風雪

濁（６：００）ー取付（６：４０）ー三角点（１１：３０）ー２２５０ｍ（１２：２０）ー烏帽子小屋(14:10)

濁（１３：３０）サポート

細川以下５名、烏帽子小屋入り。甲田山田サポート。

ｆｉｘ 地点も難なく通過していよいよブナ立の登り。ルートは夏道の一つ手前の尾根にとり赤旗とかすかなトレースに導かれる。ラッセルはほとんどない。三角点までは淡々たる急登だが２ヶ所ばかり濁沢側をまく変な所があるが注意して通過。懸念していた上部のｆｉｘ予定個所は雪のナイフエッジになっており、難なく通過。ナイフエッジ上部でサポート隊と別れる。このあたりより雪が降り出す。上部で少しラッセルがあったが約８時間で烏帽子入り。今日から２時間おきにトランシーバ

後発２名（大川、栗原）大阪発

３月１６日　晴

濁（６：３０）ー三角点（１２：２０）ー烏帽子小屋（１４：００）

サポート：烏帽子小屋（７：００）ー２１００ｍ（１０：３０）ー烏帽子小屋（１４：００）

山田以下４人が烏帽子入り。昨日のトレース通りに行く。上部を細川、田中、的場がサポート。

後発のＯＢ２名濁入り。

３月１７日　快晴

○烏帽子小屋（７：００）ー野口五郎岳と真砂岳間のCamp Site(11:45)

絶好の上天気。北アルプスの全部がよくみえる。細川以下５名が野口五郎岳に向う。荷物は３０Kg弱。稜線は夏道が出ておりアイゼンのチビルこと。三ツ岳は本峰は東沢側、西峰は高瀬側をトラバース。あとは夏道通し。

雪庇は高瀬側に出ているが大きいものはない。

Camp Siteは野口五郎岳南東カールの真中にする。

○後発：濁（６：３０）ー三角点（１２：３０）ー烏帽子小屋（１４：００）

サポート　烏帽子小屋（８：００）ー三角点（９：００～１２：３０）ー烏帽子小屋（１４：００）

大川、栗原両ＯＢ烏帽子小屋入り、的場、山田がサポート。

３月１８日　野口五郎岳　風雪　停滞

烏帽子　◎時々◐後⊗　停滞

３月１９日　快晴　強風

○Tent（８：００）ー赤岳（１０：００）ー Camp Site(12:00)

細川、甲田、田中で東沢乗越の偵察。真砂岳と赤岳の間は雪がついていてリッジ通しに難なく行けるのでｆｉｘ の必要はない。

○烏帽子小屋（７：２０）ー野口五郎Tent Site(１２：１５)

的場以下６人が野口五郎岳へ向う。出発に手まどり途中の風で少々時間を食った。テント設営後１年はアイゼンワークの練習（2:00）を行う。

３月２０日　快晴

本日Attack

○水晶隊　細川（リーダー）、田中（サブリーダー）、出口、松林

Camp Site（６：１５）ー赤岳（８：３０）ー水晶岳（１０：１２）ー赤岳（１１：３０）ー Camp Site(14:45)

鷲羽隊と一緒に出発。絶好のアタック日和で槍ガ岳、北鎌尾根、硫黄尾根な◎ が目前に見え。赤岳で鷲羽隊と別れ水晶岳に向う。少し進んだ所でザイルを出し所定のザイルパーティ

ー(細川ー松林)田中ー出口)でコンテイニアス、スタカートを交えて行く。水晶が近づくにつれて雪と岩のMix した不安定な稜線をスタカートで黒部側を行く。頂上直下の10時の交信で鷲羽隊がピークに立ったと聞いてビックリシタナーモウ。交信のすぐあとピークに立つ。帰りもスタカートで行く。11:30赤岳で鷲羽隊と合流して13:45 Camp Site 帰着帰りは暑かった。

○鷲羽隊　甲田(リーダー)、山田(サブリーダー)、的場、栗原OB

○Camp Site(6:15)ー赤岳(8:30)ーワリモ岳(9:15)ー鷲羽岳(9:45〜10:20)ー赤岳(11:30)ーCamp Site(13:45)

赤岳までは水晶隊と同じ。赤岳を下りワリモのコルあたりから足もとは所々氷となってアイゼンをたたきこまねばならなくなった。しかも快調なペースで進む。先行者のかすかなトレールがあり所々に旗ざおもあった。コルからワリモ岳の登りにかけては割と大きな雪庇が出ており雪庇とのさかいを行く。ワリモ岳の登りは完全に氷化している。ワリモ岳の下りが少々急だったが難なく通過。石コロと氷のMIxした登りをつめると鷲羽岳の頂上であった。風下側にツエルトをかぶって昼食のあと記念撮影。昨年歩いた双六岳ー三俣岳ー黒部五郎岳ー薬師岳を見るとなつかしくなった。水晶隊と交信を交してツエルトをたたむ。帰りはワリモ岳のピーク直下の下りが少しいやらしかったがアイゼンをきかして下る。11:30水晶隊と合流して帰幕。帰ってからは好みに応じて雪洞掘り、イグルー作りに忙がしい。

3月21日　晴後曇

本日晴天停滞。昼から2年を中心にスタカート、コンテイニアスでのジツヘル練習。

3月22日　地吹雪　停滞

3月23日　地吹雪　停滞

3月24日　地吹雪後快晴

Camp Site(8:15)ー野口五郎小屋(9:45〜10:20)ー三ツ岳(12:30)烏帽子小屋(13:45)

冬型気圧配置が残って風強し。青空が見えかけたので時間待ちの後撤収。地吹雪の中を行動をおこす。風にふらつきながらやっと野口五郎小屋へ。小屋で風待ちをしたがたいして弱くならず出発。三ツ岳までは強風と地吹雪、ガスのために難渋し、とうとう三ツ岳のトラバースでルートを見失なう。烏帽子小屋の手前の所は行きと違って割に深いラッセルだったが全員総出動で軽く(?)ながして出発後5時間でやっと烏帽子小屋に入る。強風のためにほとんどのものが顔面凍傷。

3月25日　快晴

烏帽子小屋(7:40)ー濁(11:45)ー葛(15:00)

気温の高い日だった。ブナ立のジャンクション直下の斜面でドドッーという音と共に斜面がゆれてびっくり。三角点までは慎重に行く。樹林帯に入ってからは先頭のステップを崩すものがおり後は大迷惑。最後の下りはシリセードまでしはじめた。fix 個所も無事通過して河原に出ると汗ばむような暑さ。軌道をとばして葛温泉でドブン。12日分の汚れをおとしさっぱりした下山気分だった。

各係報告

○食糧・今回は烏帽子のデポを組み交えて使用したが、当日にならねばOBの人数、先行するパーティーの人数が定まらなかったために相当の時間をくった。

・食糧係の最も重要な任務は残量の確認である。今回はそれほどの失敗はなかったが、まだまだ小さな失敗はあった。食糧係でなくともこれは重要な問題である。

・エッセンの内容に関して

・毎年積雪期には米を食べたがる。調理の仕方によるがそれ程うまかったとも思えない。時間の点を考慮すれば使用には問題があろう。

○ラード、マーガリン等の脂肪食品をもっと食べるべきである。カロリーの不足や軽量化の方にもかかってくる問題

春山合宿行動表

	大町	墓	濁	プナ	立取付	烏帽子岳	野口五郎岳	AC
3月 13		905	1200	先発3名				
			1310	甲田、山田、出口				
			1445					
14			650	甲田、山田				
			1100	1700m				
			1315	細川、甲田、山田、出口				
			1500					
15			600			1410 細川、的場、田中、出口、松林		
			600	山田、甲田				
			1830	2200m				
16			630			1400 山田、甲田、中岡、石原		
		大川、栗原	OB	1030		700 1400 細川、田中、的場		
				2100m				
17				700				1145 細川、田中、甲田松林出口
				三角点		800 1400 的場、山田		
			630			1400 大川、栗原 中岡、石原		
18				停滞				停滞 石原、大川、栗原
19				720				1215 的場山田中岡
						細川、甲田、田中 出口、松林		800 1000 水晶
								1200 赤岳
20						細川、田中、出口、松林		615 830 1345 1130 1012
								615 830
						甲田、山田、的場、栗原		1345 1130 745 1000
						大川、石原、中岡		カン
21							停滞	
22								〃
23								〃
24						〃		
					1345			845
25						740		
		1500	1145					

である。

○スープ袋の野菜は冬と同様大根菜を使用したタダで手に入る事が強み。食べてみても普通の野菜と変らない。

○調理に際してはフタを使用すべきである。テントでもそうだが、特に雪洞内では湿気がひどくなる。

（的　場）

○装備 • 装備の方もケロシン、メタ、ローソクなどは多量にデポしてあるのでこれを大巾に使用した。

• 隊の分離の際の連絡事項が不徹底であった。例えばfix ザイルの分け方が必要な方に少なかったことなど。

• 烏帽子小屋における係の独断はやはりつつしむべきであったと思う。

• 旗ザオの旗はもう少ししっかりと結びつけねばならない。

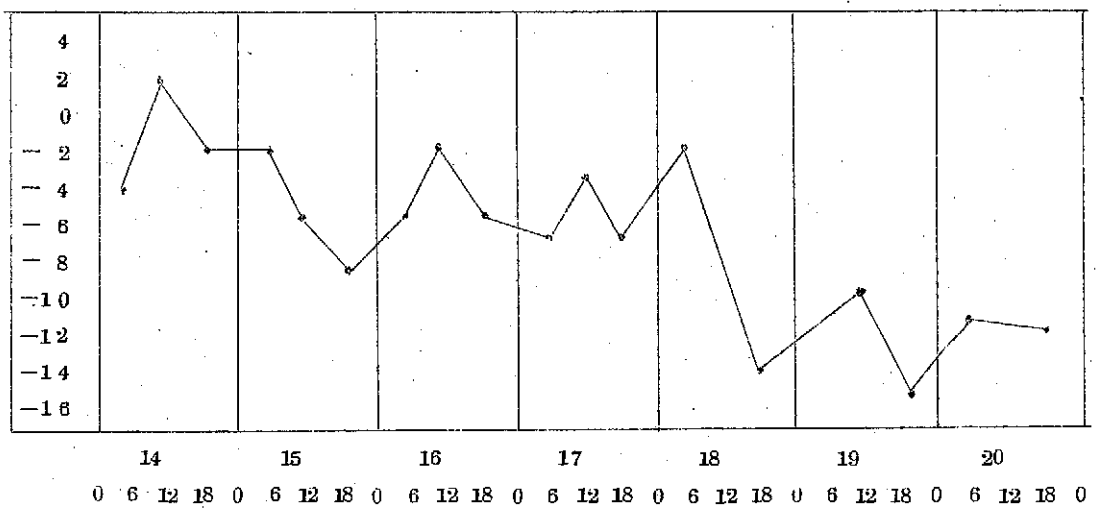
（田　中）

食糧、装備共デポの残りは5月山行用に再びデポとして烏帽子小屋においた。

○気　象

3／13	◎時々⊗		
3／14	◎		日本海に移動高が出る
15	①後⊗		気圧の谷通過
16	①		九州付近に弱い低気圧（後消滅）本州中部に弱い高気圧
17	○		移動性高気圧、低気圧接近
18	◎	風雪	本州上を発達中の低気圧通過（12時990mb）
19	○	強風	冬型（弱）
20	○		移動高　台湾坊主発生
21	①後◎		低気圧接近（台湾坊主、日本海低気圧）
22	⊕⊗		二ツ玉低気圧通過
23	⊕		冬型（12時高気圧1032mb 低気圧986mb & 976mb）
24	⊕後①		冬型ゆるむ 移動高出る
25	○		移動高

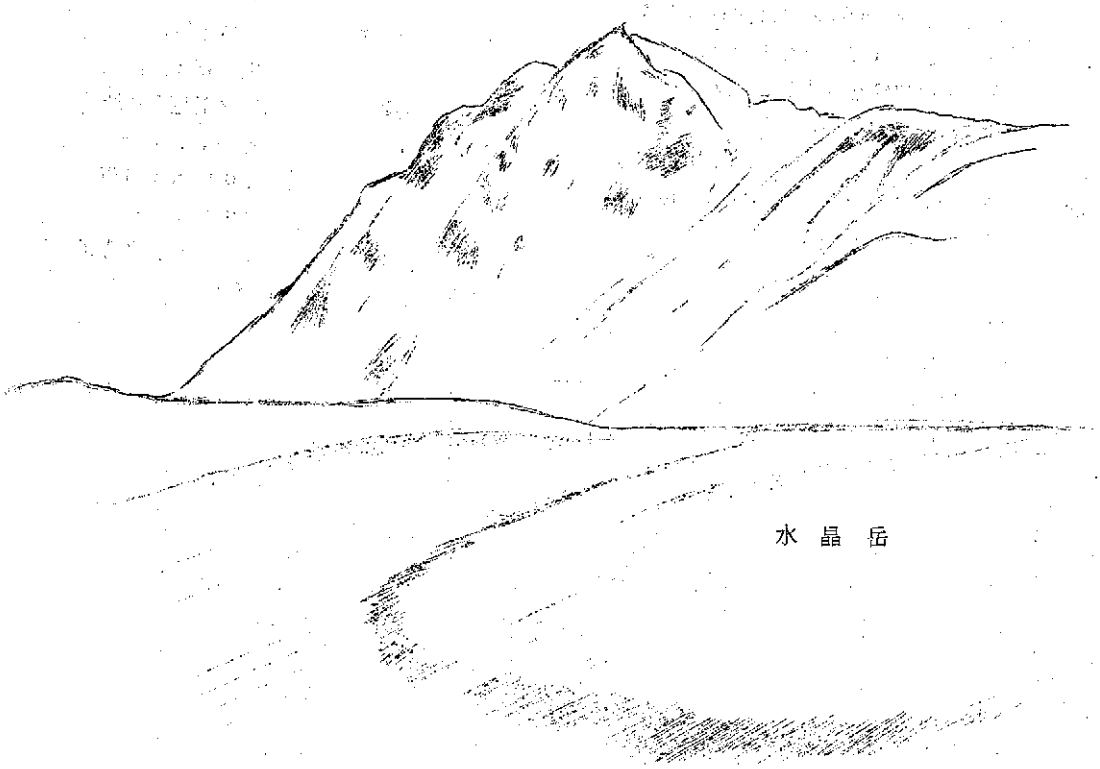
気温変化



（注：21日以降は温度計の破損や氷のふ着が激しく適正なData が得られなかったのでカット。）

Attack までは春山らしい好天に恵まれたが２２日からは発達した低気圧の通過で冬型にはまり東沢の吹き上げと相まって相当な風となった。合宿中２度の寒波（１８～１９日，２２日２３日）があり特に後の方は冬と同程度の強いものであった。２３日２１時輪島７００ｍｂ－２１℃　また２３日の寒波は前日の福岡、鹿児島などで完全に予知できるものであった。ミスともいえるだろう。雪崩は１７日濁沢を中心に５つばかりのなだれを目撃できた。いづれも点発生表層なだればかりであった。大きさでは水晶東面に発生したものが最大。ワリモ沢においては面発生なだれが多い。これは南向きという条件によるものであろう。雪庇は大きなものはなく又崩壊もなかった。

（山　田）



リーダー所感

1967年度　報　告

C．L	甲田吉彦	3年
C．L 学連係	的場幹史	3年
主務	岡田謙治	3年
食料係	田中喜樹	3年
装備係	山田靖則	3年
図書係 記録係	竹林真一	3年
医料係	中岡和哉	2年
気象係	出口信之	2年

リーダー所感
1967年度を振返つて

甲田吉彦

一年をふりかえってという題で、何か書けとのことですが、現在、原稿締切日は春山前なのです。従って厳密には一年ではありません。だからここでは、回顧的なことよりも現在私が、我部が直面している問題について述べたいと思う。

我が阪大山岳部O．U．M．C．は終戦後、いち早くその体制を整えた。関西において、そして関東の諸大学に比して決してその出発点においては劣らなかったのであります。否、1961年の富士山の遭難までは、後立から黒部を渡り、剱へ、穂高へ、その足跡を残し、輝しき伝統を後輩に伝えてきたのでした。

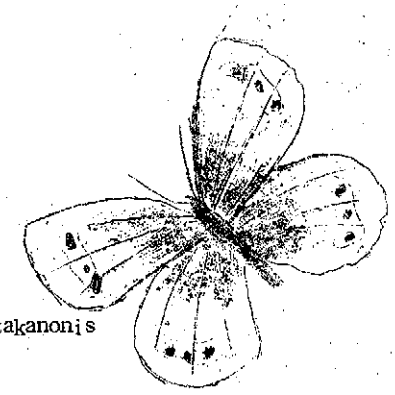
然るに1961年11月以来、我部の記録を見る限り、一時的には遭難前のレベルに達したかに見えたが、ここ数年は、決して高いレベルにはなかった。レベルだけが低いのなら救いはある。しかし、どうもこの原因は、部を構成している部員、即ち、今の学生の気質、そして阪大という学校の風土が、少なからず作用しているように思われる。さらに旧態依然たる部の組織、運営にメスを入れる必要もあるのではないだろうか。ここで言っているのは、今、構成している部員の多数が望む方向に改造するのではなく、山に登るものとして、大学山岳部として、そして体育会クラブとしてあるべき方向であって、ここが大切なのだが、決して同好会的なクラブではないのです。

現在の学生は、特に阪大生には、私の見る限りある物事に対して、情熱を持ち続けるという人々の数が少なくなってきているのではないだろうか。

一体、山に限って言えば、阪大の学生は、即ち山岳部員だが、こう考えているのではないだろうか。つまり卒業してからも、山に登ろうとは考えていないだろう。換言すれば、大学にいっている間にせいぜい山を楽しもうと考えているのではないだろうか。

もっとも、そうは考えずに、純粋なクラブ活動として、まじめに、しかも情熱をもってやっている人もいるだろう。

現在我々が、一番必要としているのは情熱である。情熱からすべては出発するのです。



Erebia ligea takanonis

5　月　山　行

槍ケ岳北鎌尾根

昭和42年4月28日～5月4日

メンバー

CL　記録　甲田　吉彦（Σ3）

SL　装備　山田　靖則（T3）

　　食料　松林　一男（T2）

　　佐々木OB

槍ケ岳北鎌尾根一今では単なる縦走路になってしまった。そして、剣の早月尾根と共に、今では古典的なルートとしてそこはトレースされているようである。

北鎌尾根といえば、慶応学習院の初トレース争いや、加藤文太郎、松涛明を思いださずにはおられない。過去の山行において、いつも、北鎌はその勇姿を我々の眼の前に横たえていた。我部の先人達が黒部を見て、黒部に入ったように、自分も北鎌を見て、北鎌をトレースしたくなった。それも、出来るなら厳冬期に。だが、部の方向及び自分の実力がそれを許さない。従って、その一つ前のステップとして、残雪期にここをトレースすることにした。以下その記録である。

4月28日　雨中を千天出合まで。エッセン1日分不足に気付く。

4月29日　雨後晴

朝から雨昼からトカゲ

4月30日　快晴

小屋への引越（他のパーティは全部出発したので小屋は空になる。）をすませて千丈沢へ出発。甲田佐々木PはCルンゼ。ルンゼに入って各岩稜を見山田松林Pは赤岳側稜から全体の概念をつかむ。この偵察は夏の合宿地を定める一つの資料を手に入れるためである。全体の感じではここの岩場はスケールの点では剱や穂高の岩場に劣るが明るく開放的で傾斜もさほどなく本にのっている紹介記事通りである。実際岩稜末端の感触はブリクションはききそうだし、もろくなくその上順層である。各沢は稜線まで雪が続いており各岩稜には雪はついていない。夏よりも5月に合宿した方が面白そうだ。

出発（6：30）一帰幕（14：30）

5月1日　強い雨

前線の通過で沈殿　食いのばし。

5月2日　快晴

3：10起床　星がまたたいている。多門治尾根に取りつくところの丸木橋は濡れていてアイゼンをつけて渡る。こんなところで時間をくうとは。急な登りを赤印に導かれ、4峰に達する。支峰は、何となく通過。6.7のコルを目ざす。は6峰の天丈沢側のトラブアースでザイルを出す。コルへつきあげている雪面を登り、コルに出る。7峰は千丈側をまくが、フィックスしてあるところが、下が切れていて悪い。北鎌のコルに出る下りが夏道通しだが悪く、ザイルを出す。キスリングザックでは、ザイルが必要、サブザックなら要らない。コルに着いたのは11：55だが、明日も見通しが着いたので、テントを張ることにする。着くなりギャンブル。コルからの眺めは素晴らしい。アーベントロートに輝く峰々よ。

3：10起床一出発5：05一橋5：20一5：40一取付5：45一2峰6：25一3.4のコル7：40一4峰8：00一北鎌コル11：55

5月3日　快晴

3：40起床　30分も寝過ぎる。昨日の疲れか。日大や、社会人のオッサンらは、まだテント。アイゼンをつけて登りはじめる。天狗の腰掛を越えて独標の登りにかかる。独標の取付になっている滝のようなルンゼは傾斜が急だが偵察した結果不安がなく、そのまま登る。あとは単調な登りでステップのないところもアイゼンがよくきいた。独標に立つと大槍が小槍、孫

槍、ヒ孫槍を従え、その勇姿を見せる。シラス雲が出ているが天気図から判断すると今日明日充分もつだろう。あとは大槍までずっとトレースが続いている。途中千丈側をトラバースと、天丈側のはい松と、雪（くさっていた）のミックスした直登するところでザイルを出した。北鎌平につくと、大槍の人が見える。ルートを見定めて、最後の登りにかかる。大槍の登りは傾斜高度感も充分だが、雪があり、さらにステップがあって呆気なく大槍へ。ザイルの必要は全然なかった。大槍へ出る所で５ｍ程の岩登り。大槍の下りは勝手知ったるところ。肩に着く。槍沢をツリセードで下る。泊りは横尾山荘前。
３：４０起床－５：４０出発－独標７：４０－北鎌平１０：１５－大槍１１：００－１１：２０－肩１１：４５－横尾山荘１６：００

５月４日　快晴　後　晴

出発７：３０－徳沢８：２０－白沢出合９：１０－９：３０－峠１１：３０－１２：００－島々宿１４：００

省りみて

北鎌尾根、千丈側々壁は１日しか見られず、又実際に登ってはいないが現在の我々の夏の合宿としては適当だろう。それよりも五月に合宿した方が面白いのではないか。来年の五月にやってみたい。

北鎌尾根は完全に予想を裏切った。下半は雪が少なく、ステップが目立たないので、やや面白かったが赤印が多く自分で登ったという気がしない。上半にいたっては、バケツのようなステップにただあきれるばかりだ。自分でトレースするならば５月で３～４日はかかるだろう。そしてその興味はつきないと思う。装備はこれで一体いいのかと思う位少なくしたが、何一つ不足せず、又余分なものがなかった。テントは雨が降るので、冬天が必要。内張は必要なし。ない方がむしろよい。ツエルトは雨の時こまるだろう。テント地はたくさんあった。雪は例年並、エッセンは少し多すぎた。７００g／day短かい山行だったからだろう。

東北朝日連峰山行記録

１９６７年４月２８日～５月３日

メンバー　竹林（３回生）L
　　石原（２回生）SL食糧
　　田村（　〃　）　装備
　　黒田（OB）　医療
　　豊坂（OB）

４月２８日　曇後雨

１５：００長井着－１７：００過自動車チャーター．発－１７：３０　野川ダム着．４０発１８：４０木地山ダム第二発電所着

２７日夜８：４０発の急行「日本海」で大阪を出発した我々東北朝日パーティ５人は高曇りと小雨の一日を列車内で過した。日本アルプスの場合は朝から山路にとっつくことができるのに比べウンザリするような時間をもてあました。それでも昼過ぎ信濃平野を北上中の車窓より朝日の南側に縦に並ぶ飯豊の山々のその白い姿を目にした時、山を前にしたときに感じるあの興奮がパーティの中にうかがわれた。

今回の山行は昨年５月飯豊縦走を試みた竹林Lにより提案、計画されたもので、大きな地図帳を前に竹林Lはじめ皆の目が輝きはじめる。車窓からの観察によればかなり雪がついているようだ。羽越本線から米坂線へ入る分岐点の坂町で２時間半程待った後１５：００長井着、トラックチャーターは案内書には市役所にたのむようあるにもかかわらず、ちょうど地方選の最中で手こずる。二時間余り方々交渉した結果、予定の木地山ダムまでではなく、ずっと下流の野川ダム付近までなら行くという。仕方なしに運んでもらうが大金２０００円を請求される。日暮れのせまった谷の自動車道を「悪徳商人」をのろいながらも歩かざるを得ない。結局２ピッチ目の終るころ木地山ダム発電所の宿舎にたどりつき、その軒下で一夜を明かすことにする。あのオヤジの話しによると野川ダムより先はナダレのデブリ等で車は入れないということだがそんなケハイは全然ない。

我々は入山第一日目にしてダマサレタのである。山にきて人にだまされてもあの白き頭をのぞか

せて静かにそびゆる山々にだけはあざむかれまいと、小雨の薄暗い谷間をながめながら思う。

4月29日　雨後晴

4：30起床（5：00気温14℃、標高350m）6：10出発－8：10木地山ダム8：25出－ピッチ目より雪田に入る－10：45悦瓶山山荘－危険なつり橋㊙11：45出　12：00過　自動車道より夏道に入る。14：30悦瓶山大玉間コルの少し上部TS着

小雨の中を出発。予定ならきようは木地山ダムを出発しているはずなのにダムまで野川添いの自動車道を歩かねばならなかった。谷すじの斜面はもうほとんど雪はなく、ところどころ小さな沢状の窪地に残っているだけである。昨日のオヤジの言ったナダレの心配は毛頭ない。トラックも通行可能。目の前は段々雪の多い景色に変って行く。谷が大きく左に曲り前方の狭くなった地点に木地山ダムが鮮かなブルーのゲートから純白の帯をたらしている。木地山湖の右側を大きく蛇行しながら、やはり自動車道を進む。静かなすきとおるような水面に悦瓶山が雪の衣を写しだしている。水鳥が2～3羽漂よい湖畔での小休止はこの上ない。この頃になると太陽が顔を出し天気回復を喜ぶのもつかの間暑い暑い。500～600m付近から道は雪の中に入る。桑住平の少し手前から大玉山と悦瓶山のコルに出るため両ピークから出た屋根にはさまれた沢すじについた夏道に入る。やっと自動車道から解放される。マッタク広い道はやりきれない。桑住平からは悦瓶山の全姿をとらえる事ができる。青い芽を吹き出した木ずえを通してその白と黒の山肌が美しい。又そのはずれの小さな沢が集中した平らな湿地帯には数えきれない程の水芭蕉が白いガウンをまとい始めている。でもまだ小さい。あと一週間もすれば一面に咲きほこることだろう。人くさくない所がよりすばらしい雰囲気を作っている。コルより少し大玉山よりの尾根にとっつく。雪は太陽のおかげで大きな大きなステップが可能である。稜線は白い雪の上に新緑を重ねるスカイラインが段状に切れた雪庇が出ている。この地方は冬季季節風の作用に顕著にあらわれ偏東横雪という現象がおこる。山稜の東面に豪雪が横もるのである。果して山稜に達してみると雪は今我々の登った側に稜線より張り出しており山稜そのものはイヤな夏道を出している。少々ショック。くずれる心配もなく広さも適当なので張り出した雪面を少しスコップでならしてテント設営。疲労はかなり強かったが眼前に標高差400m余りで視界をさえぎる悦瓶山の頂上をきわめる事に決定。わずか1400m余りの山ではあるが見る者を圧迫する程に感じられた。悦瓶山への稜線は雪の横に夏道が顔を出している。帰りは雪庇に用心しながらできるだけ雪面を下る。往復の所用時間約2時間、強行軍であった。頂上からははてしなく広がる越後の山々が飯豊連峰を地平線に白い世界を展界しているが臨める。飯豊は特に雪が多いようだ。それにひかえ、大朝日岳と思われるピークは書きたくない気分になる。アタック　は黒田OBはじめ4人、竹林Lはテントで夕飯の準備にあたっていた。

4月30日　快晴

4：30起床－6：15出－8：00大玉山山頂－10：20平岩山キャンプ地入口着11：30発－13：00大朝日岳頂上着：15出－小屋まで10分　16：30中岳下の小ピーク着TS　17：00頃まで雪上練習グリセード等。

快晴。昨日悦瓶山々頂より大朝日までの稜線を見せつけられた我々はその大部分が雪のない道であることを覚悟してTSを出る。地元の人の話しでは大いに期待をかけられるべきものであったのに。大玉山への登りは夏道とキックステップの繰り返しである。朝6時だというのに雪はステップが良くきれる。ワンピッチ後アミシャツの上のシャツをぬがざるを得ない。昨日の疲労が残っている。大玉山頂はじめ朝日連峰の山々は頂上が丘の上のようにダダッ広い。山容は大きく感じられ波長の長い波をうっている。谷は深くおちこむ。山に何かを求めるにしろ求めないにしろ、山自身の持つ自然の原始性は、それから遠ざかりつつある人間をひきつけるものを持っているようだ。大王山頂は夏道が消えまた大朝日岳から西朝日岳への稜線まで見わたすことができる。西朝日の方は白い。下りは雪

の斜面をコルまでキツクステップ。快適。その後は平岩山めざして、たまに雪上に出る。しかし温度高く、昨日より２～３度雪庇のおちる音を聞いているため、用心する。平岩山山頂手前のキヤンプ地入口付近で太陽をいっぱいにあびて大休止。時間的余裕もあり、紅茶を沸かすことに決定、あの時のあの味は紅茶の真髄であろう。大朝日岳南西面の登りはまったくの夏山登山である。汗が目にしみる。頂上に雪なし。中岳にかけての東面斜面は予想しがたい程の雪。気をとりなおす。北に眺望がひらけ、はるか月山が白い姿を春霞の中に見せている。広い広い山の中である。どこまでも山がつづく。
小朝日アタックは計画の一つであったが、全々雪をつけていない尾根を見て全く興味を失う。批難されるべき心境ではあろうがまったくこればかりはいいと思う。結局中止。頂上より少し下ると朝日小屋がある小さなヒラヤ建の小屋でしめきってあるためか中はムンとして臭い。長居は無用。この小屋下の斜面は広い尾根で積雪期は何の心配もなく十分雪洞にたえうる。中岳までは雪面をこきみ良く音が続く。テント設営を物色しながら歩く。ほとんどどこにでもはれるのだが好い雪上練習場を近くにもつことも条件の一つである。中岳ピークより少しおりた尾根の東側よりに決める。ハイ松群のそばで、テントの下にハイマツを敷きスパラシイＢｅｄを作る。設営し下の斜面でグリセード、去年の夏の技術が物を言う。雪質も適当に制動がきいて快適。登りがシンドイほど長くトレースを引く。夕日に雪面がはえ数条のトレースがおもしろい。愉快なひととき。テントの外での食事。５人だけの世界である。天気くずれそう。

５月１日　曇　６時すぎより小雨　すぐやむ　強風　１０：００頃より快晴

４：２０起床　５：５０出発－６：２０西朝日岳頂上（雪多し）風強く小雨　雨具着用－８：２５南寒江山ピーク－９：１０三方境－９：４０狐穴小屋

早朝の用タシの際日の出。山で最も良い瞬間の一つであろう。モルゲンローテがやけに赤い。雲多く、くずれるのも時間の問題と思われる。西朝日頂上近くでパラツキはじめるが一応以東岳までは行くことにする。登りの少いなだらかな尾根。ピッチをあげ、きようはトップ石原。田村と一日交代である。ほとんど夏道。きれいな道だ。寒江山登りのころ地形のせいもあって風最も強し。狐穴小屋は稜線からはずれて雪の切れた場所にある小屋に達した頃より西方ガスに穏れはじめる。雪近し。皆が竹林Ｌの顔をうかがう。本日これにて終了話しがわかる。雨がくるまでとさっそくピッケルをにぎってグリセード一すべりするかしない内にザアーと降ってきた。前方に横たわる以東岳もすぐガスに包まれる。あとは小屋内でゴタゴタ。小屋は新しく居住性大いによろしい。

５月２日　晴

３：３０起床－出５：３０－７：４０以東岳頂上出８：００－９：１０大鳥池出合－９：３０対岸の岩小屋着－釣り

昨夜は１２時すぎまで雨と風があったように思う。もちろん出発時は美しいモルゲンローテ予報通り。食糧はあと３日分。予定より少し遅れているためもあり、また大鳥池で十分に時間をとろうと早起き。竹林Ｌの意気込みがちがう。でも少しゆっくり食休みをしすぎた感じ。以東岳へはゆるやかな登り。夏道。積雪があるならすばらしいスロープだ。スキーを使うとおもしろいだろう。やはり東面には雪。月山の少し左よりに鳥海山が美しくかすんでいる。ここから見ると２０００ｍもある山々はなるほど高いような感じがする。孤立峰だけに一層その感が強い。以東頂上より大朝日の方をふりかえればとび石のように丸いピークがおだやかな山並をつらねている。ハイ松の　と雪のコントラストが朝の太陽にはえている。竹林Ｌ期待の大鳥池は三方を白い尾根にとり囲まれ、白一色の世界である。岩魚の宝庫も完全に期待を裏ぎられたかに見えた岩魚はともあれ一同しばし感嘆。我々が昨日泊まる予定だった以東小屋はいっこうに姿を見せない。よく捜せばピーク下の西側の尾根上に屋根だけ見せている。右の小屋中をのぞくと部屋は半分以上雪がつまっていた。今さらに昨日の幸運を思う。下りはしばらく尾根添い

に下ったあと池出合まで長いツリセード。雪より傾斜もよし、スポン破損者続出、それでもやめたくないのが人情というもの。白いオオイをかぶった池を渡れるかどうかは大きな問題である。竹林Lと黒田ＯＢが先に行くがナント氷は１m余もあり、かって記録映画にあるような雪原を思わせる。ヤバイ池横の斜面のトラバースも必要なく楽々と対岸に達する。池のそばに小さな岩小屋がある。石をつみそれをセメントでつないだものだが奥行２m余、幅４mほどもあり５人が横になるには十分である。予定通り岩魚つりを試みる。というのも幸い水門近くの氷かきれている場所があったからである。竹林L持参の釣り道具一式６本の毛ばり数時間の苦闘の末毛ばり６本と引きかえに２０cm余のヤツを２１匹、まずまずというところ。一日中甲ら干し。雪が少なかったとはいえ、せめても少しはイイ色になろうという思いか？尾根からブロックがころげ落ちるのを目撃。雪塊がゴロゴロとブキミな音をたてて斜面を駆ける。スサマジイ岩魚の塩焼きとバター焼の夕餉。シュラフに入って岩小屋間口のスクリーンに展開される池の夕ぐれ、五人だけで見るのはおしい気がする。チラと下界の事が頭をかすめる。最も充されたひとときであろう。

５月３日　晴

４：３０起床一滝見物一６：２５出発一７：４５小沢出合１０：５５自動車道へ出る１４：３０繁岡バス停着

地図上にもあるように七ツ滝という大きな連瀑があるという。見物に行くが時間の制約もあり上部だけみてひきかえす。水量が多いため見どころはある。ブロックに注意しながら谷すじに下山コースをとる。道は出ていない。一応五万分の一地図の点線をたどるコースである。途中、トツブの石原が突然雪の中に消える。ムコウずねをしたたかうったが、笑い話しに終って幸い左岸から右岸へ移る地点ではつり橋は基部だけしかなく、水量も大いため渡渉は不可能。幸い少し下流にスノウブリッジがある。無事通過。夏道に出るため沢から尾根をこすとき、上部で少しブッシュこきをやる。少々手こずったが上で小鳥のさえずりになぐさめられる。トラバースぎみの夏道はときおり雪をかぶっており一瞬田村スリップ、竹林Lがつかみ、また本人もピッケルでとめるが、皆ヒヤリ。雑木林をくぐって下におりる。自動車道に出てホッとする。まだ先は長いというのに。はじめて人に会う。釣人だ。あとは下山の日によくある歩け歩け運動の行進のようなもの。東大鳥川は梓川を思わせるような広い美しい川だ。川ぞいに下る。あたりは春、遅咲きの東北の山ザクラが咲きみだれ、北国特有のこぶしの白が新鮮な趣きをそえる。里ではもう田植えの準備が始まっていた。

（田村　記）

◎烏帽子一東沢一赤牛一霞平（黒部）一高天ケ原新道一三俣一新穂

メンバー　的場　幹史（３回生）L
　　田中　喜樹（３　〃　）SL
　　中岡　和哉（２　〃　）装備係
　　出口　信之（２　〃　）食糧係
　　渡部　　洋（５　〃　）

期間　４２年４月２８日～５月６日

行　動　記　録

４月２８日　雨　七倉９：０５一濁１０：２０一ブナ立取付１１：１５一中休み（２０００m付近）３：１５

雲低く雨のパラつく中を出発。濁では１時雨が上り空が明るくなるが、歩き出すと再び降る取付でしばらく考える。今日は登るのをやめようかとも思ったが、鬼の渡部にニラまれて登る。１７００m付近で一度夏道を見失なった。終日落石の音が濁沢の対岸で聞こえる。落石で引き起された雪崩の音も聞こえた。（夜７時）消灯７時

４月２９日　雨後晴　出発１０：４５◎一ナイブリッジ１２：４５一烏帽子小屋１２：１５◎後①

起床は２時半の予定であったが、田中が起きるとまだ雨が降っていたので５時まで寝てしまった。気温は７℃強で雪崩の音を３回聞く。１０

時の天気図と、現在の様子から今が一番いい状態と判断してガスの中を出発。小屋の中では予想がはずれて、天気回復に大喜びで装備を屋根に干す。消灯8時。

4月30日　快晴　出発5：00－三岳三角点6：05－三ツ岳7：20－ジャンクション7：30－東沢10：45－TS11：45

出発してワンピッチの所でラジオを聞く。三ツ岳トラバースは雪が硬く、又岩や氷も有っていやらしい。三ツ岳から東沢への尾根は2800mから左へ下る方を使ったが、2300mを過ぎると急になる。樹林の中の急斜面は時々もぐっていやらしい。2300mの台地は十分なTSとなる。2200m位から迷いやすい広い斜面となる。右手へ尾根状の所を下ると支沢へ下ってしまう。左の方へトラバース気味に下り「東沢」の沢の字の所の支沢の岸にそって下るといい。TSは「東」の字の所の沢の出合の少し下流。　TS1：30－一の沢の手前2：45－赤牛側の支沢を登る3：30－TS4：25（的場、出口）

時間があるので散歩に2人で出る。東沢は主な沢は余りデブリはなく、小さなルンゼや沢からのが目につく。1724mの独標の下まで行って引き返す。「東」の字の少し下流から赤牛へ上っている沢を登ると、出合より80m～100m位登ると連瀑らしい所がある。途中ゴルジュ帯が30～40mある。消灯6時

5月1日　曇　沈澱

ポンチョ2枚でフライ代りにしているものの終日の雨でテントの中は居住性悪し、日本海上部の低気圧と南西にのびた前線に伴う深い気圧の谷。かなり荒れそうに思う。動けないことはないが、夏道の無い尾根でもあるし、大事をとって沈とする。

5月2日　晴　出発5：10－2200mの台地7：40－2740mの北東尾根9：50－ピーク12：20－霞平2：50

11月のササのブッシュは雪の下。グングン登る。北東尾根上部はやせていて、雪庇が口元のタル沢へ出ていやらしい。ザイルを2本用いて150mに2時間位かかった。北西尾根は雪が少く岩がゴロゴロ出ている。2479mのピークへの下りはキックステップで難なく通過。残雪多く霞平へは楽に入れた。霞平は北アルプスの秘境。グランドを思わせる水平な高原。薬師の大カール群を目の前にする壮観は素晴らしい。黒部が深くまだ朝の眠りに沈んでいる時に薬師は朝日に金色に輝やくのである。

5月3日

Party I 的場、中岡

CS5：05－2210mのピーク5：25－1900m台地5：55－高天ケ原新道6：30－口元のタル沢出合7：05～8：05－高天ケ原新道8：30～8：45－地図の「上の廊下」「上」の字の対岸10：00－河原に下降10：15－スゴ沢出合11：30－CS13：50

予定通り5：00に出発、2210mのピークを下り出してからアイゼンをつける。尾根は急緩が交互に現われる傾斜で樹林の中を下る。11月にはものすごいササのブッシュで苦労した所だ。口元のタル沢側の方が急で又支尾根も出ている。1900m位から尾根は細くなってくる。この付近の黒部側はテントが数張はれる台地がある。高天ケ原新道は雪がなくすぐにわかった。口元のタル沢出合迄は、やせた尾根を注意して下る。出合は対岸の沢からのデブリが10m位も積っているが、黒部本流は完全に出ている。上流のトロにはほとんど雪はない。昨年夏とは状態がまるでちがっている。深いトロだった所は白く泡立っている。河原に下りようといろいろさがしてみるがケンスイで降る以外に方法はない。口元のタル沢はすぐに雪が割れたゴルジュの滝が出てのぼれない。あきらめて高天ケ原新道ぞいにトラバースをする。残雪が出る度に道を見失い苦労する。踏跡程度の道でみつけにくい。「上の廊下」の「上」の字の辺で河原に降れる。河原へつき出した半島状の所である。テントも張れるが後ろからの雪崩に注意がいる。夏の新道の下降点より河原に立ち右岸をいく。ここからは上の廊下の中でもかなり広い河原がつづく。廊下沢出合は以外に小さく又荒れていて雪は少い。一般に黒部にそそぐ

小沢や急斜面は全部といっていい位デブリが出ているのでロウカ沢のように出口の小さい沢はついみのがしてしまう。二度程岩壁のヘツリをやったがあとは大体雪の上を歩ける。スコ沢は出合から小滝がみえる。中のタル沢は完全にうまっている。中のタル沢近くの大きなガレ場ではテント程のBlue Iceのスノーブロックが河岸におちてきていた。

（的　場　記）

PartyⅡ　田中、出口、渡部OB

CS5：00一霞平南方の沢第3の分岐点5：00（2000m）一沢出合6：25一水面7：00一屈曲点のテント予定地7：40～8：00一屈曲点尾根（1950m）8：25一金作谷上流の沢下降点9：30一出合（滝有り）10：20一金作谷出合（11：45～12：40）一霞平下台地13：40一CS14：25

霞平の丸山と北西尾根との平坦地のCSより南に向っていき、南方の沢にそって下降開始、久しぶりのサブだったのでグングン下っていく。だんだんと沢は深くなり又早朝の為雪がかたいのであろう3pitch目位よりアイゼンをつける。なんだかなるい沢そなあと思っているうちに出合付近で急に沢が切れていて滝状となる。アップサイレンで下れるかなあと思ってピンをさがすがみつからず又下の状態もわからないので、この沢をおりることは断念して少し上流にのぼり雪のつまっている支沢をつめて尾根に出て、そこを少し歩いて滝やガレの所をトラバース切味に下っていくと90°屈曲点の少し下流に出て待望の黒部におりたつ。このような季節に何人このような景色をみているだろうかと思うとなんだかたのしくなる。そこから上流にむかって雪崩が水にけづられたような90°位の所をつたっていくと90°屈曲点に達して、そこから少し岩をのぼり90°屈曲点の少し上流のテント予定地につく。その上流500m位に川から50m位上になかなかよきテント地がみえた。そこをパックに渡部氏が岩の上にてポースをとる。写真をとり終ってから帰ってくる時、のっていた1m×0.3m位の岩がくづれて黒部の川にしずんだ。その時はほんとにびっくりした。テント予定地で休息ののちそこから尾根をのぼり始める。約100m位上にもなかなかよきテント地あり。朝日のあたるあつい中を汗をかきかき東にむかってのぼっていき2000～2100m位より朝下った沢の支沢にはいり北にむかって行進開始。てきとうに雪がくさっていて、グリセードを少しばかりやるがつまづきそうでうまくいかない。尾根を2つばかりこして金作谷上流の沢に入りグリセードでぐんぐんとばしていくが末端にいたって又もや滝が出現して金作谷を目の前にして涙をのんで大休止ののち出発する。これも少しのぼって支沢をつめる。五月はあの赤牛特有の笹が雪の下にうまっていて秋の様なつらさを味わわなくてもよいがやはり暑さで体がバテル、がしかしステップがさだまるから楽である。いたる所にカモシカのフンがある。沢をつめてから霞平の西の台地の辺から金作の少し下流をめがけて下り始めるが途中より尾根が切れてなんだかその辺一帯が急斜面になっている。ブッシュをこいで岩をトラバースしたりしてやっとの思いで金作の少し下流に出てうれしい。やはり金作からのナダレはすごいようだ。先輩がスターリン戦車でも通れるといったあのスノーブリッジは連休前の連日の雨の為か、今や半分もかけていて旧日本軍の戦車が通れる位だ。少し上流にもきれいなスノーブリッジがかかっている。この辺一帯はナダレの巣のようだ。写真をとってのち地図で金作谷より500m位下流の沢をのぼろうと決心して末端付近にて滝がでているので200m程上流をのぼり滝の上に出る。あついなかをのぼっていくうちにガソリンが切れてきて霞平の下の段の所で三人ともバテバテになってしばし休けいしてチョコレートを出してたべて元気をつけてやっとの思いでテントにつく。今日の収かくは以上と、それに出口のカワイコチャンの名前がわかり口止メ料としてようかんを1本金作谷出合にてたべた。うまかった。（田中記）

5月4日　partyⅠ的場、中岡

CS5：35一金作谷出合6：30一金作下流の赤牛側の沢の出合7：00一金作上流の草

付トラバース７：３０～８：４５－１９００ｍ９：５５－ニセ赤牛沢１１：３５－ＣＳ１４：００

昨日田中のｐａｒｔｙが登った沢を使って簡単に河原に立つ。金作の下流、最初の屈曲点より下流は両岸が１００ｍもある程の立壁で途中に不安定な雪がへばりついている。屈曲点にそそぐ沢は薬師側からのものはスノーブリッジを黒部にかけ、又赤牛側の沢もデブリを出している。右岸からはどうしても先へ進めない。又スノーブリッジも対岸が岩壁の為に使えない。上の黒ビンガをみるのはあきらめて引き返す。金作出合は広い段丘だが雪崩のあともみえる。出合のスノーブリッジは半分くずれているが使える。その上にももう１つスノーブリッジがある。右岸通しトロの上の草付をトラバースする。ササのブッシュをこいで１時間以上進むが次の屈曲点迄の半分３００ｍ位しか進めない。ブッシュが切れ、草付のスラブ気味の所が出てきたのを機会に急なルンゼを登って霞平の方へ引き返す。雪が硬く、アイゼンをつけカッテイングを行った。１９００位迄登ると平らになった。時間があまったので明日の帰路の為に半分雪にうまった高天ケ原新道をさがしトレースとナタ目をつけた。（的場記）

ｐａｒｔｙⅡ　田中、出口、渡部ＯＢ

ＳＴ５：３０－中ノタル沢東尾根（２０００ｍ）６：００－スゴ沢出合６：５０～７：０５－上の黒ビンガ下流７：３０－中ノタル沢西尾根末端台地８：００～８：２０－霞平下段（２１００ｍ）９：２０－ＣＳ９：３５

昨日の的場のトレースぞいにいく、上部は段々がつづき又広い尾根の為まよいやすい。しかししばらくいくうちに尾根も細くなり、ちょっと中ノタル沢ぞいにトラバースをして下っていき、少しブッシュをこいで中ノタル沢出合の５０ｍ位程上につく。約１時間２０分程にて。途中対岸（中ノタル沢）に絶好のテント地をみつける。スゴ沢出合で休けいののち上流に向って右岸通しにいくが上ノ黒ビンガの屈曲点が５００ｍ位先にみえる位になってやばくなって引き返す。スゴ沢出合の少し上のトロの水は緑色だ。感激した。下降の途中にみつけたテント地で休けいしてボツクラボツクラ中ノタル沢をのぼり出す。約１時間半程にてつめてしまって、昨日のつかれの体をひいこらひいこらいいながら、ＣＳにつく。あとは日なたボッコをする。エアーマットをひいて、薬師を横目でみながら「ここは高級避暑地だなあ」といいながら甲羅ぼしをする。大変きもちがよく、いつのまにかねてしまった。

（田　中　記）

１　テント地及びひなん地について

イ、東沢出合はみていないが十分にはれると思う。

ロ、口元のタル沢の上の段のテント地は対岸からの表層ナダレがこわい。赤牛側からのなだれは心配する必要がないと思う。確実なテント地は１８５０ｍの樹林の中の台地。

ハ、中ノタル沢の左岸の末端ちかくの台地がある。確実性あり対岸の間山からおりている沢の右岸の右手の岩棚がひなん地となる。

ニ、金作谷出合は赤牛側からのなだれがこわいと思う。テントを張る場所は平坦であるがそこ以外には霞平近くにあがらねばならない。１９００ｍ位迄

ホ、９０°屈曲点

屈曲点より上流約５０ｍ程先の赤牛側によい台地があり又その上流５００ｍ位で水面より５０ｍ位によきテント地有り。

５月５日　晴

出発６：０５－ニセ赤牛沢７：４０－高天ケ原１１：００－祖父岳とのコル２：１５－三俣小屋３：３５

昨日高天ケ原新道を見つけておいたので今日は快調にとばす。黒部の河岸段丘上を薬師の景色を楽しみながら軽くなったザックでピッチが上る。高天ケ原は雪の下だ。水晶のなつかしい稜線も白く美くしい。高天ケ原をすぎる頃から全員バテ気味だ。反射炉の底のような岩苔小谷の暑さは体力をしぼり取られるようだ。岩苔乗

越は雪庇が出て急になっている。バテたパーティはのろのろと少しも進まない。源流は尻セイドウで一気に下る。しかし雪がくさり、思ったより緩傾斜の為すぐ動かなくなる。三俣小屋に入り鷲羽や槍の見慣れた景色を見ていると、これでこの山行も無事に終りそうだという気がして肩の荷が下りた感がする。

5月6日　高曇り

出発6：10－双六小屋8：20－弓折岳9：30－丈ノマ沢出合10：00－左俣出合10：40－新穂　2：10

三俣からはトラバースして双六へ向う。トレースは使わないことにする。双六から弓折のトラバースは雪硬くスリップしそうになる。その内に雪はくさって来て、大ノマ沢への尻セイドウは快調である。巌平への尾根から大ノマ沢本谷へ下っている支沢を下る。下部はすごいデブリのあとで歩きにくい。左俣谷からは雪もめっきり減る。チョウが飛び、フキのトウもあちこちに花を開いている。雪をはねのけて、立木が起き上る。里はもう初夏なのだ。最後に雪どけの左俣谷で全員スブ濡れになっての渡渉を強いられた。ザイルを張ったが流された。

（的　場　記）

（付記）

観天望気記録No2.

気象係　出口

28日

6：00車中

層積雲、切れ間から青空　雲底に明暗あり

8：00　大町

層雲　明暗うすくなる。切れ目なくなる。

以後雨

9：00

小雨

10：00　濁

一時的に雨止む　空割合明るし

29日

5：00　三角点下（中休み）

小雨

7：00　左同

小雨，落石and　雪崩の音響く。

10：45　出発

小雨（非常に弱い）

11：15　雨止む（ガス）

13：15　明るくなる（太陽出る）

13：45　高曇り

14：10　烏帽子小屋

雲が切れて青空見える。

16：00　小屋

積雲（薬師、赤牛方面）西方絣雲

19：00

快晴、黒部川、木挽山に積雪　夕焼け

30日

5：00　小屋

晴　上空羽毛状絹雲

5：30

東方羽毛状絹雲、西方絹層雲らしきもの

南方絹雲

6：05　三ツ岳三角点

西方絹層雲広がる

7：30　三ツ岳尾根

西方に　　した波状絹雲

7：40　波状絹雲くずれる。

8：05　三ツ岳尾根

上空に所々絹積雲　北方絹雲

11：45　東沢　快晴

14：00　北西に収束する絹層雲（絹雲）

14：30　絹層雲広がる

15：30　上空絹層雲and絹積雲

17：50　高積雲（いわし雲）

1日

5：00　東沢　曇天（本曇り）以後雨

6：00　小雨

18：00　雨止む（層雲　不均一）

23：30　快晴　星がきらめく　温度降下（－1℃）雪の風化はなはだし

2日

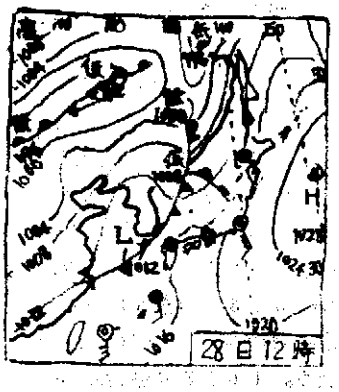
5：10　晴　層雲所々浮ぶ

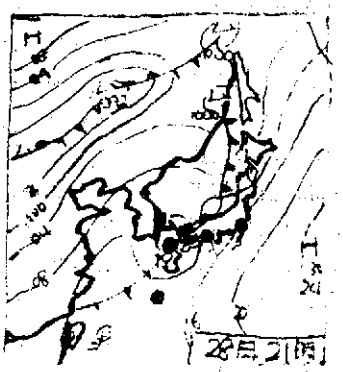
6：25　赤牛東尾根　北方に絹雲

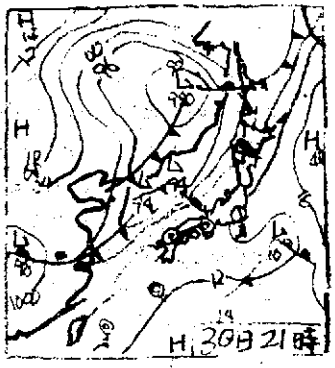
7：30　東尾根　上空絹雲

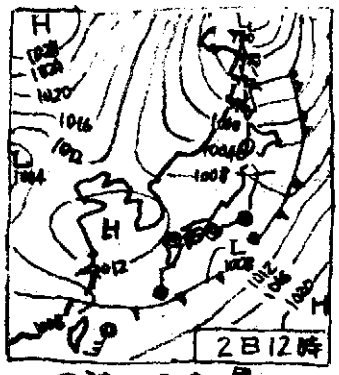
12：00　北東尾根　絹層雲広がる。

１５：００　かすみ平
上空絹層雲（日本海側晴れる）
３日　霞平
５：３０　西方に収束する絹雲
６：２５　絹雲→絹層雲
７：４０　所々絹雲
１１：４５　金作台出合
南方絹層雲、北方絹雲
１３：４０　絹層雲切れる。南方に収束
１４：２５　絹積雲
１５：３０　高積雲（西方に積雲）
１７：００　積雲
１８：３０　ガスつて来る。
４日
５：３０　快晴、黒部川ガス
６：００　快晴、ガス切れる。
６：５０　快晴　以後快晴
１１：００　晴、薬師側に積雲出る。
１２：００　積雲広がる。
１３：３０　晴　積雲飛ぶ
１４：３０　ガスって来る。
１６：１０　ガス切れる。積雲飛ぶ
５日
６：００　かすみ平　晴　北方、南方絹雲
７：００　晴　南方絹層雲
７：３５　晴　所々に絹雲
１０：２０　高天ヶ原　西方絹雲
１０：５５　高天ヶ原　北方羽毛状絹雲
１２：００　水晶池　上空絹雲、西方絹層雲
１４：１０　祖父東コル　西方絹層雲広がる
１５：１５　高曇り
６日
６：１０　西方絹雲
８：１５　双六小屋　高積雲
９：３０　弓折頂上　高積雲消える
１０：１０　大ノマ沢　南方に収束する高層雲
１６：３０　バス中　うす曇り
１８：２０　汽車中　小雨

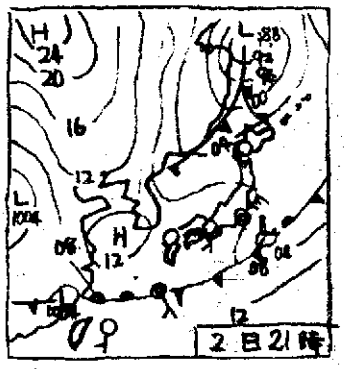




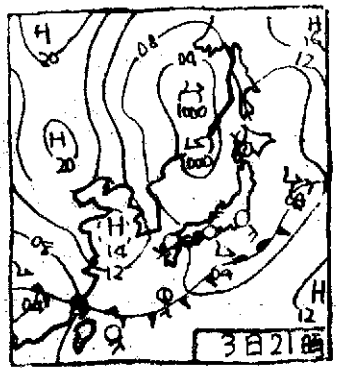




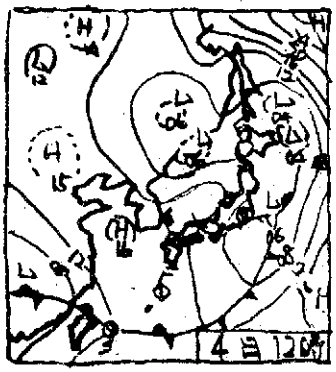
フジ -2.0 曇 (正午)

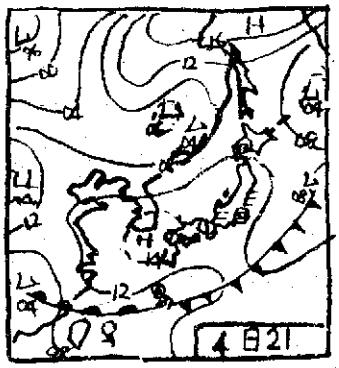


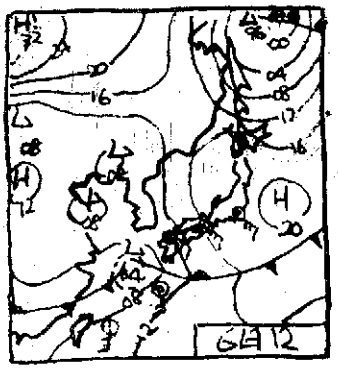
フジ



フジ







新人山行

昭和42年4月29日～5月2日

参加　石浜OB、加藤OB、稲垣、大西、小山
　　寒川、黒岩、中川

4月29日　曇

大阪駅→彦根→高ノ宮→多賀→佐目→鞍掛峠下

朝8：30大阪駅中央口に集合する。初めての山行のことでもあるし期待と不安（？）を胸にだいて・・・。連絡の手ちがいからか、大西寒川、稲垣、黒岩、中川の5名米原行快速電車を求めてホームを行ったり来たり。9時頃加藤先輩来る。9：37駅発。休日のことでもあるし、ハイキングとか、家族づれが目立つもラッシュほどにはあらず京都までに全員座ることができた。彦根で石浜OB小山と合流す。12：05多賀着バスの時間まで2時間ある。昼食の後、あたりをぶらつく。縁結びだとかいう多賀神社あり。2：20バスで佐目着4ピッチで鞍掛峠に到る。4：30河原に設営。食事後たき火を囲んで自己紹介や先輩の話を聞く。テントには石浜OB、小山、寒川、稲垣と加藤先輩、大西、中川、黒岩のグループに分かれる。石浜OBの歌声がおそくまであたりのしじまをやぶっていた。夜空には星がですぎていた。

4月30日　曇　霧

鞍掛峠→口の平→鈴北岳→白瀬峠→天狗岩→藤原岳→治田峠

5：30起床　朝食後7：30出発　設営地から5分も行かないところから鞍掛峠への道をそれて、口の平に向う。昨日はふつうの道だったが今日から山道に入る。9：10口の平着、チョコレートを食う。9：30歩きはじめて約10分後鈴北岳通過。真の谷を下って行く。途中2パーティーに会う。10：30昼食の休けいラジウスを出して紅茶をのむ。11：30再び歩きはじめる。1143メートルの標高をす

ぎてから天狗岩までの道ははっきりしない。ひき返して来た登山者といっしょに前進。石浜、加藤両先輩道を捜す。天狗岩のすぐそばであった。天狗岩で少し休止天気であれば、とくやまれる。３：３０藤原岳山荘につく。先程の登山者はどこかに下りたのかもういなかった。ますますガスってくる。今日の設営地はどこなのかと思いながら歩きはじめる。藤原岳の展望台をすぎるとガクンとくるような下り。腹の減った頃でスリップするものも出る。先輩の石浜ＯＢスイスイと下る。５：３０頃加藤先輩テントを張れそうな所を見つけるも、治田峠まで行くことになる。治田峠設営６：００食事はテントでと。加藤先輩、黒岩、中川水をくみに行く。かなりきつい坂。今夜は石浜ＯＢ、稲垣、中川、黒岩と加藤、大西、小山、寒川のグループ両方のテントとも、おそくまで先輩の体験談を聞く。

５月１日　雨のち晴のち雨

治田峠→竜ガ岳→石榑峠→愛知川支流に下る。

５：３０起床　雨が降っている。初めて雨具を使用、道はササやぶ同然、２時間いくと雨もあがり、霧もはれてくる。行く手には竜ガ岳の道が後には今まで歩いていた山々　１０：３０竜ガ岳山頂着昼食フランスパン、すぐ後から女性３人男性３人のＰａｒｔｙがくる。その女性の１人の休息すがた、石浜ＯＢイワク「ウンチングスタイルや」一同ニヤニヤしながらパンととっくむ。竜ガ岳から下りはじめる（１１：０５）下界へと。石榑峠で再びガスってくる。雨にならず沢ずたいの気持の良い道は２ヒッチいった所で雨がポツリポツリ。石浜ＯＢ自称優雅なコウモリガサを出す。雨がだんだんはげしくなり再び雨具。急にけわしくなる。両先輩道をさがす、１０分位後に引きかえす。炭焼小屋の後にテントを張る。（２：３０）夕方に向って雨もやんでくる。夜一方のテントでは加藤先輩、小山、稲垣、中川、寒川の５人、トランプの熱戦。一方では大西、黒岩、石浜ＯＢの話しを聞く。

５月２日　快晴

愛知川支流の上流→愛知川ダム→永源寺→八日市駅→大阪駅

６：３０起床、ゆっくりして８：５０出発、１ヒッチで大きな車の通れそうな道に出る。２０分位歩くと山の方からダンプカーがおりてくる。運よくのせてもらう。（杠葉尾→永源寺）途中愛知川ダムを見る。永源寺で石浜ＯＢさきにかえる。のこりの７人永源寺で昼食。１２：１５バスにのり３０分で八日市駅。電車はすいていた。３時大阪着　解散。

1967年度 夏山合宿

夏山合宿を振り返つて

今合宿は大した怪我無く終えたものの、問題点を多く残した。しかし、終った今、我々現役はベストを尽したと感じる事も又否めないだろう。

例年と違って、3年部員がリーダーシップを執って行ったわけであるが、それが故に頑張たところもあり、又、至らなかった点も多々あった。

一体、苟しくも、リーダーシップを執る者は甘えてはならない。こういう気持で今合宿を行った。

まず、反省すべき今後に問題点を残した事柄をあげよう。第1に、大事に至らなかったとはいえ、スリップ事故を3件、ハーケンが抜けた事によって惹起された墜落事故1件と例年より多い。前者は本人の不注意によるものと思われるが、後者は岩登りにおける基本（ハーケンを打ち込んだ後の確め等）を無視したこと、特に事故を起した者はリーダーグループの一員である事などを考えると、この事故のもつ意味は大きいと思う。

第2に縦走における新人2Party共に途中で下山した事は今までの新人教育及びリーダーシップの執り方に関る事だけに上級生グループは更にリーダーシップの研さんに励まねばならない。

第3に、第2のそれと関係ある事だが、1年生に不満が多かったことである。1年生は先ずやるべき事を行って後に言うべき事を言うことだ。又、上級生も毅然とした態度で新人に望むべきだろう。

その他個人々々種々反省すべき点があるだろうと思う。

しかし、反省すべき点もあったが、千丈沢をBCにした北鎌側稜の各ゲビートは我々に岩登りの楽しみを、そして縦走では山の良さの一部を教えてくれた。

全体に千丈沢での夏合宿は雪が少ないという点を除けば、静かで伸び伸びとした岩登りが楽しめる。ちなみに定地合宿前半　千丈沢はほとんど我部だけで後半になって2.3のParty.がやってきたにすぎない。

もっとも大してバリエーションルートはとれないような気がした。いわゆるクラッシックルートは、3年部員では、物足りなかったが、2年部員や新人には手頃だろう。

縦走において新人Partyは完遂出来なかった事は前に述べたが、黒部上廊下の2Partyはその遡行を通じて黒部に又、一歩近ずいたであろう。残念なのは石原が合宿中に盲腸に罹り笠東面と柳又谷の両Partyが出発出来なかった事である。

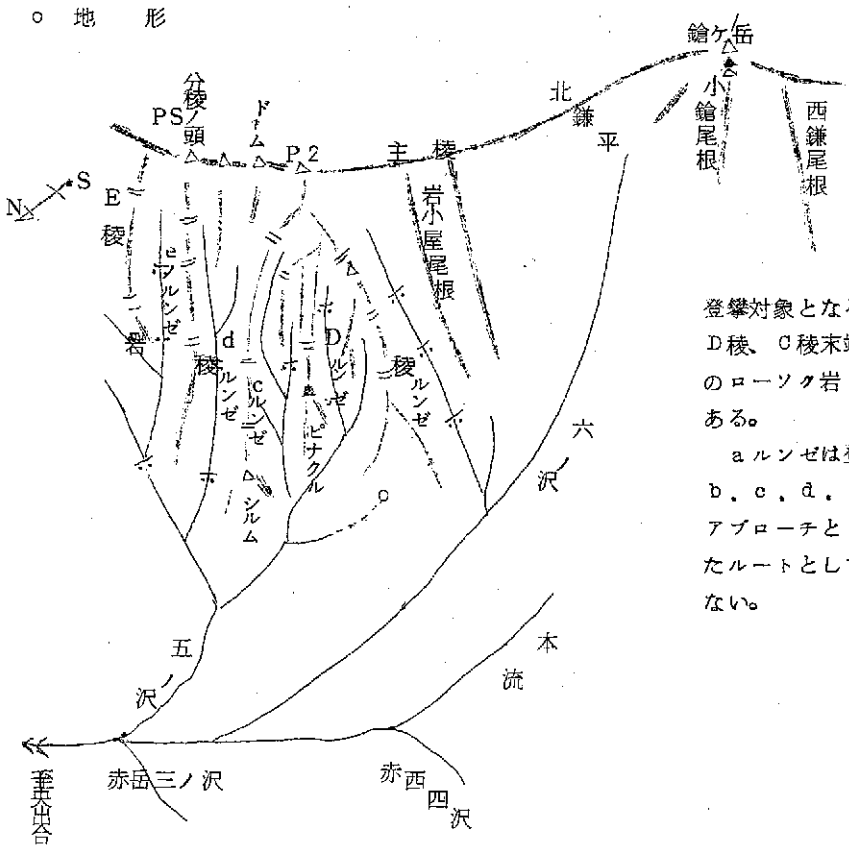
最後に今合宿に参加して下さったOB諸兄には、色々なアドバイス、石原の盲腸発病に際して、大してあわてずに済んだ事等大変御世話になった事、有難う御座居ました。

我々現役は、この合宿を経験した事によって更に次のステップへと進んで行こう。Berg Heil !

C.L.　　甲田　吉彦

槍ケ岳北鎌尾根

○ 地　形



登攀対象となるのはA，B，C，D稜、C稜末端ツルム、E稜末端のローソク岩（岡大仮称）などである。

aルンゼは登攀終了後の下降路b，c，d，eルンゼは各稜へのアプローチとして以外には独立したルートとしてとりあげる価値はない。

○ 特　色

千丈沢側の岩場の特色は明かるく開放的なことである。これは千丈沢上部はひろびろと拡がり周囲の山腹の傾斜がゆるいこと、また四、五六ノ沢などは本流への出合付近は沢というほど深く切れ込んでおらず広いブーロ状の押出しとなっていることなどの理由によるためであろう。このためこの地域における岩登りには威圧感やすごみはない反面あくまでものびのびとした登攀を楽しむことができる。

岩稜の高距は下部のBush　帯を除いて１００ｍ－２００ｍくらいである。岩質は堅く、概して順層で、ハーケンもよくきく。スケールはさほどなくビッグクライムを期待することはできないが部分的には困難なところが多く中級者にふさわしいゲレートであると言える。

今合宿の成果

今合宿に於て、雪上訓練、槍ケ岳往復以外のトレースは下記の通りである。

北鎌主稜
　千天出合－下半－独標沢
　独標沢－上半－槍ケ岳
北鎌側稜
　岩小屋尾根
　A稜
　A稜側稜
　B稜
　C稜
　C稜ツルム（正面壁側壁）
　D稜
硫黄尾根

中山沢ー赤岳ー赤岳３の沢

硫黄岳

小　槍

小槍一般ルート（北面境界リッジ）

南面トラバースルート

千丈沢ー天上沢ー槍ケ岳ー千丈沢（ラウンド）

メンバー

３年甲田（ＣＬ）　的場（ＳＬ）　山田（装備）

田中（食料）　竹林（記録）　岡田

２年中岡（医療）　出口（気象）　松林

石原　田村

１年稲垣　黒岩　大西　中川　寒川　池田

特別参加

渡部（５年理）　黒田（５年医）　細川（５年工）　糸井（ＯＢ）　石浜（ＯＢ）

行　動　概　要

７月１５日　先発３名大阪出発、昼汽車にて夜、大町バス待合所に寝る。

１６日

濁より第５発電所まで軌道使用。第５発電所より縦走用食料など約２７０Ｋの荷物をトリプルボッカで湯股に集結。テントを張り終ったのは、夜９時頃だった。夜本隊大阪出発。

１７日

先発　湯股→千丈沢→槍平。

本隊　新穂高温泉→槍平

先発は千丈沢でＢＣ地を確保する。

本隊は人によっては５０Ｋｇのボッカを強いられた。過労の為か、新人１名発熱、槍平小屋に収容。

１８日　槍平→千丈沢

但し昨日発熱した新人はもう１日様子を見る為に小屋に残る。

１９日　晴　雪上訓練

遅れ　　千丈沢入山。

２０日　晴　岩登り。

２１日晴　雪上練習後槍登頂

２２日晴後雨　岩登り。　石原盲腸炎

２３日快晴　石原下山のため停滞

２４日快晴　雪上訓練

２５日快晴　岩登り

２６日快晴　岩登り

２７日快晴　岩登り

２８日快晴　撤収　撤収隊　ＢＣ一槍平

２９日快晴　縦走出発

撤収隊　槍平一新穂　撤収完了

個　人　行　動　表

	1	2	3	4	5
A稜		竹林黒田中川	山田中岡大西	甲田石浜稲垣	
A稜側稜	竹林石原				
B稜			細川松林		渡部出口
ツルムC稜連続	細川田中	甲田石原	的場出口	渡部田村	岡田中岡
ツルム		渡部出口寒川			
D稜		山田松林	黒田岡田	田中中岡	甲田竹林
小槍	甲田田村黒岩		渡部竹林寒川	山田岡田	
小槍尾根	岡田出口	的場田村		細川的場松林中川黒田田中稲垣	
硫黄岳			甲田田村池田		
赤　岳	的場松林大西				
下　半		細川田中石浜黒岩			
上　半		岡田中岡稲垣	田中石浜細川中川		山田松林大西池田
Round	山田中岡寒川中川			竹林出口池田黒岩	
南　岳				細川寒川	
				細川	的場田村黒岩

合宿ノートより

赤岳　的場　松林　大西

7月20日

5：30出発　6：15中山沢出合。6：35雪渓スタスタ　7：00コル真近　雪渓消失。ガスの間に奇妙に赤黒い岩峰群が見える。7：38全てが浮石。赤黒い岩、緑が恋しい。8：00やっと主稜線と思ったら1の沢と2の沢の間の尾根に出ていた。ここからザイルを出した。9：104ピッチのザイルピッチで主稜線に出る。何ともはや面白くないガラ場登り。9：25　2の沢の頭（Ⅱ峰）に立つ。カラカラに干いた岩の山、尾根は小さな岩峰の連続で完全に尾根通しで行く、トラバース不可。11：05Ⅲ峰に立つ、ここが赤岳の最高峰。3時間余りザイルをつけっぱなしだがⅢ峰より、3の沢へ下降も、まだ急斜面の下降であり、ザイルを解けない。12時ザイルを解く、やっと、ほっとして前を見ると、ツルムやA稜が目にとびこんできた。BC着に15。トップに立った松林氏曰く「落石するとセカンドに当るので、それに気を使った。トップはよほど気をつけて登らねばならない。

こんなにカラカラの岩山であっても美しい花は咲く、日だまりに咲く、白いチングルマ、そして可愛いツガザクラ。（的場）

D稜　岡田　黒田

7月25日

7：20ガリー下。リッジへ出て尖岩まで急なブッシュの中を行くが踏み跡がきれいについている。尖岩からザイルをつける。1ピッチ、岡田右手へトラバースぎみに洞穴の下へ2ピッチ黒田。第4ケルン　右手のフェイスをさらに2ピッチ　このフェイスの上部が快適だった。登はんは大体これで終了　10：20　B，C 3：40。（岡田）

天上沢　山田、中岡、中川、寒川

7月20日

出発(5：35)ー千丈出合（7：35）ー北鎌沢出合（9：05）ー天上沢雪渓入口（10：05）ー東鎌稜線（13：47）ー槍肩（14：20～14：50）ー千丈沢乗越（15：30）ーBC着（16：10）

千丈沢を下る。宮田新道は高まきが多いので河原をつたうが次第に道どうりになる。露多くベタベタ。千天出合まで2時間消費。少々時間がかゝる。天上沢に入って問題の丸木橋は干いており、すんなりと行く。天上沢は東沢谷の雰囲気。北鎌沢出合手前より広い河原になる。東鎌の稜線はガスってよく見えないが、雪の一番多い沢に入る。（槍ケ岳につき上げている沢、天上沢本流？）広さは長次郎なみだが、開けていて明るい。左側にルートをとりヒュッテ大槍めざす。沢はだんだん急になって平蔵もしくはそれら以上の傾斜があり、少々しんどいとは思ったが、一年をトップにして歩かす。時々ステップをくずしてヒヤリとさせるが、ただそれだけ。雪渓の切れたところからガレ場に入り岩峰の基部で休憩。岩峰は右側を登るBushを使って行くが、途中1ケ所ザイルを出す。あとはBushをこいですぐ縦走路へ。縦走路からは少々ペースが落ちる。千丈沢はガスって見えないので千丈乗越にまわって下る。変化もあって美しい。特に2時間ほど雪渓の上を歩くので新人には良い。（山田記）

C稜ツルム正面壁ーC稜　田中　細川

7月20日

出発5：35　ツルム取付6：40　取付出発7：30　ツルム頂上10：30　尾根12：40　Aルンゼつめ13：30　Aルンゼ取付14：30　B，C15：20

B稜Partyと途中で一緒になり6の沢より5の沢への間道をつめる。この間道は6の沢を15分～20分つめて左側をみると赤旗があるので判る。ガスの中を約1時間程でツルムの末端に着く。そこで1時間程時間待ちして（ガスと岩がぬれているため）しぶしぶ出発。ツルムはガイドブックに書いてあるルートをとる。ブッシュが多くぬれることといちじるしい。岩登りらしい所は上のトラバースとツルムの上部のみ。C稜の下半部はナイフリッジの連続でブッシュが多くコンティニュアスで行く。このナイフリ

ッジの消える所にコル（Cルンゼ）があり、そこからDルンゼのガレている所をつめる。途中で竹林Partyに合い、尾根に出る。そして休憩の後Aルンゼを下る。ガラガラで何時ねんざするかと思いながら約1時間で下る。6の沢で冬天のボールをひろって持って帰る。朝、小槍へいったPartyがみつけておいたものだった。重いのに持って帰ってあほらしかった。
（記田中）
（感　想）　C稜及びツルムはあまりブッシュが多くてあまり面白く無いことおびただしい。

小槍　　甲田　田村　黒岩
7月20
小槍取付まで、小槍尾根Partyと同じ。取付9：40
甲田トップで、ほぼリッジ通し（曾孫とのコルの続き）途中1ケ所カラビナを通し、25m位で中間テラス。岩は硬くホールドも充分。槍北面の谷への高度感はすごい。ガスの切れ間に見えかくれする。雪渓、ガラ場、ガスで陰さんだ。しかし簡単であるが、ゲレンデで味わえない、充実感がある。2P目は田村トップ。残り15m程をいとも簡単に登る。終了10：40きっちり1時間の登はんだ。感想としては、高度、距離に乏しいが、新人向で快適なクライムを味わえる。傾斜は1P目強し。後はガラ場をつめて、大槍の一般路に出る。小槍尾根Partyと一緒に帰る。15：10帰幕（甲田記）
P8下降路として岩小屋沢は新人には無理。上級生なら可だが、千丈沢乗越経由の方が早い。小槍Partyは曾孫も登ると面白い。
（甲田）

A稜剣稜　　竹林、石原
7月20日
Time　C．S出発5：30－ツルムFG6：40－BCルンゼジャンクション9：35－B稜取付11：45－1ピッチ半－クライミングダウン－B稜取付点12：15－稜線13：00－aルンゼのコル13：20－槍の肩14：20－TS16：00
岩登りに要する時間は短いだろうという予想で、休憩時間を十分に取りツルム下まで2ピッチ少し。ツルムのルートを偵察する。ここでツルムパーティと別れてCルンゼをつめる。途中bルンゼとの出合がなかなか判らない。雪渓のついた2股の所もbルンゼとの出合とみて竹林氏が偵察に行くが確証なく引返す。結局cルンゼをつめてB稜ピナクル上のジャンクションに出る。途中一ケ所チョックストンをアブミを使って乗越す。ここで昼めし。そこは谷壁千枚がビョーブの様に立ち並んでいる。中央の正面壁をB稜とみてスケッチをしながらルートを決める。後で判ったのだが僕達がB稜と思って取付いたのはA稜側壁であった。従ってそのルートはA稜側壁について述ることになる。
始め、右斜にスカイ・ラインをリッチ通しにピークに出る様登り始めた。竹林氏トップでアブミ3個使ってルートよりはずれて直登する。小さな草付きでビレー，直登を決めて8m位上のハング下のテラスに行く事にする。ここでトップを交代するが4m位で行きづまり。草付きテラスまでクライミングダウン、そこからアップザイレンで下まで降りる。そしてCルンゼをつめC稜ルンゼPartyと一緒にaルンゼコルまでゆき大槍経由で帰る。途中槍肩でラウンドPartyと会う。
（石原）

小槍尾根　　岡田、出口
7月20日
アプローチは6の沢をつめ、右手の沢を入り、肩の小屋の近くに出る。小槍はガスっている。取付9：30　出口トップで第1チムニー直下から取りつくが、えらくて、その上ハングさげてとてもむり。トップをかわって右手のリッジぞいに登りトラバースして第1チムニーへ入る。チムニー内でジッ　　。次は出口のピッチで小槍の上。10：40終了。11：00オンスイ。甲田らのパーティーと行動を共にする。手間どってケンスイが終ったのは12：20。すぐに曾孫にとりつく。2ピッチ。孫やりも2ピッチ。孫やり13：10。上はせまくて、2人がまたがるのがやっと。一度立ってみたが風がふくとフラフラしそう。高度感がちがい、クライムダ

ウンして、大槍の2ピッチ13：30。すぐに下る。乗越2：20　BC　　（岡田）

北鎌上半　　岡田、中岡、稲垣
7月22日
5：05出発、四の沢出合、5：15最初の二股は左を行く。すぐにF1（10m）雪渓がつまっている。F2（10m）左岸をのぼる。すぐにF3（20m）右岸を高まく。F4通過F5左岸を登る。F6（20m）両岸が岩壁、左岸のクラックを登る。ジメジメしていやらしい。中部はチムニー状、上部は左手に出る。ぬけ出る所が草付でいやらしい。ハーケン2　約25m。上の草付ブッシュ混りのテラスでジッヘル。約1時間。予想外の滝の連続で非常に時間を食う。そこから上はガレ場で9：00コル着。千丈側をトラバースぎみに行く。独標9：30。10：40D稜上部。大槍12：00B、C、1：50。　　（岡田）

北鎌下半（独標沢下降）
7月22日　田中、黒岩、石浜、細川
六ノ沢出合のテント地より1時間半程で、千天出合に、つく。堀立小屋の裏手をいって、天上沢のはしを渡って取付につく。取付からは、赤ベンキの連続でバカでもルートをはずす心配はない。でも独標迄は多門治尾根をでてからはかなり遠いし（3～4時間）浮石が多いから気をつけねばならぬ。独標沢はF6（いちばん上の滝）がどうしてもまくことができず、けんすいでおりるしか手がない。どうみてもザイル30m2本が必要であると思う。僕達は30mザイル1本しかもっていなかったがFixの残りを回収しながらきていたのでそれをつないで何とか下ることが出来た。あともF1～F5迄はすべてまくことが出来る。テント地を出てからテント地に帰る迄12時間位かかった。

（黒岩）

C稜ツルム側壁
7月22日　Party　甲田吉彦、石原敏雄
所要時間2時間半
このC稜ツルム側壁は我が阪大山岳部が19

60年度夏山合宿において、両先輩によって開拓されたものである。
取付は、C稜基部を右へ廻り込んで、Cルンゼを50m程登ったところである。一見して、ルートがわかる。へこんだところをルートにとるわけである。我々は右上してV字状の底部に達した。1ピッチ目、甲田が取付く。高さ2m位のところを数m右へトラヴァースして、上のV字状の底部に出た。傾斜強く、乗越すようにして達した。ハーケン有り。ちょっとしたバランスが要る。あとは、フリークライミングで、最初のピッチなので、ゆっくり登る。次のピッチは、外傾した、垂直に近い階段状のところを数m登る。ホールドががっしりしていて、フリクションがよく効いている。快適だ。高度感有り。ここで、このルートの岩登りらしい緊張は終り残り4ピッチはコンティニアスだ。全く快適の一語に尽きる。ルートは自由に選べる。ツルム頂上直下の2ピッチは高度感もあり、これ又快適だった。この後、C稜へ取付いたが、C稜、B稜間は数本、リッヂが派生しており、我々はどうやらBC中間稜を登ったらしい。

甲田記

硫黄岳
8月25日　晴
夏山合宿の中で最も自然らしい自然に親しむことのできた一日だった。硫黄という岳名はさも荒廃した生命を　　印象を与える。西鎌根から眺めればさもあろうが、小次郎沢をつめて硫黄に出るコースはひやそりと人知れず、自然がその世界を誇っている。ニッコウキスゲの色調がひどくあざやかだった。いたるところでお花畑が目をとらえる。あざやかな自然の色彩が千古の昔から同じ色をにおわせている。そうかと思うと、いまにも熊と鼻づらをつき合すようなケモノ道のトンネルがある。山行といえば走形式のいわゆる山道をたどってきた一年間を経ている自分にとってブッシュは苦しいながらもなごやかな気分になる。はじめて山へ登った一年生には少々気の毒ではあったが。熊であろうか、あるOBのよりもはるかにごついドンが

ある。ここではボンでさえも何だか、親しみがわく。そのボン場で熊は昼寝をしたに違いない。狼藉の後は熊の大きさを思わせる。カモシカのツメあとはブツシユのわずらわしさから、一瞬気をそらしてくれる。

ハイ松におおわれたピークでのエツセン当番御自慢のツリカケメシは満足のできるものだった。それに小次郎沢上流の岩の下から流れ出る清水は、腹にシミルようなミネラルウオーターであった。もし今度行くことがあったら、熊かカモシカに出合いたいものだ。てな事を無事に下山して思うのも仕方のないこと。

（田村　記）

B稜

7月24日　曇　L松林、細川OB

6の沢を上り、B稜に登るつもりでA稜のピラミッド直下に取付てしまう。そこよりトラバースをし、Cルンゼに入り目的のB稜側壁に取付く。取付点はハング気味で2.3のハーケンが認められる。岩はしめり気味ですこしいやらしい。短いヒツチで2ヒツチを要して通過する。傾斜のゆるいガラ場に出、その上部は段状のスラブの連続であり、人跡はなく、ハーケンなどはとうてい見あたらない。眺望はひらけ、ホールド豊富で快適なクライミングを楽しむ。2ピツチでハングにあい、その右側に逃げ、頭に出る。

（記　松林）

Aconitum hakusanesis

夏　山　山　行

北アルプス縦走パーティーⅠ

湯股尾根ー高天ヶ原ー東沢出合ー雷鳥沢ー池の平

竹林(L)、松林（ＳＬ）、黒岩、大西、中川

７月２９日快晴

湯股６：３０→湯股岳まき道８：００→湯股尾根頭１４：１０→赤岳１７：００→高天原２０：００

湯股尾根に新しく出来た道を竹村新道といい晴嵐荘の裏が登り口になっている。心配していた湯股岳への登りは予想通り２２００ｍ付近よりまき道があり、又南真砂岳も、まき道があったので予想以上に早く裏銀へ出ることが出来た。湯股岳と南真砂のコルは春には最適のテント地になるであろう。ここにきたない小屋がある。水晶小屋についた頃には日は西に傾いていたが、黒部Partyに出会い、元気づいて高天原までかけおりた。途中日がくれたので２０分位懐中電灯をつけて歩く。

７月３０日　晴　起床７：３０

昨日２日分行動したので今日は停滞。新人は休養して、竹林、松林が立石付近にイワナをつりに出かけたが獲物は０。

７月３１日　晴　起床６：００→出発８：００→広河原１３：１５

左手に薬師の美しい姿、右に赤牛から発するなだらかな尾根を見ながら歩くのは全く高原ムードそのものである。しかし高天原新道はまさしく新道で、まだよく踏みならされていないハイ松と笹になやまされた。

８月１日　快晴　起床４：３０→出発６：３０→口元のタル沢９：１５→東沢出合１４：３０

昨日にもまして悪い道だった。ピッチは一向にはかどらずイライラする。東沢出合まで５～６時間位だろうと予想していたが、あにはからんや８時間もかかった。途中廊下沢をちょっと行った所で、高まき中、大西がスリップ、河原へ頭から落ちたが好運にもキスリングのおかげでけがはなかった。テントを張り終った時渡部黒田両氏がボートで下ってくるのに会う。かもしかが渡渉しているのを見る。

８月２日　快晴　起床２：００→出発４：００→平の渡し５：４０→平６：２７→テント地

渡しの始発が６：２０分なので４：００に東沢を出発した。平に着いてからヌタイ谷でイワナつりをすることにして、今日新しく出来たキャンプ場にテントを張る。

８月３日　晴　起床４：００→出発６：００→刈安峠７：００→五色小屋９：４０→浄土山１３：００→雷鳥１４：００

１日休養したので二股までと思いながら出発したが、刈安峠の上りを２ピッチという快速でかけあがったので全員バテル。五色へついた頃からガスって来る。なんとか今日中に立山を越えようと疲れた身にムチうって進んだが、浄土山につき、立山へ登るアリのような登山客を見ていやになり、浄土を下り、雷鳥にテントを張る。全員下山ムードにひたるが、気をとりなおしてガンバロウと決心する。

８月４日　快晴　起床４：３０→出発６：３０→御前小屋７：５０→真砂９：３０→二股10：３０→池の平１２：４５→テント地１６：００

雷鳥沢を登り、快調に剣沢を下る。剣沢の雪渓は去年よりも非常に少ない。この分では最初の計画通り真砂沢を下っていたら、苦労したことと思う。北股より三ノ窓と二股に分かれた右側の小さな沢を登る。入口に５ｍ位の滝がありこれを滝つぼに入って強引に登る。つぎに２ｍ位の滝を登ると二つのルンゼが入っていたのでその右側を行く。しばらく行くと又ルンゼが３つありその左側に入ると池の平に出る。池の平から見る剣岳はすばらしい。トンボがとんでいた。仙人湯は湯が出ているだけで整備されていない

８月５日　晴後にわか雨　起床６：００→出発

8：00→阿曾原 9：00→樺田平 13：30

肉体も精神も疲労したので下山と決める。下山と決めたら元気が出た。阿曾原から澤平までの遠々たる水平道を歩き続ける。計画をやりとげることが出来なかったことを少々残念に思いながら。　　（竹林）

北アルプス縦走パーティII

三俣→雲の平→高天ケ原→太郎兵衛平

Menber 甲田(L) 田村（SL）、寒川、池田（装備）、稲垣（食料）

7月28日　晴　湯股ー三股蓮華ー祖父沢TS
6:15　14:00ー15:00　16:00

7月29日　晴　TSー雲ノ平ー高天ケ原TS
7:00　9:00〜12:00　15:00

7月30日　晴　TSー薬師沢出合ー左股TS
8:00　13:30ー14:00　15:30

7月31日　晴　TSー太郎小屋ー薬師峠
12:00　14:00　14:30

雑感）

山の湯で定着合宿のアセを流したあとはエッセン係が早くも手腕を見せる。愉快な夏の宵の宴。考えてみるに話しが良すぎた。去年といい今年といい二回の統計ではあるが前祝はヤメル方が良いのかも知れない？伊藤新道は小屋のオヤジの皮算用が図にあたって、多くの人間が利用している。我々はというと、追越したり追い越されたりしている内に沢山の美人と顔見知りになる。人の多いのは感心しないがコウいうのはハナハダ良い。ダラダラの登りでバテ気味の気分が思わずほぐれる。といっても地下タビの黒部パーティはカワイソウダネ。新人も良く地図を拡げる。ゴツイ湯股尾根が目に入る。あそこでがんばっているけなげな人達の事が思われる。三俣もあと少しという所で寒川の遅れが顕著になる。右ヒザをいためたらしい。三俣の小屋横に腰をおろした時はさすがに顔がほころんだ。槍、北鎌がガスに見えかくれし、一週間前の興奮がなつかしい。祖父沢への下りは右ヒザのため時間がかかる。例の如くテントの保護色を有効に使ってテントを張る。渡部さんらが少し遅れて、トナリにツエルトをはる。黒部を前にしてOBの若々しいことこの上ない。黒部の水は若返りに良いとか？　せいぜい腹一杯の水を飲まれるように。雲ノ平での山田氏とのドッキングと彼の持つバイカンを目の前にちらつかして雲平へ。快調。寒川も登りはついて来れるらしい。昨日の黒田ドクターの診療では疲れだそうだ。無理をしなければ持つだろう。
雲平はハイ松とお花畑で思ったより良い所だ。笠ケ岳、黒部五郎岳が臨まれる。

ここで下界からザック1ぱいの差入を肩に登ってくるはずの山田を待つ。しかし全然その気配がない。1体どうしたのか心配ではあるが仕方がない。12時まで3時間待って高天原へ下る。何度行っても良いのが高天原だ。何度いってもそばにメッチエンの居ない事が悔まれる。ニッコウキスゲは女の子には良く似あう。竹林パーティに会う。彼らのアルバイトには驚嘆する。松林と再会を祝ってうまいものを食う（これは俺しか知らない）。
うたい空一ぱいの星の下で、テントから顔を出してねる。ここで涙でも出れば詩人だろうが。月光と寒気に目がさめて水晶が月光に映えるのを眺めてテントにもぐり込む。高天原になごりをとどめ黒部へ新道で登ってくるオッサンに会い、山田らしい人の事をきく。キタナラシイキスリングを背おったうすぎたない服装のメガネの似あう人というから、マス間違いなかろうと又もバイカンとロングピースを目の前にチラツカせるが人ちがい。薬師沢までは川岸を歩く。人の多いことといったら話しにならない。シーズンといえ、失望ハナハダシイ。カベツケ原にゴミが多い。ひとアセ流して、左股の良いCSに決定。さっそく甲田と自分とが半分ずつ6匹のイワナを釣りあげる。気を良くして寒川の右ヒザ快復をねがう意味でも、翌日も半日イワナ釣りということになる。油ののったイワナと豊富なエッセン、トンカツなどは思うだけでもイヤ、さすがのブツブツも出ない。エッセン係の稲垣はあわただしい。黒部パーティの辻OBが現われ、水が少いのでゴムボートの失敗を予想

していたが、あまりの突然に驚く。（くわしいことは黒部の報告を読まれんことを）。期待はずれの半日ではあったが甲田だけは獲物を手にしてご満悦。昼めしをくって薬師峠へ。薬師山頂からは赤牛の尾根が手に取るようだ。霞平、夢ノ原、高天原、大黒部が作りあげた自然の彫刻。その上に緑と白の衣装をまとうのだ。とうとう最後まで下山気分の出ない内に折立まで来てしまった。

全体的には愉快ではあったが、新人にとってはどうだか。しかしやむを得ないことではあった。苦しい山行がより強く心に残るといえば言いすぎかも知れないが？山田とは、とうとう合流出来ずに終った。　（田村）

劍岳チンネ登攀

メンバー　甲田、山田、出口、中川

行動記録

９月５日　大阪発（山田、出口、中川）

９月６日　曇後晴

富山ー千寿原ー美女平ー室堂（１２：３０）ー別山乗越（１５：００）ー黒コル（１５：40～１６：３０）ー前劍（１７：４０）ー平蔵避難小屋（１８：３０）

９月７日　ガス後晴

ＳＴ（７：３０）ー劍岳（８：１０）ー池谷乗越（９：３０～１０：１５）ー三ノ窓（１０：３０）

９月８日　晴後ガス

○山田、出口Ｐａｒｔｙ

チンネ：左方ルンゼ→ｇチムニー→ｃクラック→ｄクラック

取付（７：４５）ー中央バンド（８：２５～45）ーｇチムニー入口（８：５０）ー頂上（９：40）

左方ルンゼは浮石の多いつまらない所である。ｇｃｄと快適であるが浮石が多いきらいがある。やばい所はない。

○ジャンダルムをＣクラック登攀　Ａチムニー下降

取付（１０：３０）ーＰＬ肩（１１：０５）ーＡチムニー基部（１１：５０）

Ｃクラック付ホールドが小さいが傾斜がゆるいので楽。岩は少しもろい。ＰＬからの下降は40ｍ片けんすいが必要なのでＡチムニーを下降することにする。１回５ｍくらいのけんすいを加えかんたんに下れる。

○甲田、中川Ｐａｒｔｙ

○チンネ：中央チムニー→ａバンド→ｂクラック

：左方ルンゼ→ｇチムニー→ｃ，ｄクラック

９月９日　◯　停滞

９月１０日　◎　Ｐａｒｔｙ　甲田、山田、出口

チンネ：目嶺ルートー左稜線上部

ＳＴー取付ー中央バンドーＴＳ

チンネ頂上ーＢＣ４：４０

朝晴れまが見えたので天気図を見て出発。取付付近でガス濃くなる。１Ｐチムニー状のガリーを抜け浮石の多いテラスでヒレイ。２Ｐ１２ｍリッジを行く。テラスでヒレイ。３Ｐ核心部は甲田がアブミを駆使して白いＦａｃｅを登りクラックを快適に登って中央バンドに達す。Ｔ５までのトラバースが最後がいやらしい。上半は第一ハング、第二ハングを用上げとアブミでこしてその上のハーケンでグリップヒレイ、第２ピッチ凹角にはいるといっていた山田が左のＦａｃｅ　に移るところでスリップ。幸いほとんどけがなし。後はずっと甲田がトップをとる。このＦａｃｅを抜けると核心部はほゞ終る。あとはナイフリッジと小岩壁が交互に現われる。ピッチが短いので時間をとったが４時すぎに登攀終了。

９月１１日　①　Ｐａｒｔｙ　甲田、出口

ジャンダルム：左稜線

山田と中川は小窓王を往復する。

９月１２日　①

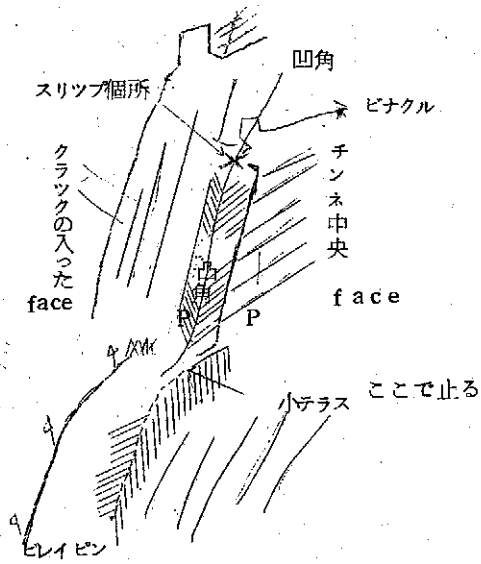
三ノ窓ー本峰ー早月２６００ー馬場島

早月は上部にくさりがＦｉｘ　してあるので楽にくだれる。とにかく早月尾根は長い馬場島につくと汗びっしょり。

＊チンネ左稜線における山田のスリップ事故報告

９月１０日　◎時々①又は◯

○ルート　目嶺ルート左稜線上部



○状況　Ｔ５までは省略

Ｔ５から甲田がトップで第１第２ハングを抜けその上のゆるいＦａｃｅでビレイ、ここまでＴ５から約２５ｍ出口、山田と登ってそこでトップ交代上部は傾斜７０°程度Ｆａｃｅにあるクラックから右の小テラスに出て（約１５ｍ）凹角に入る凹角上部（ピナクル直下）から左のＦａｃｅに移るとき凹角内の小さいフリクションホールドにのってＦａｃｅのフリクションホールドに足をのせる。甲田等は足の開きすぎといっていたがそれほど無理な姿勢ではない。一回ホールドを確認したあと二回目に右の足がスリップ手のホールドは確実なものでなかったのでそのまま凹角内を３ｍスリップして小テラスで目力でとまる。けがは手にさっか傷が少し。そこでビレイして甲田、出口を上げる。ガスってはいたが岩はほとんど湿っておらず体の前傾とフリクションの過信が原因と思われる。尚セカンドで登った時は同じホールドを使用したがその時は容易に通過出来た。　　記　山田

黒部上の廊下遡行Ｉ

日時　８月２２日～２６日

メンバー：田中喜樹、田村孝、松林一男

８月２２日　晴のちくもりのち晴

黒四ダム出発９：４０平１２：４０Ｃａｍｐ Ｓｉｔｅ14：00

前日富山より大町についてバスの駅でゴロ寝をしてから８：３０発の扇沢行きのバスにのりこみ出発。軽装なので追加料金はとられずにすみそうであったが、松林が関西電力のトロリーバスに乗り継ぎの時に１００円とられただけで助かる。それにしてもあのバス賃は高すぎる。１時すぎにダムサイドにつきブラブラしてから出発。（このブラブラが後になって大きくひびいた）道は旧道（水際）と新道（クン元沢迄高まき）に分かれているが高まくのはいやなので旧道をいく。タンボ沢の手前で変なトラバースをしようとしたが失敗して少しひき返して高まく（道有り、新道ではない）。少々時間をロスした。後は平担な道をトンドンとばす。平の小屋についたのは１２：４０。次の船は１７：00迄ないとのことで、たのんでも船は出してくれない。黒四ダムから舟で少々えらそうなオッサンがきたので、帰りに対岸迄いってくれとたのんでも首を横にふるばかり。時間におくれたとはいえ少々腹が立つ。えいままよと思いヌクイ谷のテント地に今日は泊ることにする。

皆さんこの時刻を今後、決して忘れぬように。

６時
１０時
１２時
１７時

２３日　晴　平出発６：００東沢出合８：００同出発９：１０下の黒ヒンガ１０：３０　口元のタル沢出合１２：０５偵察後テント設営１３：００

朝一番の船で対岸へつく。平の小屋のおっさんの横暴な態度に又もや腹が立つ。ねすごしのため朝食ぬきなので東沢出合で飯ということにしてどんどんとばす。３Ｐｉｔｃｈで東沢出合に

つく。対岸にも道がみえたのでよけいに腹が立つ。朝飯ならぬラーメンをたいてたべる。いよいよ遡行開始。左に右にと渡渉をくり返しながら進む。水量は去年下降した時よりも少々多いように思う。まあなんとなくいっているうちに最初の難関の下の黒ビンガも左岸を高まき、けんすいもしないで川原に立つ。途中でカラビナ１個収得。口元のタル沢の手前のトロ（岩魚が多い）は左岸をへつる。あまりたくさん岩魚がいるのでつることにする。約３０分で収獲尺物一匹。ここは尺物のイワナが群泳しているが、なかなかつれない。口元のタル沢出合で二年生だけで偵察にいかすが、最後のつめでいかれないので引き返して、高まきも相当に時間がかかると思われたので早いがテント設営とする。後はイワナつり。口元のタル沢で尺物のイワナをつりあげる。今日の収獲計４匹。

２４日　晴のちくもり

口元のタル沢出合出発７：００高まき終了９：１０、ローカ沢出合９：３０スゴ沢出合１０：３０高まき開始１１：３０、終了１６：３０金作谷出合１７：００

口元のタル沢の左岸の尾根をつかって高まき開始。途中で川原におりたくなり早々に下降しようとするが、下部が５０～６０ｍ位スパッと切れているのでやり直し、しかしピッケルとサングラスをひろう。又来し方をのぼり直し、日電歩道跡に出てゆるい尾根ともルンゼともわからぬような所を下降。簡単におりられた。後はスゴ沢迄左右に渡渉をくり返して早々にスゴ沢出合につく。昨日来ていたらよかったと思うことしきりである。１１時迄にスゴ沢出合についたら先にいこうと考えていたので即行動をおこす。上の黒ビンガを約１００ｍ近くはいって中に石が２つ出ている所迄きたが（右岸通し）その先はどうにも行けそうになく思われたので高まき開始。きついきついブッシュ。の連続だいつの間にか高天ケ原新道に出ていた。そして五月にのぼった沢（地図で金作谷より約１cm上方で露岸記号が２つ出ている方の上の沢）を下降。下部約１００ｍ（本流より）位の所で滝があることがわかっていたので滝迄いき、そこより左岸のブッシュにつっこみトラバースを５０ｍ～６０ｍ位１つ下降する。（ササのブッシュが密でしんどい）やっとのことで川原より１段上の石段にたどりつきとっておきのチースを出してたべる。後は右岩をトボトボ歩き金作谷出合でテント設営。金作谷出合はまきも少ない（岩魚もおらん）金作谷のゴツゴツスノーブリッジも今や全然ない。（五月はものすごくて近よりがたい位だったのに）ここは黒部の中では何とも殺風景な所で僕はきらいだ。

２５日　小雨のち快晴

金作谷出発７：４５トロ通過９：３０ニセ赤牛沢１０：３０立石１１：４５

朝雨が降っていたので出ようか出まいかまよったがきり雨になったので、勇んで出発。金作谷上流のトロはすべて右岸通し。二回程空身でへつってはザックを水にうかして補助ザイルで引っぱる。なかなかおもしろい。後は何ということなくトロを通過。でもトロで水につかっている時に運悪く雨が降ってきて寒かったが、トロを通過する頃には晴れあがった。神様は我々を祝福していてくれると三人で言い合う。トロを通過してからは後は何ということなしに奥のタル沢出合につく。途中で関大探検部のかいをみつけたが水に流してしまった。早いが皆な頑張ったのでテント設営とする。
後はぬれたものを天のめぐみをうけてかわかす。昨日から煙草が切れて何となくさびしい。

２６日　晴

立石発７：３０薬師沢出合１０：４５太郎山１３：１５太郎山発１３：３０折立１５：０５

立石から上流のトロは最初右岸をいき途中で左岸に渡りコブをこしてから再び右岸にもどりあの有名な立石奇岩につく。ルートはよくわかる。薬師沢迄はドンドンとばす。この辺は十日前より水が少いと二年生が言う。薬師沢出合についた時は３時間少ししかかかっていなかったので、自分の時計をうたがった程だった。上からおりて来たアベックに煙草を分けてもらい二日ぶりのたばこをすう。このたばこのおかげで太郎山迄のあのだらだらな道のしんどかったこと。太郎小屋であまった米をうる。１升１５０

円地。あとはかよいなれたる道をドンドンとばす。どうもあの道ははしってしまう。下からのぼってくる人々がけげんそうにみていた。（実をいうと田中のスボンがパッサリとやぶれ、パンツがみえていたから）三角点からは１ピッチで折立におり立つ。地下足袋なので爪がいたい。この山行をふり返ってみて

○装備について

ツエルト１ラジウス１

三つ道具（トンカチ１カラビナ５ハーケン６）

ザイル８ｍｍ４０ｍ１

補助ザイル兼捨なわクレモナ６ｍｍ３０ｍ１

ポンチヨ１（グランドシート用ハンゴウ２シユラフ２キルテイング１シユラフカバー１毛の上下下着（各人）ワラジ４足地下足袋

重量個人装備と共同装備合わせて１人１０Kg～１２Kg位

○食　料

朝晩ともにしたため少々重くなった。沈殿の日の昼食をラーメン（２回）にしたが１回もつかわず東沢出合と立石でたべてしまった。野菜はたまねぎ１日１コジヤガイモ１コ／日ヒーマン２コ／日ニンニク少々。富山で買ったみそは塩が安いのかしらんがたいへん塩からい。米以外すべて富山で買う。

○天気について

天気図を富山で買おうと思っていたが買えず又ラジオをもっていたがこれは１０年程前の代物（バリコンが密ぺい式でない）で谷にもっていくと全然はいらなかった。もっぱら観天望気。天気は一般的にいうと晴れであったが第４日目などのように朝は雨で出発してから２時間～３時間すると晴あげくのはてには快晴という天気であった。又夕方小雨がふった日が４日程あった。

○シユラフカバーでねることについて

毎日交代でねたが渡渉して水にぬれているために少々寒い目をした。くもっている日はそうでもないのだが晴れている日は朝方寒くてしかたがなかった。こんな時は酒が少あればよくねむれると思うが許してもらうことは出来ないだろう。　（田中記）

黒部上の廊下遡行Ⅱ

（遡行Ⅰより１月早いが記録的には同じ。

昭和４２年７／２９～８／６

的場（Ｌ）　出口、中岡

７月２９日　晴

湯俣（６：２０）三俣のコル（１：４５）ワシバ（３：３０）水晶小屋跡（５：００）

小屋跡で竹林Ｐａｒｔｙにあう。今日中に高天原までいくと全員はりきっている。

７月３０日　晴一時雨

小屋跡（６：４０）水晶（７：２０）高天ケ原への分岐点（８：２０）赤牛（１０：２５）東沢出合（３：１０）

７月３１日　晴　停滞

偵察出発（８：００）　帰幕（４：３０）

下の黒ビンガの巻き道までトレースする。左岸をまく。

８月１日　晴

ＣＳ（６：３５）下の黒ビンガ（９：１５）いわなつり１０：３０～１１：００（出口、的場）　口元のタル沢１１：３０～２：００

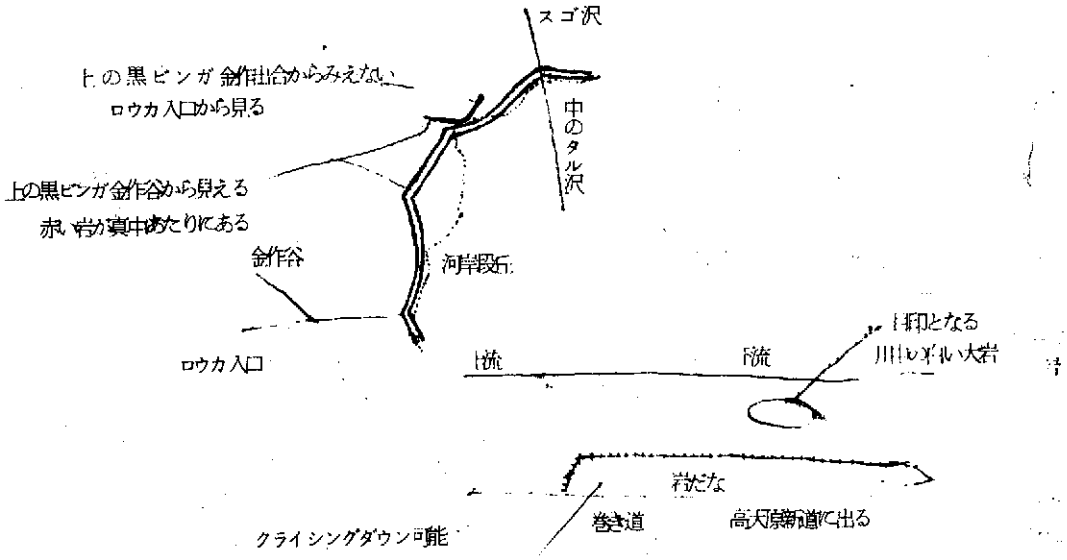
口元のタル沢から高天ケ原新道に上っている尾根の一つ上流側の尾根の下降を試みる２：１０－４：１０　赤ガレすこし手前のＣＳ６：１０

口元のタル沢上流のトロは左岸を胸までつかっていくが、あと少しでトロをぬける所で脱けられず。的場はひきかえしたのち右岸のたなを見にいく。たなは外傾しておりブッシユを通して川が足もとにみえる。この間に渡辺、黒田両ＯＢののるゴムボートが下って来てしばし歓談する。

８月２日　晴

ＣＳ６：３５ロウカに入る７：１５上の黒ビンガ８：４５上流へいくのをはばまれたトロ９：００～１２：３０河岸段丘５：３０金作谷出合のＴＳ６：３０

上流へいくのをはばまれたトロ　まずおよいでみるがおしかえされる。左岸は高巻くと大変なので右岸のルンゼをのぼる。１８００ｍあたりでふみあとがでてきてそれを利用、ふみあとはあったりなかったりだったがそれでも大分助けられた。



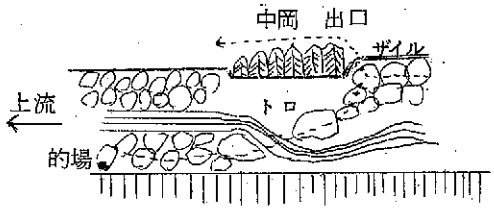
8月3日　晴

下流偵察6：45～8：15　出発8：45ザックおよがしてトラバース9：10～9：50第2のトラバース10：30～12：00立石岩小屋3：15

金作上流のトロは終始右岸をへつって行った。

8月4日　晴

出発7：15　ザックつりあげ7：45～9：15　10：30～12：00ひるね ～薬師沢　4：10



岩だなまでの高さ4mぐらい。的場トショウしようとして一回目流される。再度こんどはとんで岩にしがみつきなんとか右岸にわたる。この間出口、中岡およごうとするがおしかえされる。

8月5日　晴夕方小雨

出発7：00　赤木沢出合8：15連瀑9：10最後の大滝（30～40m）10：40赤木沢出合　12：00

赤木沢は明るい美しい沢だ。ニッコウキスゲの花が我々をむかえてくれた。今日は最後の夕食だ。ヨーカン、コンビーフ、サラダetc.を食べ無事黒部がすんだのを祝う。

8月6日　曇　一時雨

出発5：50　上の岳6：50　太郎7：50～8：20　折立10：40

（記　中岡）

黒部川上の廊下
ゴムボート下降

1967年7月－8月　　渡部　洋
黒田治朗

はじめに

「ゴムボートで上ノ廊下をやらんか」と渡部に誘われたのは6月はじめだったが、しばらく返答に躊躇した。さらに「行けるぞ、勝算ありや」と持ちかけてくる。以前も話は出たが、皆が話に乗らないのと登山の方が忙しかったのとで、それきりになっていたのだ。上ノ廊下の様子は三年前の八月完全遡行をして大体わかっている

し、彼にしても昨年エアマットで瀞を泳ぎながらの下降に成功していた。大きな滝はなく浅瀬もなんとか引きずれるだろう。しかし、滝の大きさや数は正確につかんでいなかったし、何メートルまで転覆せずに通過できるか疑問で、そこに一抹の不安はあった。だがやはり黒部は阪大のゲビートだ。積雪期下ノ廊下、上ノ廊下横断の記録、さらに今後上ノ廊下を中心とする計画もある。「よしやろう」と話はきまったが、それからが大変だった。

計　画

まずゴムボートを友人加藤から借りることを、われわれはかってにきめてはいたが、人集めには苦労した。3.4人は必要だと目論んで誘いかけたのだが、現役は駄目、OB連からもそれぞれ理由があって断わられる。さりとて部外者を引っぱりこむには危険が大きすぎるので、途方に暮れてしまう。計画を進めながら人を集めるよりほかに方法はなかった。時期は重要な問題だが、われわれは二人とも七月下旬の現役合宿に参加が決定していたので、その直後の八月上旬とした。さらにこの時期の水量、天候がともに最適であること、それ以上に関大探検部も八月上旬に計画していると伝え聞いたからである。ボート下りの経験不足を補うには、付近の川で練習する必要があり、それには急流と廊下的雰囲気を備えた武庫川上流を選び、新たにメンバーに入った辻と3人で1日がかり15キロ足らずを下る。この時、奇しくも関大とかちあったので、互いの長所を取り入れる。彼らはザイルの必要性を認め、われわれは頑丈な木のオールを作る。彼らの出発が8月5日と聞いてライバル意識をかきたてられる。もっともこの時、底に2ケ所も穴があき、ボートの補強に頭を悩ましたが、底全体にザック生地を接着剤で張りつけることで解決する。周囲の気室は二重で穴のあく心配はない。さらに重要な問題は保温だ。常に摂氏10度前後の冷水につかるためウエットスーツはほしかったが、資金難で苦肉の策を編み出す。毛の上下に腹巻、雨具のスポンを履き、上をビニールテープでぐるぐる巻き水の流通をすくなくする。衝撃に対してはヘルメットは必要だ。装備、食糧の防水には厚めのポリエチレンの袋を二重にし、転覆時の荷物の流出防止のために補助ザイルをボート周囲と底に固定し、荷物をむすびつける。積荷が重いと底の摩擦も大きくなるので軽量化しツエルト露営とする。急流でのスピード制御は未解決のまま出発する。

装　備

ゴムボート　米軍の中古で6人用。長さ3メートル幅1.3メートル重量21キロ、オール(木とプラスチック、各2本)、エアポンプ、修繕具、救命胴衣、ヘルメット2、ザイル(8ミリ40メートルと30メートルの2本)、三ツ道具、ツエルト、ラジオ、救急薬品、カメラ、飯盒2、その他個人装備として、毛の肌着上下、毛の帽子、腹巻、雨具、地下袋、わらじ、その他。

食糧は源流出発より5日分。

記　録

7月30日　快晴

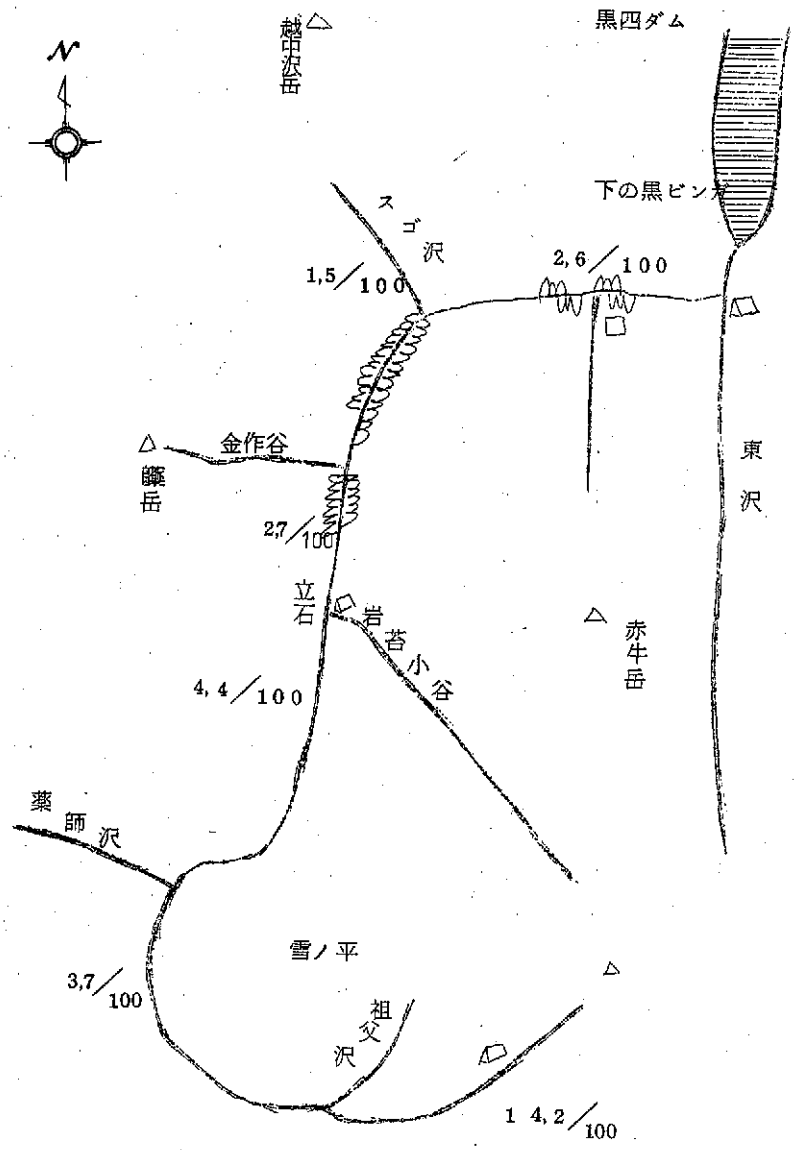
ボートを浮かべられるところまで、源流を下る。赤木沢出合付近から瀞が所々に出だすが、薬師沢出合を過ぎてもなお勾配が急で滝多く、また水量が少ないので岩の露出が目につく。30キロを越す荷にばて気味で薬師沢下流2キロの廊下の入口で泊まることにして、明日への準備をする。15分ほどふいごを踏んでボートに空気を入れ、気室の周囲と底にザイルをフィックスする。流れの方も中旬以来の晴天続きで例年より水量もかなり減っている。最も懸念したスピード制禦の点でやや安心する。満天の星を仰ぎながらのツエルトビバークは快適。明日への期待と不安でしばらく寝つかれなかった。

31日　快晴

いよいよ出発というのに、辻が体の不調を訴えるので、仕方なく2人でやることにする。ボートの操作はなんとかやれるだろうが力持ちの彼が抜けるのは大きな傷手だ。9時、彼に見送られて勇躍して最初の瀞をこぎ出す。瀞はすぐ終わり、岩がでて通過がはばまれる。やむをえず降りて胸まで水につかりながらボートを押しにかかる。流石に水は冷たく心臓までの深さに

なると身ぶるいする。やっと流れに引き出して飛び乗るとまた岩に引っかかる。水量が少ないからだ。立石までは１００分の4.4と上ノ廊下きっての急勾配のため３メートル以上の滝が5.6個もある。ボートにザイルをつけて滝を落としたが、滑滝になっているせいか転覆はしない。

われわれは岩伝いに進み、また飛び乗る。「おい、飯盒とプラスチックのオールが流れてしもたぞ」と下流を見ると瀞をぷかぷかと流れて行く。こっちはボートの面倒を見なければならずどうしようもない。うっかりしてオールをつないでおくのを忘れていたのだ。岩にはさまれた



り岩に乗り上げると傾いたボートにどっと奔流が流れこみ、水流の激しい不安定な足場では押せども引けどもびくともしない。ヘルメットで水をかい出したが遅々としてはかどらない。面倒とばかり低く傾いた側に乗り、傾斜を強くして水のはけ口を作る。するとボートは急に軽くなりスウーと動きはじめる。このようにたった3キロを下るのに延々4時間の苦闘の連続でボートに乗っているよりは水中で操作する方がはるかに多く、やっと立石に置く。まだ日は高いが肉体的いや精神的にも参ってしまい、ここで泊まることにする。ポリエチレンの包装にもかかわらず食糧も装備もずぶ濡れになり、ボートの底には早くも10cmの大きな穴と数個の小さな穴があき、修繕に忙しい。明日への不安で心は重く、2人とも黙りこくったまま流れにみいっていた。

〔タイム〕出発（9：00）ー立石（13：00）

8月1日　快晴

不安な気持を押し殺して9時半に出発。ここまでくると水量も増して岩の露出は少くなり、意外に滑るように下って行く。乗る姿勢は気室にまたがり、両足で気室をかかえこむ。このようにバランスをとりながらオールをふるう。さかまく早瀬の凹凸が快い衝撃を伝え。正に馬上の山賊という姿。まもなく廊下に入る。廊下が開けると右岸から赤牛沢が入り、谷間ごしに越中沢が望まれる。しばらくは両岸の開けた早瀬をを時々回転しながら懸命にこいで岩の間をすり抜ける。昨日のように岩に乗り上げることも少なく快調。緊張も解け、笑いも出てくる。谷幅がぐっと狭くなると金作谷上部の廊下だ。両岸100mを越える煉瓦塀のような壁で囲まれたうす暗い中をゆったりした流れが幾つもの瀞をつくっている。前方の流れが途切れぱっかり空間が現われると滝だ。急いでボートを流れと平行にして突っこむ。1mの落差なら気室に腰かけたままオールをふるい、2m近くなるとフィックスしたザイルをつかんで底にへばりつく。左岸のくま笹の斜面を回りこんで瀞の岸にこぎ寄せると、金作谷の出合につく。11時。釣をしているパーティが2.3いる。この調子ならとすぐ出発。やがて上ノ黒ビンガに入る。谷幅は5～15m、両岸は200～300mの黒い壁が果てしなく続き、長い、深く淀んだ瀞を区切るように5.6の1～2メートルの滝が高度を下げる。狭く仕切られた空間から陽光が降り谷間は意外に明るく、側壁から数条綾状の滝が落ちてそれが一層渓谷の美しさを増している。底を横切る岩魚を見て立石に忘れてさた釣針を惜しがる。泡立つ滝壺に巻きこまれると難儀だ。こうなるといくらこいでもぐるぐる回転するだけで滝の水がどんどん入ってくる。カメラも浸水。必死にオールで岩を突き、岩に飛びつきザイルを引っ張りやっと流れに乗せる。両岸がぱっと開けるとスゴ沢出合だ。「12時前だ。早いぞ。東沢まで行けるな」と声をかわして、さらに下る。広河原は両岸の傾斜もゆるく樹林が岸まで迫って明るく広い。薬師のカールの残雪が青空にくっきり浮かんできれいだ。このへんから遡行パーティがいたが、皆もはじめはきょとんとしていたものの次第に歓声をあげ手を振り、カメラのシャッターを切っている。オールを振ってこれに答え、浅瀬を滑り下り、口元のタル沢上部の廊下に突入する。1～2mの滝が3.4個所あったが、1つは2mを越えている。「あつ、滝だ」とフィックスしたザイルにしがみついた途端、黒田は頭にゴツンとショックを感じて水中にほおり出される。ザイルをしっかりつかんでいたのですぐ這い上がれたが、被っていたヘルメットと毛の帽子は見えず、眼鏡が紛失防止の紐にぶらさがっている。渡部もいやというほど水を飲まされる。口元のタル沢出合で遡行してきた現役の的場らに会って「もう成功やなあ」と食事をとりながら1時間の休憩後2時前出発。その後は浅瀬が多く、1時間のスリルを楽しむと西沢出合だった。縦走パーティの竹林らが手を振って歓迎してくれる。ボートを磯に上げてみると損傷は激しく、補強に張ったザック生地もきれいに剝がれてしまい、底の穴は10個所以上で水と岩との激闘を物語っている。

〔タイム〕出発（9：30）ー金作谷出合（11：00）ースゴ沢出合（11：45）ー口元のタル沢出合（12：45～13：45）ー東沢

出合（１４：５０）

２日　快晴

５分で黒四の湖面末端に出てしまう。淀んだ水、岸辺の水中に立つ枯木、周囲の樹海とアマゾン的なひろびろとした水面に静かな波をおこしながらこいでいったが、思いがけない向かい風だった。６時間もオールを使って、ボートをダムの後立山側に横づける。

〔タイム〕出発（９：００）ー黒四ダム堤（１４：５０）

後がき

成功の原因としては。第一に水量が適当だったこと。第二に小人数であったのでボートの損傷が少なく、さらに滝下りの際ほおり出されたり転覆を免れたためだ。

懸念していた保温は常時水中にあっても我慢できる程度であった。さらに滝壺にほおり出された時を考えて、はじめはゼルブストザイルを使ったが、足やオールにからみつくので途中からはずしてしまったのでその後はまったく不安はなかった。また２ｍ前後の滝なら転覆せずに乗りきれることが実証された。なお立石から東沢まで２ｍ以下の滝が１５.６個あったことを書きそえておく。

反省すべき点は防水に難があったこと。輪ゴムで袋の口をとめるくらいでは効果がなく、完全包装を考えるべきだ。

最後に

終始ライバルとしていた関大より早く、いわば初下降だと安心しているうちに彼らにさきに大々的な発表をされてしまった。まことに残念というべきである。今後の課題はやはり下ノ廊下から日本海だろう。さらに横雪期の沢ではゴムボートも機動化の主役として注目してよいと思う。

（阪大山岳部ＯＢ）

祖母谷ー室堂、小山行

１９６８年８月

メンバー　中岡(L)、石原、牧野（ＯＢ）、栗原（ＯＢ）

８月１８日　晴

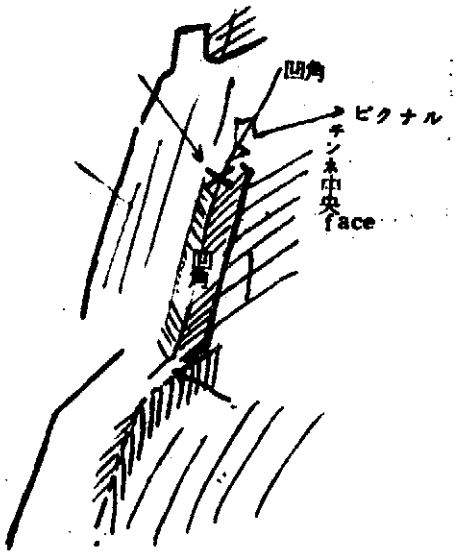
祖母谷

８月１９日　晴

祖母谷ーケヤキ平ー阿曾原ー仙人湯

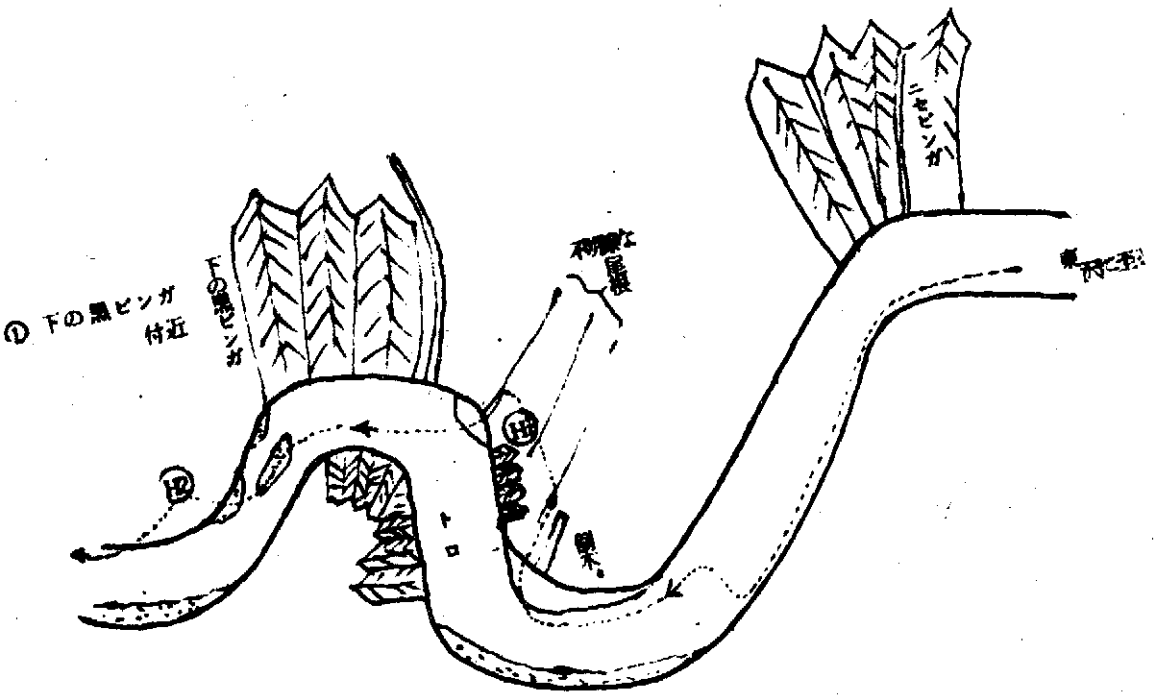
８月２０

仙人湯ー仙人岳ー二股ー剣沢ー雷鳥沢ー室堂ー下山



黒部上の廊下核心部

的場幹史



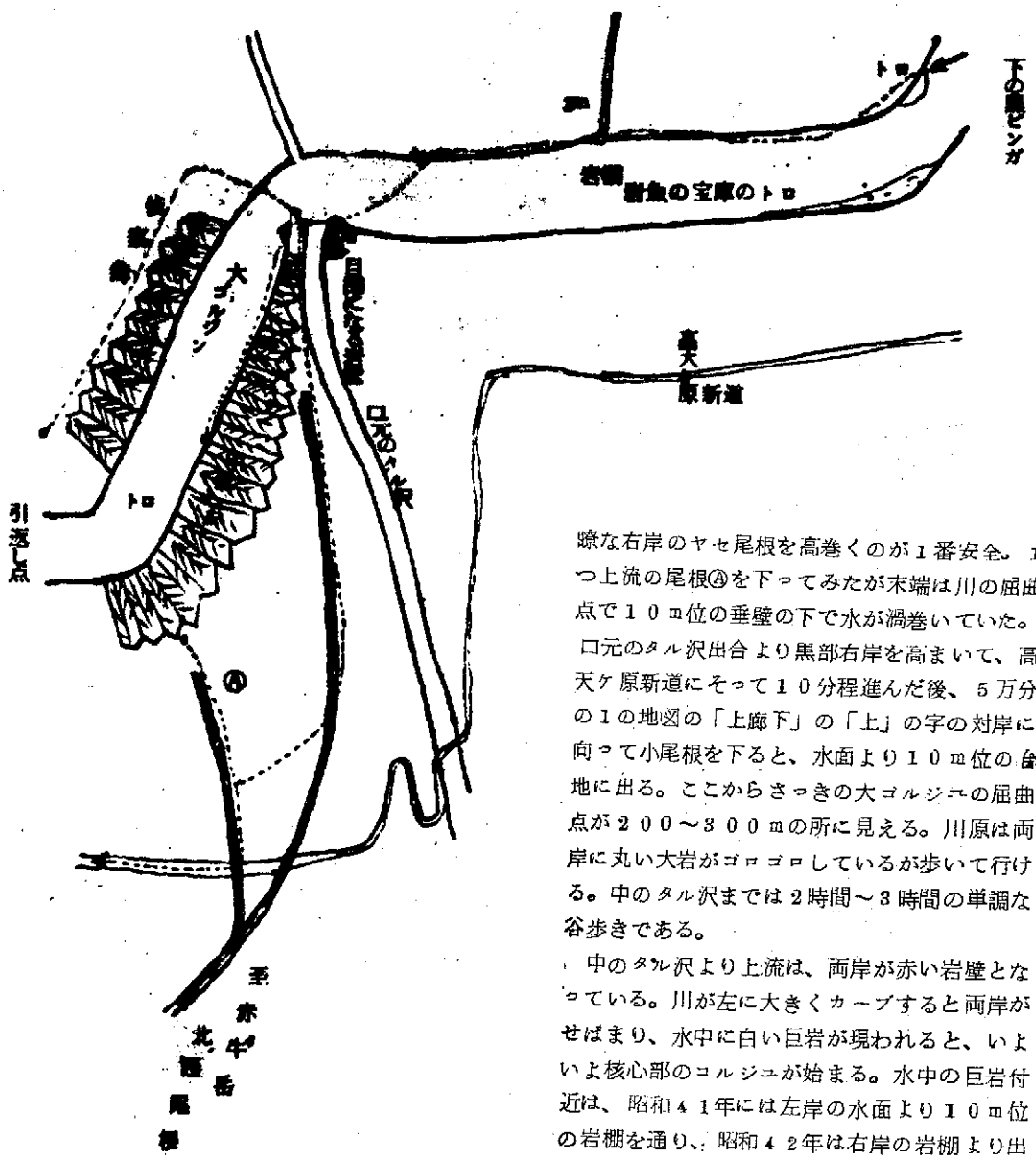
ニセビンガは下の黒ビンガ独特の菱形大ハングも無く又真中に大きなルンゼが入っている。
本物の下の黒ビンガはS字状に急激に屈曲した奥にあり、近付くまで見ることは出来ない。

問題となるトロは、水極端に少なければ、右岸水中を行けるが、高巻く時は左岸がよい。トロの左岸は、水流がぶつかり深いトロをなしている。岩棚を数mたどれば残置ハーケンがあるが、それ以上は無理、多分トロを泳いだ時のハーケンだろう。

㊐の高巻きは倒木を利用して草の深い斜面を30～90cm登り左手の小尾根状へ移る。尾根には太い木も生えている。尾根を数m登ってから水平にトラバースして小さなルンゼや尾根（共に不明瞭）を過ぎ2つ目の尾根を下る。この尾根は末端はちょっとした岩壁となり、簡単なクライミングダウンで川原の右の上に下れる。（10分位の高巻き）

㊐は水流が弱ければ右岸へ渡渉すればよい。5m位の高巻きである。

㊐を終ると明るいトロの左岸をへつって行く。ハーケンが途中2本ある。水の中や岸のバンドなどをうまく組み合せて行ける。3mの小滝が岩の上をすべって本流に下り、合流する所は広いテラスとなった岩棚で目前のトロには大きな岩魚が浮いている。（絶好の釣場）。前方の右岸には口元のタル沢出合の赤味を帯びた岩壁が見え本流は左に曲っている。



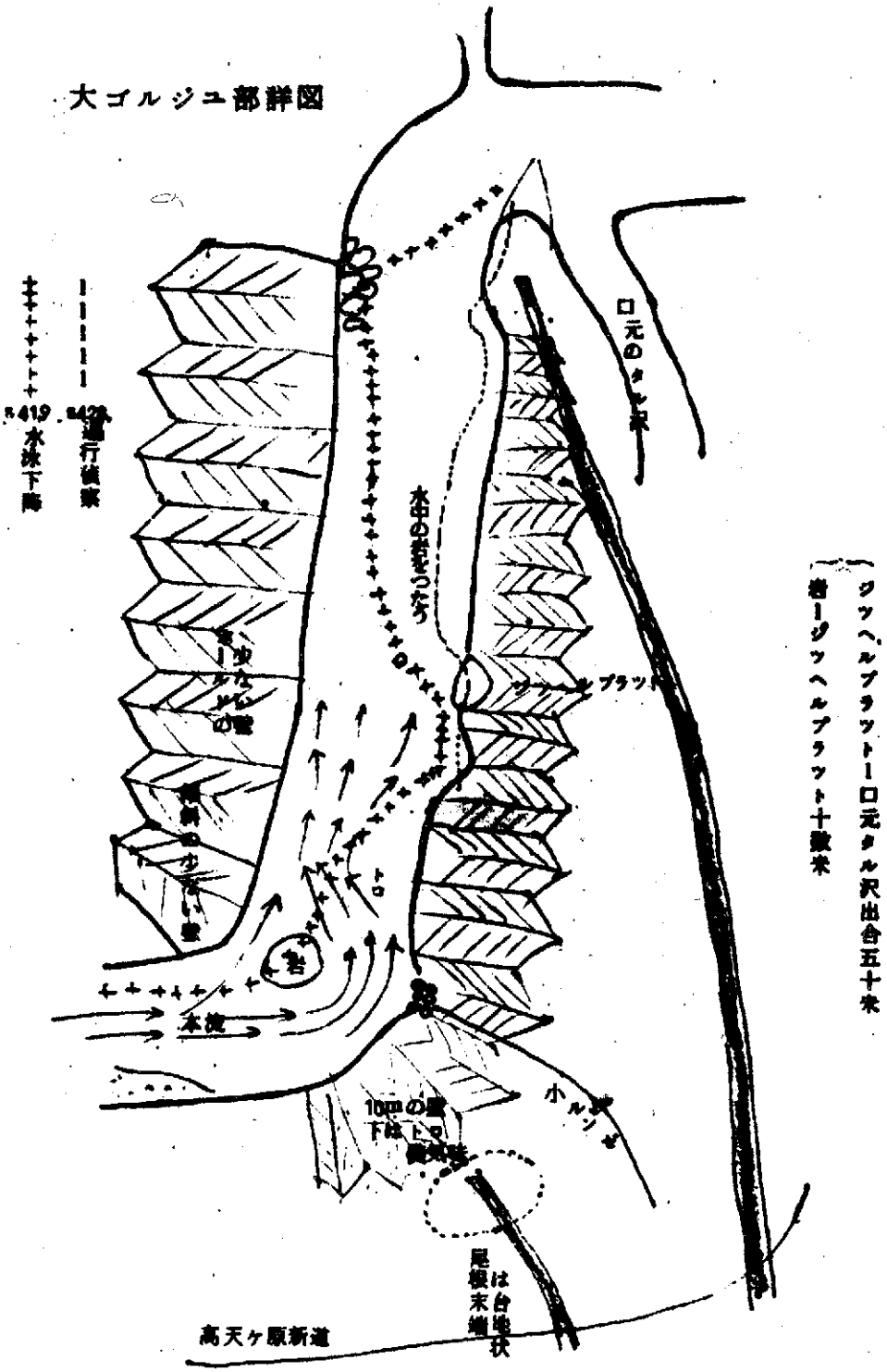
大コルジュは右岸の水中が浅い。最後の10数mは通過困難なトロ。左岸は岩壁中腹の竹の繁った草付斜面をトラバースすることも出来るが積雪期は雪壁となるのではないか？　踏跡明瞭な右岸のヤセ尾根を高巻くのが1番安全。1つ上流の尾根Ⓐを下ってみたが末端は川の屈曲点で10m位の垂壁の下で水が渦巻いていた。

口元のタル沢出合より黒部右岸を高まいて、高天ヶ原新道にそって10分程進んだ後、5万分の1の地図の「上廊下」の「上」の字の対岸に向って小尾根を下ると、水面より10m位の台地に出る。ここからさっきの大コルジュの屈曲点が200～300mの所に見える。川原は両岸に丸い大岩がゴロゴロしているが歩いて行ける。中のタル沢までは2時間～3時間の単調な谷歩きである。

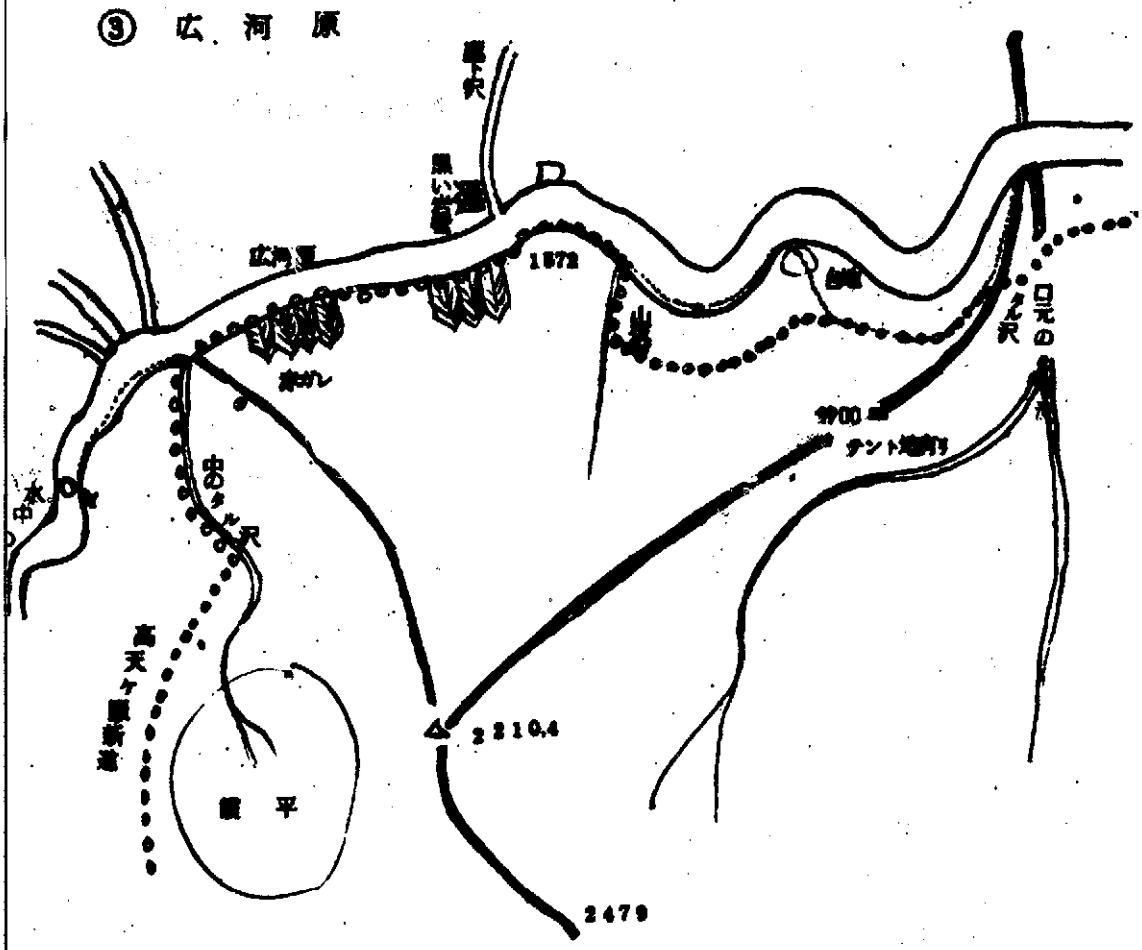
中のタル沢より上流は、両岸が赤い岩壁となっている。川が左に大きくカーブすると両岸がせばまり、水中に白い巨岩が現われると、いよいよ核心部のコルジュが始まる。水中の巨岩付近は、昭和41年には左岸の水面より10m位の岩棚を通り、昭和42年は右岸の岩棚より出口のルートフアインディングでクライミングダウンして水際に下って通過した。

上の黒ビンガの下は大きな岩棚が発達して簡単である。金作から見える大岩壁はBであって中央に赤味を帯びた崩壊部がある。AはBよりスケールがやや大きく、完全な黒い壁である。B

大ゴルジュ部詳図


口元のタル沢
水中の岩をつたう
ジャンプ
トロ
岩
本流
10mの壁
下はトロ
小ルンゼ
尾根末端は台地状
高天ヶ原新道
ジャンプ
岩
ジャンプ
ジャンプ
ジャンプ

③ 広河原



の下のトロが通過困難、B、C間はかなりの廊下状。

S42年ルート

Ⓑ手前の大岩（直径4m）まで行ったがそれより上には行けない。引き帰して急流をザイルを使って右岸に渡り、岩のルンゼを登る。下の方の巾1.5m位のルンゼで上部は巾50cmのチムニー変る。ルンゼ以外のルートでは、ルンゼ右側のリッジでもよい。

100m程登ると、急なブッシュにとびこみ、さらに100m程登ってから右にトラバースする。昔の東京電力歩道のあとが所々かすかに残っているがそれ以外はすごいブッシュである。

金作谷出合まで直線距離1Kmであるが、2本の沢（支流を合わせると3本）をトラバースして金作谷出合の上流500mの広い草付斜面を下った。

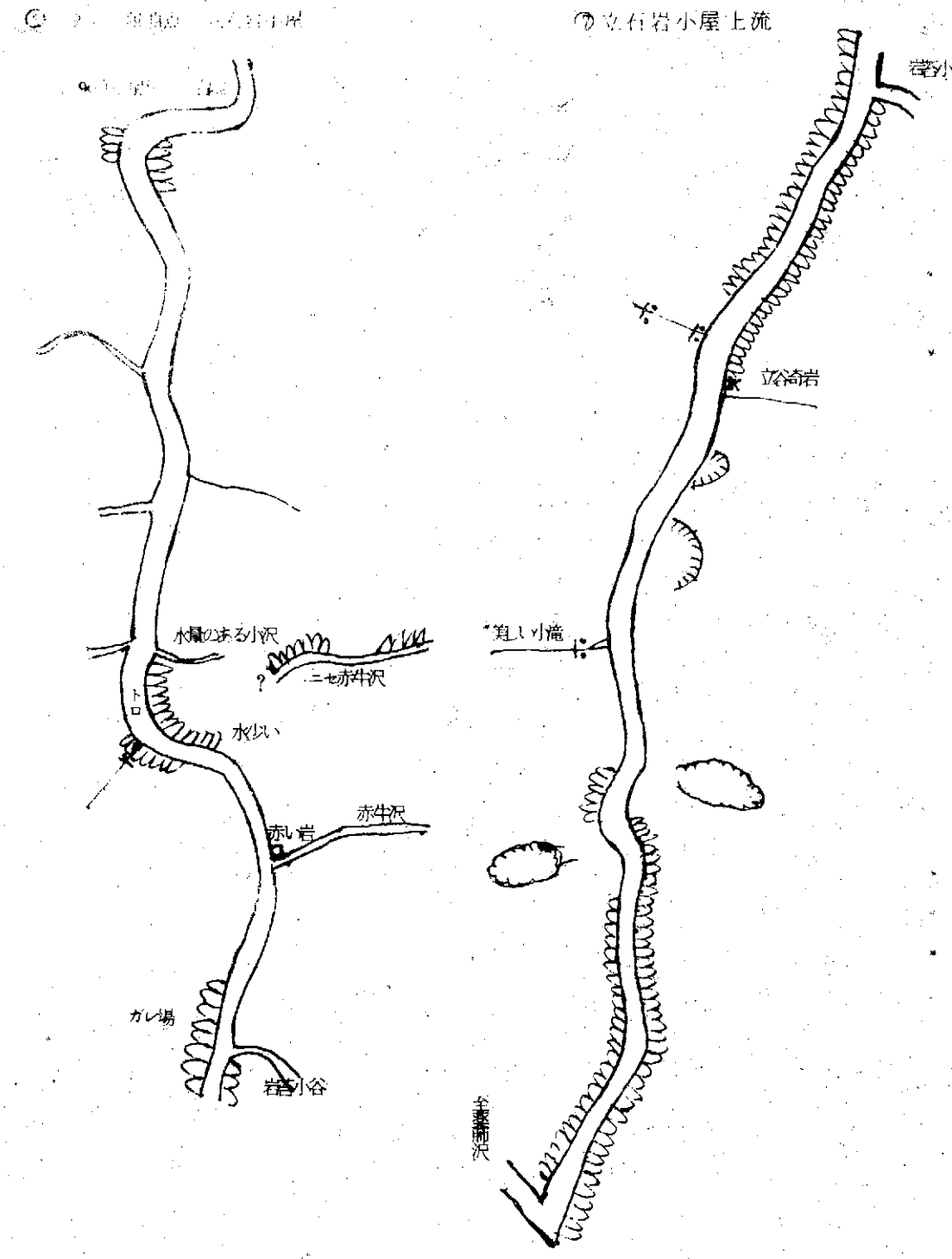
S41年ルート

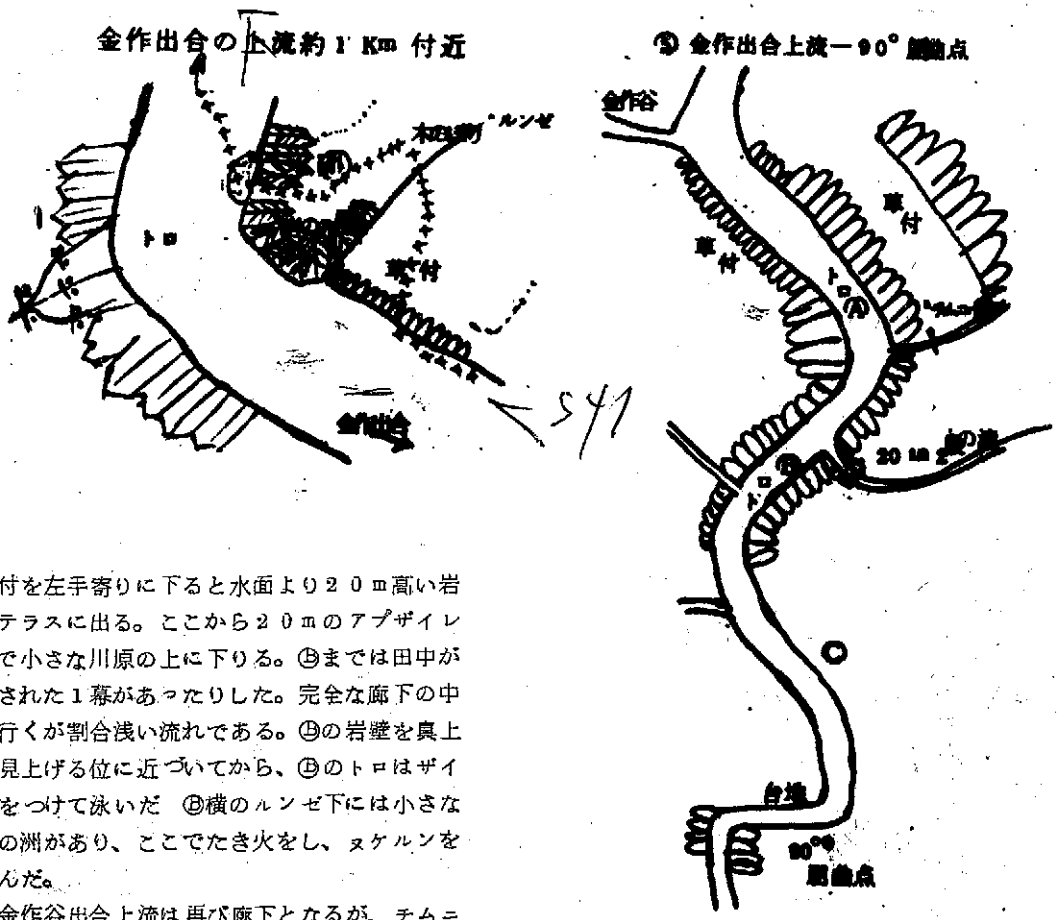
金作谷出合より水辺や水中の浅瀬を下る。Ⓒのトロは通過不可、Ⓒ手前の右岸の草付を登り左にトラバースしてルンゼを横切り、低木の密集にとびこむ。

ここは屈曲点の真上であり、水面から100m位。対岸の薬師側は沢が幾本にも分れた滝となって岸壁にかかっている。

まず、右手寄りにアブザイレンで15m下り、

④　上の黒ビンガー金作出合





草付を左手寄りに下ると水面より２０ｍ高い岩のテラスに出る。ここから２０ｍのアプザイレンで小さな川原の上に下りる。Ⓑまでは田中が流された１幕があったりした。完全な廊下の中を行くが割合浅い流れである。Ⓑの岩壁を真上に見上げる位に近づいてから、Ⓑのトロはザイルをつけて泳いだ　Ⓑ横のルンゼ下には小さな石の洲があり、ここでたき火をし、ヌケルンを積んだ。

金作谷出合上流は再び廊下となるが、チムニー滝の屈曲点までは左右の岩壁の上に草付が有り高巻くことが出来る。

Ｓ４２年の時はトロⒶ、トロⒷ共に右岸を空身でへつることが出来た。減水時には右岸の水際を、岩棚をつなぎながら行ける。トロⒷには余りきいていない残置ハーケンが２本ある。

チムニー滝対岸の薬師側岩壁は、圧倒的にかぶさってくる。チムニー滝は岩壁の屈曲点に有り、巾１ｍ奥行２ｍのチムニーの中を落下する。赤牛側は２００ｍ位上に霞平からのゆるい斜面がつながっていると思われる。

Ｓ４２年５月の偵察ではチムニー滝、２０ｍ２段の滝の両者共下れず、Ⓒ　点でやっと下ることが出来ることが判った。

トロⒶ右岸の草付は積雪期には雪崩をさければ使用可。

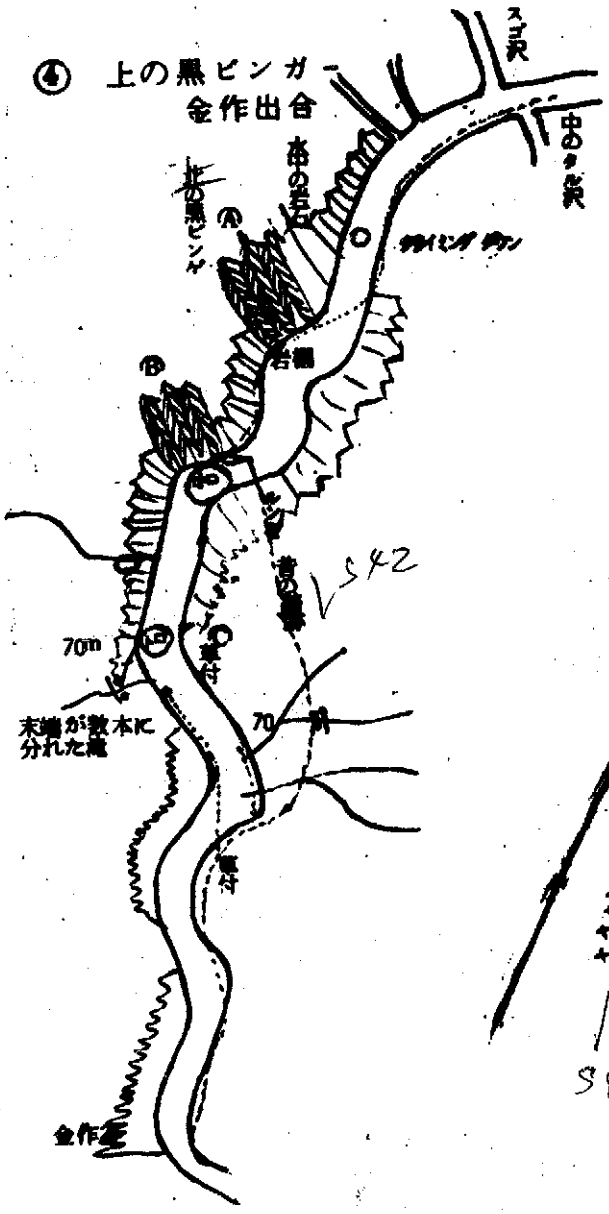
９０°屈曲点は右岸にちょっとした壁があるが、それより上流は明かるい谷がつづく。薬師岳カールからのガラガラの沢が次々と合流する。沢の大きさの割には水量が少ないのは、冬の雪崩の大きさを想像させる。

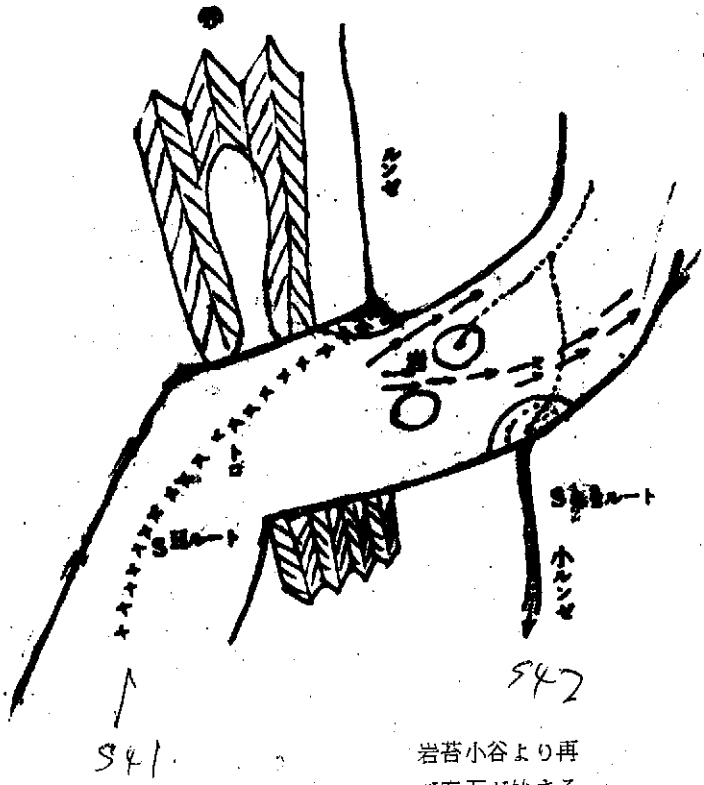
ニセ赤牛沢のトロは、右岸に噛み跡がはっきり残っているので問題はない。へつりには左岸が有望。

ニセ赤牛沢の落口は、トロの上流のガレ場のように地図に記してあるが水が無い。

トロの手前にはかなり水量の有る落口が有るが、その上流の沢が不明である。僕の想像では、ニセ赤牛沢の落口が地図より変化してトロの下流になっているのではないか。

赤牛沢の落口には、高さ数ｍの赤い壁が１個の





岩のように見える。左岸に砂のガレ場が落ち込む と岩苔小谷である。
立石の岩小屋は、岩苔小谷の三角洲にある。4～5人の宿泊可

岩苔小谷より再び廊下が始まるが水量はかなり減少している。
岩壁の高さも低く、「明るい廊下」の感がある。
左岸に滝が合流すると右岸に立石奇岩が現われる。
（的場　記）

１０月　山　　行

南アルプス北半

日程　１０月８日～１０月１５日

パーティー　的場(L)　石原（ＳＬ）　寒川（気）
稲垣、大西（食記）

１０月８日　晴　　峠３：４５ｓｔ　バス　駒ケ岳神社４：３５－ＣＳ４：４５

変化する車窓の景色に、山への期待を秘め、やっと汽車から降りる。俗界から離れ、孤独の生活に入ろうとするものが、逆に人をなつかしむのは不思議な現象だ。　峠で今晩のおかずやデザートを買い、明日への活力を養おうとする。テント地に着いた頃あたりは秋のあのすきとおった様な雰囲気の中に紅葉の華かさをかもしている。程なく暗くなり、長い汽車の疲れをシュラフでとろうとくずれるように眠る。この南アに、どんな自然が隠されているか、どんな収獲があるのか。

１０月９日　駒ケ岳神社５：３０ｓｔ：笹平８：２５－刃渡り１０：０５－五合目小屋１１：４０－７合目小屋１２：５０

東の空がうっすら赤くなる頃、肌寒い中を駒ケ岳を目指して登り始める。稜線に出て刃渡りを快い程のピッチで渡る時には富士山の真上にある太陽がまぶしく照りつけ、夏山を思わせる暑さに汗がにじむ。刃利天狗に来た頃に１年の昼メシは無くなり、樹林の間を吹き抜ける風が汗と共に体温を奪うのでなんとなくわびしい虚無感の様なものがおそう。しかし前方に駒ケ岳のあの白い岩稜を見た時には、充実し、常に発展している人間が共通に持つ一種の緊張感を感じる。七合目まで木のハシゴ登りで高度をかせげる。

１０月１０　晴後曇

５：２０ｓｔ－駒ケ岳頂上７：４５－仙水峠１０：００－北沢峠１０：３５－馬ノ背小屋２：３０－仙丈小屋３：４０

駒ケ岳の頂上まではすごい登りで途中２－３ケ所岩登り的スリルを味わう所がある。頂上に登り着くと同時に３６０°の大パノラマが全員の目を奪う。北アルプスのスカイラインがコバルトブルーにくっきり浮び、富士はその雄姿をまわりの山々に誇るように頭をもたげる。この景色を観ただけでもはるばる南アルプスまでやって来た価値がある。しばらくして、駒に背を向け、北沢峠まで下る。うっそうとした樹林帯の中を全員膝をガクガクさせながら下る。

しかし楽勝ムードはここまで、仙丈小屋までの登りに石原が腹痛をおこし馬ノ背小屋付近から調子がおかしくなった。と同時に全員の呼吸が乱れ、最後の１ピッチが非常に苦しくエベレストの最後の登りのように思えた。

１０月１１日　快晴

仙丈小屋６：１５－仙丈岳６：４０－高望池９：２０－横川岳１１：００－両股１２：０５

小屋泊りは非常に寒い、マッチの火も凍った様に青白く光り、熱を持たない如くにゆらいでいるのだ。今日も天気は良いし、ついている。仙丈のピークにひっそりと立つケルン、このケルンにどんな歴史があったのか、今日も又同じように北岳の影を写してひっそりと立っている。中ア、北アが雲海に浮き船のようにゆらゆら揺れている。快調なペースで馬鹿尾根を通過？　いやはや全く倒木が多い。両股では久し振りの沢音に眠けをもよおす。この南アルプスの真中で孤独感が身体中をかけめぐる。

１０月１２日　快晴

ｓｔ６：３０－大滝７：３５－北岳頂上１１：３５－稜線小屋１２：４０

海抜２０００ｍ近くの低さなのに、テントが凍りついている。大滝の素晴らしさに時間の経つのも忘れる程だが、そうする事を許されない我々は北岳目指して急な道を喘ぎながら登る。一歩で５０㎝も登ると思える登り、カン木がやがてハイ松に変り、それもなくなる頃、北岳直下５０ｍの所に居た。この頃気圧の谷接近で中央アに異様な雲がひっかかっている。今日は途

中１人しか出会わずやはり秋の南アとなると、もの好きも少ないのだろう。しかし５人の馬鹿どもはただひたすらに歩む。今晩は３０００ｍの稜線での露営、しかし寒さは余り感じない。徐々にガスが北岳、間の岳をつつみ明日から天候が悪くなるのを知らせているようだ。いつしか暗くなり、谷から吹き上げてくる風がまともにテントにあたり、風に吹かれたゴミが人間を暗示するが如く闇に舞う。ラジオから聞える、ミス神戸（思いや、実はミスワカサ）の声が遠のいていくにしたがって我々は深い眠りに入って行くのだ。無意識の中で農鳥岳や塩見岳が唸りを上げている。

１０月１３日　快晴後曇

ｓｔ６：００―間ノ岳８：０５―農鳥岳１０：２０―広河内岳１１：２０―池ノ沢小屋２：４０

朝方は風が強く、テントが激しく揺れ、ボロテントは今にも太平洋の彼方にぶっとびそうだ。間ノ岳の登り、農鳥岳の登りは寒風が鼻をもぎそうな程吹き、ザックで自由のきかない身体は左右にフラフラ傾く。しかし今日も天気はもちそうで、計画通り池ノ沢小屋までいけそうだ。広河内岳からの下り道を見失い、ルートファインディングに３０分間費した後、頂上に戻り、池ノ沢を下る。廃道となっているが上級生の適切な指示により予定より早く下れた。ここで歩きながらも辺りの紅葉の美しさに目をやったり沢の何とも言えない音に耳を傾ける余裕が出てきて、山岳部に入って初めてと言って良いぐらいの楽しい山歩きが出来た。

１０月１４日　雨　停滞

予想どおり、朝から雨が降り出した。いかにも秋雨を思わせるように、もの悲しく木々の葉や、土にまみれた落葉を打つ。むしょうに人を恋しく思い、今自分がここに存在しているのが不思議なような、わびしいような感情にかられる。

１０月１５日　晴後曇

ｓｔ４：３５―源頭テント地７：１５―塩見岳８：４５―権右衛門１０：１０　三伏峠１２：１０―塩川２：１５―鹿塩３：５０―４：４０バス

３ｐｉｔｃｈ歩く頃尾根を白くそめた太陽の光がようやく谷へも注き込み、下山という何か後めたい気分を一掃するようである。岩の上の水は凍りつき、幾度も足をすべらせながら、やっと稜線に出た頃には太陽が山行成功を祝福するように照りつけている。

最後のピークに立つと昨日までの山々が何の動きも見せずに静かに横たわっていた。

（大西記）

魚沼パーティー

メンバー　Ｌ山田（３年）、中川（１年）、黒岩（１年）

行動概要

１０月１０日晴

小出（１０：２０）バス―大湯（１１：１０）―駒ノ湯（１１：５０～１２：３０）―小倉山（１７：００）―ＣＳ（１７：１５）

駒ノ湯で水補給の後、小倉尾根へと取付く。山日記とはえらいちがいで山頂に着いたら１７時。南側の草の斜面に露営。水は縦走路から５分下った沢から取る。

１０月１１日　晴

ｓｔ（７：５０）―駒ケ岳（１０：３０～１０：４５）―中ノ岳（１４：４０）

駒ノ小屋で登山カード提出。駒頂上からは信濃川が眼下である。郡界尾根は地図ほどやせてはいなかった。中ノ岳までカン木帯の道、１ケ所左側が大きく切れた所があるが他はたいしたことなし。魚沼でいえることは尾根の中復に岩壁が発達している。又沢には雪渓があった。中ノ岳に設営。水は池塘の水をこして使用。

１０月１２日　晴後曇

ｓｔ（６：５５）―１７００コル（７：２５）―最低コル（８：４０～９：００）―八海山（丸岳）（１１：１０～３０）―最低コル（１３：４０）―帰幕（１６：１０）

八海アタック。昨日見たところ相当な高度差があってやる気減退。しかしとにかくｓｔ。最

低コルまでで朝つゆにぬれて下半身はびしょぬれ。１ヶ所クサリとｆｉｘがある。最低コルから１３４４ｐまでは両側が数百米に切れおちたやせ尾根であるが樹林が発達しているので恐怖感はない。登り下りが多いので以外に時間をくう。八海山は丸岳までとし大日山のアタックはとりやめとする。帰りもやはり同じように時間をくい最後の登りで黒岩が完全にｄｏｗｎ。

冬期になれば下りはほとんどｆｉｘが必要で京大の延２０００ｍのｆｉｘも十分にうなづける。水無川源流は滑滝多く面白そう。

１０月１３日　曇

ｓｔ（７：００）ー兎岳（９：０５～１０）ージャンクションピーク（９：３０）ー１７００ピーク（１２：１５）　１７５０ｍｐｅａｋＣＳ（１５：３０）

兎岳までは割合よい道があるが兎をこえると単なる切開さのみとなる。高峰経大ＷＶが本格的切開きを行っており１７００ｐｅａｋまでは楽にいけると思っていたら、彼らは途中で切上げており１７００ｍｐｅａｋを中心として本格的ヤブこぎとなる。このピークをすぎると核心部は終了。あとは踏跡がついて楽であるが再び黒岩がｄｏｗｎ。１７５０ｍの三角点を抱いてテント設営。水は尾根から１５分東側に寄った沢からとる。高度差１００～１５０ｍ。

１０月１４日　雨

停滞

１０月１５日　ガス後曇

ｓｔ（６：５５）ー劔ヶ倉山（１１：３０）ー平ヶ笹（１３：２０）ー白沢山（１４：４０）ーＣＳ（１７：１５）

今日頑張ったら尾瀬までいけるとおだてておいたので１年が非常に張り切る。劔ヶ倉山手前が少々Ｂｕｓｈがきつかっただけであとは楽。しかし期待していたその先の踏跡はササのために判らず平ヶ岳まで相当やぶこぎをしいられる。しかし頂上近くになると湿原が広がりはっきりした道も現われる。山頂では１５分間三角点をさがす。平ヶ岳から白沢山までは完全に道があり非常にはかどるが白沢山をこえるとササのために完全に行きづまる。１９１８ｍピークを通ったあたりに幕営。

１０月１６日　ガス後曇

ｓｔ（６：４５）ー大白沢山（８：００）ー景鶴山（１３：００）ー山ノ鼻小屋ＣＳ（１６：００）

みじめな夜であった。朝からガス。大白沢山への尾根の分岐で少々リングワングリングをやりかけるが磁石で方向を決めてどうにか大白沢山の影をみとめる。相変らずのササこぎである。景鶴の手前で最高の猛烈なヤブをこいで景鶴へつく。下りは道がある。道は非常に楽である。尾瀬はカタスゲの枯野原で感激はなかった。

１０月１７日　晴

ｓｔ（７：１０）ー鳩待峠（８：００）ー戸倉（１０：３０）

鳩待峠までは紅葉の中を急ぐ。戸倉へつくとすぐバスであった。

（山田記）

六兵衛谷偵察

１０月９日～１０月１７日
L竹林（３Σ）　田村（Ｌ２）
１０月９日　晴
　蓮華温泉ー瀬戸川製練所跡
１０月１０日　晴
　ＯＳ一雪倉鉢コル避難小屋
　２日前の新雪で山は薄化粧。紅葉。秋山の感強し。空気とたばこがうまい。蓮華温泉からの山麓コースは道よくメッチエンコースだろう。
１０月１１日　快晴
　出発６：３０。７：３０　２４２０ｍの針岳下の三角点８：３０までそのまま尾根下降、沢すじを見るためトラバース小ルンゼを４本越し地図で六兵衛の左右ガレ分岐付近に下りている尾根にとりつく（１０：１０）標高２０５０ｍか。その地点より沢上部（２０００ｍ付近）に２０ｍ程の滝を見る。尾根をそのまま忠実にワンピッチ下る（１０：２５）と左右ガレた出合の横につく。その地点より小尾根が分岐しこちら側から沢にルンゼが流れこんでいる。沢より尾根にとつつくのは少し急だがかなりブッシュがあり、不可能ではないだろう。沢筋はかなり横に広くその地点にかぎれば沢歩きは可能。左股ガレは意味（遡行の目的に値するもの）なしと見た。ワクワクしながら、きようはこれまでとする。帰途（ｓｔ１１：００）は下った尾根をリッヂ伝いに登る。１２：３０にトラバースを開始したルンゼ横に達する。従って尾根下部には地図上で判読できない小ルンゼが多数あるものとの見解に達した。ルンゼを上り（１３：００）に２４２０の地点下の台地状に開けた所に出る。ビバーク可。ワンピッチでケモノ道の多い針葉樹林を上り２４２０ｍにつく。２４２０ｍは広い台地、池トウありビバークに適す。白馬、旭の白黒の烈なコントラストが印象深い。ガスわき始め、避難小屋まで１時間たらず。
１０月１１日　晴後曇　４：００起床
　天気図が勇断を許さず、行動時間を短かくして、直接沢下降を試みる。それも２人ｐａｒｔｙという特殊性から決して無理はしないということで、６時避難小屋下のルンゼを下降。水は涸れており下降容易。可視範囲であそこまではあそこまではと言っている内にかなり下降する。この調子ならと希望をもつ。６：３０沢上部ルンゼの分岐点（３本のルンゼ）。右股より雪どけの水がそそぐ水流はたいしたことはない。
６：５０　５ｍ余の滝。クライミングダウンで滝横のカベを簡単に降りる。帰途を考えることはもちろんである。その滝下より段状に沢は高度を急速に下げている小滝の連続。７：１０～３０、２つで１０ｍ程の２段の滝。ザイルをだしして滝中段より左岸から右岸へトラバース簡単。ハーケン必要なし。すぐ下に１０ｍ余の滝らしい滝が行手をはばむ。左岸の斜面が小尾根にはさまれたルンゼ状になり、そこを下りぎみにトラバース。この斜面（鉢岳側）は鉢からの大きな尾根の末端部にあたると思う。滝下着（８：１５）
滝下より鉢側に短いルンゼが走っている（傾斜急）。８：３０　２０ｍの二段滝上部。つぎからつぎへの滝の出現を予想していたものの、ちょっと当惑。荷を沢にのこし、小一時間偵察。カラ身で容易に滝下に降りるトラバースルートを見つける。滝下より上部二股の大ルンゼが鉢側にあり、トラバース下降はそのルンゼを経た。ルンゼは滝なくガレガレでやさしい。この滝が昨日尾根より見えたものらしく、遠くからみた感じより水量ははるかに少い。この下より沢は地図上でも判明しているように大きく下に向って右にまがる。９：４０荷を滝下におろし、時間の都合で、今日の目的達成という成果もあつて、ひきかえすことにする。滝下の鉢側ルンゼをのぼってみることにし、１０：２０休憩、腹ごしらえの後、上部２股の右側のガレをのぼる。まったくのゴルジュであるザクザクで４０分。息をきらして登りきるとすぐ尾根に出た（１１：００）。２股の左側の方は大きく上にむかって右に迂回し滝多そう。尾根から小ルンゼをこして向いの尾根を偵察すると、そこは昨日の１２：３０の地点であることが判る。思わずカンセイ！　沢上半の尾根の概略が頭の中でできあがった。そのままその尾根に移らずゴルジュ

上部の尾根を２４２０ｍにむかってのぼる。予想通り２ピッチで２４２０ｍ楽勝の感強し。（１２：３５三角点）小屋着１３：４０

１０月１２日　雨　停滞

１０月１３日　曇　ガス　停滞

エビのシッポの発達

１０月１４日　曇　ガス

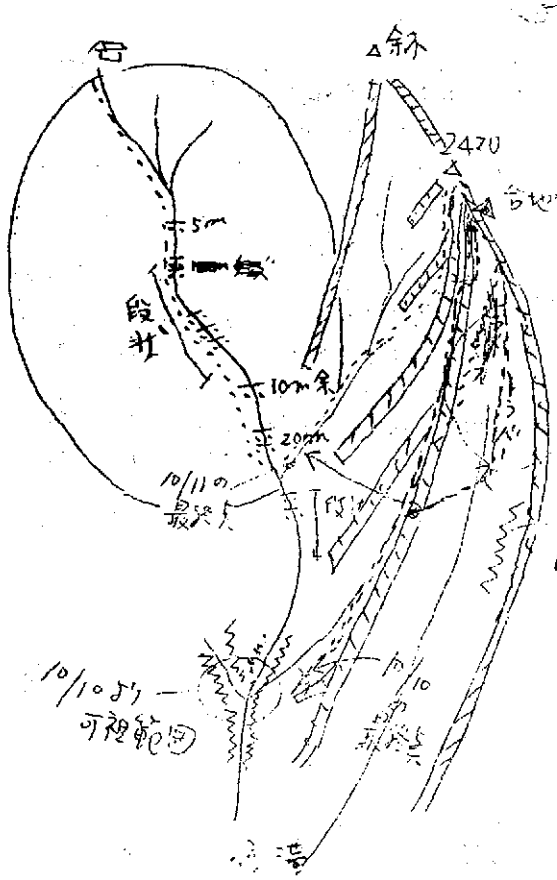
小屋ー白馬山頂

１０月１５日　曇

白馬→下山

（感　想）

あと一歩というところで天気待ちになってしまった。ガスが終日谷をうずめ２人partyとして目シュクした。でも六兵衛沢完全ソコウは時間の問題であると確信する。



穂高山行

メンバー　Ｌ甲田吉彦　Σ３

栗原完治　Ｊ３（ＯＢ）

期間　６７　１０月１７日～１０月２２日

コース　明神東稜ー前穂ー奥穂ー北穂滝谷第２尾根中間稜faceー北穂ー槍ケ岳ー槍平

１０月１７日　曇後雨　松本ー白沢出合

松本で買物を済ませて１３時上高地入り。雨が降ってきたので、白沢出合の橋の下に設営。

１０月１８日　曇　白沢出合ーひょうたん池

相変らずのガスである。明神池裏から、下宮川を経てひょうたん池まで行く。

１０月１９日　快晴　ひょうたん池ー明神東稜ー穂高小屋

一体に明神東稜には、pointと思われるところにはfix が残っていて、ルートを易しくしている。第１階段然り、本峰直下の凹角ルート然りである。荷が思ったより重く、２７kg位か。重荷の岩登りはしんどい。別に苦労したところはなく、教科書通りに明神岳主峰に達する。あとは、稜線をトコトコ歩いて奥穂、穂高小屋の横に設営、着くとすぐに暗くなった。

１０月２０日　快晴　穂高小屋ー滝谷第二尾根下降ーＰ２中間稜ー穂高小屋

南峰と北峰のコルから第２尾根主稜を下降、踏み跡をたどり、頃を見はからって（Ｐ４から）北山稜にトラヴァース。北山稜を登っているつもりがＰ２から派生している中間稜に取付く。１Ｐ目、かなり傾斜のある、岩のブロックを積み重ねたようなところを登る。浮石だらけでイヤだった。しばらく、コンティニュアスで歩き、２５ｍ位の傾斜８５°位のすっきりしたfaceに出くわす。傾斜があるが、faceを右上にクラックが走っているので（しかもハーケンあり）取付く。最初の数ｍが緊張しただけで後はネチネチ登り栗原氏を迎える。

後は時間もないので、フリーで登れるところを適当に楽しみながらＰ２，Ｐ１を越えて往路を帰る。

１０月２１日　ガス濃く、風強し　穂高小屋ーキレットー南岳小屋

岩々にベルグラが発達。唐沢岳の下りが真白で、岩にうすく氷がついていたりしていやだった。北穂のpeakではガスの切れ目に見える槍が印象的だった。北穂の下りも、まっ白で難渋。アイゼンをつければ解決するのだが。

１０月２２日　ガス濃く　風強し　南岳小屋ー肩の小屋ー新穂高温泉

雪に見え隠れする夏道、ケルンをひろって、トコトコ歩く、途中、迷路注意の場所（南岳、中岳のコルへの下り口）で３０分程時間をロスする。肩の小屋でお茶を飲んでいるうちに、話は下山と決り、槍平に一気に下る。暗くなって新穂高に着く。足の靴ずれの痛い一日だった。

ＯＢ氏との２人旅。何とも御機げんな山行であった。大いにのんびりと山を楽しみ、チョッピリ風に吹かれて、新雪を踏みちらす穂高の稜線、これは小生の感傷であろうか。

（甲田記）

１１　月　　山　　行

水晶荷上げ（春山用デポ）

１１月１日～７日

メンバー　Ｌ甲田、的場、田中（３年）　出口
　　石原、田村、松林（２年）　稲垣、
　　中川、黒岩、大西、寒川（１年）

１０月３１日

急行日本海にて大阪出発。

１１月１日　晴　ワサビ平ー大ノマ乗越

１人５０Kg近い荷物に、目標である大ノマ乗越まで行くことが出来ない。２５０Kgの荷物を大ノマ沢下部にデポし、的場以下６名は甲田以下４名をサポートして３５０Kgの荷物を大ノマ乗越にあげる。行動終了午後９時

１１月２日　晴後雨　大ノマ乗越ー双六小屋

甲田パーティは３５Kgづつダブルで双六小屋に、的場パーティは大ノマ沢下部より３５Kgシングルで双六小屋に集結し幕営。夜半に浸水しコッヘルに２７はいくみだしても、無駄に終る。

１１月３日　風雨。停滞。

１１月４日　晴　双六小屋ー三俣小屋

３分の２の荷物を三俣に集結後、的場以下５名は残りの荷を双六まで回収に行く。甲田以下３名は、源流偵察に行き、帰りが午後７時半になり皆心配する。

１１月５日　雪　停滞

１１月６日　曇　三俣小屋→水晶小屋ー三俣小屋

無事に水晶小屋跡にデポを行い（１３：００）甲田、松林の２名は後立縦走に向う。残りは三俣にもどる。

１１月７日　晴

下山

双六から後立縦走

１１月１日～１１月１７日

メンバー　Ｌ甲田（Σ３）　松林（Ｔ２）

最近、小生には、個人山行が多い。自分の山登りが出来るからである。一体、山登りとは、個人の感情の発露だと思っている。合宿とは、

その個人々々の想いが、大方において一致した時にもたれるものだとも考えている。

計画は、荷上げの後、およそ、2週間の予定で白馬まで行って、冬山に登る、白馬から西に派生している突坂山へ下る予定だった。

2人で、しかも、11月にこのような計画は当然リーダー会や、OBあたりから色々注文もでたが、とにかく、やってみるより外はないのである。

11月6日　曇

13：00赤岳－14：30東沢乗越

13時、他の部員達に別れを告げて、ガスに見えかくれする東沢乗越へ下り始める。荷は34Kg位。雪は新雪で軟く、アイゼン全くきかず、春よりも難渋するが、1時間半で最低コルへ着く。

11月7日　快晴

7：30CS出発－9：30野口五郎小屋

10：10同出発－13：00烏帽子小屋泊。

アイゼンはよく利く。ボッカの疲れのため、疲れが著しい。今年は例年に比べ本当に雪が多く、春山みたいだ。休養のため、烏帽子小屋で泊る。

11月8日　晴後曇立冬

7：30烏帽子小屋－8：30分岐点　10：15南沢乗越－11：30不動岳peak　－13：00　2291mpeak－14：30船窪岳

南沢岳の下の池の氷を割って、久しぶりにうまい水を飲む。このあたりから船窪岳のpackまで終始ブッシュこぎ。しかも、膝までもぐる大根オロシ状の雪に、アルバイト著し。雲は悪天の到来を告げている。

11月9日　曇

10：55出発－12：30　2280peak－13：00船窪乗越－14：40船窪取付（針の木谷出合）

今日は沈と決めこんでおいたのに、青空さえ見えはじめた。9：15分の天気図では好天の兆し。とにかく出ることにした。昼前だ。今日のコースは急な登降が次々とあらわれ、そしてナイフリッヂが多い。足もとが定まらず、慎重を要した。乗越への下りは、かなり急だったが途中から針の木谷へ下っている沢へシリセードする。はやデブリもみられた。途中15m位の滝が3つあったが、共にダイレクトに降る。

11月10日　地吹雪

7：15船窪取付－9：45針の木小屋10：50出発－12：30針の木岳－14：10マヤクボ谷のコル

雪に見え隠れする夏道を行く。針の木小屋はひどく汚いが、うれしいことに、ゴミカンには残りものが一杯あった。大休止の後、針の木岳への登りでアイゼンをつける。

最初、稜線通しに行くが、岩稜がえらくショッパクなってきたので、岩峰の下をまいて一つ手前のピークに出る。ピークから四方の眺望は最高に素適だ。黒四ダムが眼下に、ふりかえれば槍穂高連峰から南ア、富士山までが雲の上に見える。後立連峰に目をやれば、鹿島、鑓、さらには白馬までが我々を待っているように、ガスの間に見えかくれする。はじめ、稜線を下るが稜線は岩稜となり、一つの岩峰で、下降不能となり小スバリ沢源頭を下降気味にトラヴァースする。数分下降を続けるが雪硬く、傾斜は45°を越えているかとも思われた。ザイルを出しスタッカットで行く。1p半で安全なところに出る。この下りに1時間を要した。

11月11日　快晴　今秋最低の気温

7：20出発－7：45スバリ岳－9：00赤沢岳－9：55鳴沢岳－11：15新越乗越－12：45岩小屋沢岳－14：30種池小屋

スバリ岳への登りは、バンド状のトラヴァースが少しショッパかった。下りは針の木の下りに劣らず急だ。ザイルは出さなかったが、二年生には、少しキツかったかもしれない。この日かなり距離をかせいだ。連日行動で疲れ著し。

11月12日　終日猛吹雪

11月13日　ガス後快晴

11：30種池小屋出発－12：30爺岳13：15出発－14：30冷池小屋

天気待ちで出発遅れる。爺岳のpeakに立つ頃にはすっかり晴れ上り、まわりはパノラマの様だ。特に安曇野への田園風景が印象的だった。

１１月１４日　快晴

７：２５冷池小屋出発－９：４５鹿島槍南峰１０：１０同出発－１０：４０コル１１：４５出発－１２：００北峰－１４：００八峰キレット－１５：１０キレット小屋

小屋からは、昨日に続き太もも位のラッセル。１時間余り歩き、やっとアイゼンが利き出す。南峰に立った時、一橋大ｐａｒｔｙが時を同じく登ってきた。写真を撮ったり、煙をすったりして、難場を前にしばし憩う。一橋大Ｐはそのまま往路を引き返し、後立の盟主鹿島槍２８９０ｍには、我々２人が居るのみ。南峰から、コルへ下る時、はやくもザイルを出す。コルに着いて、ルートをさがす。大体、今回のコースについては事前に何の資料も読まなかった。さて、ルートとして北峰からダイレクトに下る。北峰のケルンの直下は荷をザイルでおろして、空身で下った。はじめの２０ｍ位は、垂直に近かった。あとはノンザイルで行く。急なリッヂを、時には巻き、時には後向きになりながら、キレットには、黒部側から降り立つ。鎖が出ていた。キレットからは、カクネ側をトラヴァースして出るのだが、このトラヴァースがいやらしく、ザイルを出す。キレット小屋へは、鎖で導かれた。

１１月１５日　ガス　停滞

１１月１６日　快晴、強風

７：３０キレット小屋－１１：００五竜岳－１２：００五竜小屋－１５：１５唐松小屋

五竜岳までは、凸凹の激しいナイフリッヂが続くが、予想より易しかった。２５４７ｍのピークからのリッヂと、五竜の登りが慎重を要するところだ。五竜岳からは、稜線通しに行く。快適だ。白岳からラッセルにアルバイト著し。牛首の登りでバテ気味。やっと唐松小屋に着く。

１１月１７日　快晴

唐松小屋－不帰の　一鐘温泉

天気図は、悪天の来ることを告げている。しかし、雲の様子を見ると、なる程、収れんしたウロコ雲が見られるが、南に片寄っている。迷ったが雲の方を信じる。

昨日、気がついだのだが、連日アイゼンをつけて歩いて、しかも岩場も多くあったのだろうアイゼンが丸くなっていた。となると、非常に不安で一歩々々、蹴込んでいった。唐松岳までは何ともなく、三峰も、稜線通しに簡単に通過し、二峰へは、信州側の夏道を下る。しかし処々、岩に氷が張ったりしていた。二峰のピークは信州側のナダレそうな斜面を、ザイルを出して空身でラッセルする。一峰とのコルへは、針金や鎖に導かれる。天狗の大登りを、あえぎあえぎ登り、やっと緊張から解放された。最終下山日は明日なので、仕方なく鐘温泉へ下る。

何がともあれ、完全に計画を消化出来なかったが、小生にとって思い出深い山行だった。

（甲田記）

御岳アイゼン合宿

１１月２３日－１１月２５日

メンバー　Ｌ甲田、的場、岡田、竹林（３年）
出口、中岡、田村、石原（２年）
大西、黒岩、寒川、中川、稲垣（１年）

１１月２２日　夜　大阪出発

１１月２３日　晴

小坂口より入山。２０００ｍ近い濁河温泉までバスを利用出来たので１日で二の池にテントを張る。途中三の池でアイゼンをつけて練習したが、池は完全に氷結している。

１１月２４日　晴

アイゼン練習、ストップ練習、ザイルワークの練習等

１１月２５日　晴

同　　上

１１月２６日　晴

王滝口へ下山。この日の内に大阪着。

好天に恵まれたことも原因して、広く変化に富んだ頂上に、自由なトレーニングを繰り広げることが出来た。二の池は氷を割って水が利用出来、絶好のベースキャンプ地となる。二の池、三の池の岸の斜面には、安全なトレーニングが

十分に可能である。強風に吹かれてのお鉢めぐり（この池１周）も１年には役に立つたと思う。

１９６７年度　冬山合宿

この計画が我々の話にあがつたのは確か一昨年度だつたと思う。我々は山行を重ねる度毎に、この白馬から西に派生する長大な尾根がいやが上に目についた。そして昨年度五月山行において、我部はここをトレースした。確かに長い。中一年おいて、我部には昨年度の不振を挽回すべき機運が生じたが、秋山を経るにつれて、部の雰囲気は悪化の一途をたどつた。さらに悪いことには秋に予定していた偵察が出来なかつたことだ。そして予定していた参加者が２名も欠けた。それでも我々はpartyを送つた。

メンバー

ＣＬ	甲田吉彦	３Σ	食料係兼医療係
ＳＬ	山田靖則	３Ｔ	装備係
	石原敏男	２Ｓ	気象係
	田村　孝	２Ｌ	記録係
	渡辺　洋	５Ｓ	ＯＢ

Date　１２月２３日～１２月３１日

記録

１２月２１日　先発の甲田、石原大阪出発。

１２月２２日　雪時々曇

宇奈月出発９：００－笹平着１１：４５～同出発１３：００－７００ｍdepot地点－笹平着１７：３０

突坂尾根をぶち抜くトンネルを出ると、関電の小屋があつたのでここで昼食。ここから、depotに行く。荷は、２人で２７５Kgr。稜線に出るべく斜面を登る。木が深く茂り長物をもつている者は苦労する。約１時間で稜線に出る。４５０ｍ付近か。稜線に、送電線のための切り開きあり、ルールをまちがうことなし。ラッセルは太ももあたり。途中、小雪少々はげしくなる。４：３０になつたので送電塔のかたわらにdepotする。７００ｍはきているだろう。途中、懐電を灯けて下る。

１２月２３日　終日小雪

本隊、宇奈月出発８：５０－１１：３５笹平着～同出発１２：３０－７３０ｍ地点　Ｓ１５：２０

昼食を採り出発。やはり昨日より早い。トレースも残つていた。depot地点からラッセル深くピッチはかどらず。すぐ設営する。

１２月２４日　雪

６：００起床。出発８：３０－１３００ｍ地点１５：３０

ルートは登りonly　なので高いところへ高いところへと登つて行けばよい。所々広大のであろう、赤旗が残つていた。下山時を考えて、赤旗をつけながら行く。しかし雪深く難渋する。平均して、腰の上だが、自分の背たけ程のラッセルに思えた。ラッセルする者は空身で先行するが、遅々としてはかどらず。

１２月２５日　晴後曇　夜満天の星

出発７：３０－１０：５５突坂山頂－山頂直下の切戸（ナイフリッヂのコル）通過（１４：００～１６：３０）－１４８０ｍ地点１６：４５

昨日と同様深いラッセルだ。突坂山頂はpceとは呼べず、２重山稜になつている長い頂稜だ。地図でみるとなんともないコルがかなりの切戸を作り、この通過にザイルを出す。天候が厳しくなかつたので楽だつた。稜線の雪をはらつてやつとテントをはれるようにした。

１２月２６日　曇時々雪。停滞

１２月２７日　曇

出発７：２０－１８００ｍ１２：００－１９

70mpeak　15：15ーテント地15：30

相も変らず雪深く難渋する。大小様々なピークを越える。ナイフリッジになったところもあり、雪庇を形成している。トラバースする所が以外に多く、雪崩を心配するが雪が意外にしまっており、さらに樹林帯でもあるので雪崩れず終日ラッセルに終始する。今日の天候がもったのは、日本海に弱い気圧の谷が発生したためであった。更にこの日猫又へのコルまでテントを出すことは可能であったが、帰りのことを考え下り口にテント地を決める。ラジオは30日頃の大寒波を伝えている。このロウサギを一羽拾う。

12月28日　雪

アタック出発11：00ー帰幕12：00

昨夜相談した結果、好天が3日つづけばアタックは出せるが、とうてい望むべくもないので即下山ないしは猫又、清水アタックの選択を迫られた。猫又アタックに決定し出発する。10分位進んだ所で山田雪崩のため首までうまる。コルへ下ろうとした時リッジが（そのあたりは二重山稜）急に曲りさらに下っている。従って山田に様子を見に行ってもらった。もっとも雪崩れて下まで流されることはないだろうとは判断していたが、その時我々のトレースから1m位はなれたところに、トレースと平行に切れ目が走り、アワが発生したのだった。雪の厚さ50cmくらい長さ15～20mくらいか。とにかく全員リッジ上に引き返し、帰幕と決定。

12月29日　地吹雪

出発9：00ー切戸手前の1500m台地15：15

前進をあきらめ、下山と決定。前日の横雪1m程で雪崩に気をくばる。荷が軽くなり全員30Kgを割っているにもかかわらず、雪深く、しかも重いので再び猛ラッセル。1970のピーク前後は猫又谷側からのふき上げで地吹雪。前にトラバースした地点は新雪の後ゆえ回避し、雪庇に気をつけながらリッジを伝う。

12月30日　雪

出発8：30ー突坂山12：00ー笹平小屋19：00

切戸をなんなく越す。突坂山の登りで石原とクマくんがにらめっこ。あわてたクマくん雪庇をふみはずし、みっともない姿で幕。石原の眼光さすがにいつもながらのサエを見せた。視界悪く突坂の下りで少しルートを失うこともあったが、赤旗をひろいながら奮闘。最後の下りで暗くなり手間どる。小屋で全員の無事を祝ってEssen解放。しかしやはり残念ではあった。

12月31　晴

出発10：30ー宇奈月12：30

（甲田記）

<考　察>

見事な失敗であった。直接の原因は予想を越える横雪であった。この計画の実行に当って我々は食糧に装備にと軽量化を図り1人当の重量を32Kg程度という軽さにし、割合に天気の安定している年内中にケリをつける短期決戦を画していた。計画の段階において我々は広島大学の記録を手にし少なからず参考にした。彼らの記録に対しては我々は1.5倍以上の日数を見積り行動日数的にはまず十分と思えた（その時点においては）。もちろん予備日数の不足はいなめなかったがこれは全天候行動で（樹林帯中の行動が多いので）この不足をうめることにし実行をむかえたのである。しかしながら出発前の降雪は予想以上の横雪をもたらした。

細部に当ってはいろいろ反省点も多いであろう。しかし我々は全力を出したと思っている。それでかつ成功しなかったのは実力的に無理なのか。計画自体に無理があったのか。この尾根に対してラッシュは無理ではないのかという気がしないでもない。とにかく現在は考慮中である。

しかし今度このような後退を考えながらの前進といった計画は十分評価してもよいであろう。

（山　田）

新人冬山合宿

1967年12月22日～1968年1月3日

メンバー

CL・・・的場（Σ3）　SL・田中（T1）
医療・・・中岡（M2）　装備・大西（T3）
食料・・・中川（T1）　食糧・稲垣（T1）
気象・・・黒岩（E1）　記録・寒川（T1）
スキーコーチ・・三沢（OB）

12月23日　雪

9：00千国着－11：00猪股氏宅着
12：00デポ発－3：40赤抜デポ地着
3：55発－6：20猪股氏宅着

12月24日雪

7：30出発－4：40御殿場小屋－7：15阪大小屋着

デポ地点には正午近くに着く。23人スキーをここでデポ、代りにエッセン罐のボッカ。トレースはかなりあったが慣れないラッセルではかどらずハッパをかけられる。あきらめの境地で歩く。御殿場小屋に着いたら小降の雪の中の夕焼けだった。梅の森ヒュッテの手前でバテかけたものもいたがなんとか持ち直して頑張る。懐電を照らして阪大小屋入り。

12月25日　快晴

8：35出発～10：05デポ地着10：20発－12：05阪大小屋着－1：00～2：30スキー練習

昨日、小屋で落ち合った三沢OBと共にデポ回収に出る。最短コースをとり一気に下り5pitch　足らずでデポ地に着く。登りも快調なペースで昼には小屋に戻る。

12月26日　曇時々雪

7：30出発－11：30天狗原－2：45阪大小屋着

シールボッカで天狗原へ出発。成城小屋から上はジグザグで登る。すべらないのは有難いが足の重いのは辛抱せねばならない。天狗原のほこらの横にデポする。風がきつかったが、ここからスキーで阪大小屋へ下りる。慣れないスキーで山道を下るのは嫌なものだが皆転び乍ら頑張った。夕方恩地先生が小屋に来られた。凍傷で水ぶくれをつくった者も在った。

12月27日　晴後雪

7：00出発－1：25天狗原着（ひよどり峰尾根経由）

残りの荷物をワッパをつけてボッカする。計画通り鵜峰を越える尾根にルートを求める。早大小屋のすぐ横からコルに向って約4ピッチ急な斜面を登る。ラッセルが遅いとハッパがかかる。コルからは尾根通しに行ったがなにぶんブッシュが多くやっかいだ。250m程登ってから再び急斜面を直登する。これが最後だと言い聞かせて皆頑張る。苦しい登りだった。恩地先生も後から僕らについて登られた。この後、ブッシュで手こづって下り気味にトラバースしたが、ボソボソもぐる者が続出。ゆるやかな登りを行くとほこらに着いた。このルートは全く初めてであったが変化に富み面白い。今後の利用を勧める。

12月28日　雪

8：00～11：30スキー練習－1：00～2：30イグルー造り

スキー練習は三沢OBがコーチになつて親切に教えてくれる。その後風雪の中で寒さにふるえ乍らイグルーを造る。天井がしまらなくて未完成ではあったが、以後寒川氏専用のボン場と変身。仕事を終えてテントに戻る。外界の寒気から逃れてホットする。後は一日で一番楽しいテント内の生活－夕食と睡眠の時間である。

「スキーは目的でなく手段である。目的は雪まみれになることなり」－中岡名言集より

12月29日　雪時々曇

6：30～10：00スキー練習－11：30～1：30乗鞍岳往復

スキー練習は主に斜滑降を行なう。何度も転んで、雪まみれになって、うまくなれない。テントに牧野さんなど3人のOBが来ていた。スキー練習後赤旗に導かれて乗鞍岳の急斜面を登る。かなりラッセルにも慣れた。風雪の急斜面には新雪が30cmも積っていただろうか。忠実に尾根上を選び、二度雪崩調査のブロックを切り雪崩には最大の注意を払った。一年は空身であったが悪天中のラッセル行で大分雪山にも慣れたと思う。

12月30日　風雪

7：30～12：30スキー練習、雪洞掘り

－1：50～4：00山の神方面スキー

山回りクリスチャニア、テールずらしと斜滑降の完成を目指して練習したが、山回りが出来たのは2－3人程度。スキー練習と同時に交替で雪洞を掘る。スコップの使い方も仲々むつかしい。イグルーと違い今度は立派に仕上げた。8人ははいれるだろう。昼から山の神方面へスキーツアー。新人が先頭に立って協議しつつルートを決める。最後は三沢OBの後を行く始末。2080mまで下った。帰りはシールをつけて登る。寒さに目が凍る様だ。夜は中川、大西、黒岩と的場さんが雪洞に泊まることになりT1テントを徹収した。

12月31日　快晴後小雪

7：00出発－10：30小蓮華着10：45発－12：05テント着－スキー練習

待望の快晴。今日こそ小蓮華へとはりきる。稜線はかなり強風。11月のアイゼン練習の効果があって安心して登れた。小蓮華山頂で写真をとり後立山の連山を臨み絶句－これぞ冬山の醍醐味。帰り乗鞍の上で中岡さんらと会い共に下りる。乗鞍の急斜面をどんどん下りる楽しさ。軽い疲労と満足感でテント着。昼から　例のゲレンデでスキー練習－今日は良くしごかれるなと言いたくなる。夕方T2テントを徹収し稲垣寒川、中岡、田中が雪洞入りしT1テントはゲレンデ下の吹きだまりに張りこれに残りが入った。雪洞は快適で水もりもなく温泉気分であったが、天井の沈下が激しい。一夜に15m位は沈下する。夜、紅白歌合戦を聞きつつ眠る。

1月1日　雪　強風

10：00～11：00テント設営－12：00～3：00風吹大池へのスキーツアー

今日は元旦。連絡がうまくゆかなかったのとのんびりムードのため設営が遅れたが、昼から風吹大池に向かってスキーツアー。新雪が深く降雪中でもありスキーをはいても腰までのラッセルである。先頭は必死で汗をかくが、2番以下は寒さで凍傷をつくりそうだ。約1950mの地点まで行ったが、時間切れとなり引返す。最後の1ピッチで往の腰までのトレースは完全に消えてなくなり、新しくラッセルしながら進む。テント地まで50mの所で激しく吹ぶかれて冬山の厳しさが身にしみた。サブからヤッケをとり出して着てやっと安心できた。テントに戻れば狭いとはいえ天国である。凍傷を新しく作ったり、以前の傷をさらに悪くした者がいた。

1月2日　快晴

7：15テント発－9：45山の神着10：15発－11：45テント着、テント徹収1：15テント発－5：00阪大小屋着

朝起きると合宿の最後にふさわしい、すばらしい日の出であった。雪をまとった山々は神々しかった。よし頑張う、とみんなが思ったに違いない。12：30までに帰ったら小屋へ下りることにして出発。乗鞍の大きな姿を背に快適に新雪をすべる。山の神の三角点からは妙高、戸隠など手にとるように見えた。斜滑降までしか教えていない新人がツアーをする計画には、自信はあったが好天に恵まれこのように成功出来た事はうれしい。帰りはシールをつける。ポカポカと春山を思わせる陽光に心も軽い。青空にジェット機が急上昇した。目で追いかけていると青空はますます深く、陽光は目を焼くばかりであった。テントに戻ると一足先に下った三沢OBの伝言とさし入れが残されていた。下山ムードがわき上る。荷分けをして各人約30kの荷をかついで小屋に下る。慣れぬ重荷のスキーに皆なみなみならぬ苦労をする。くやしさと腹立たしさに泣けてきた人はなかろうか。夕方阪大小屋に着く。ワンゲルとOB、僕等で24人。小屋は満員で少し気分がわるかったが・・・。翌日、甘酒をくみかわし解散した。

（寒　川　記）

○新人合宿反省

大体において成功であったと思う。ラッセルは冬の軽い雪ではあるが小屋への入山、ヒヨドリ峯尾根からの入山、悪天中の乗鞍、スキーをつけての風吹大池への尾根などで用いられた。大分に慣れたものと思う。

スキーは、直滑降と斜滑降を充分に練習する事に止め、実際に歩き回わる事を計画していた。練習を午前、午後等半日以上続けなかったのも

その為である。合計１３時間の練習で今回程動ける事がわかったのは１つの収穫であった。ガスの尾根をルートファインデングしながら山の神方面に下ってみた事。悪天下スキーで腰までのラッセルを行いながら風吹大池の尾根を千国揚の中間まで往復した事。好天の時尾根をうまく谷側斜面を利用しながら山の神までのツアーに成功した事等。

(的　場　記)

春　山　合　宿

―積雪期黒部上の廊下完全トレース―

参加者

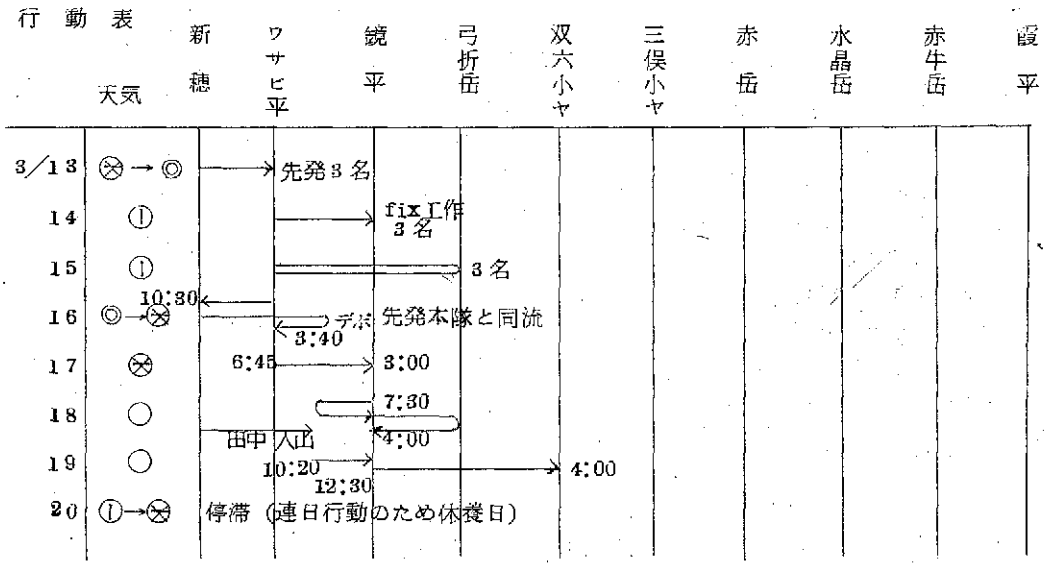
CL	甲田　吉彦	3年	基礎Ⅰ
SL	的場　幹史	3年	基礎Ⅰ
食料	田中　喜樹	3年	工学部
装備	石原　喜雄	2年	理学部
記録	田村　　孝	2年	文学部
医療	中岡　和哉	2年	医学部
	稲垣　佳夫	1年	工学部
	大西　邦男	1年	工学部
	寒川　敏夫	1年	工学部
	黒岩　芳夫	1年	経済学部
	中川　　晃	1年	工学部

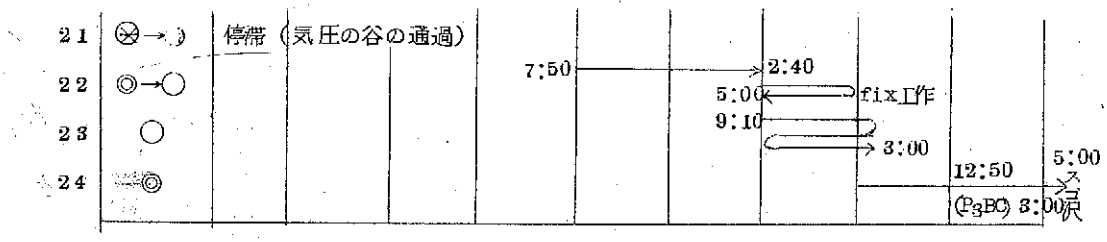
春山合宿を顧て

現在のリーダーグループが、積雪期の目標ととして、上廊下を選んだのは２年生の初秋だったと記憶している。言うまでもなく積雪期の目標は、即ち、我々の山行の最終目標である。以来我々は総力を積雪期、無雪期を問わず、黒部及びそのアプローチである赤牛岳周辺へ投じてきた。１９６６年夏には、現在３年部員である我々が、全員上廊下をトレースしその概念を得、その秋には赤牛西面の各尾根を、そして春山にそなえて烏帽子小屋への荷上げを行つた。しかし残念ながらその年の春山はあるトラブルのため黒部へは入れなかった。その春山後、４年がいないため例年とは異なり、３年生がリーダーンツプをとる形になった。そして、この１年の目標を黒部への一つの前の段階として、技術的なレベルアップに努めることにした。与えられたチャンスを逃さないためには、それなりの実力が要ると思つたからである。又、レベルアップ目体、我々の常の目標でもある。これと並行して足繁げく黒部へ通った。１９６７年度はまず五月に、今合宿の予備的な山行を行った。これで、あるいは簡単にトレース出来るのではという希望をもった。２年目の夏には現２年部員が、上廊下をトレースし、これで、無雪期に出来るすべての事を完了した。そして１１月に水晶小屋跡に、約３００kgr の荷上げを行い春山を待った。一体、積雪期上廊下のトレースは我部創立以来の必然的な欲求でもあった。戦後阪大山岳部が再建された当時、すでに篠田前部長その他一部の人達が上廊下に目をつけていたのであるが、実力未だ到らず、後立山周辺に多く積雪期の合宿を持ち、数多くの記録を作り、そして必然的に、積雪期黒部下廊下横断を敢行したのであった。１９５６年のことであった。それから３年後１９５９年３月には、積雪期上廊下横断を一回で成功させ、翌１９６０年３月には薬師東面にトレースを残し、上廊下のトレースはもはや、アタックするのみとなったのである。しかし、我部はここであせらずその力を劍へ向け、翌１９６１年３月に一峰東面に初トレースを行ったのである。ところが、この年事故が相継ぎ、１１月には終に死者を出すに到り高揚し続けた我部のレベルは出発点に戻ったの

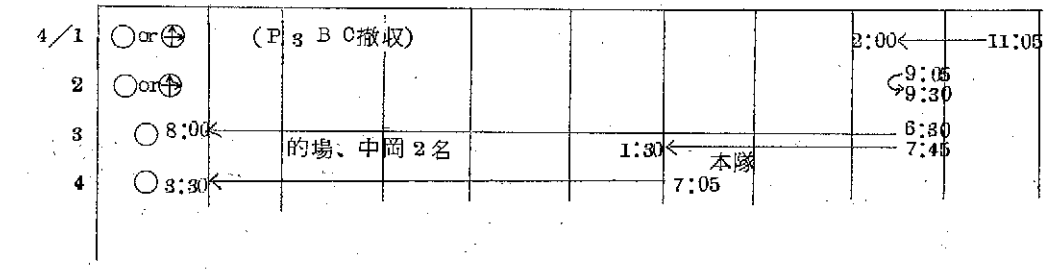
である。こういった歴史的背景において、黒部は我々にとってはまさにdie Heimatと呼べるだろう。そして我々が黒部を隅々まで知りたいという欲求に駆られるのは当然だっただろう。ところが肝心の積雪期の状態は、わずか5月に行った経験しかなかった。過去に於て、積雪期のこの周辺の記録は我部には多いのであるが、近年に於ては広島大学隊が廊下沢出合から金作谷出合までを積雪期初トレースし、我々には大きなショックであった。だが我々は計画を続行することにした。本年度の当初の目標はまず、上廊下の本流へテントを下し、雪の状態を見ることであり、併せて、サポートの入るべき尾根をトレースすることにあった。もちろん、あわよくばという気持もあった事は否定出来ない。赤牛へのアプローチは昨年の春に、ブナ立を登ったので、今年は、双六からのを採ることにした。このkey pointは水晶岳を果して新人がボッカして安全に越せかにあったが、新人はよく期待に答えてくれた。テントは赤牛岳peek付近と霞平、スゴ沢出合と3ヶ所出すことにした。これは主として、部員数に制約されてのことである。結果的には、これが、非常な好配置であった。思うに今合宿の成功は、今年は、天候が良かったことと、やはり、与えられたchanceを逃さなかった。全部員の頑張にあったと思う。特に、新人は、この一年の本当の意味のシゴキの効果が現われ、実力をあますことなく出した。ある意味では、今年の目標のレベルアップは少しは達成されたのだろう。もちろん、上級生も、有機的に各々の役を演じてくれた。一つの事故もなかった事は、それだけでも立派なことである。初トレースは、おまけだったと考えている。しかし、なんといっても全員が、各々の与えられたことをミス一つなくやってくれたことである。今年の成功を踏み台にして、次のリーダーシップを執る者は、よく方向を見定めて、我部の進む方向を決めてほしい。もっとも、今回の合宿も完全にすべて成功だったのでなく、小さいことながらも反省すべき点があり、大事に至らなかったからよかったものの、ソリセードの失敗なども、まかりまちがえば死んでいたかもしれない。大体山登りとは、そういう死と背中あわせのことをやっているのであるから、我々は常に小さなミスでもなくなるよう努力しなければならない。そして今回の成功を安易な考えで喜ばず、より一層シビアな考えで山を考えたい。もう一度言おう。問題は今回の成功を、今後、次のリーダーシップ（直接的には新3年生）がどうもって行くかである。

CL　甲田　吉彦

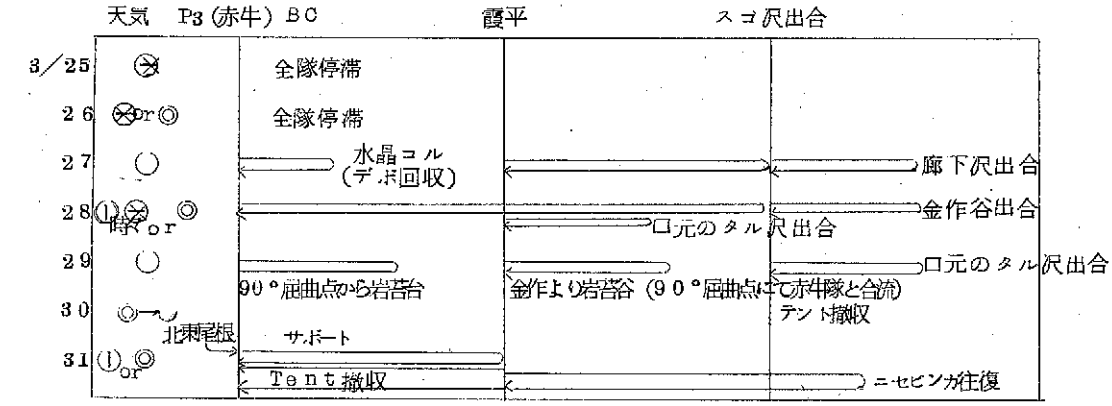




3／25～3／31 Attack の欄参照



Attack 表



各隊テント地

赤牛ＢＣ	赤牛北西尾根ピーク３	６名
霞　平	２２１０ｍピークの上	３名
スコ沢	中のタル沢左岸末端	２名

行　動　記　録

○アプローチ

先発隊　的場(L)　田村　寒川

３月１３日　雪のち晴のち曇　１４：００（十２℃）　１９：１０（－１℃）

神岡７：０９バス－新穂高温泉８：４５－９：３０出発－１１：４０用水取入口１３：００ワサビ平小屋着

先発の入山には何らかの期待と不安が伴う。我々３人がバスの最後の乗客として下車した時新穂は小雪に見舞われていた。中崎山荘で熱い茶を御馳走になり出発する頃には雪もおさまりかけていた。用水取入口までは雪崩の出ている所が２ヶ所程あったが、我々の通過する時には別に危険はなかった。左股の川原の中まで侵入している大きな底ナダレのデブリを越えてワサビ平入り、テント設営のあと的場、寒川は上流の渡河点探索。田村は竹ザオ５０本を昨夜車中に忘れた事を大阪に連絡する為新穂まで下った。正午前後は青空の下で汗をかいたが夕方には黒

い雲が空をおおい始め、明日の天候が心配された。

3月14日　雪のち晴　5：00（－4℃）
12：00（＋3℃）

4：10起床～雪の為停滞～13：05発－14：15鏡平取りつき－16：30鏡平－19：20TS着

朝から雪でシュラフが湿ってきてイヤな気持である。日数の余もあることから天気図を見て回復するのを待つことにする。雪のため昨日まであったトレースは消え、ブスブスもぐったが全員快調、渡河は左股の屈曲したところよりすこし下流にうまい具合にスノーブリッジがあった。竹ざおならぬ枯木の赤旗は昨日的場がつけたもの。左岸に渡ってしまうと雪崩の心配もなくしばらくとことこ快晴の春山気分を楽しむ。尾根は末端が急な登りであるがあとはダラダラした登り。他大学のパーテイーのトレースと赤旗がしばしば目に入り、あまり気分は良くないが、時間の短縮になる。鏡平下の急な登りに麻8mmを60mfixした。その頃には穂高の稜線が茜色に染まり始め半日の疲れに良い清涼剤となる。寒川の強くなったことに他の二人は目を見はる。明日も頑張ってもらおう。

3月15日　快晴　7：00（－10℃）　9：00（＋1℃）

6：00起床～8：00TS発－11：30鏡平－12：40弓折岳ピーク～13：00発－14：00鏡平－15：30ワサビ平TS着

せっかくの晴天を寝すごす。しかし昨日のタイムから弓折往復の余裕は充分にあった。昨日鏡平下にあった関大の雪洞にも人影はなく、上にあがった様子。太平洋高気圧の張り出しで絶好の登山日和。弓折ピーク下の急坂は難なく通過。露岩は雪の下になっていて、fix の必要無し。稜線は少し風があり、人のいない同志社大のテントの陰で昼めしをパクついてかけおりた。尾根の末端でシリセードをしようと2－3mトラバースしたら表層雪崩が起りおもわずドキリ。明日はゆっくりしたいところだが本隊出迎えはヤムを得ない。

本隊入山　甲田(L)、石原、中岡、大西、黒岩、中川、稲垣

3月16日　晴のち曇　雪

7：20TS発－8：30新穂～本隊発10：30－12：30ワサビ平着～13：30デポ出発－15：00尾根末端よりワンピッチ上部－3：45ワサビ平小屋着

道路工事のため本隊が新穂に着くのに少し時間のロスがあったが予定通り終了。

120Kgの荷を末端近くの尾根上にデポする。

3月17日　雪　天気図冬型　6：00（－12℃）

4：30起床～6：45小屋発－8：35尾根取付－13：30fix地点－15：00鏡平CS

雪の中を出発　全員ワッパをつける。気温もかなり低く、尾根までの沢すじはトレースも消え、ヒザまでのラッセル。尾根の上はときたま地吹雪になり、途中でヤッケを着用。苦しいラッセルが続いた、数人指先を少し凍傷気味。鏡平のテント地についた時は、全員ホットした。

3月18日　晴　移動性高気圧　6：00（0℃）　9：00（2℃）　12：00（3℃）　19：00（－10℃）

4：30起床　デポ回収　7：30CS発－8：30デポ地～9：15発－12：15鏡平CS～13：00発－15：00弓折ピークデポ

デポ内容（カン8　フクロ4　ケロカン4　ツェルト竹50本　ヤンの実1つ）

石原は、田中を出迎えに新穂に下る。デポ回収順調に進む。大西、中川が風気味で平熱を上まわる。石原、田中とはトランシーバーで連絡の予定であったが連絡失敗。弓折のピークは夕映えに美しく、三々五々CSに帰る。トランシーバー交信は午後8時をもって打切る。星空はいつも心のなぐさめとなる。

（この日二人は鏡平下2時間のところの雪洞でビバーク）

3月19日　快晴　6：00（－6℃）　12：00（3℃）

12：30TS発－13：35弓折岳ピーク～14：00発－15：50双六小屋着

石原、田中が遅いので、的場、大西が下る。あとは時間待ち。幸いに三人が昼前にＯＳに帰ることを大西が連絡してきたため、本隊は３人を待って移動することに決る。撤収をすまして紅茶をわかして石原、田中、的場を待つ。弓折のデポ回収しシングルで行くことに決定。稜線は広いし別に問題はない。上級生は４０Kg以上になったが双六小屋まではどういうこともなかった。大きな気圧の谷をひかえ、小屋に入ることが何よりも幸い。

３月２０日　曇→ガス　沈澱

予定以上にはかどっているので出発は見合わす。午前中は、視界がかなり良かったが、昼すぎには５０ｍ前後の視界と強風になる。昼まえ腹へらしのため甲田、田村の二人はセミ沢岳に散歩、めったに通れぬピーク。

３月２１日　みぞれ→ガス　気温戸外で終日－１℃　沈澱

気圧の谷が弓状に日本列島の西に頑張っている。南風共水型の気圧配置。明日、快復の見込みでエッセン６日分以外の２日分の主食を小屋にデポ。荷分けをする。赤岳まで６日分を持って出る予定。新人五人組は小屋二日目でいささか飯炊きにもあきてきたらしい。それでもチームワークよろしく、こまやかな味をつける。

３月２２日　晴

４：３０起床　天気待ち７：２０発－９：５０三俣ピーク－１１：３０爺岳コル－１４：１０赤岳小屋着

朝方、イヤな感じの空模様ではあったが、すぐに青空がのぞく。稜線はかなり吹いていたがアイゼンも好調で楽に三俣を越す。源流ルートに入る頃、雪もだんごになりはじめる。爺の南側斜面に表層が２ケ所出ていたが源流まで達していない。午前中の速いペースがたたって、皆疲れ気味。小屋は中半分雪に埋れていたが１１月のデポの方法が良ったので難なくカン２５コケロシン４４ℓを回収。設営の間、甲田、的場が水晶にルート工作南峰手前のトラバースに麻８ｍｍ３０ｍ北方の下りに同じく３０ｍをｆｉｘ割合に楽に通過出来そうである。

３月２３日　晴

５：３０起床－９：１５デポ出発－１０：３０水晶北峰を越えた所にデポ－１３：４５テント撤収後出発－１５：００デポ地着

一人平均２５Kg弱位でまずデポに出発。岩稜のトラバースは上級生がｓｔｅｐを切り時間をかけて通過少々スリリングな場所である。新人は全員ゼルブストを着用カラビナを通す。ｆｉｘ地点１ピッチ足らずの所でザイルを出し一人ずつ通過。この時的場が立ててあったピッケルを誤ってたおし谷に落とす。一時は回収不能と見られたが甲田が下り簡単に見つけた。途中でひっかかっていたらしい。「今夜は晩飯抜き」と自らこぼす所は的場氏らしい。北峰の下りは急なだけでアイゼンワーク以外には別に不安のない所。一年のアイゼンワークは、昨年１年間の特訓のかいもあって、しっかりしたものだ。時間的余裕もあるので、テントをデポ地へ移動。緊張した１日であったが、的場のピッケル、田中の尻制動失敗と反省すべき点も多かった。北ア主稜線での１年の行動にも十分自信が持てる事に我々は出発前の１つの問題が解決された事を喜ぶ。

３月２４日　曇　強風

６：００（－１０℃）－１５：００（－1,5℃）－６：００（－５℃）

５：００起床－８：４０出発－１１：１０赤牛peak１２：１０出－１２：４０Ｐ３　２７００ｍにＢＣ建設　霞平スゴ隊と別れる。

強風をついて出発。今日中にカスミ平、スゴ沢にそれぞれ分散するので、かなりの重荷が両パーティに回った。赤牛隊はデポしていくことに決定（カン１１コ、ケロ５カン袋２）。稜線はかなりの強風だが歩行に支障はない。アイゼンが良くきき赤牛のなだらかな雄姿が目の前にせまってくる。ピークより、甲田、的場が偵察に下り、Ｐ３の台地を赤牛のベースに決定。ここからはカスミ平も見わたせ文句なしのＢＣである。期待に胸をはずませて、２パーティは下っていった。　霞平着３：００　スゴ沢着５：００。

スゴ沢隊（田中、石原）　霞平隊（甲田、中岡寒川）　赤牛隊（的場、田村、大西、黒岩、稲

垣、中川）

○北の廊下attack日誌

スコ沢出合テント地ー廊下沢出合往復

3月27日　晴　メンバー田中、石原

4：00起床6：30出発　7：30廊下沢出合　8：15帰幕

4：00起床した頃は好天特有の谷間のガスがかかっている。朝めしが終る頃にはガスは消えかかる。朝日に染まる黄色のガスの間から青空が臨まれて、出発ムードを盛り上げる。6：30出発。河原を歩くのは積雪期だけに、やはり一種独特の緊張感に身を引きしめられる。スコ沢出合はあたかも雪原の様に雪にうめられている。しかし黒部本流は幅数mから十数mの水面が出て、深き数十cmから2m位の水が流れている。大体右岸通しに行く。広河原はデブリが一杯になっているが本流まで達するものは少ない。広河原を少し下ったところの赤牛岳側の岩壁は夏ならば、滝になっているのであろう。小さなルンゼ2ケ所に、Blue-ice が十数m位ついている。廊下沢出合までスノーブリッヂを渡って左岸どおしに行く。廊下沢出合まで右岸左岸どちらでも通行可能であるが、概して赤牛側は岩壁が連なり、廊下沢側の方がやや明るく歩きやすい。両側共、小さな沢や小さな岩壁のルンゼに至るまでデブリが認められる。そして意外とも思える大きなデブリが出ていたりする。これらのデブリによってかけられたスノーブリッヂによって、右岸、左岸はどちらにも渡ることが可能である。

廊下沢出合付近のデブリは余り大きなものはなく、本流のスノーブリッヂはそう期待できない。ここから下流は右岸通しの方がやさしそうだ。従って廊下沢出合2.0m位上流のスノーブリッヂを渡って右岸通しに下る方が得策であろう。ここまで来ると沢に陽がさし込んでいる。ここ2,3日の積雪は数cmであり、湿潤雪崩もある程度出尽した観もあるが、やはり心理的に日射は大きな動揺を与える。ここから引き返すことにする。帰路は往路を走る様にして帰る。河底に積った雪面やデブリの上を歩くだけで別に技術的に困難という所はない。ただ1ケ所のみ廊下沢出合手前10mの左右両側の雪壁のヘッリがある。これ等の様に岩壁についた急斜面の雪壁は表面数cmは堅いが、その下はもろいざらざらの乾燥雪で、もぐるとバランスを失いやすいから注意を要する。

スコ沢出合ー金沢谷出合往復

3月28日　晴　メンバー田中、石原

6：20出発ー7：20金作谷出合ー8：20帰幕

1時間寝過して5時に起床。昨日の残りのバター飯をおじやにして、朝食を終えた。上の黒ビンガから金作谷めざして出発。一番上流の雪の割れている所でザイルを出す。石原topで40mいっぱいでへつる。second の田中は石原がザイルを張りすぎてひっぱられてあやうくおちかける。デブリの雪質は非常に変化に富み、いやらしい。へつった後はコンティニアスでドンドン進む。横からのナダレに注意しつつ。ザイルを出した所より上流ではすべてうまっている。上の黒ビンガをぬけた所に薬師側から沢が出ている。スコ沢出合より一時間で金作谷出合につく。夏の1日行程と比較して何とあっけないことか。金作谷出合はものすごいデブリの山でデコボコが全然ない。又出合の様子は5月8月のおもかげはない。デブリの山はスキーのスロープに丁度いい傾斜だ。出合より上流のトロは完全にうまっている。当時気温は－2℃。うすいガスがかかり、恐怖感をやわらげてくれる。帰りは上へあがってからテント地に下ろうか、それとも来し方を引き返すか案じたが、ひき返すことにする。帰路はアイゼンのききが悪くなり、靴が半分位うずまる。来た時は快適にアイゼンがきいていたのに。やはり沢筋に陽がさしこんでからの行動はさしひかえるべきだ。往路でザイルを出した所で再びザイルを出す。ピッケルをしっかりと確保して石原topで行く。雪質が変化にとんでいる上に温度が少々あがっているためにステップがくずれやすい。石

原が苦労して横断を終える。次の田中は石原の確保でトラバースを始めたがあと１０ｍ位で終了という所でステップがくずれて田中はあおむけになって落ちかけるがステップの穴に足がはいっていてかろうじてとまる。全く冷汗ものであった。

あとはザイルをしまってスゴ沢出合のテント地に帰着する。金作谷出発迄２時間で往復出来たことは全く信じられない位である。夏ならまる１日かかるのに。

テントに帰りついてからここは何人通ったのかと思うと大変うれしくなりしみじみと幸福感、満足感のようなものが心の底にわいてきてひとりにやにやしていた。

（田　中　記）

金作谷出合ー岩苔小谷出合

３月２９日　快晴　メンバー甲田、中岡

霞平ＣＳ（６：２０）→金作谷出合（７：００～７：１０）→９０度屈曲点（７：３５～７：５５）→岩苔小谷出合（８：３５～９：１５）→赤牛ＢＣ（１４：００～１４：１０）→霞平ＣＳ（１５：００）

昨夜は、この日のａｔｔａｃｋの事を考えて、少し睡眠がたりなかった。出発は非常に遅れ、６：００をまわった。しかし、核心部の通過は８：００までに終るだろう。ところで、金作谷へは昨年の５月には沢筋を下降したのだが今回は尾根通しで行った。本流に出る末端が非常に急だ。４５度はあっただろう。樹林が多く尾根が顕著でないので、ガスれば、トレースは不可能だ。とにかく、金作谷めがけて下る。ちょうど７：００に着き田中と交信。下流からは、昨日の田中らのトレースがあり、出合でターンしてあった。その上流は、これから我々がつけるのだ。見ると金作からのデブリは、想像以上に大きく、夏遡行の際高まく草付の斜面も足下になっているところを見ると、厚さは３０～５０ｍ位だろうか。しかも広く、野球ができそうだ

さて、上流は完全な廊下だが今は、つきあたりの屈曲点まで、デブリでうまっている。最初は恐る恐るあとは度胸をきめて歩いた。甲田が中岡の前２０ｍ程の所を歩く。もちろん雪崩にやられない為である。５００ｍ程歩いただろうか、廊下は右折していた。そしてデブリもそこで終っていた。そしてトロは水を青々とたたえている。ところが幸運にも左岸には非常に不安定ながら雪のバンドが出ぱった石の上にあった。その先の屈曲した所は見えないが、その奥は又デブリがある。とにかく行ってみる事にする。すると雪のバンドの続きに同じ高さで岩のバンドが続いており、簡単に次のデブリに移れた。それからは次々に出て来るデブリの上を、主に左岸に気をつけながら走る様にして越して行った。そして９０°屈曲点を目前にしてやっと安全地帯へ入った時、突然コールが聞えるではないか。赤牛ＢＣから９０°屈曲点へ下っている尾根をトレースして来た田中等だった。９０°屈曲点で彼等の歓迎を受けて再会。印象深かった。ここまで２５分しか経っていないが、とても長く感じられた。写真を撮ったりしてしばし休憩の後、上流を見て岩苔小谷の出合まで、新人二人を含む尾根を下降したＰａｒｔｙと共にトレースする事に決定。陽ざしは本流にかかって来始めているが大した廊下もない事であるし大丈夫だろう。途中かなり急なトラバースがあったり夏と同様ニセ赤牛沢付近を高巻きしたりして岩苔小谷出合に達す。ここから上流は立石まで廊下になっている。途中⅓の位までトレースしたが、９：００近くになったので引き返す。大体この上の廊下遡行は岩苔小谷で終るのが普通らしい。９：００にはまさかと思ったが、霞平と交信出来た。帰路は勝手知ったる赤牛西面。赤牛沢の右岸の尾根を赤牛北西尾根Ｐ２目標に登る。途中から見た立石方面の谷はデブリで埋っていた。この日は終始快晴に恵まれコッテリバテた。赤牛ＢＣで食べた小アジはおいしかった。

（甲　田　記）

スゴ沢出合ー口元のタル沢

３月２９日　快晴　メンバー的場、石原

スゴ沢テント地（５：３０）ー廊下沢出合（５：４５）ー口元のタル沢の廊下入口（７：００）ー口元のタル沢出合（９：００）ー「岩魚

の宝庫のトロ」往復（9：30～10：00）一霞平テント地（12：10～13：00）－スゴ沢テント地（14：00）

3時半の予定が少々遅れ、4時起床となった為出発5時30分。水面の出ている広河原を廊下沢出合迄飛ばす。途中赤い岩壁では昨年5月と同様な場所に5月と同じ様な立方体の巨大なブロックが落ちていた。小さなテント位の大きさの青氷のブロックである。

廊下沢近くになってスノーブリッジを渡り雪で埋っている廊下沢出合もそのまま左岩通しに通過する。広河原一帯はかなり両岸が開けている。だがそれでも沢という沢、小さな草付の斜面、ちょっと凹んだルンゼ状の所等、全てデブリが出ている。ところが廊下沢スゴ沢の様な大きな沢には未だデブリは無い。さて廊下沢出合を過ぎた後もなお左岸通しに進む。我々は口元のタル沢のトロの通過を考えて左岸通しの道を選んだ。だがトロの入口に至ってから左岸に渡れば良い事でこの辺では、まだ右岸通しに行った方が楽であった。その方が多分高巻きを強いられる事もなく、単調な雪面が続いていただけであろう。

右岸には夏に見た10m位の滝が見事な青氷の氷瀑となっている。

6：00頃左岸は約5m位岸辺の雪原が切れて小さな岩壁となり、その下を浅い流れが洗っている所に出た。流れは少し左向に向をかえ、再び右に曲りその先に赤牛側から口元のタル沢出合に下っている尾根が見える。尾根の直下までいって、本流は大きく左に向きを変えて、そこから、口元のタル沢出合までがトロなのだ。

6時のトランシーバー交信は、カスミ平からの声はききとれるが、我々の声は届かないらしく、再三、応答せよと言う繰返しがきこえるだけだった。アンテナの方向によっても感度に差が生じ、カスミ平の針金のアンテナ線が大体東西になってあるのだが、トランシーバーのロッドアンテナも東西に水平に向けると一番良く、電波が入っているようだ。交信は失敗したが交信の為に左岸を少し登った所、そこに小台地をみつけた。水面からは20～30mある台地で少し下流にあるいてから、急な雪面を下るとさっきの5m程雪の切れているところをへつらずにまくことができた。やがて、大きく左に本流が向きを変える屈曲点にきた。屈曲点は右岸のデブリでうまっている。ここがトロの入口だ。まずは偵察と右岸にわたり、うすい雪の上をゆっくりトラバースする。岸の岩との間に、空洞が生じ、今にも水の中におちそうな雪だ。屈曲点のデブリの上に立ち、下流に目をやると、トロの全部が視界に入った。やはり青々と水面が出ている。100m位向こうで本流は右に曲って見えなくなるがそこは口元のタル沢出合である。左岸からは「スノーブロックのある沢」が落ち、デブリで黒部本流を完全にうめている。ここから見えないが、その対岸に目的の口元のタル沢が合流しているのだ。意外だったのは、眼前のトロに1ケ所スノーブリッジがかかっているのだ。左岸のルンゼからのデブリだがこんなものがあるとは、無雪期には予想もできないような小さなルンゼからのものなのだ。勿論そのスノーブリッヂまでにはトロがあるし、仮にそこまで達したとしても、その先にもトロが雪を少しもつけずに顔を出していて水際をへつることは不可能だ。両岸は黒々とした岩壁がせまり、巾10mの完全な廊下状で夏にはよほど水量の少ない時以外は水泳か、高天原新道までの高まきで通過する廊下なのだ。しかしこの廊下も左岸には通過可能と思われる岩崩がある。無雪期には約45°の傾斜でササが密生し、立木も生えている段が水面から20～30mの高さで、岩壁を上下二つに二分して続いているのだ。夏の偵察で、下流側から、この棚を探って見た時はトロが終る屈曲点付近でこの棚は消えており、結局は沢身に下ることができなくて引返したのだ。しかし、時には黒部遡行のまき道に利用するときいた記憶があるが確かではない。さてこのトロの通過には右岸の高天原新道に逃げないかぎり、何としてもこの棚まで登りつかねばならない。屈曲点のスノーブリッジを左岩にわたりそのまま雪壁を20m登る。雪のテラスで7時の交信を試みるが、相も変わらず通じない。7時半にハングの下のテラス上でザイルを

出し、立木を利用してジッ　ルする。トップは石原である。時間も少し遅いので、急ごうと言葉を交す。１０ｍ程岩のバンド状のテラスをトラバースすると一本の太い木がありそこでテラスはとぎれる。石原はブッシュをつかんで、草付まじりの岩壁を強引に乗越して左に曲った屈曲点の向こうに消えて見えなくなる。声もうまく届かず時間がかかってイライラする。しかしどうやら目的の棚の末端を見下すところへたどりつきジッヘルした。セカンドの僕は、石原のところまでひっぱりあげてもらい、二人共完全にトロの壁に出たことになる。棚は完全に続いているのではなく、せまくなったり、広くなったりして、例のスノーブリッヂをつくった小ルンゼも、手前近くで棚を横切っている。トップを交代して、１０ｍほど雪の急斜面を下る。ブッシュは多い。さらに１０ｍ近くトラバースすると、巾数メートルのそのルンゼにぶつかる。雪崩でけづられた、急な雪のルンゼである。少し登って岩壁の下でピッケルをハンマーで打ちこんでジッヘルする。再びトップの石原は、雪崩道であるルンゼを横切り、木やブッシュ混りの雪の斜面を３０ｍいっぱいトラバースしてやっとヤバイ所をおわった。時間は８時４０分ザイルを出してすでに１時間以上になるのだ。気温は８時に０度をこし、朝日も頭上の斜面にあたり始めた。それと同時に、溶けたツララや枝の上の雪がパラパラとおちはじめ、そろそろブロックの崩壊や落石が始まる気配である。残りの７０ｍの急斜面のトラバースは、ザイルを出す程のこともないが、雪の堅い所や、軟い所がまじっていて、ステップを切っていると意外に時間を食う。廊下の中では、気温の上昇が一番恐ろしく、時間との競争である。

石原が後でいらいらしているのが判る。口元のタル沢出合の１０ｍ位も積ったデブリの上に立って、今はもう通過し終ったトロをながめた時には、本当にもう体中くたくたであった。時間は９時丁度で、廊下を離れる最終時間ギリギリであった。帰路は口元のタル沢左岸の尾根を霞平まで登って、スコ沢出合のテント地に帰ることにする。

（注）口元のタル沢出合から往復約３０分間、下流を偵察に行くがこれは次の項と重複するので割愛する。　（的場記）

口元のタル沢～下の黒ビンガ往復

３月３１日　晴時々曇　　メンバー甲田、的場

霞平ＣＳ（７：００）→口元のタル沢出合（７：３５～７：４５）→下の黒ビンガ（８：３０）→ニセビンガ直下（９：１５）→口元のタル沢（１１：００）→霞平（１３：３０～１３：４５）赤牛ＢＣ（１５：３０）

一昨日で上廊下の¾のトレースも終え、もうこれで黒部もうちあげだと思っていた。ところが、この日の朝霞平で用をたしながら、下の黒ビンガ付近を見ると昨夜の雨で雪が落ちたのかビンガの上部は黒々としていた。地形的にみてあの程度の積雪ならば、昨夜は雨だったが、朝のうちならば、まず雪崩れまいと思った。ここをトレースすれば、積雪期上廊下遡行は完成するし、これまでの経験から大丈夫と確信できた。しかし、そういう分析より、我々はただ行きたかったというのが本当かもしれない。時間的にみて、今は６：４０だから今から準備してもいけるだろうと判断した。ただやはり昨夜の雨がどういう作用を及ぼすかが気になった。例えば増水、スノーブリッヂの崩壊、それに雪崩。とにかくやることに決定。Ｍｅｍｂｅｒは、この点問題はあるだろうが、ＣＬとＳＬの２名にした。

さて口元のタル沢へは甲田が３月２８日、的場が３月２９日にトレースしてあるので、３５分で出合につく。小憩の後、下降をはじめるが雨がゆるみ、アルバイト著しい。途中ブッシュをつかんで、トラバースなどをし、１５分で、ビンガを目前にして右岸に立つ。この時、交信して霞平ＣＳの撤収を伝える。

ビンガの下で、意外に雪が少なく、有効なスノーブリッヂはなかった。ルートとしては、ここで、左岸にわたりたいところだ。ただビンガの直下に、スノーブリッジがかかっているだけである。まず、右岸を高まく夏の踏み跡が一ケ所わずかに認められた。雪面を下り、核心部でもどり気味に左岸にわたる。デブリを越え、例

の大トロを目前にする。トロは水をとうとうとたたえ、岩魚は雄々と泳いでいる。ビンガからは、少しではあるが、雪が落下してきた。きみがわるい。

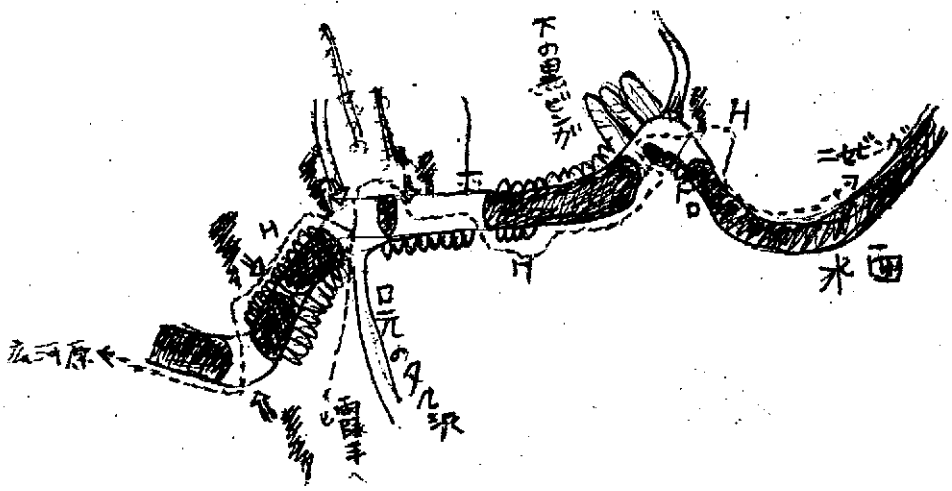
さてこのトロは夏には泳いでわたったが、今はそれもあたわず。左岩の高まきルートを行くことにする。雪と岩のミックスしたところを、５０ｍほど直上し、次に右にトラバースするのであるが、ともにルンゼの源頭になっており急な斜面の上に雪がうすくついていて慎重を要した。沢を三つ横ぎりシリセードで下った。ヤッタ!!やっと念願の完全トレースをはたした。的場と握手。何年かかるかわからなかったこの計画で、はじめてのattackで、成功したのだった。

さてあとは、広い雪原をもぐりもぐり歩く。途中交信によると、北東尾根を下る予定の田中らは、雪の状態わるく、赤牛ピーク直下からひき返したという。我々としては、帰路は東沢出合まで行って北東尾根（読売新道）を登る予定だったが廊下記号の終るニセビンガ直下まで行き引き返す。

もう時間は９：３０になろうとしているので核心部はさけて右岸を高まきして途中安全なところから往路を帰ることにする。高まきの途中スノーブリッジのくずれる音がした。一体この赤牛の黒部に面した地域は、我部の庭のような感じで、どこを通っても、どこにでもいけるのである。連日のアルバイトで疲れた身体を赤牛ＢＣまで持って行ったのは１５：３０だった。

（甲田記）

国元のタル沢～下の黒ビンガ往復の図



H　高巻き

⇐デブリ

黒い部分

白い

下　山

4月1日　晴地吹雪

5：00起床（天気待ち）11：05BC発－14：05　2800m水晶への登り。

朝方、ガスが稜線をとりまきP3が見えない程。天気待ちした後、強風の中を撤収。強風にしばしばストップさせられたがアイゼンも良くきく、入山の時より固いようだ。中岡と稲垣の調子が悪く2時間で、テント設営。一晩中強風におびやかされる。この夜中岡が肺炎かも知れないという。全員に抗生物質を配り、対策をねる。的場のアイゼンの左かかとが折れ、ハリガネで修理、何とか持ちそうである。

4月2日　晴

5：00起床（ガスで天気待ち）9：05発（ワンピッチ足らずでテント地に引き返す）

ガスで又出発が遅れるが、どうにか出発。昨日にもまして強風。中岡は個装のみで、一人平均30Kgたらず。強風のため、水晶の稜線越えは手間どりそうだ。15分程進んだところで、中岡も増々調子悪く、BCに引きかえすことに決定。ツエルトで待機し、残りがテント設営。午後は少し風もおさまる。

4月3日　快晴　6：00（－7℃）　15：00（－2℃）　18：00（－5℃）

5：00起床～7：45発－9：30北峰ピーク－11：00赤牛小屋前13：00三俣小屋前

低気圧前面で風もおさまり快晴。中岡には的場がつき先に下山することに決定。本隊より一時間早く出発。おだやかに晴れわたった下山日和り。北アルプス全望。水晶の岩稜はシングルで思ったより簡単に通過。忍者顔まけの場面もあり入山のfixも有効。源流のソリセードは期待はずれでバテる。12：00の源流でのトランシーバー交信で二人は三俣ピークにいることがわかり、中岡もむしろ快調との報。今月中に下山できる見通しがつく。本隊はすっかり気抜けしてしまい、明日の好天を予期して三俣小屋に入る。

4月4日　晴　6：00（－9℃）

5：00起床～7：05発－9：30双六小屋着～10：00発－15：30新穂高温泉着

三俣小屋での下山前夜祭は同宿者の都合でキャンドルサービスに終る。三俣ピーク直下のトラバースは雪庇をのりこすという。少々反省の余地の残るような仕末であったが、その後、快調にとばし、弓折でのソリセードが下山の日のクライマックス。満ちたりた気持で新穂に下ることができる。

○スゴ沢出合テント生活五日間

石原　敏雄

3月24日夜～3月29日朝

まずテント地の地形及び雪崩についてのべる。スゴ沢出合はまた「中のタル沢出合」でもある。テント地はこの中のタル沢の左岸に下る尾根の末端である。この末端は、黒部本流に面する高さ30mの急斜面上に、広い台地状に拡がっており、針葉樹の疎林である。この尾根の背後からの雪崩は絶対にないだろう。但し、対岸のスゴ沢からの雪崩、そしてこちら側の中のタル沢からの雪崩は十分考えられる。ただテント地はこれら二つの沢と本流が十字に交わっている所より、50m上流である。従ってかなり大規模な湿潤雪崩、底ナダレが出ても大丈夫だろう。又仮にやられるとしても爆風によるものであるから、むしろ3月以後なら先ず考えられないが大きな乾燥ナダレが出れば怖い。真向いのスゴ沢には支沢よりのデブリは数ケ所あるが、スゴ沢に入って止まり、黒部本流に達する様なものはない。スゴ沢の本流出合付近の雪のついていない赤褐色の岩壁からは日に2,3度落石があった。黒部本流について次に伸べる先づ第一に晴天の時には、特徴である谷間の雲海即ちガスが夜明け前にかかる。そして夜明けと共に漸いに消え去る。晴天の場合、朝9時頃までと、夕方4時すぎからは全くの無風となるが、日中はやや風が吹く。地形によるものと思われる。降雪量は霞平や赤牛に比すると、問題にならない位少い。もちろん湿雪であるが、しばしば雨に変る。2日停滞した時はガスがかかっていて、雨になったり、雪になったりで積雪は5cmにも達

しなかった。気温は－5℃～5℃の間であった。ここで黒部本流の積雪について述べる。黒部本流に積っている雪は大体次の3種に大別出来る。まず第1に河原にふつうに積ったものである。当然ながらこれが黒部本流のほとんどである。しかしこれには小さなデブリの上に積雪してデブリが分らなくなったものもあろう。この様な積雪であれば非常に歩きやすい。特に晴天の続いた夜明けではよくしまり全くもぐらない。これも夕方になれば、クサってきて悪くすると、ヒザまでもぐることもある。

第2はデブリである。このナダレ跡というやつは到る所どんな小さなルンゼでも必ずと云っていい程出ている。いわゆる湿潤ナダレであってそのデブリには、人の頭ぐらいのブロックがゴロゴロと積み重っている。従って歩行に困難を来たす様なことはない。まるで人の頭をふみつけて歩いている様な気さえする。以上2つが普通の河原、即ち廊下の中でない所を埋めたりスノーブリッジになっている。そして最後に廊下内のトロに、庇の様に岩にはりついて飛び出している雪である。これは非常に積雪の変化に富んでいる。薄いクラストの下には乾燥したサラサラの雪があり、又氷化した所があり、これらが互いに混り合い数mもいかないうちに変る。このうすいクラストはすぐに破れ、下のサラサラの雪の中に足を突っこむと、それらの間には空間があり、ヒザ位までは一度にもぐってしまう。バランスを崩しやすく注意を要する。雪は岩にくっついているが、非常に不安定で、今にも落ちそうな感じの所もある。

最後に沢すじの行動時間について述べる。沢筋内の行動は当然ながら早朝の雪の落ちついた時に限られる。即ち夜明けの午前5時～午前8時頃である。この時間内では前日に降雪がない限り、まず大丈夫である。雪がクサリはじめるのが8時半頃である。日射も8時前までは沢筋に入ることもなく、心理的に落ちつける。だが前述の時間では正味3時間の行動も出来かねる。従ってもう少し行動時間の必要な時は夕刻の日射が完全にかげってから日暮れまでを利用することも可能である。即ち5時過ぎから6時半までの極めて短時間である。しかし、これはその時の状態によって判断するべきで、ナダレの危険性も十分に考えられる。又この時刻ではくさった雪はまだよくしまっておらず、所によってはヒザまでもぐることもあり、スノーブリッジも不安定になっており、歩行には困難が増す。

以上スゴ沢出合にTentを張って生活した5日間で気付いた点を述べた。何かの参考になれば幸いである。

○積雪期上の廊下の概観

的場幹史

黒部上の廊下は言うまでもなく、すりばちの底のように両岸絶壁や急な雪壁でかこまれている。その上の斜面も特に薬師側などは大体において急斜面であり、赤牛側も2～3000mの高さまで急斜面である。薬師の各カールからは夏にはガラガラに荒れた沢が落ちているし、東側斜面ということも合せ考えて積雪期には非常な危険が予想される。そしてまた下の黒ビンガ口元のタル沢、上の黒ビンガ、金作谷出合上流などの各所に見られるかなり大きなトロは積雪期においても完全には埋らず、両岸も岩壁に挟まれている為に、へつるにしても、かなりの困難が見込まれる。こういうのが我々が実際に黒部に入るまでの予想であり、その為に今年度は偵察に最重点をおいていたのだ。

だが、積雪期の上の廊下に直接接した時我々の予想はかなりくつがえされた。第一印象はとにかくのどかな風景なのだ。スゴ沢左岸や、廊下沢では、カラ松が雪面に独特の枝ぶりで、影をおとしているし、青いトロには岩魚が雄々と泳いでいる。しぶきを上げて、本流の雪を割りながら、枝流からは雪溶け水が合流する。スゴ沢のテント地からは、薬師中央棱が青空をくっきりと切っている。これは我々の入山の時期が3月末で、新雪雪崩は一応落ち尽くし、旧雪雪崩には少し間があった為かもしれない。今年の少ない積雪が原因であるのか、それとも偶然に

雪のおちついた雪崩の少ない状態であった為かも知れない。とにかく我々の見た黒部はかなり快適な雪の沢であった。デブリの跡は両岸到る所に見られ、どんな小さなルンゼや凹地であっても雪崩は起っている。その為前記のトロの部分も通過が非常に楽であったといえる。下の黒ビンガはそのすぐ下流の左岸の沢から大きな底雪崩が出て本流を完全に埋めているし、上の黒ビンガは無数の両岸のルンゼからのデブリが交互に続いて夏に苦労するトロは雪の下である。又、所々すりばち状に水面の出ている所も両側の雪壁をトラバースして行ける。上の黒ビンガの上流はデブリがうず高く積りその上に雪が積っている為に、スキーに格好のスロープの連続である。金作谷出合付近は夏には赤牛側に水面より２０～３０ｍの高さの河岸段丘があり、50～１００ｍの高さにもう一段あるのだが、下の段は完全にデブリの下であり、上の段からそのままゆるい斜面が沢の上まで続いている状態だ。広河原は予想通り水面が出ていたが、両岸には雪面が続き、デブリによって出来るスノーブリッジを渡って左岸、右岸どちらでも進むことが出来る。廊下の中にトロが出ていて通過に困ったのは、下の黒ビンガ下流のトロと口元のタル沢出合上流のトロだが、いずれも左右にルートを求めることが出来た。雪崩やブロックの崩壊は午前９時を過ぎると十分に警戒しなければならない。８時頃から朝日が沢筋に入り出し、気温も０℃を越えてくると、各所で雪がゆるみ始め、ブロック落石やツララの崩壊が起る。それが９時～１０時には本格的なブロックの崩壊を引き起すのだ。夕方は５時を過ぎて太陽が薬師の背後に回り、気温が０℃より下ると落石は止む。しかし雪はまだ内部がやわらかで、足場はすぐに崩れバランスがとりにくい。高度が低い為気温は相対に高く雪がしまって歩き易いというのは晴れた日の早朝である。曇った日では早朝であっても０℃よりはるかに高い気温の場合がしばしばある。次に黒部へ下るルートだが、霞平をベースにした場合、口元のヨル沢左岸の尾根、中のタル沢右岸の尾根、金作谷出合へ下る尾根が最適である。赤牛からならば北西尾根Ｐ３より９０°屈曲点へ下っているのや北東尾根２３５５ｍピークより下の黒ビンガへ下っている尾根（末端は少し上流の沢を使う事）などが十分使える。赤牛側斜面には薬師側が比較的急で一直線に下っているのに比べ、幾段もの河岸段丘が連なっている。即ち霞平よりどの尾根をたどるにしても、何度も、テントの張れる十分に広い水平な段を越えて、それでいて序々に傾斜が急になって終には垂直に近い壁が黒部に落ちているのがよく判るだろう。最後に、暗い岩壁に張り付いている見事な青水や、うすい水色に光る見事な氷瀑が美しかった事をつけ加えておく。

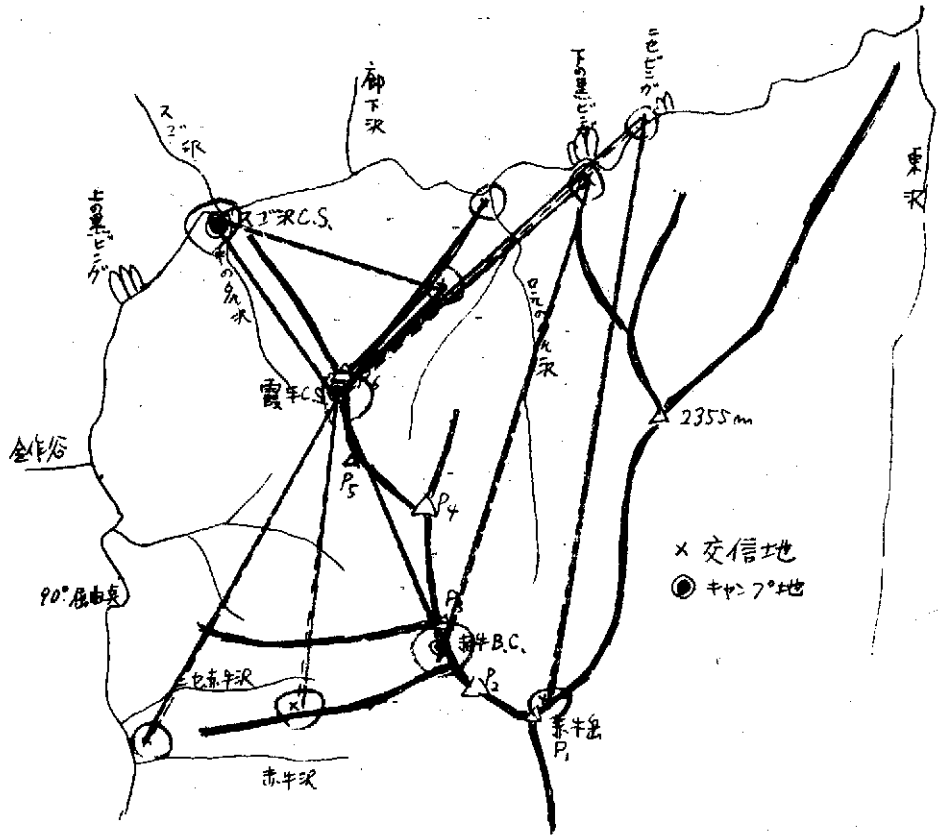
トランシーバー交信

トランシーバー　赤牛隊１　霞平隊１　霞平テント１　スゴ沢隊１

今回の春山では、トランシーバーが非常な偉力を発揮した。赤牛Ｐ３、霞平２２１０ｍピーク（Ｐ６）、スゴ沢、対岸の３ケ所のテント地には、それぞれ８～１１ｍの針金を張[illegible]交信可能であった。但し、Ｐ３－スゴ沢間は不可能であるのにＰ６－スゴ沢間は可能であった。これは中のタル沢の沢すじを電波が伝わったものと思われる。

晴天日には３パーティが同時に動いていたがそれぞれがトランシーバーを一台ずつもち、Ｐ6の霞平テントを中継点に互いに他隊の行動状態を知りつつ動けたのは、山行全体の安全という意味からも有効であった。又、下の黒ビンガの下流で、北東尾根の状態を田中パーティーから聞いてすぐさま計画を変更して安全なcourseに変えるなどの機動性のある動きができた。

なお、予備電池は、３０日の計画中特に必要とする１０日間を見越して、２セットずつ用意したがやや不足気味な感もあった。



食料反省

田中喜樹

今回はかなりの量（２０人×２０日）が旧水晶小屋跡にデポしてあった。氷結を予想して、氷専用の大型ノコを用意して行ったが、窓から入れた為、その必要はなかった。

スープ袋は、ラードで肉と野菜を十分に火を通したものであるが、赤牛ＢＣで１０日近くもテント内に入れてあった為が、少々臭くなった。味付の時、塩コンショウｅｔｃをもう少し強目にしておくか、常に雪に埋めておくかして気をつけたいものだ。味付けであるスープ類が、かなり不足したがこれは、デポ量が規定の半分しか入れられてなかった為で、ミスであった。全体に少々ドンブリ勘定であり、細かい配慮が不足したとの批判を受けたが、小生の気性である。次回の食料係はその欠点を受けつがぬように。

最近の肉その他の値上がりはキビシイですワ。

◎ 各係報告

装備係所感

石原敏雄

今度の山行で始めて、合宿の装備係をおおせつかった。山行前の準備では前装備係の山田さんに負う所、ほとんどであった。山行中も三年部員に色々と御教授願った。今度のような、アタックテントが出て複数のテントが分散されるので、装備が片寄らないように注意した。しかし不慣れの為、細かい点でのミスが多く、続々と故障、装備の不足が出てくるし、不満も出てきた。一つのラジウス等は、下山路でテントが

減ったので、良かったものの、ノスルの予備がなく、全く無用の重物としてしまったりもした。これ等は残念乍ら、私の怠慢によるミスである。従って入山前にはもっと徹底した装備点検をやらなければならないと深く反省しております。

気象報告

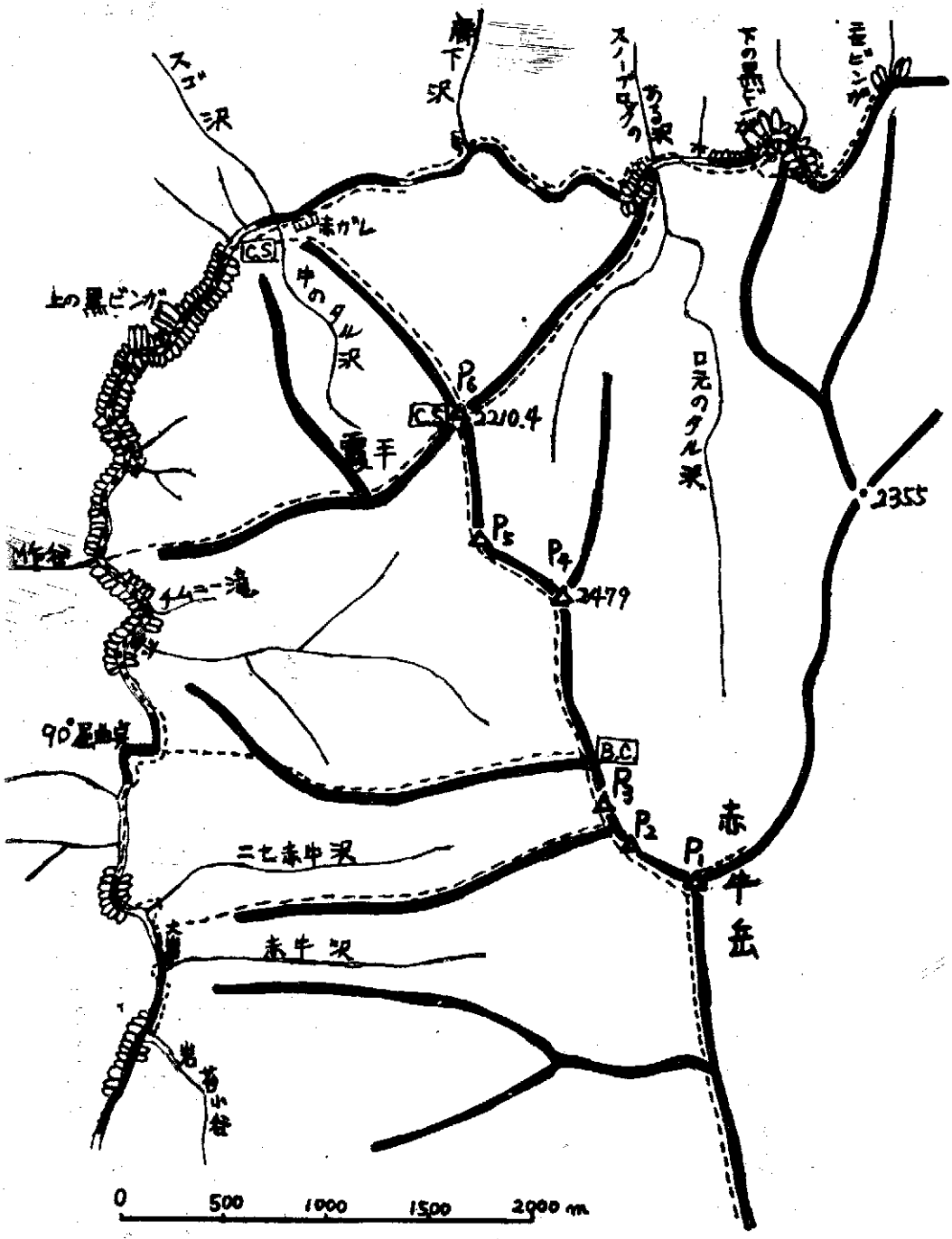
田村　孝

今合宿の予想以上の成果の要因の一つは順調な天候の変化と、それをうまく利用したことにある。２０日余の入山期間中、気圧の谷は４～５日の周期をもって型通り訪ずれ、移動性高気圧もまったく春らしい好天をもたらしてくれた。臨時の気象担当ではじめての春山であった小生にとって太平洋高気圧の強力さはまさに教科書通りであり、その影響で行動の幅を増せたように思われた。気温はベースに入るまでは測定時間がまちまちになり、正確な統計がとれなかったことは小生のミスで申しわけない。赤牛分散体制に入ってからの赤牛Ｐ３、スゴ沢、富士山の三者を比較してみた。

3／13 ⊗→◎（先発入山）
14 ⊗→①（鏡平 fix）
15 ○　（弓折偵察）
16 ①→◎⊗（本隊入山）
17 ⊗　冬型（鏡平尾根㊥）富士山3,000ａｍ−24℃ワサビ平−12°）
18 ○　移動高（弓折）
19 ○　太平洋高気圧（双六小屋入り）
3／20 ◎→⊗（沈）午後ガス出視界５０ｍ
21　（沈）富士３：００ａｍ−７℃小屋入口で終日−１℃　融雪洪水型、視界５０ｍ。コルでもあり強風。
22　移動高（水晶小屋）
23　（水晶北尾下）
24　朝方ガス、稜線風強し、西方にブキミな層積雲。
25　（沈）終日視界悪しのち⊗（赤牛入山）
26　（沈）北高南低型の気圧配置が続く。太平洋岸に停滞前線が上昇（ナタネツユ）
3／27 ①　移動高朝方ガス（廊下沢出合偵察）
28 ◎→⊗→①朝方ガス、薬師西方雲海（スゴ金作）
29 ○　（金作一奥のタル沢）（スゴ一口元タル沢）
30 ◎⊗　（沈）ガス、気圧の谷通過
31 ①→◎午前中ガス（口元のタル沢一下の黒ビンガーニセビンガ）
4／1 ①or㊥ 朝ガス、稜線強風（水晶尾根２８００ｍＣＳ入り）
2 ①　（沈）朝ガス　〃
3 ○　朝ガス（三俣小屋入り）西方に午後綿雲
4 ○　下山

以上概況　赤牛一水晶稜線は朝方ガスの出ることが多い。地型的なものと思われる。

	（気温）<8:00>	<9:00>	<12:00>	<3:00>	<6:00>
3／24	−10°			−15°	−6
25赤牛	−7	4	−5	−5	0
スゴ	0	1	−1	++4	−1
26赤	−3	4	−4	−3	−5
スゴ	−2	3	+5	+2	0
27赤	−8	3	+3	−2	不明
スゴ	−5	1	+3	+2	0
28赤	−8	2	−0,5	−0,5	−4
スゴ	−2	2	0	0	0
29赤	−5	6	+13		+1
スゴ	−2	2	以下不明		
30赤	−2	0	0	0	0
31赤	−7	5	+7	+3	−3


スゴ沢
滑下沢
スノーロッジのある沢
下の黒ビンガ
三ビンガ
赤ガル
C.S
中のタル沢
上の黒ビンガ
P6
C.S
2210.4
裏手
口元のタル沢
2355
P5
P4
2479
小屋
チムニー滝
90°屋根
B.C
P3
P2
P1
赤牛岳
二七赤中沢
赤牛沢
岩菅山
0
500
1000
1500
2000 m

編集後記

今回より部報の形が大きくなりました。2年間の我部の動きを全て収録してあります。しかし、もっと記録的価値を中心にしぼって行けば少くとも3分の2のスペースには、十分縮める事が出来るでしょう。編集者の怠慢から、そして又、予算が許すなら同じ苦労を重ねて来た部員の記録を等しく活字にしようという安易な同情から、かえってまとまりのない、単なる山歩きの文章の羅列に終った事は、全く、直接の編集者である僕の責任であります。

さて、2年間部の中心課題であった積雪期上の廊下遡行は、今年の春山合宿で一応の終りをとげました。簡単にここ2年間の歩みを記しておきます。　　（的　場）

夏期遡行

昭和41年8月3日～13日
加藤、岡田、山田

昭和42年7月29日～8月6日
的場、出口、中岡

〃　8月22日～26日
田中、田村、松林

夏期下降

昭和41年8月24日～28日
渡部、竹林、甲田、田中、的場

夏期ゴムボート下降

昭和42年7月30日～8月2日
渡部、黒田

周辺、アプローチ研究

昭和41年8月5日（南沢岳西尾根）
加藤、岡田、山田

〃　10月14日～20日（下の黒ビビンガ赤牛側・90°屈曲点赤牛側）
黒田、甲田、山田

〃　11月1日～5日（三ツ岳一霞平直線ルート）渡部、出雲路、田中、的場、石原、出口松林

〃　11月5日～6日（赤牛北西尾根より口元のタル沢）　出雲路、田中

昭和42年5月（三ツ岳一霞平直線ルート・霞平周辺・広河原遡行）
渡部、的場、田中、出口、中岡

発行所
大阪府豊中市待兼山町1の1
大阪大学体育会山岳部

編集責任者　打出美樹
的場幹史

大阪大学山岳会『時報』No.15

1966年5月～1968年3月

現役部員名簿

＝３８年度入部＝

出雲路 敬孝	工	神戸市灘区一王山町５の４６	Tel85−5470
糸井 文彦	経	尼崎市東園田町９丁目３９の７	
大野 義照	工	大阪市旭区今市町１−４４文化ハウス	
加藤 佑二	工	大阪府高石市東羽衣４丁目４−１０	
黒田 治朗	医	池田市槻ノ木町 河出方	
佐々木 義弘	理	西宮市甲子園町５８	
辻 信男	工	大阪市東成区東今里３−１９	Tel971−2554
細川 明彦	工	豊中市桜塚東通１の１４岡本方	
渡部 洋	理	豊中市岡上ノ町３の７１	

＝３９年度入部＝

甲田 寿男	理	茨木市下中条３０５	Tel2−2534

＝４０年度入部＝

岡田 謙治	法	豊中市岡町南５−１８ 三堀方	
甲田 吉彦	基	貝塚市水間４８２	Tel
竹林 真一	基	豊中市熊野町３の１６	Tel52−2570
田中 喜樹	工	姫路市広畑区本町４丁目７５５−５	Tel54−5413
的場 幹史	基	枚方市香里ケ丘４丁目１２の１	Tel54−1743
山田 靖則	工	西宮市越水町７の１９栗原方	Tel34−3829

＝４１年度入部＝

石原 敏雄	理	河内市西鴻池阪大鴻池寮	Tel781−6680
田村 孝	文	同 上	
田村 信介	基	加古川市平岡町新在家１−２５１−８	
出口 信之	基	豊中市宮山町３の９４宮山寮	Tel52−0148
中岡 和哉	医	神戸市生田区山本通２の８９	Tel22−5762
松川 降行	工	奈良市西大寺町９９０の１	
松林 一男	工	河内市西鴻池阪大鴻池寮	Tel781−6680

＝４２年度入部＝

池田 満		山口県下松市西市東	Tel下松４−２４６９
稲垣 佳夫	工	西宮市甲子園口３丁目２の２０	Tel67−4947
大西 邦男	工	神戸市生田区山本通２の８９	Tel22−5762
寒川 敏夫	工	大阪市西区南堀江立花通５−１９	Tel538−3421
黒岩 芳夫	経	箕面市桜４９０ 緒方方	Tel21−5460
中川 晃	工	宝塚市千種１丁目２の３７	Tel86−5954